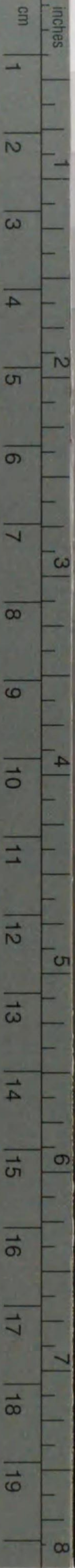


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

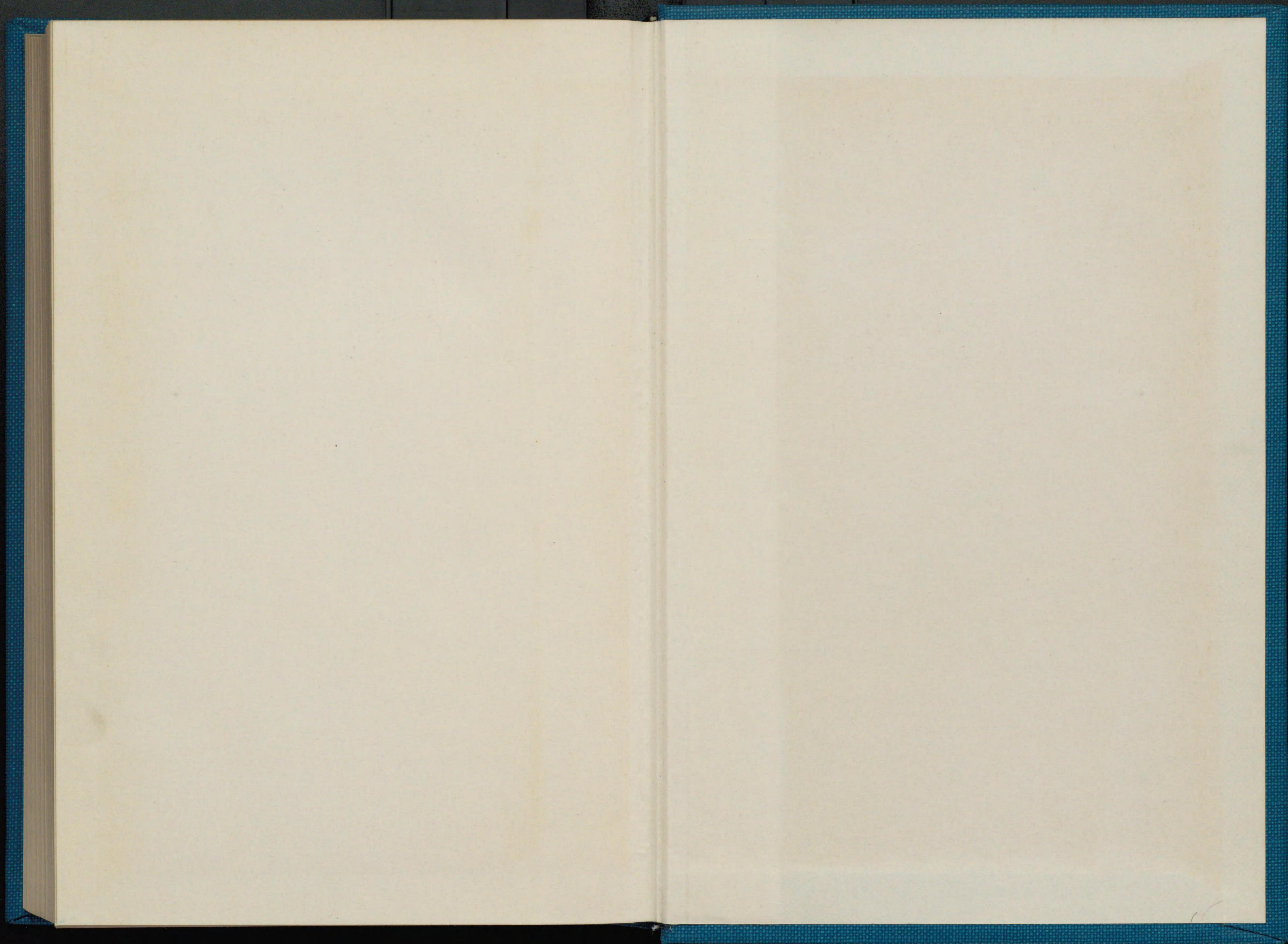
© Kodak, 2007 TM: Kodak

| Blue      | Cyan      | Green     | Yellow    | Red       | Magenta   | White     | 3/Color   | Black     |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| [Patch 1] | [Patch 2] | [Patch 3] | [Patch 4] | [Patch 5] | [Patch 6] | [Patch 7] | [Patch 8] | [Patch 9] |

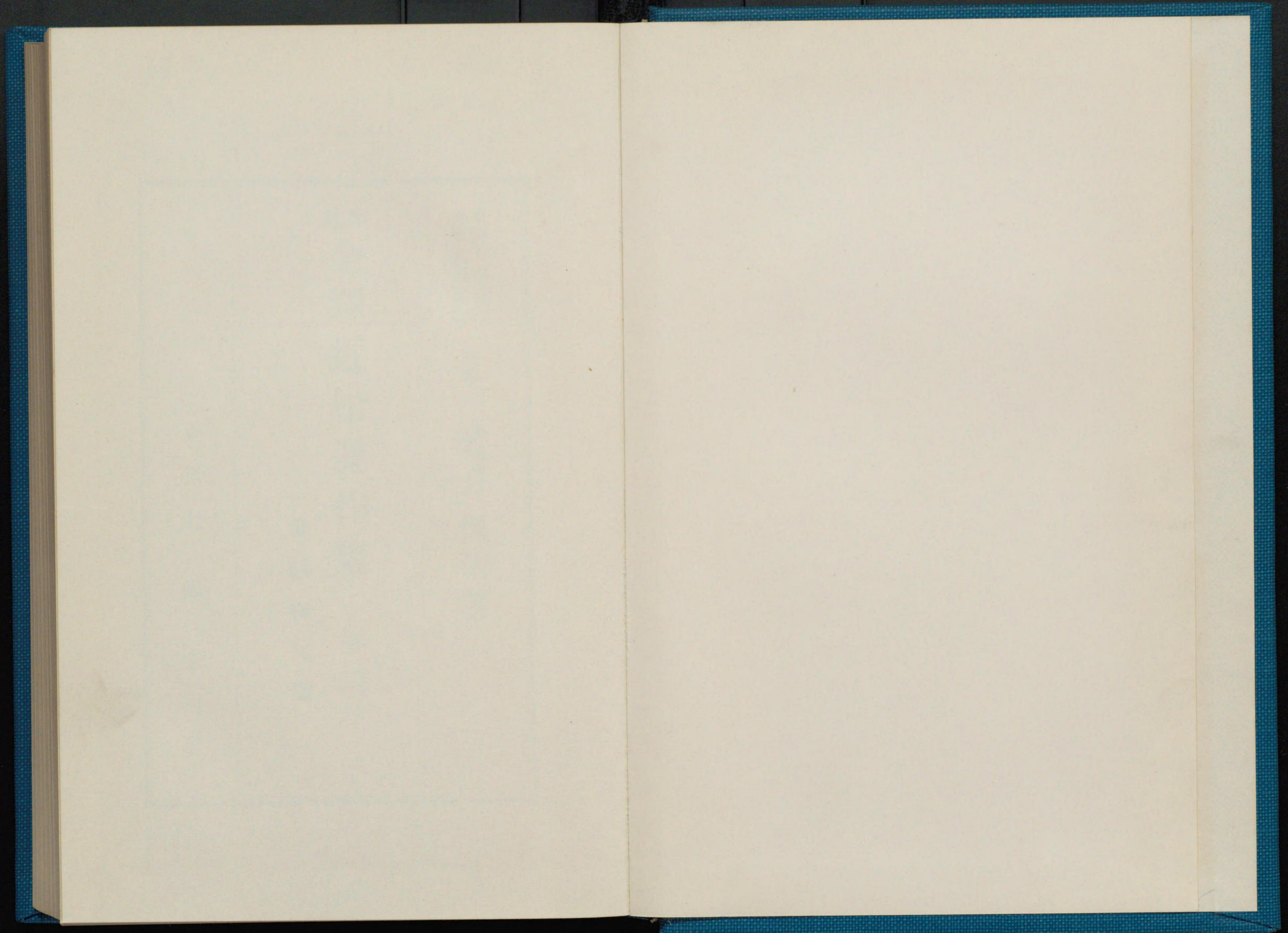
574

574-24  
1200501519509





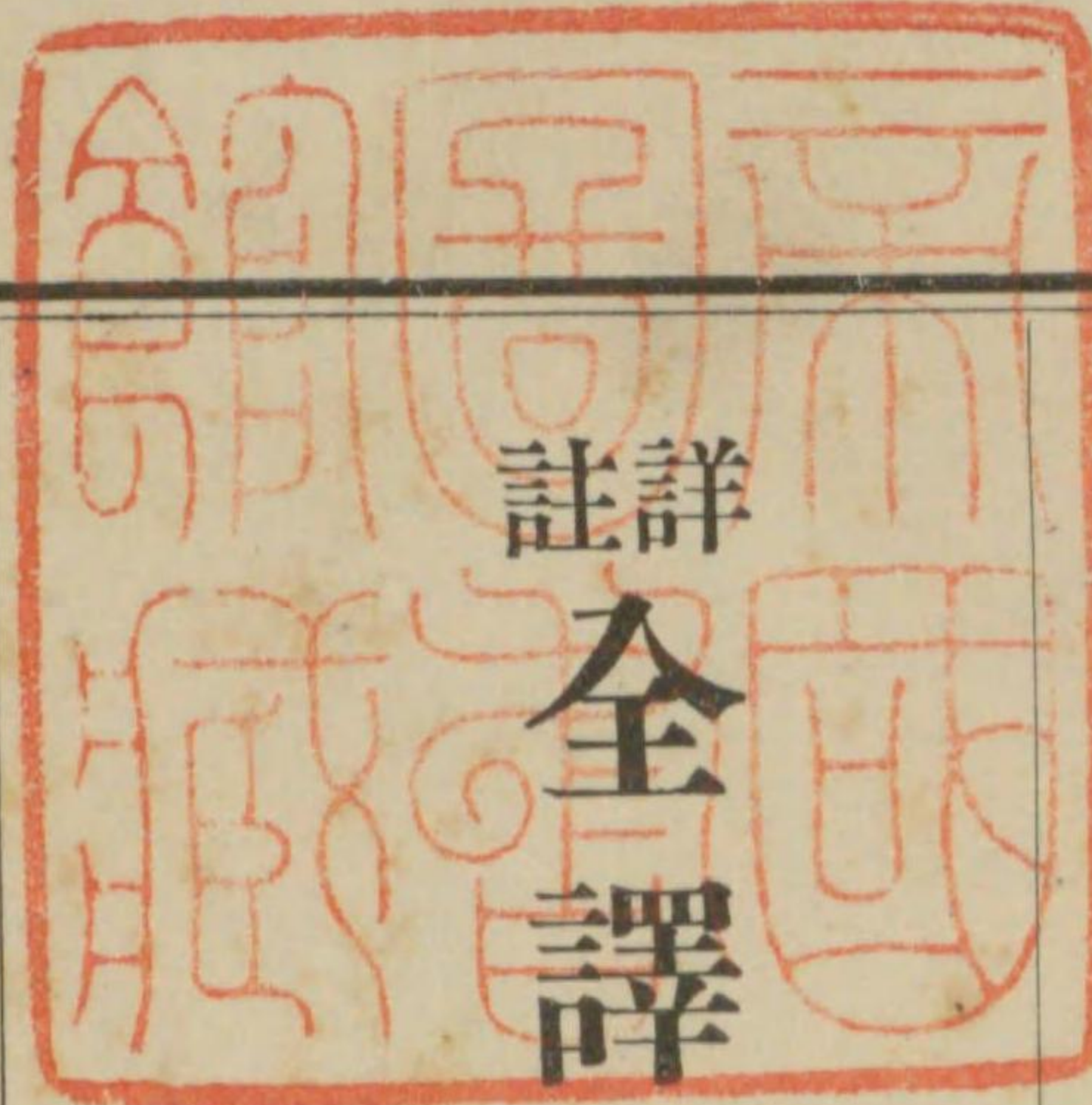






H2

574  
24



東洋大學教授  
日本大學講師

文學士

若月保治著

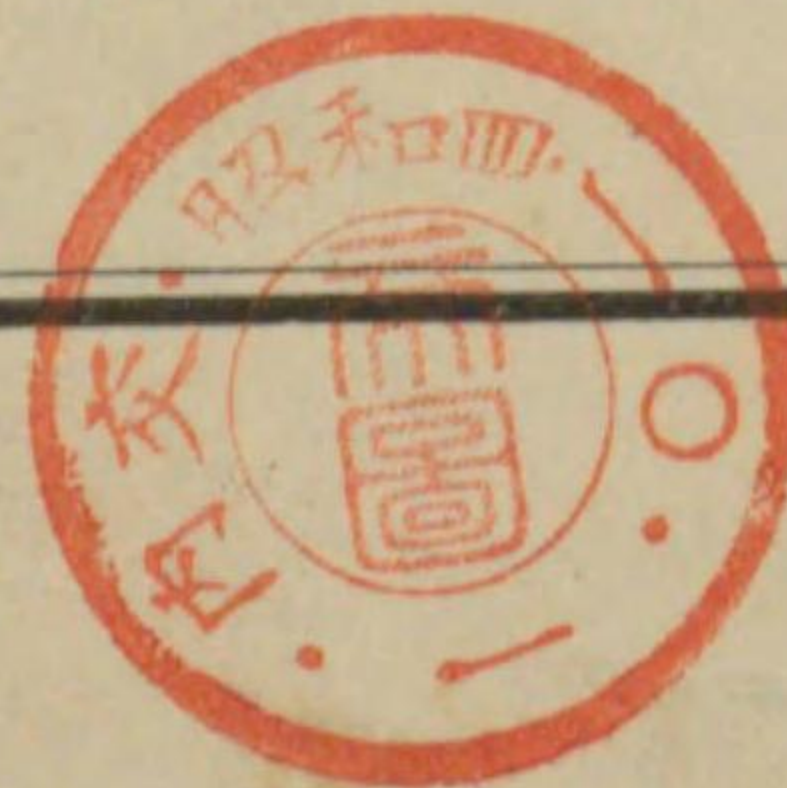
詳註  
全譯

近松傑作集

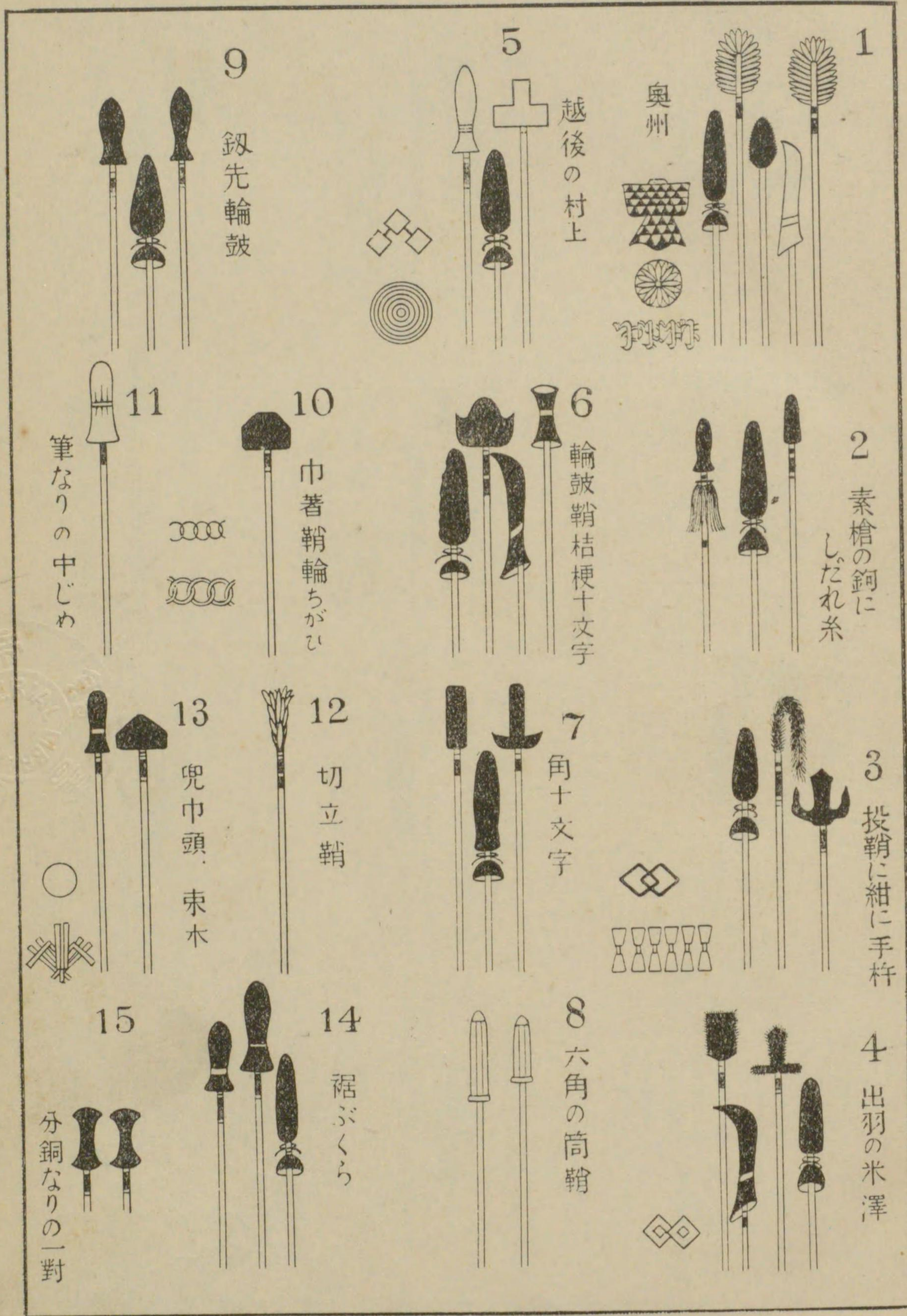
第二卷

世話物七種

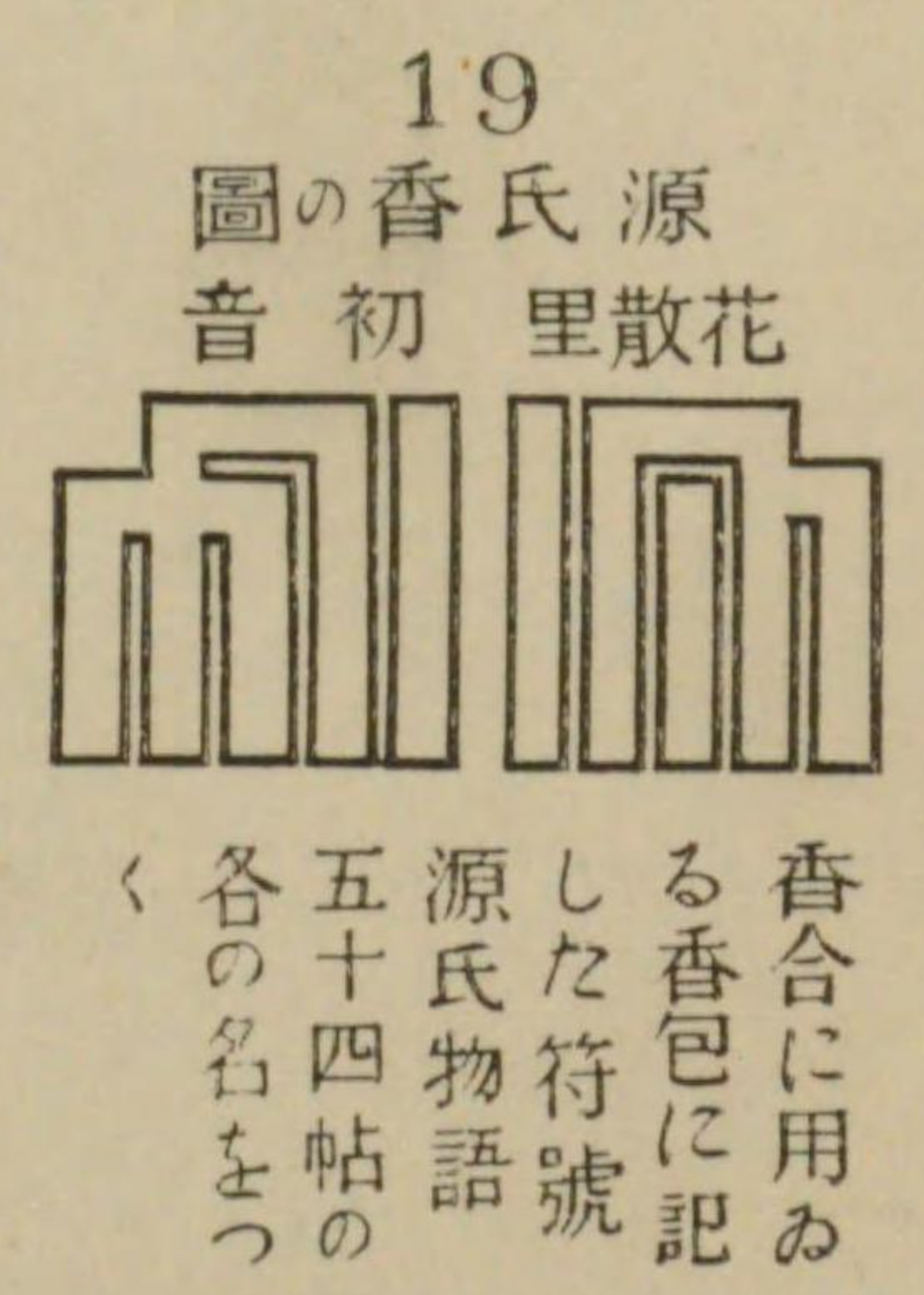
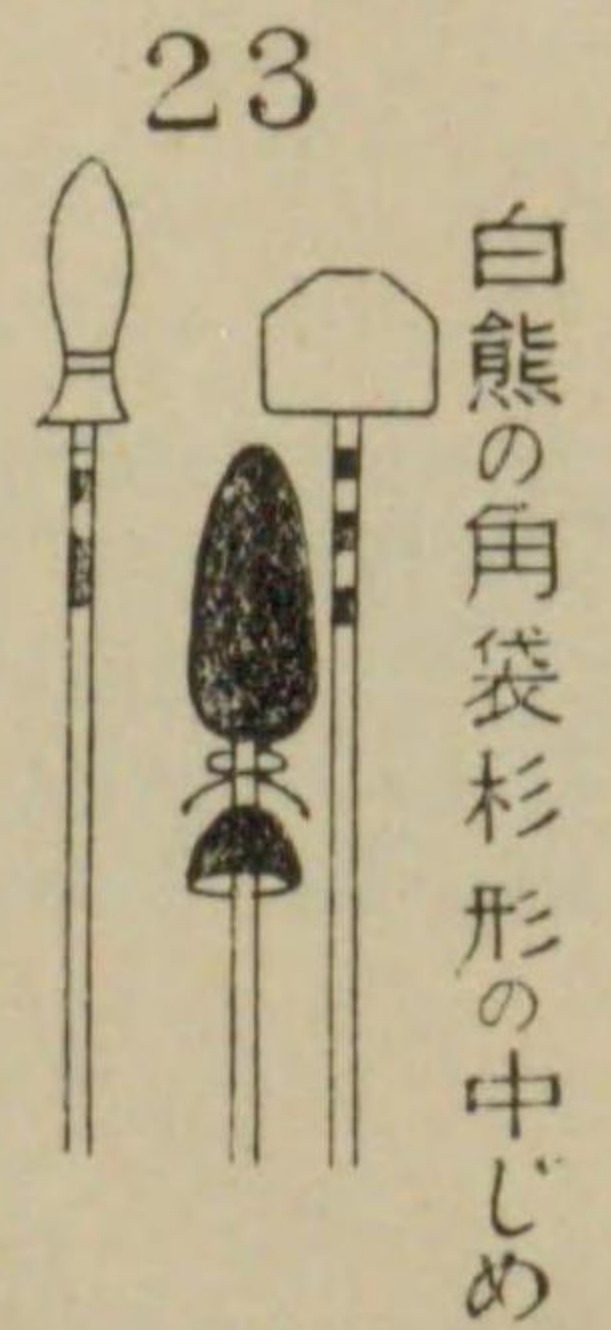
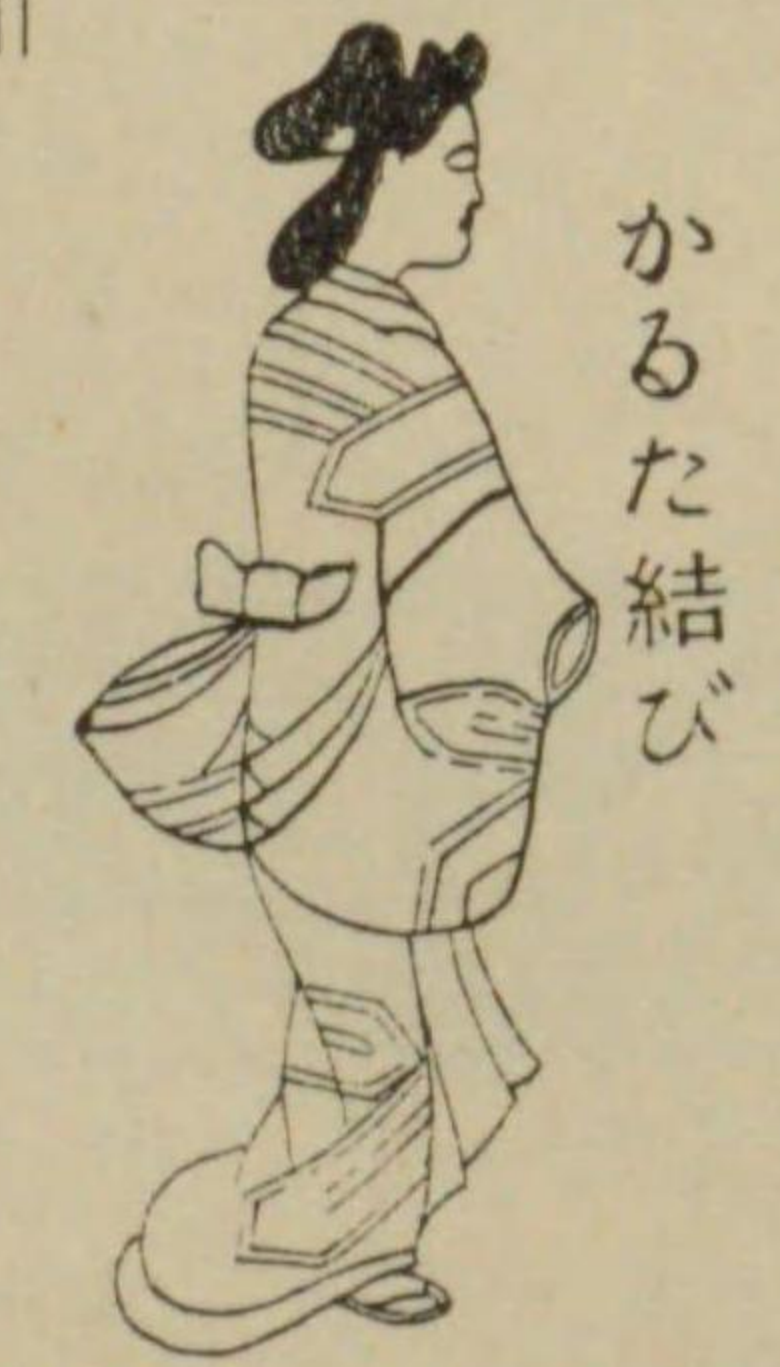
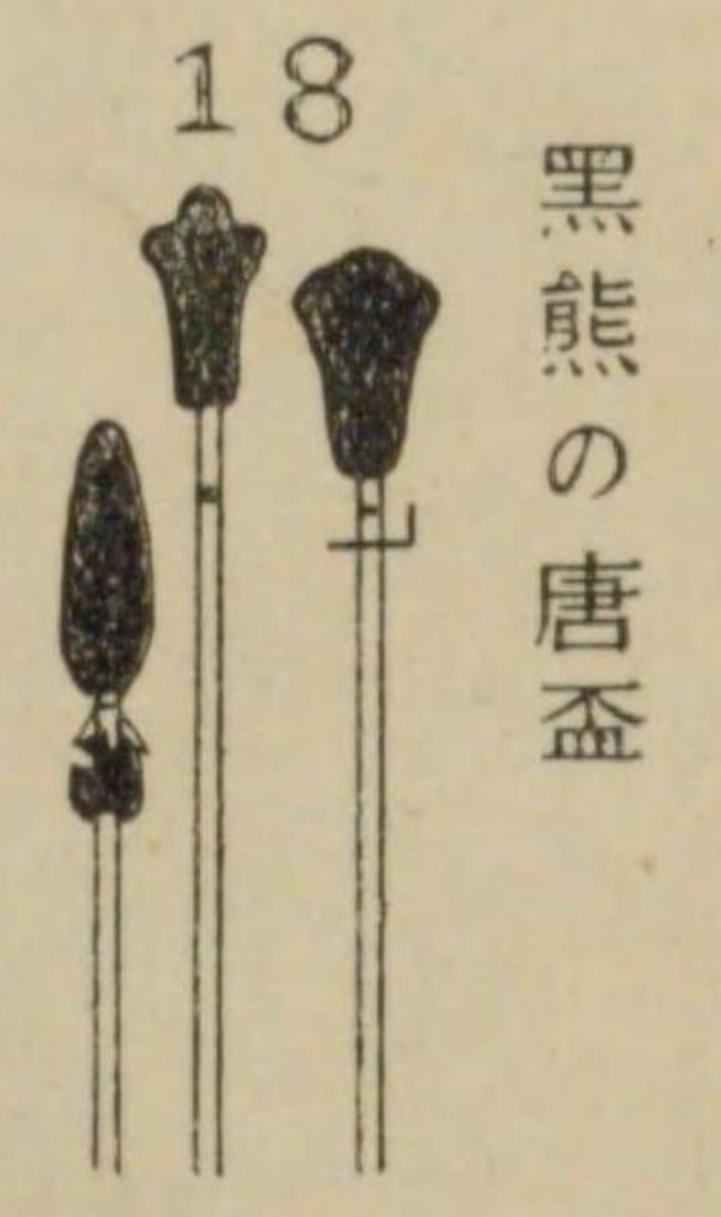
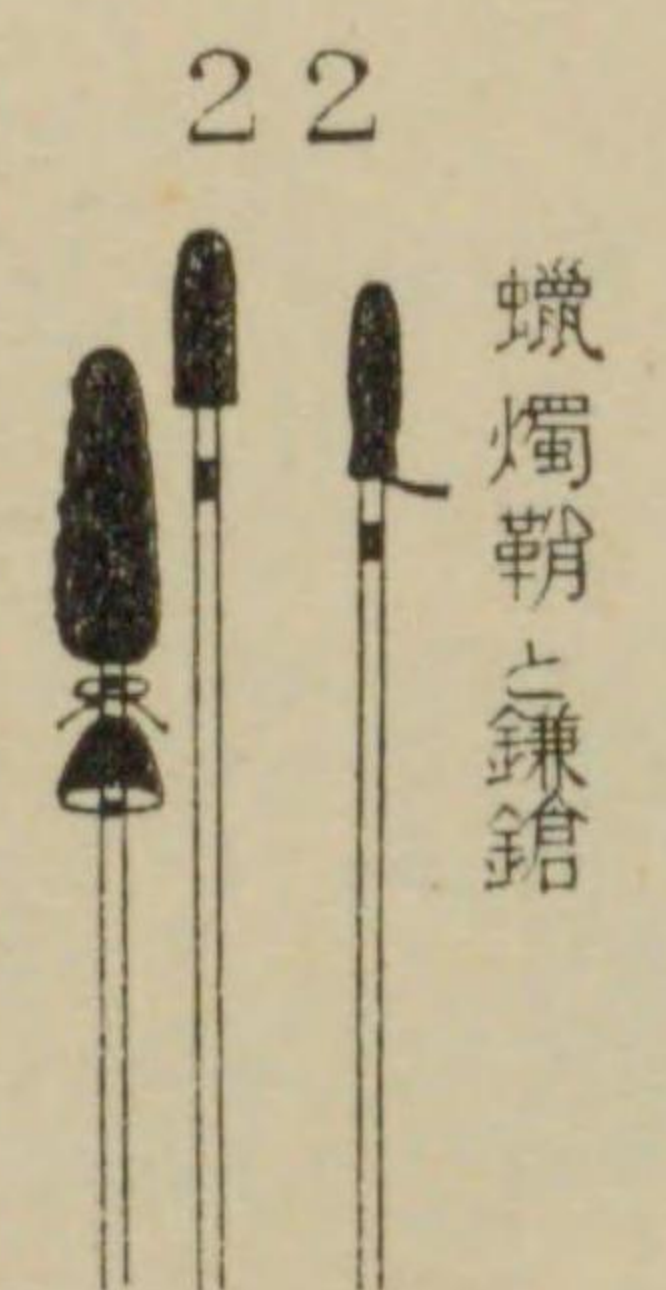
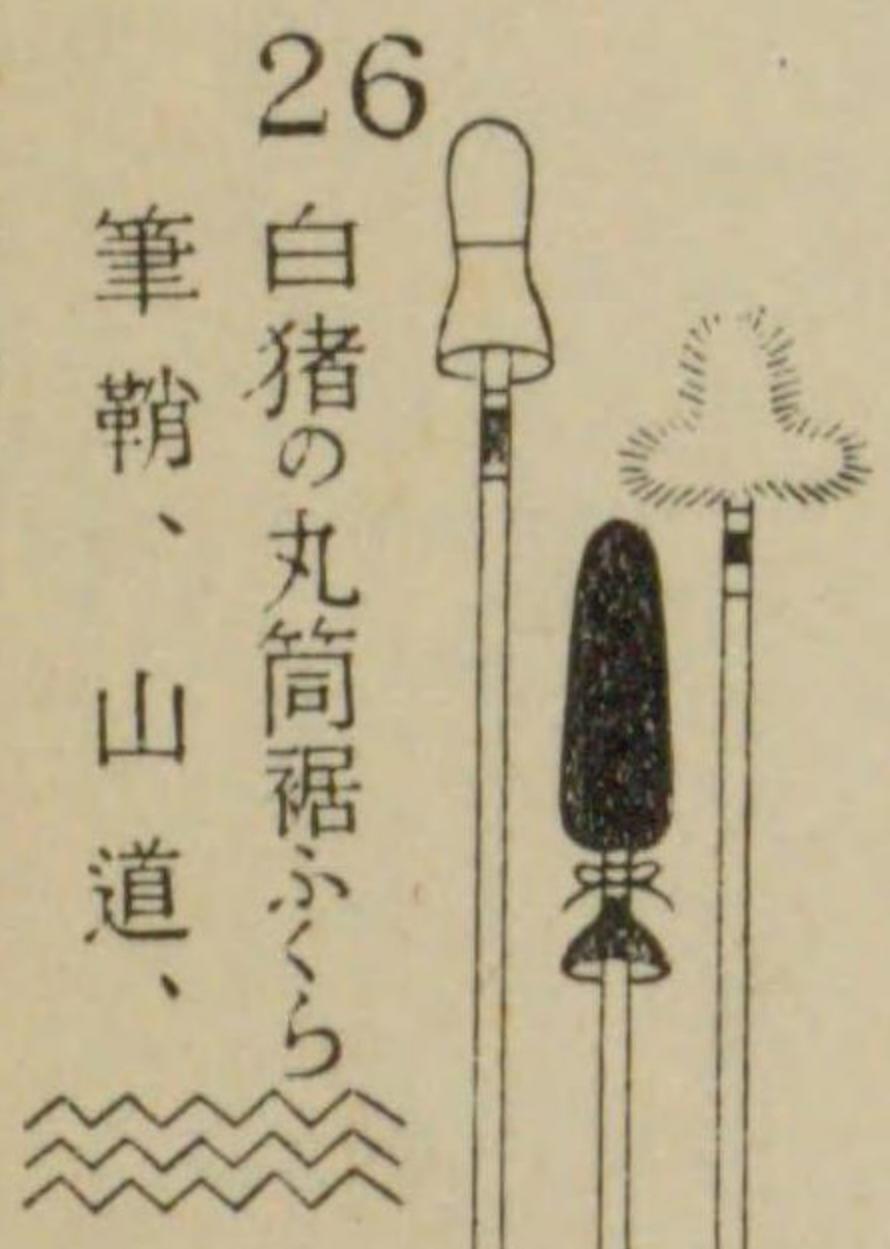
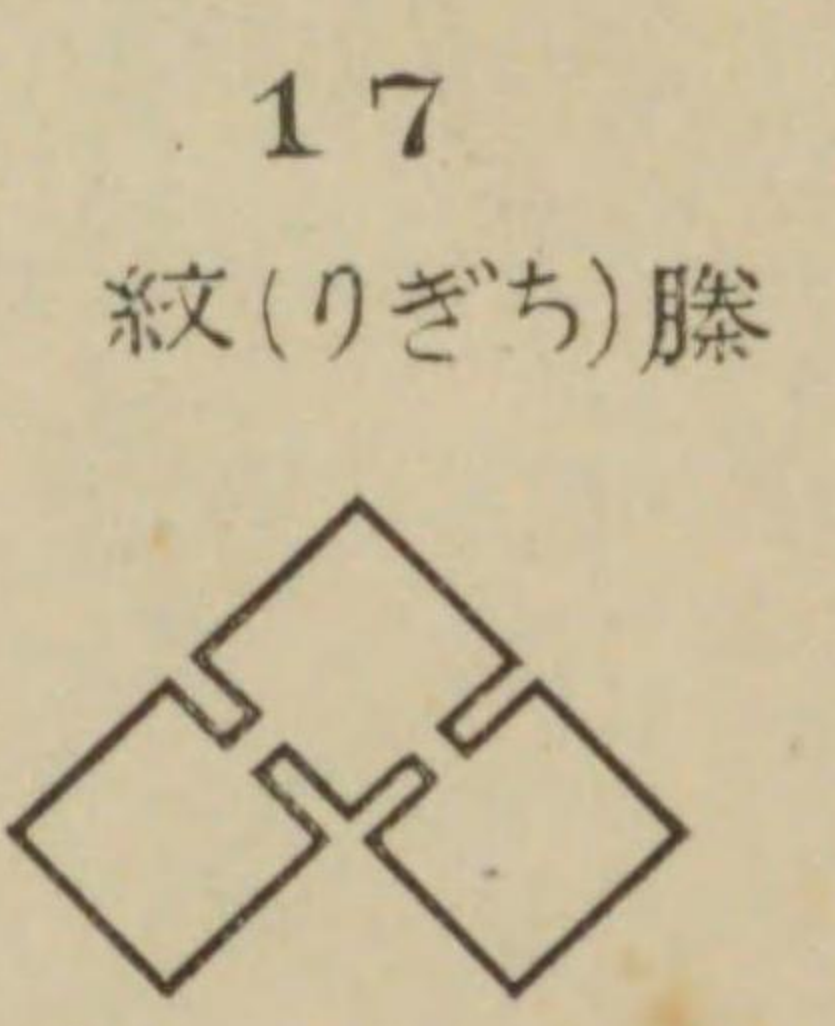
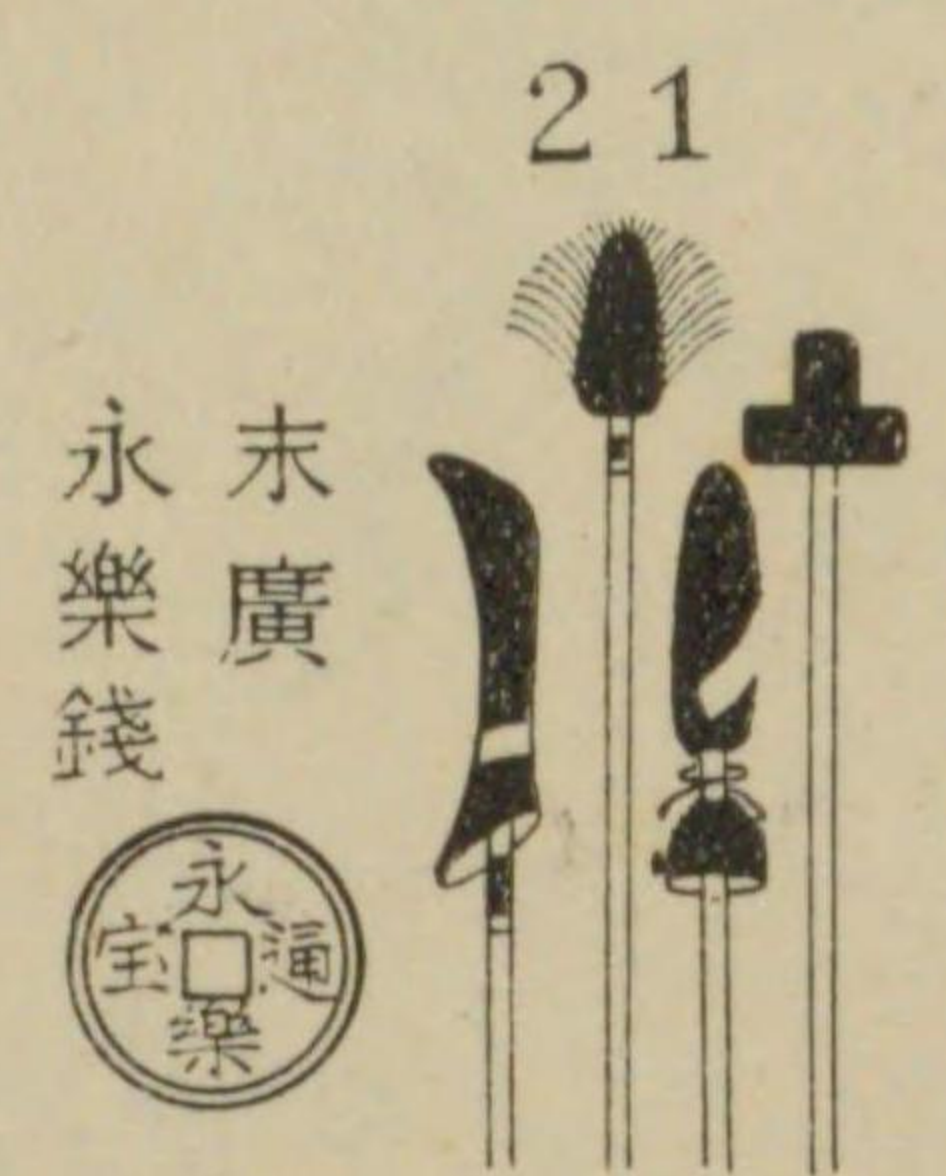
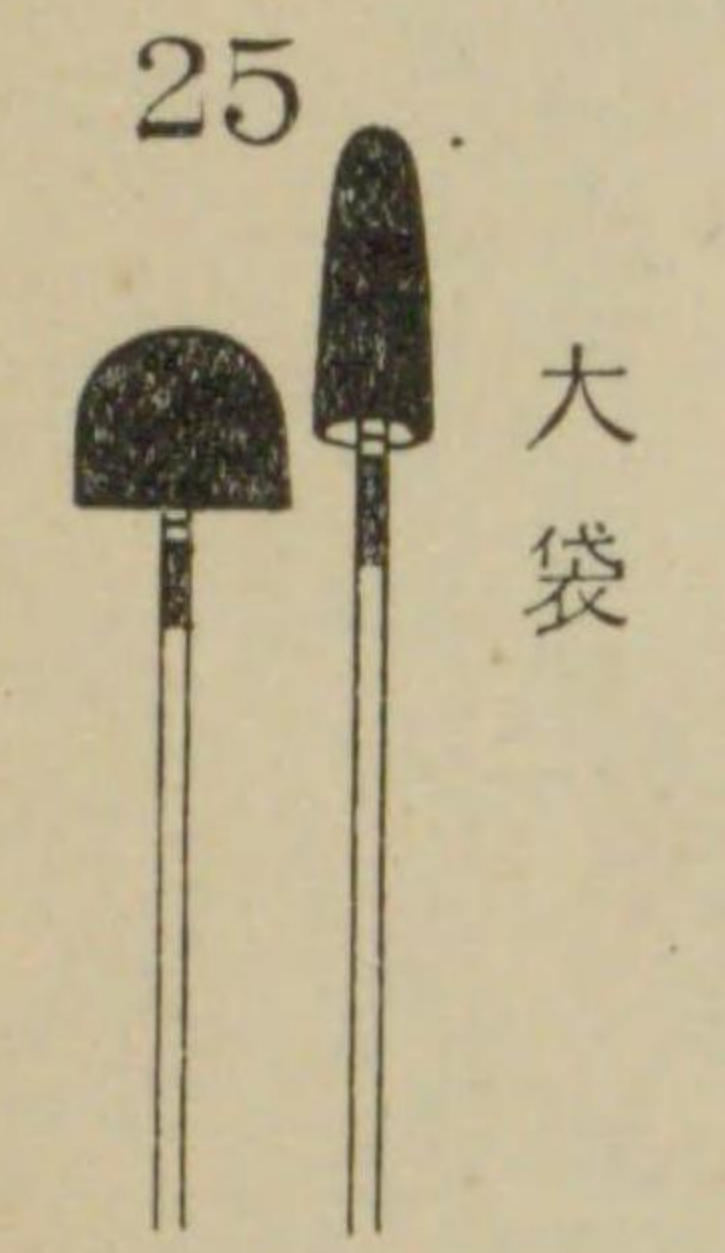
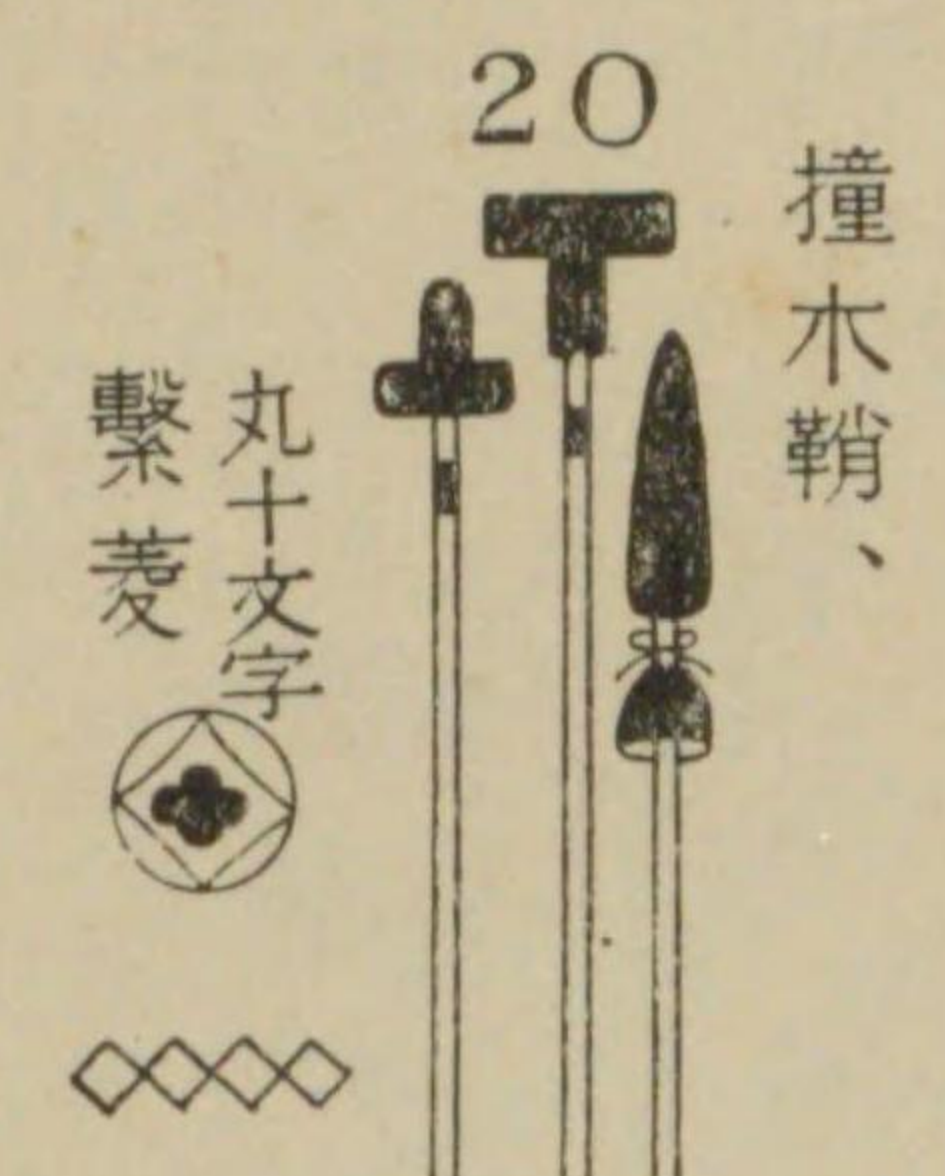
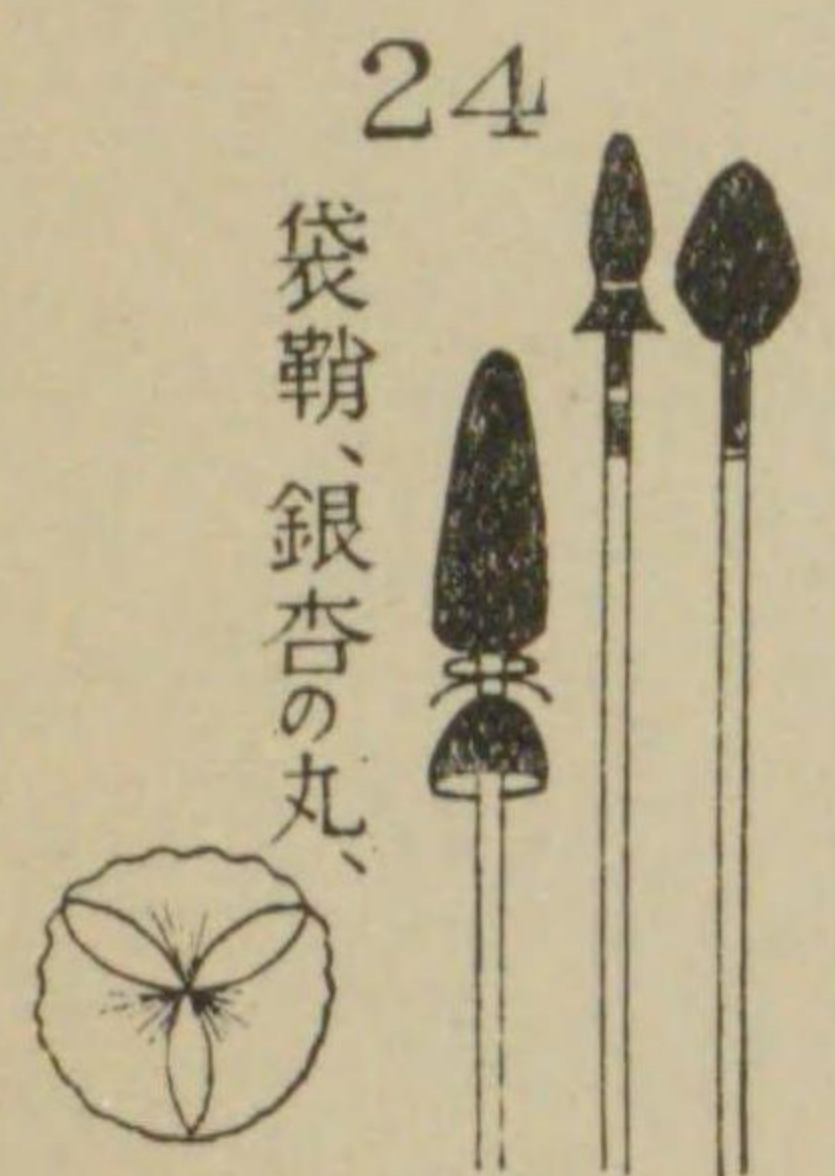
東京太陽堂發行



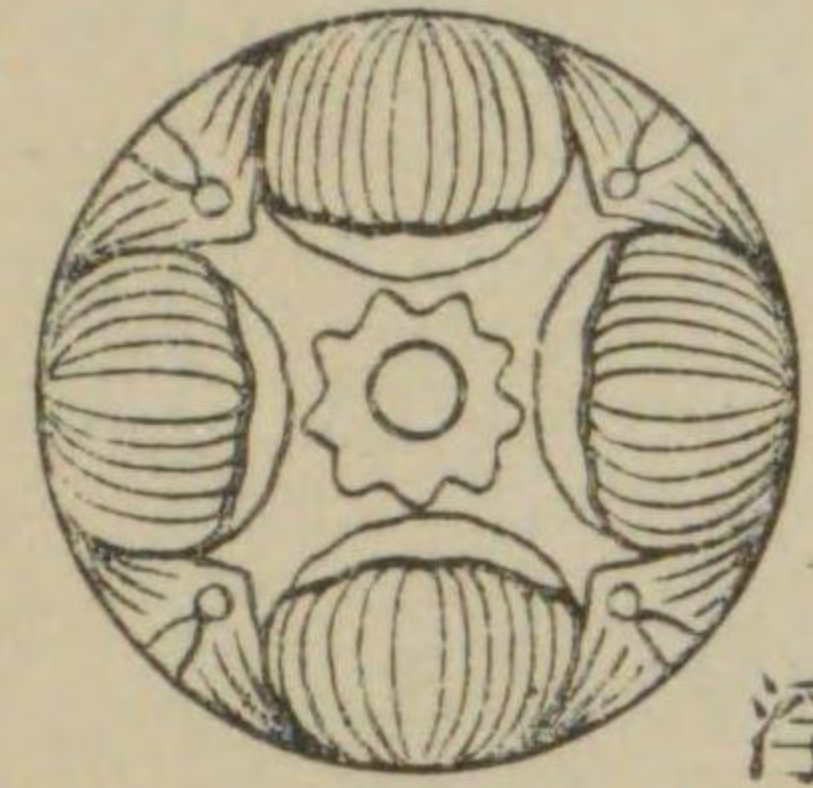






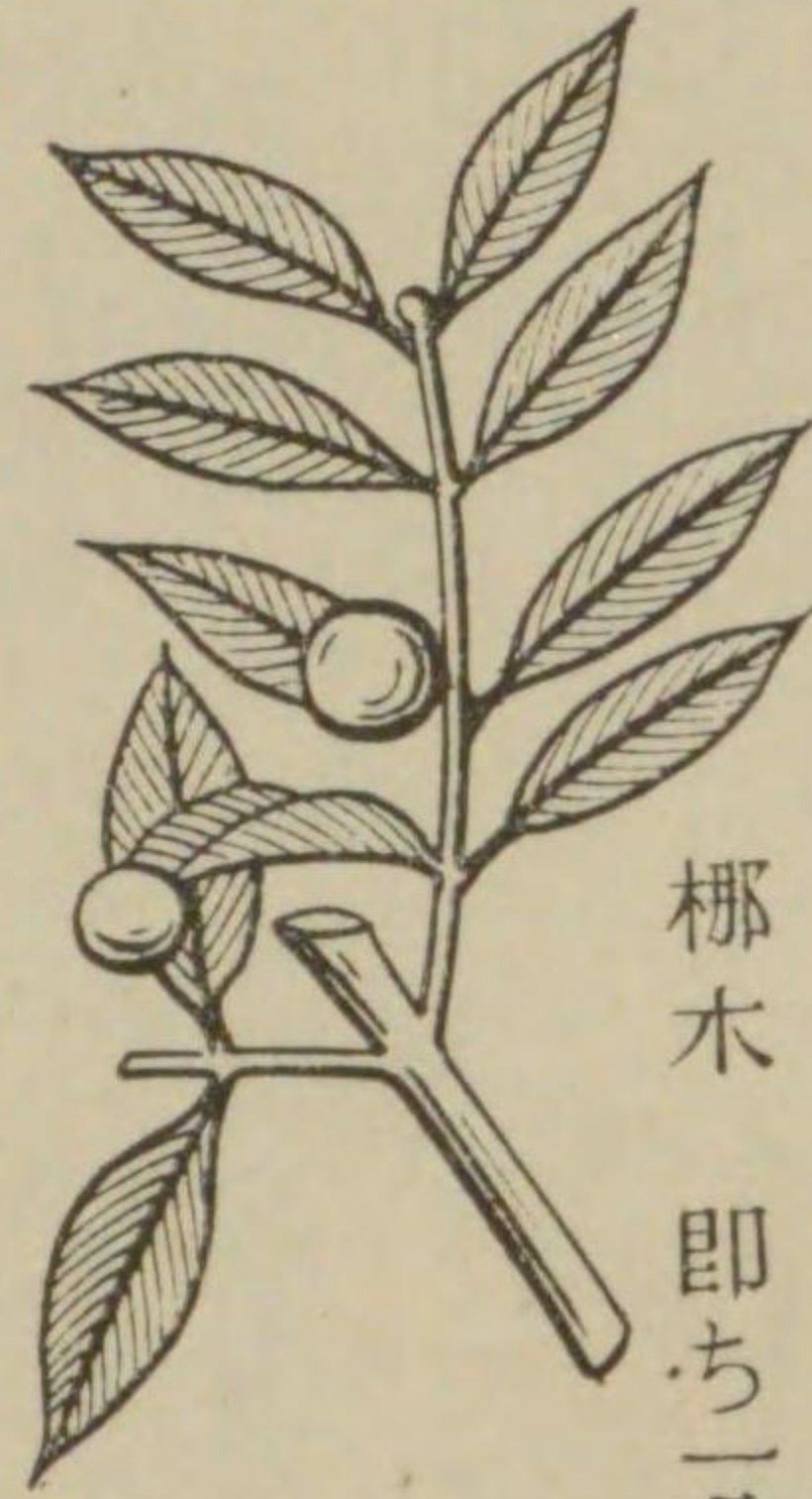




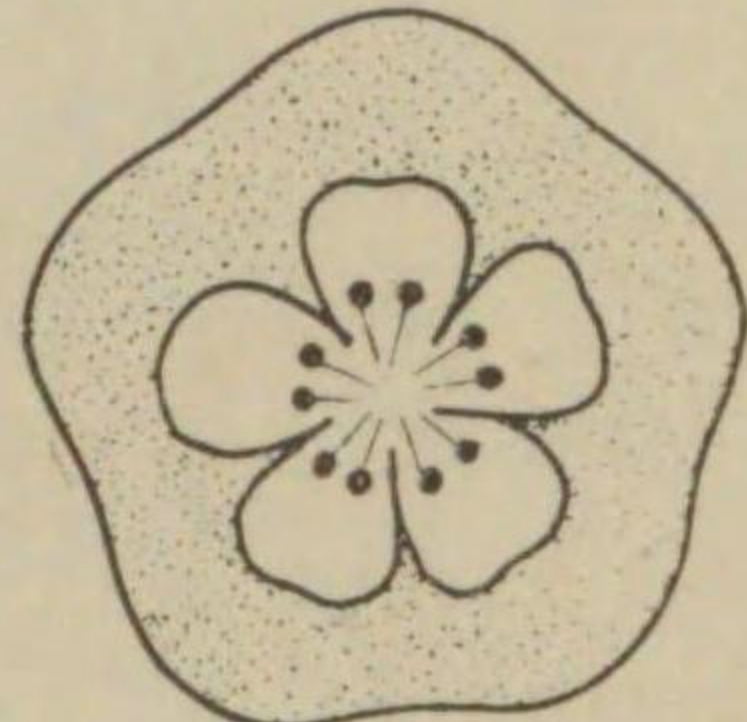


浮線綾

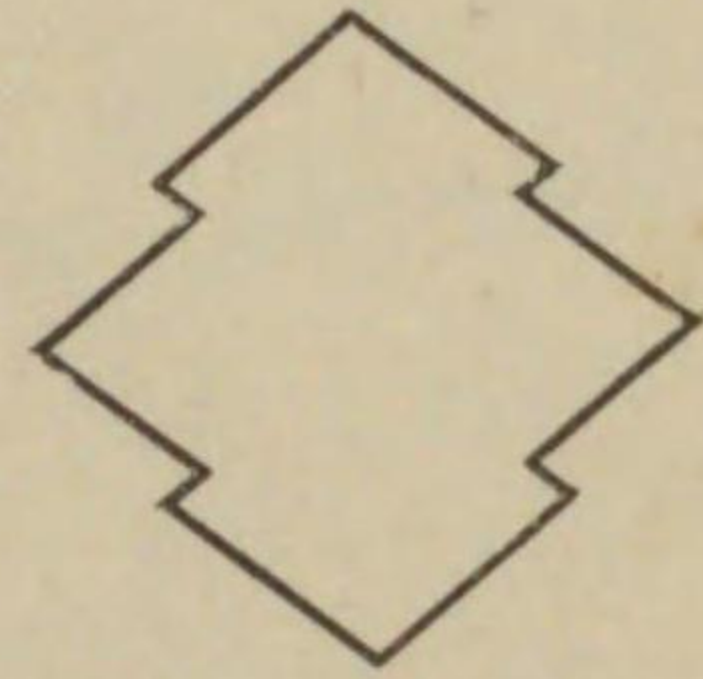
織紋の糸を浮せて  
織った浮織の綾



椰木 即ち一名竹柏

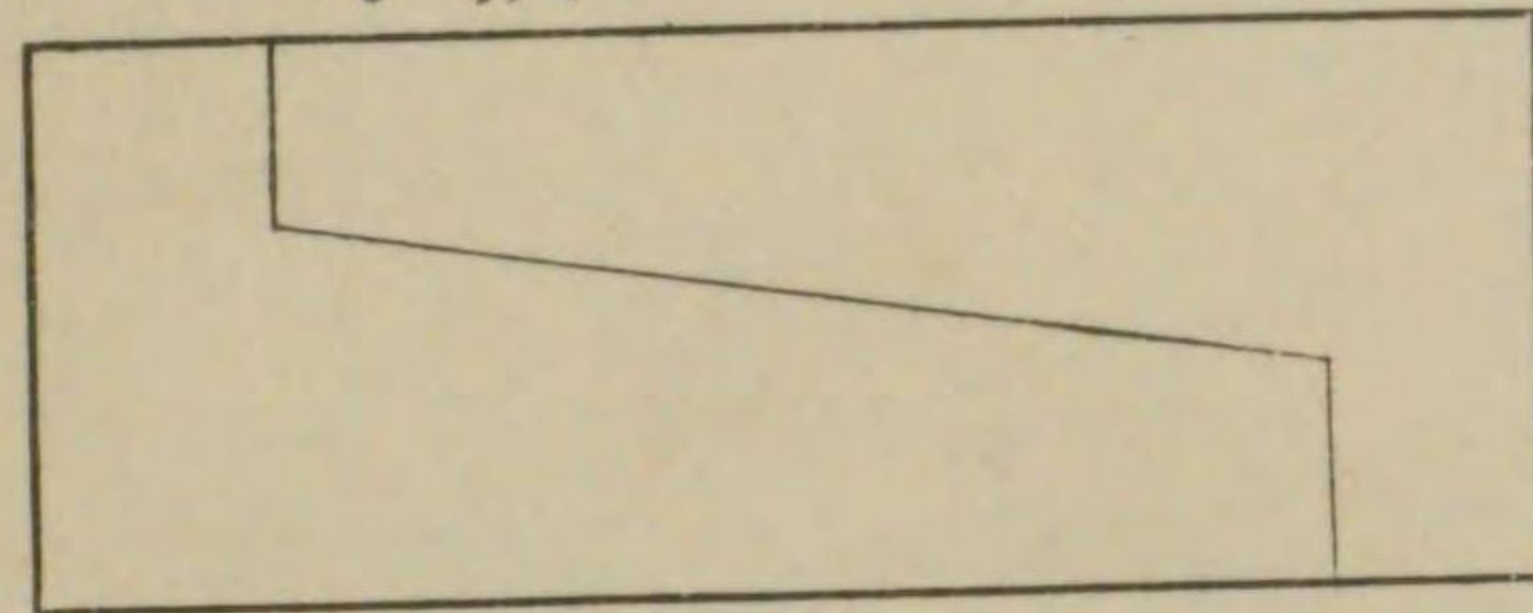


木瓜紋  
一に窠の紋  
即ち胡瓜の断面紋

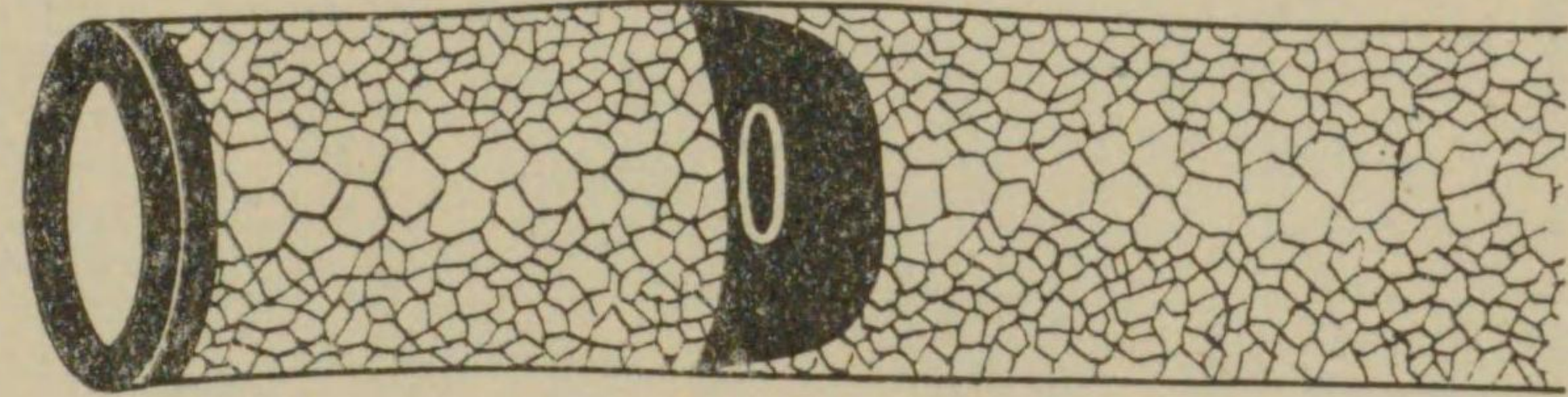


松皮菱

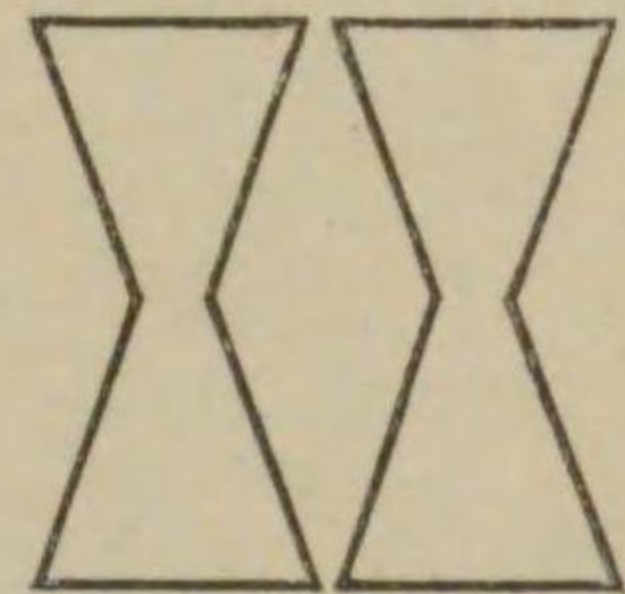
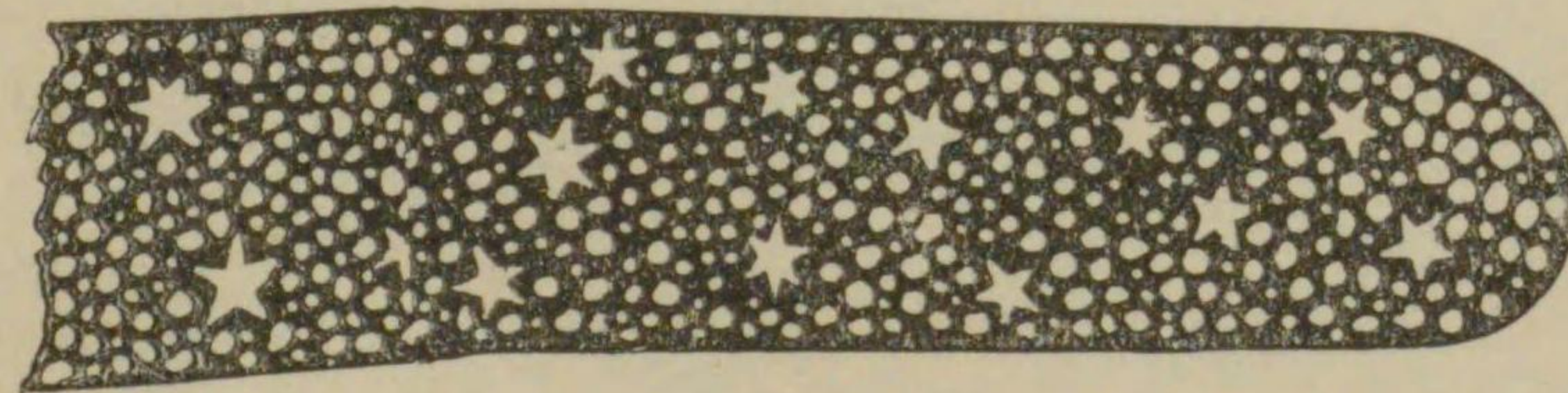
方裁の衽逆



ゲライカ脊

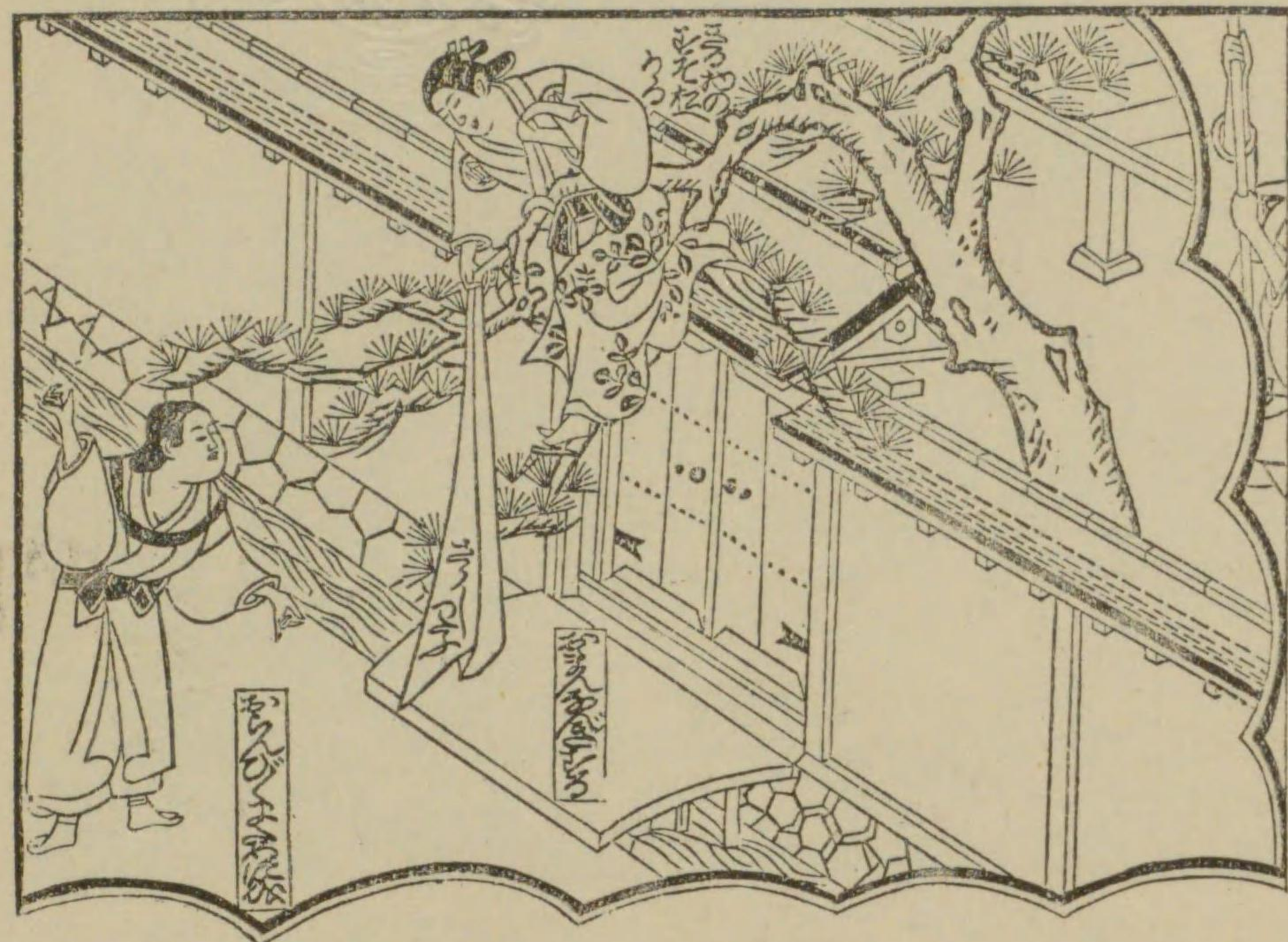


パツパ

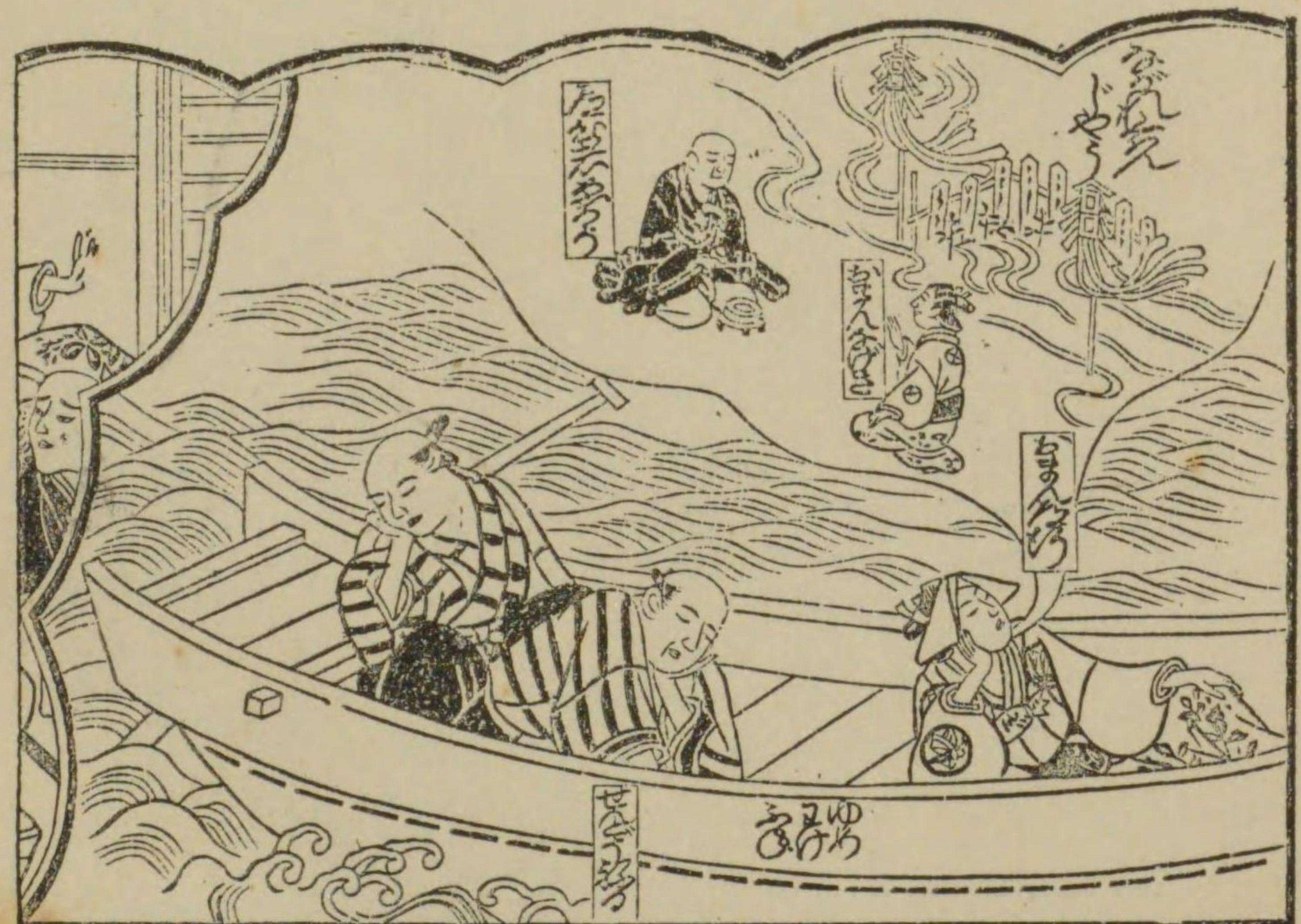


輪鼓



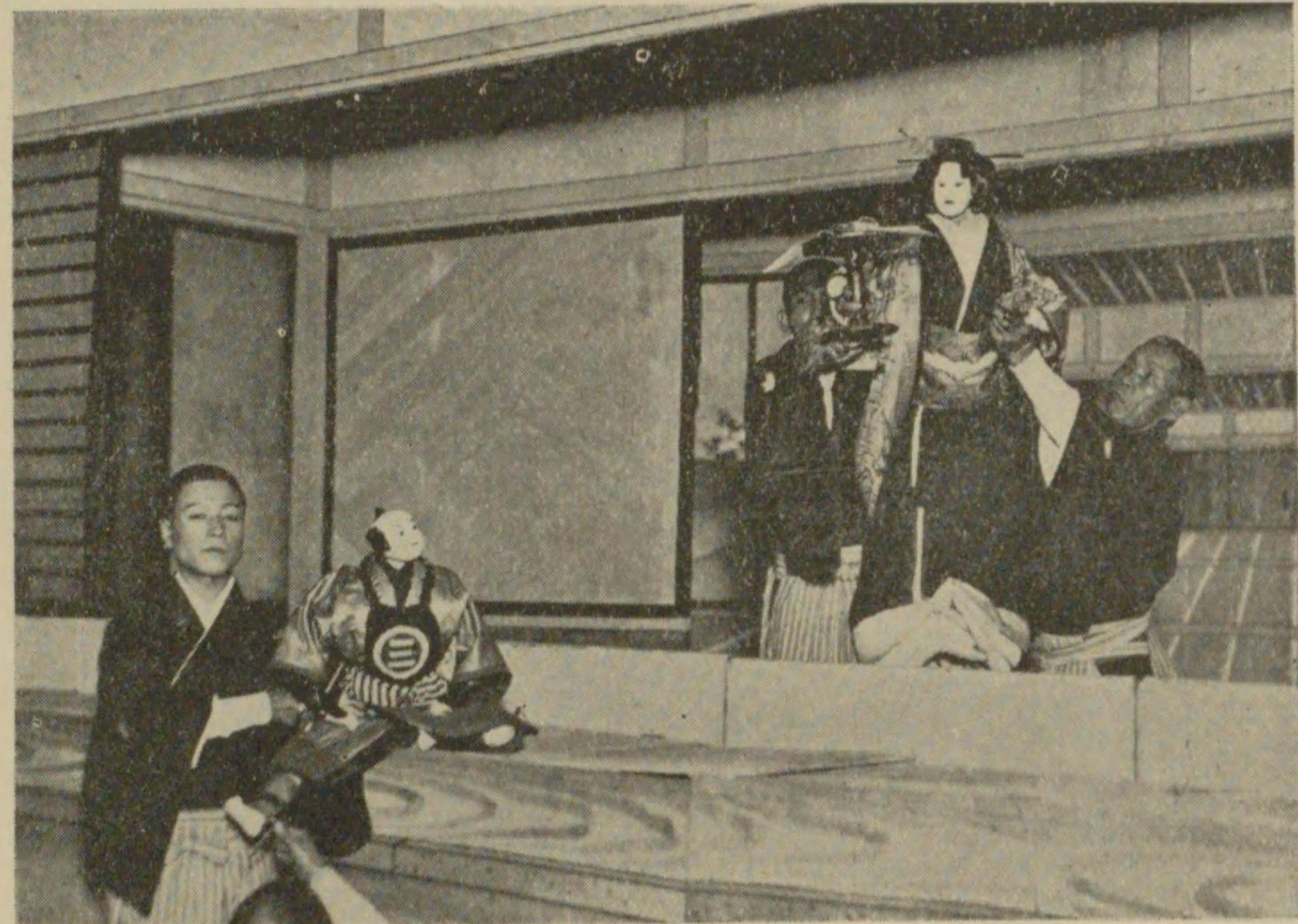


(巻の下) 歌 ま つ さ



(舟分夢衛兵五源んまお) 歌 ま つ さ





(場のれ別子井の重卷上)節室小の夜つ待作與波丹  
 (璃瑠淨形人樂文阪大てに場舞演橋新年三和昭)



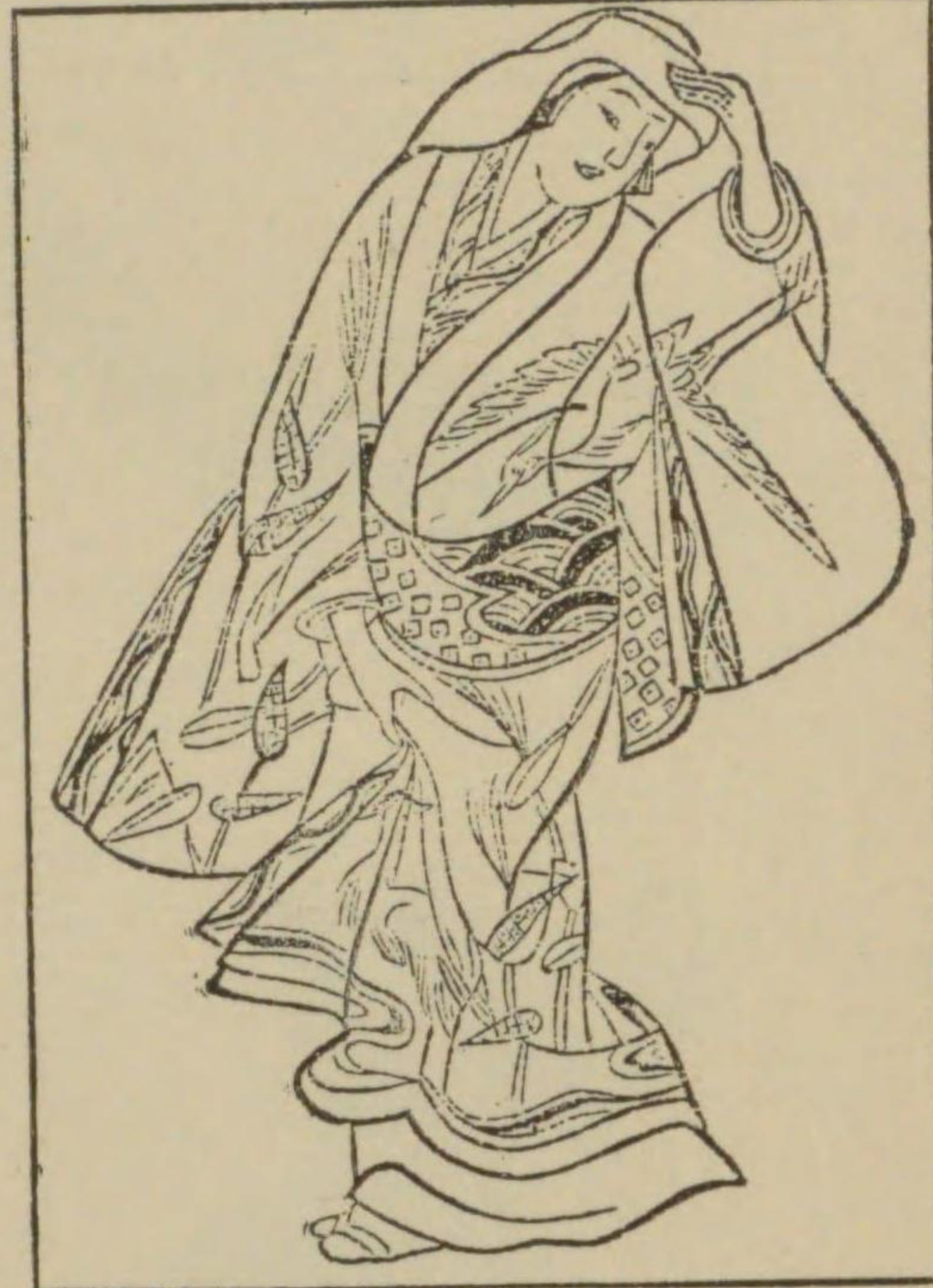
圖の王牛野熊



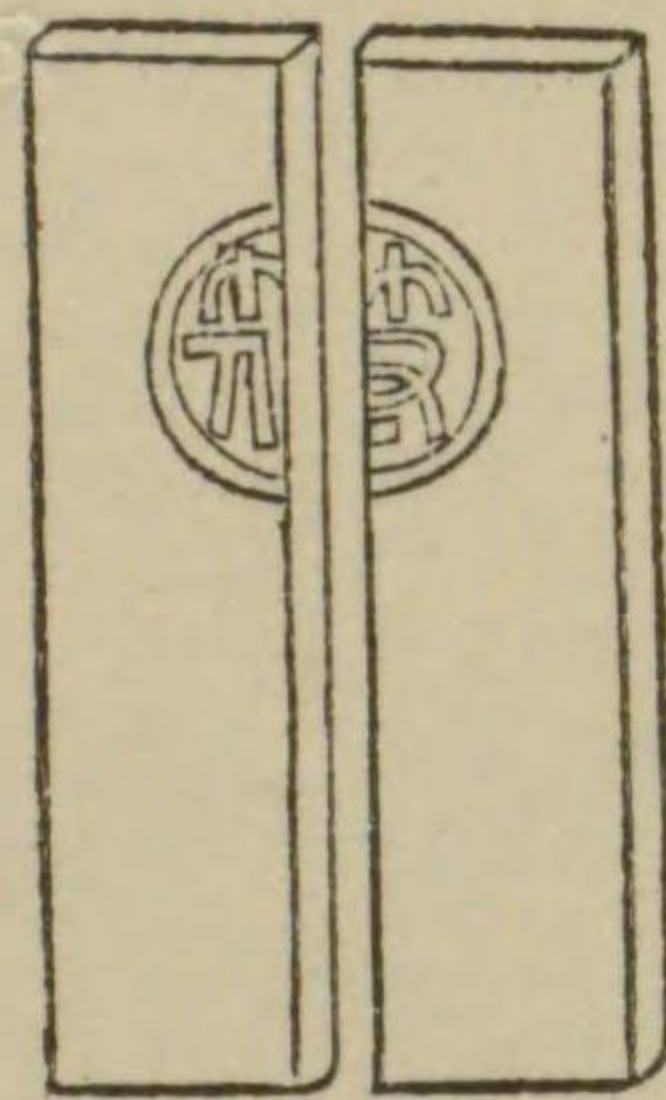
節  
季  
候



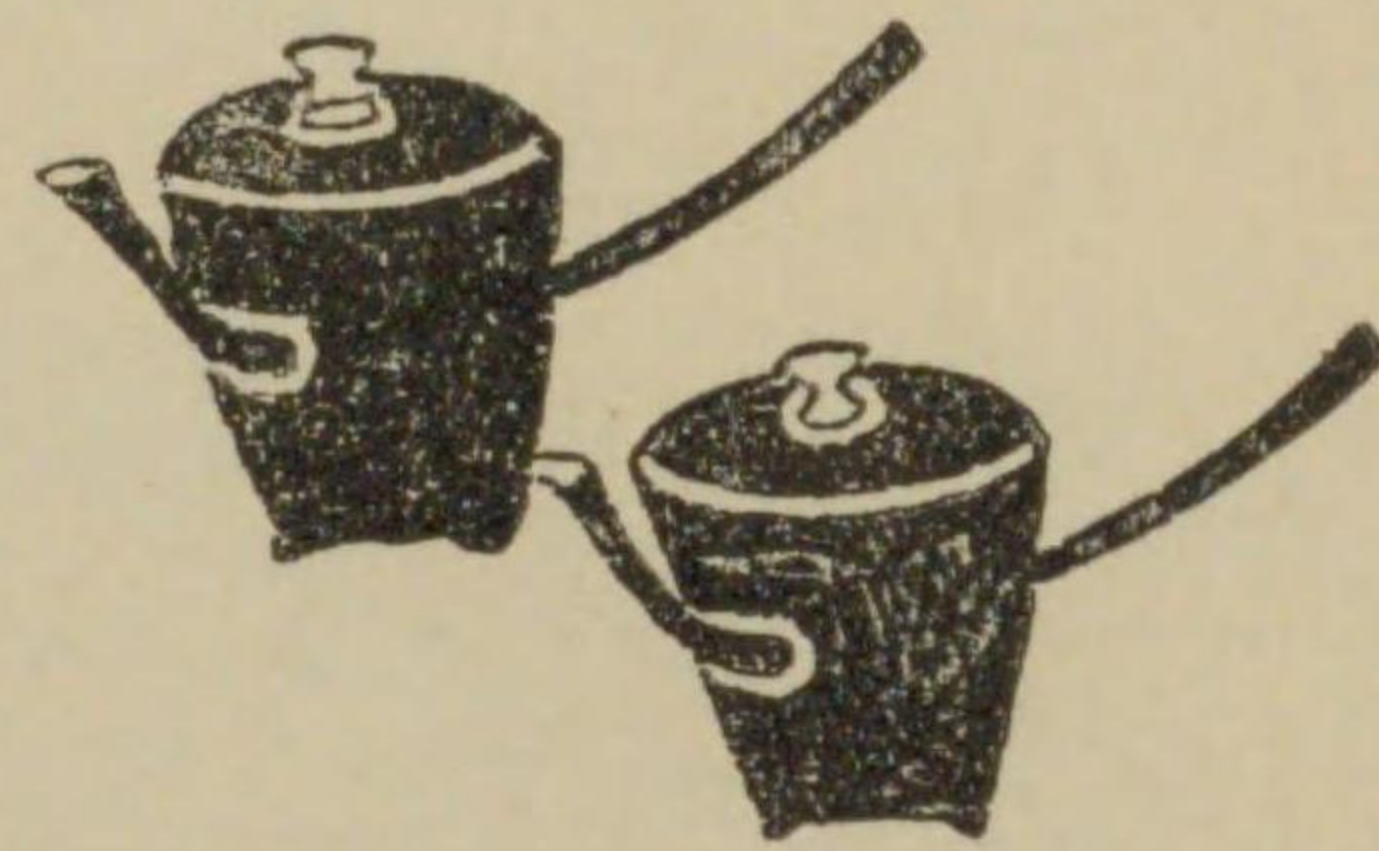
蘆  
に  
鷺  
の  
模  
様



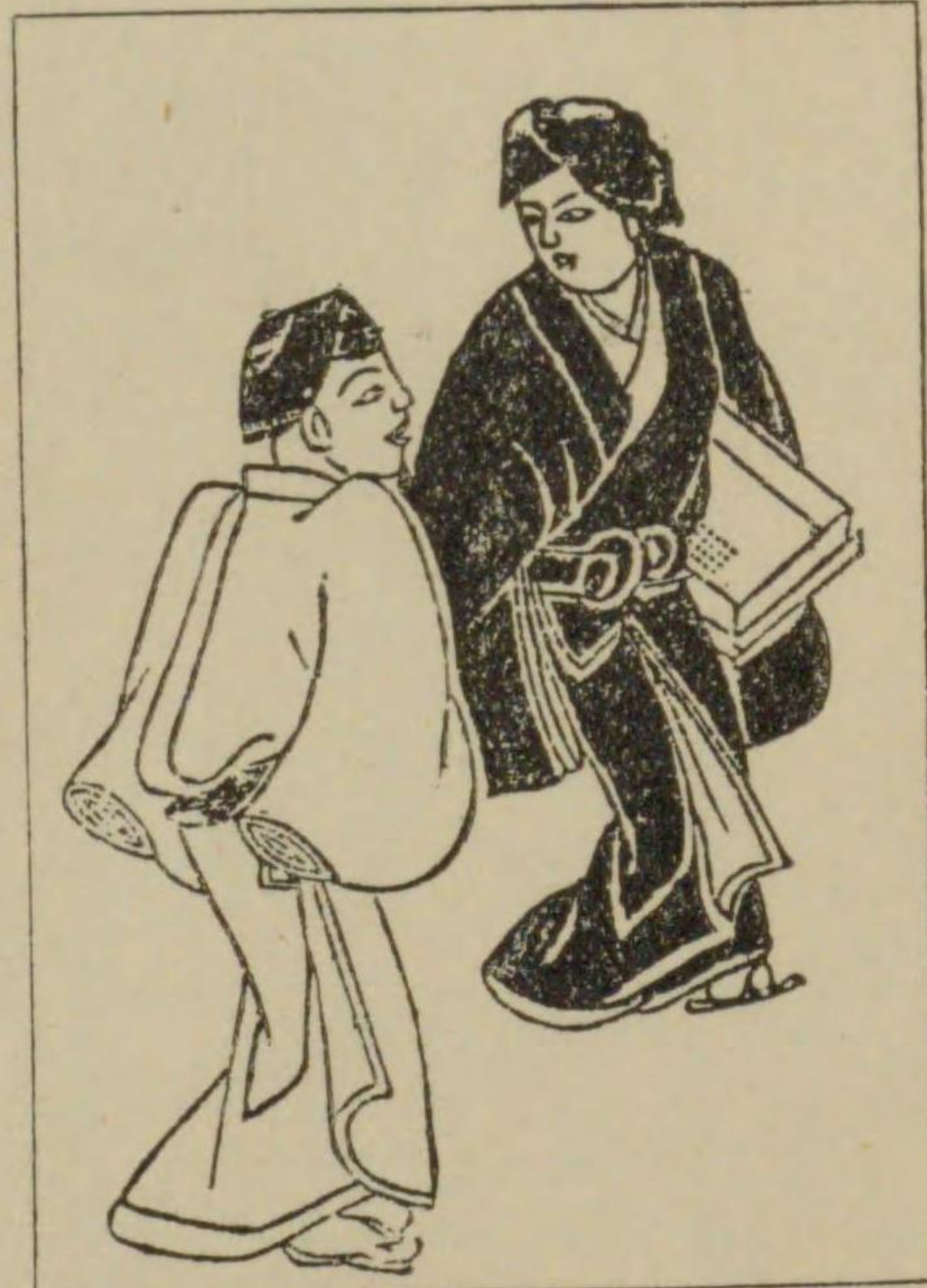
割  
符



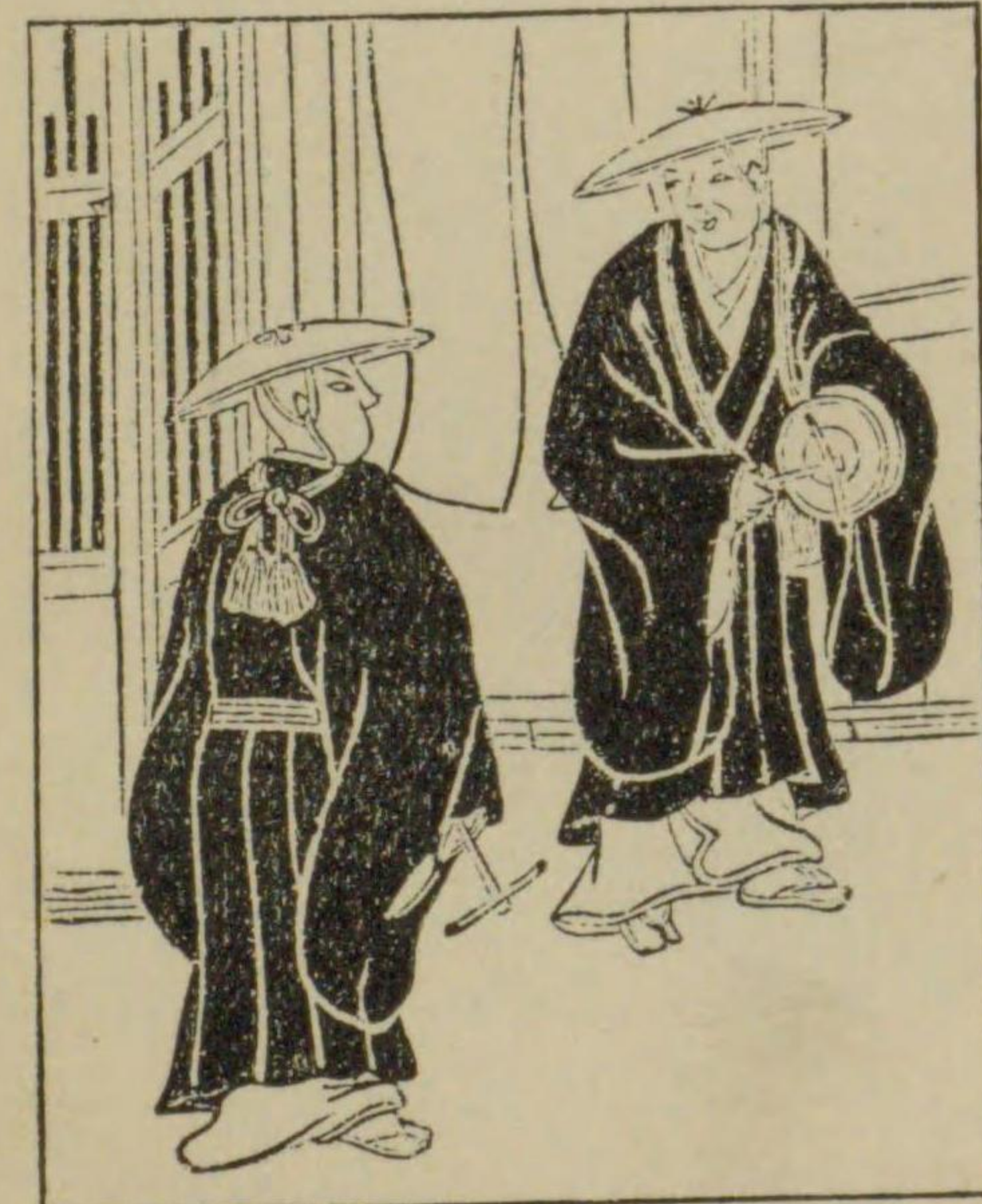
ひ  
さ  
げ



歌  
比  
丘  
尼

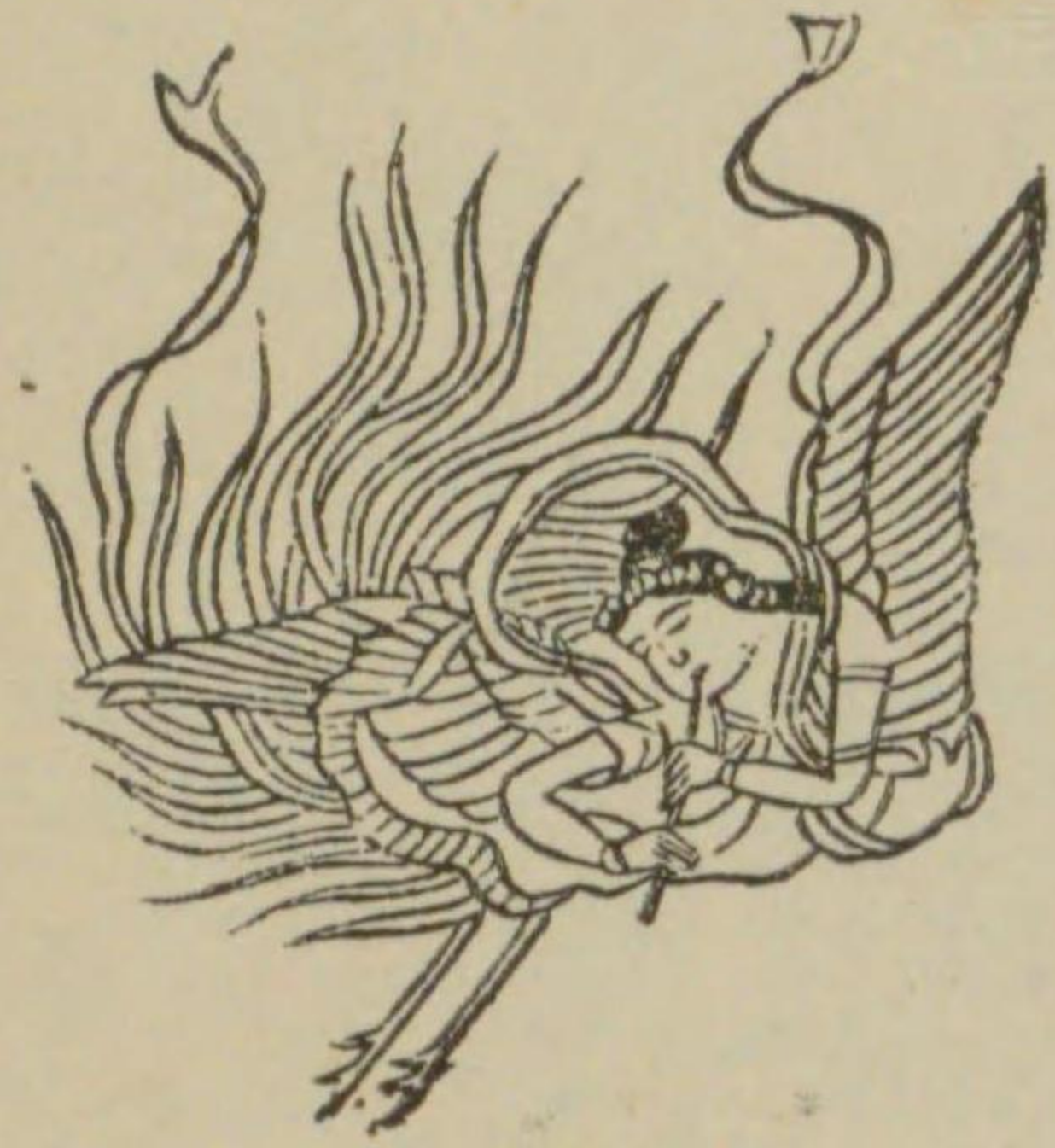


歌  
念  
佛

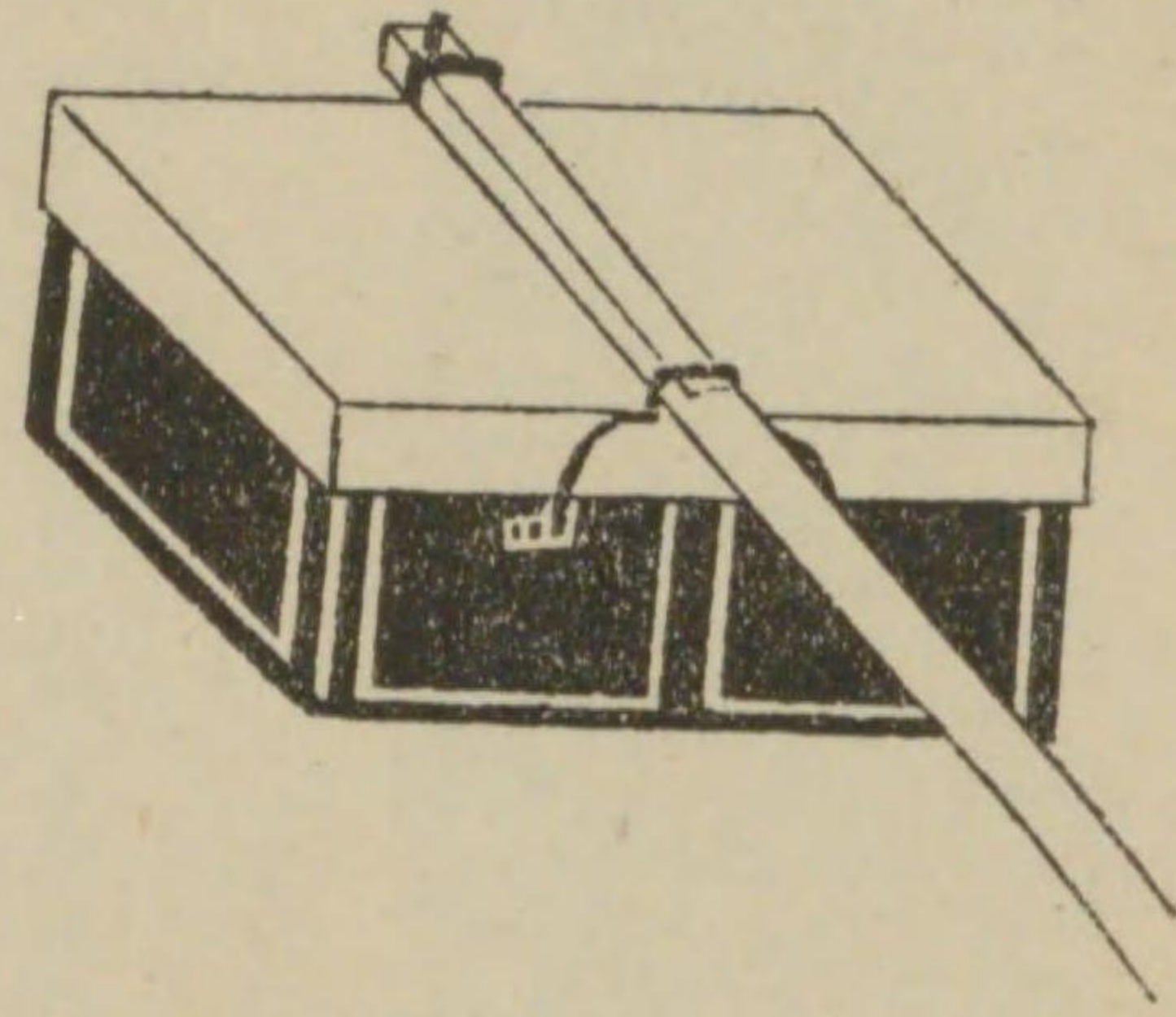




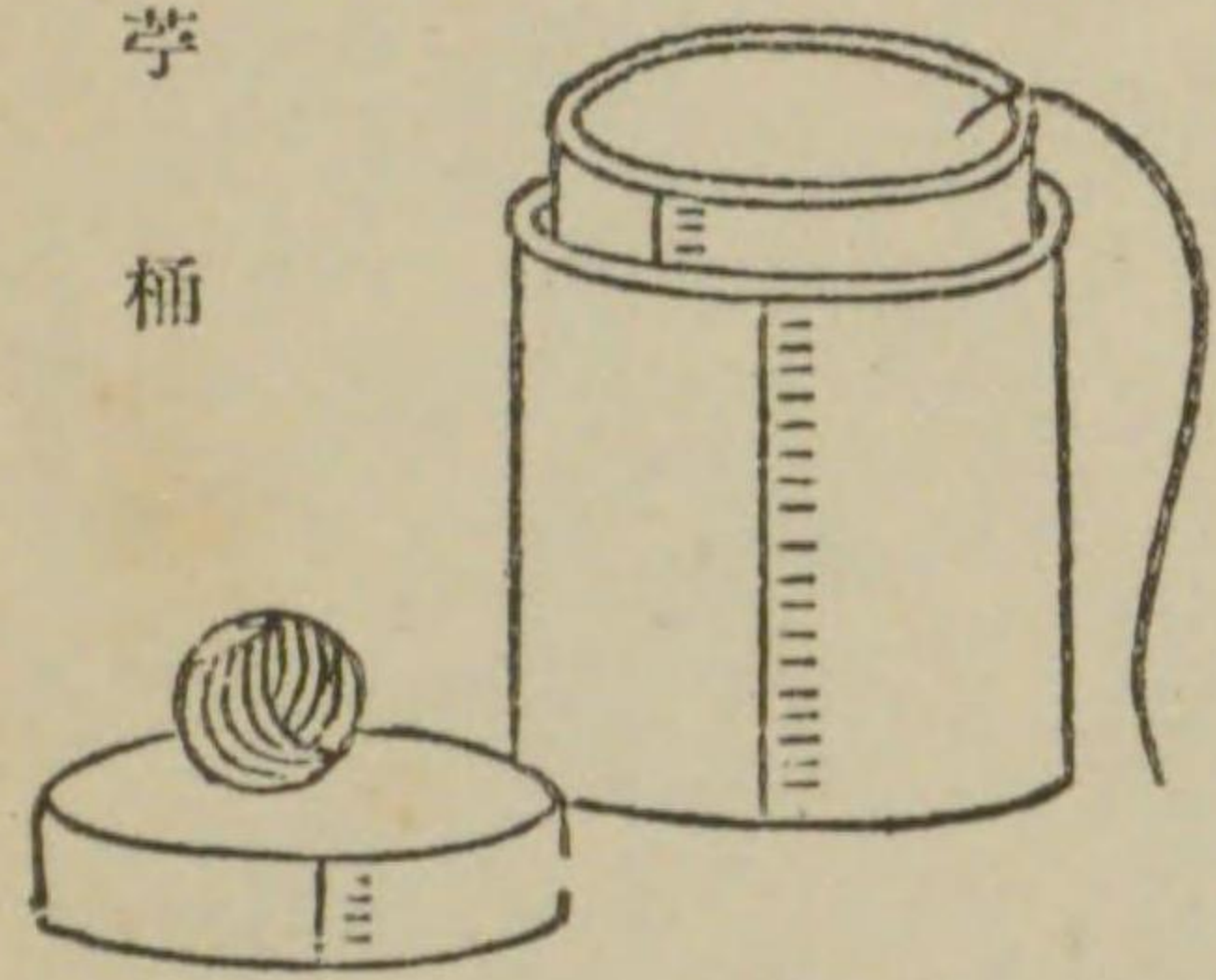
迦陵頻伽



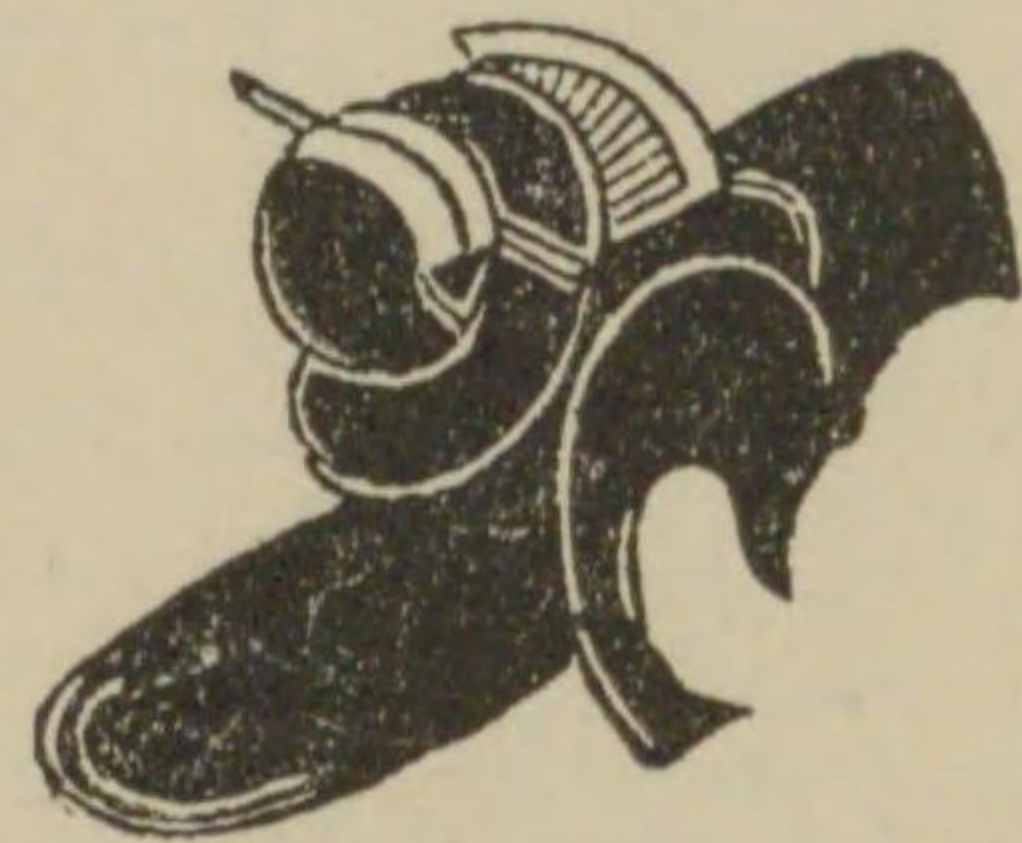
挾箱



苧桶



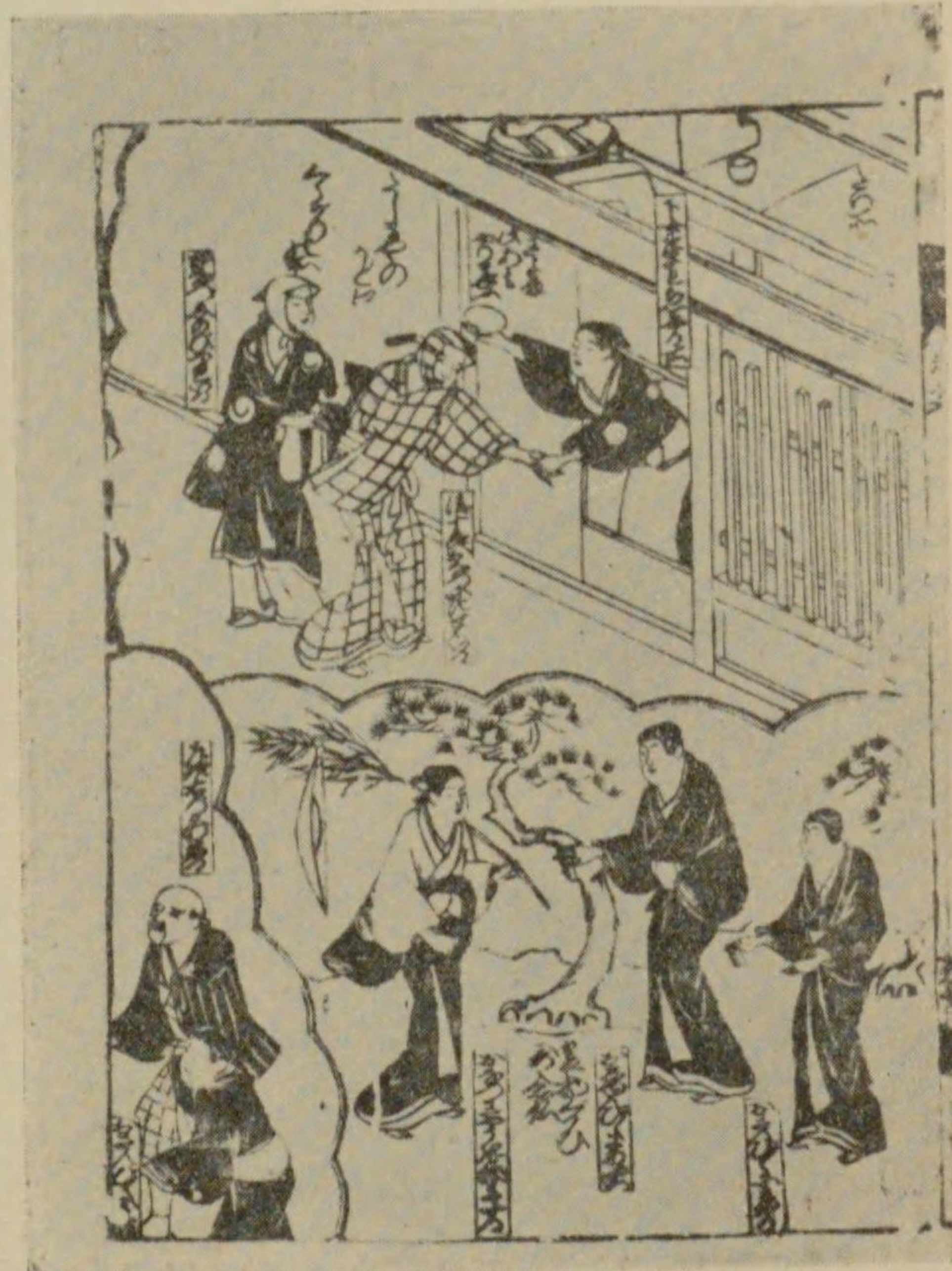
笄  
蓄



郎十清夏お



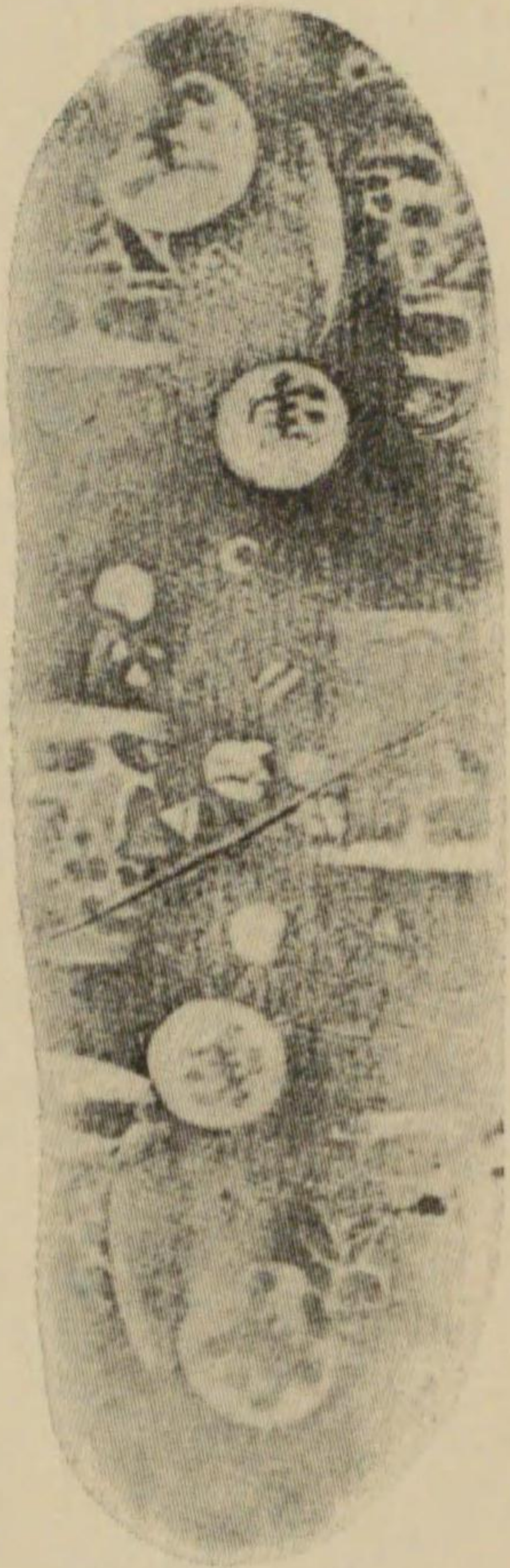
圖の(んけ八)明有







おさん 茂兵衛(哥麿筆)



四室 銀

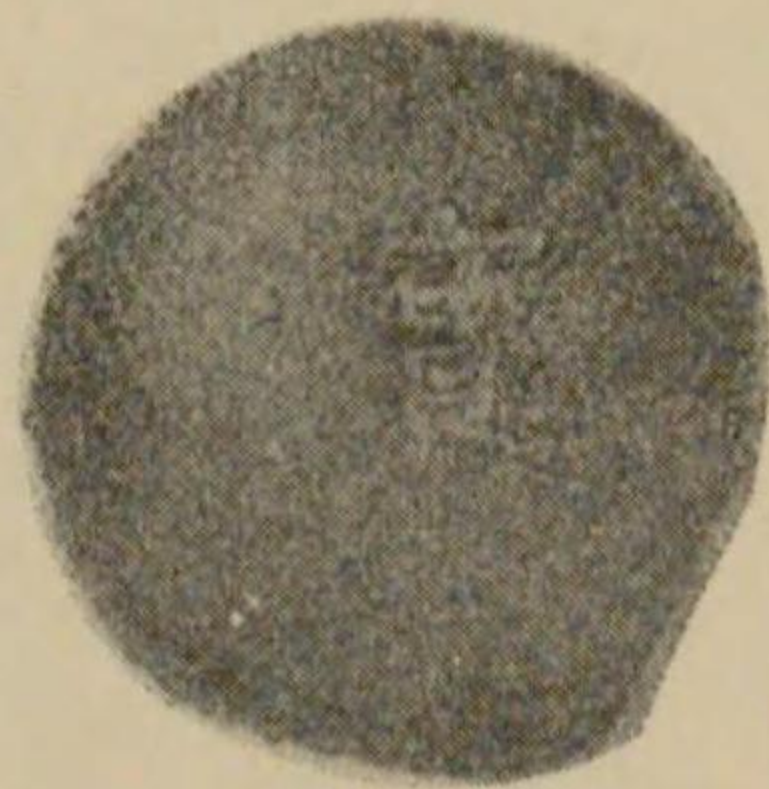


夕霧阿波鳴渡の伊左衛門



圖の釋講記平太

いふ 粒銀・豆板・小豆など





## 第二卷の序

- 一、本書の第一巻を公にしたのは昨年四月でありました。後から考へて見ると、註をもつと澤山にしたかつた點や多少の誤植の残つた點や、製本の不完全であつた點など、色々の缺點があつたにも係らず、伊原青々園氏や、笹川臨風博士、その他數氏から、種々の新聞雜誌などに於て、柄にもない好評を頂いたことは感謝にたへないことでした。
- 二、第二巻 昨年末か、遅くも今年始には公にする筈であつたのですが、書肆の事情や、印刷所の怠慢や、著者の昨年滿洲に於ける満電の自動車轉覆負傷による二ヶ月間大連で入院等の爲に、遂に後れ／＼して豫定も何もなくなつたのですが、第三巻は立派に今年中に公にして、世話物二十四篇全部丈は、一先づ纏りがつく筈です。
- 三、此巻は第一巻に比べて、更に註を詳しくし、色々批評を参考して随分意注を加へましたが、要するに専ら一般人が字引を引かないで讀めるやうにといふことにのみ重きを置きました。
- 四、著者は今世話物全部の譯註を終りて、新に近松の文化史的的研究等に没頭してゐます。これまでの近松研究とは少し異つた立場から、少くも此處數年に亘りて専念研究をつゞける積りです。いな、著者は、これを畢生の事業として行きたい考をもつやうにもなつたのですから、或は一生の間、近松研究に生命をなげうつことになるかも知れません。兎に角今の著者は、明けても近松、暮れても近松と、まるで近松狂のやうになつてゐます。
- 五、此巻に收めたのは、第一巻に洩らした心中物の二つ、即ち萬年草と生玉心中の外に五種ありますが、中にも丹



波與作のむつかしさや、さつま歌の鐘印の處の厄介さと來たら、並大抵ではありませんでした。鐘印の中には近松すら、二つばかり間違があるといふ位ですから、私の註にも誤があるかも知れません。然し、丹波與作の賭の所などは、樋口先生のお説を拜聴したあとで書いたのですから、胸のすくほど明確に説明を加へておいた積りです。

六、此巻に收めたもの、臺本としたのは、大經師昔曆及び生玉心中が、共に七行本であつた外は、凡て八行本でありました。

七、特別の場合を除く外は、一々の語釋の出典を記さないことは、前にも述べた如くですが、これは舊來の學者の通弊を除かんが爲めと、繁を避けんとした爲であるに過ぎません。出典が明示してないからといつて、此書にあげた六ヶ敷い註譯を疑ふことは無謀なことであると附記しておきたいのです。著者としては、むしろ他の本などに記してあつて、不要だと思ふものこそ、わざと出典を省いておいたのが澤山あります。

八、最後につけ加へておきたい一事は、ゑらい専門家の中には、近松の現代語譯などいふことを元來やるのが馬鹿げたことであり、決してやれないことであり、又やるべきことでないといふものゝあることについてです。成る程近松の文章が、とても散文などに容易にかへられ、いや、決して他の語に譯されたりなど出来るものでないことは誰にでも分ることです。そんなことは専門家でなくも、識者でなくとも分ることです。ところがそれでは文學としての、語り物としての味を直覺することは、學者や、ゑらい人には出来ても、語を通じての確かな意味が、一般の平凡な讀者には、果してよく理解することが出来るでせうか、何を書いてあるのか、どんなことをいつてあるのかといふことが、役者にでも、語る人にでも、乃至語り物を聞く人や、學生などが教師なしに——教師があつても、その教師さへちとをかしいでせうか——痒い處に手の届くやうに分る方法があるでせうか。註丈け見た

ので、而も此れまでのやうな分り切つたことは説明しても、分らぬことは黙つて逃げておくやうな註を見た丈けでは見當でもつくでせうか。私は敢て否と答へるのです。そしてかうした一般の人々に對して、せめて近松の概念丈けでも與へたいといふのが此現代語譯の本旨なのです。私は敢て近松の韻文的語物を、此貧弱なペンの力で、立派に現代語にかへようなどいふ野心をもつてもゐなければ、そんなことが到底私などに出来るとも信じてゐないのです。只その道の専門家が、象牙の塔にたてこもつて、すまし込んで、自分丈け分つたつもりでゐらつしやる丈けでは、私達のやうなものには到底近松を味ふことが出来ないから、近松を街頭に引下ろして、せめて大略丈けでも、共に知りたいといふ考から、此冒瀆を敢てしたのでした。かうした意味から、私の此貧弱な亂暴も、何れの世にか多少の感謝を以て迎へられるだらうことを確信すると同時に、今日でも既に喜んで迎へて下さる方のあることを感謝しつゝ勇ましく筆を續けたのでした。

一九二九年七月九日

若月紫蘭識す



第二卷 目次

薩摩歌……………一

心中萬年草……………二七

丹波與作……………一八一

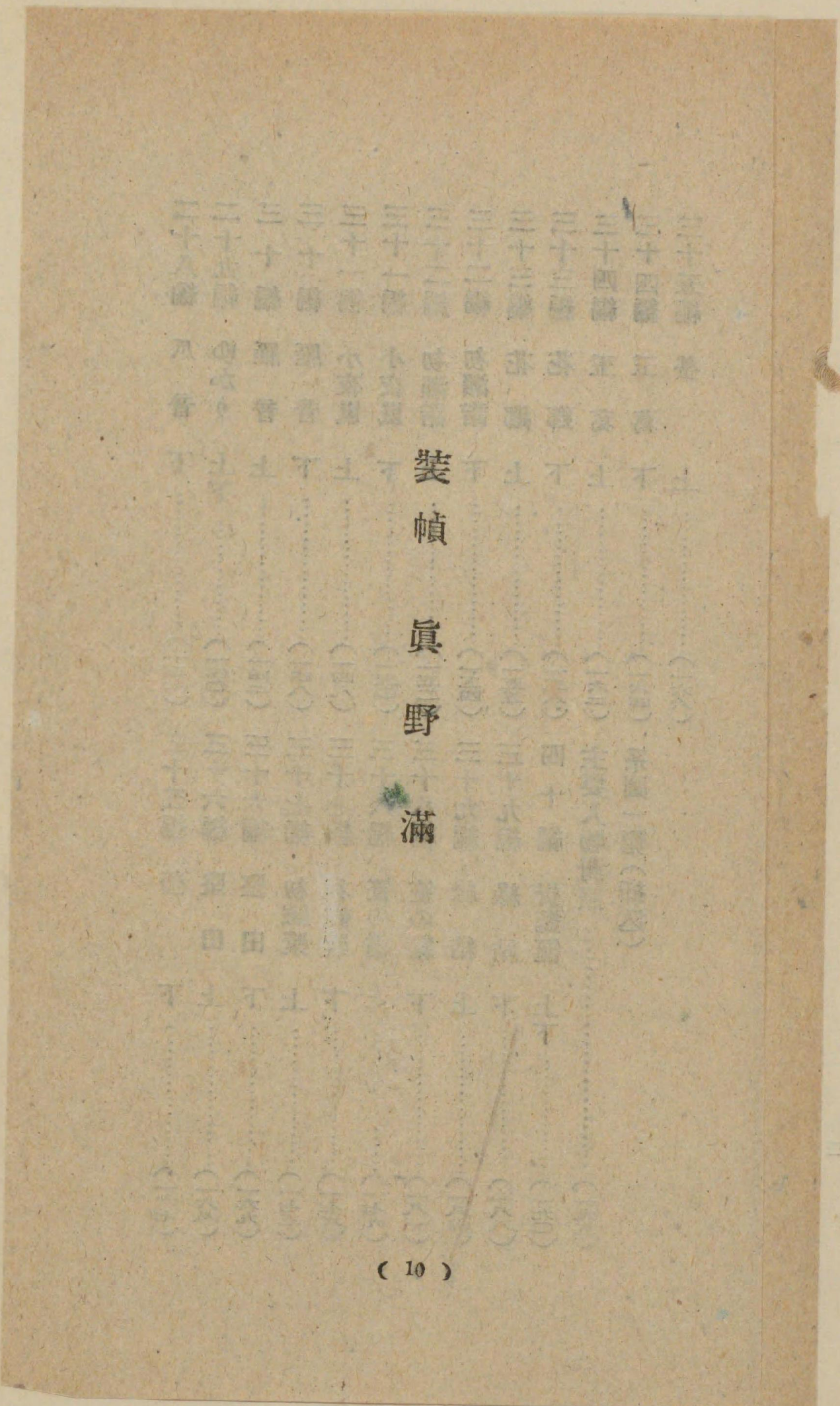
五十年忌歌念佛……………二七九

夕霧阿波鳴渡……………三五五

大經師昔曆……………四三一

生玉心中……………五五五

五





|      |     |    |       |      |     |    |       |
|------|-----|----|-------|------|-----|----|-------|
| 二十八編 | 瓜音  | 下  | (一三七) | 三十五編 | 螢   | 下  | (一六七) |
| 二十九編 | ゆかり | 上下 | (一四〇) | 三十六編 | 堅田  | 上  | (一六八) |
| 三十編  | 雁音  | 上  | (一四二) | 三十七編 | 堅田  | 下  | (一六九) |
| 三十一編 | 雁音  | 下  | (一四四) | 三十八編 | 初鐵漿 | 上  | (一七〇) |
| 三十二編 | 小夜嵐 | 上  | (一四六) | 三十九編 | 初鐵漿 | 下  | (一七一) |
| 三十三編 | 小夜嵐 | 下  | (一四八) | 四十編  | 折髭籠 | 上下 | (一七二) |
| 三十四編 | 初瀬詣 | 上  | (一五〇) |      |     |    |       |
| 三十五編 | 初瀬詣 | 下  | (一五二) |      |     |    |       |
|      | 花郷  | 上  | (一五四) |      |     |    |       |
|      | 花郷  | 下  | (一五六) |      |     |    |       |
|      | 玉葛  | 上  | (一五八) |      |     |    |       |
|      | 玉葛  | 下  | (一六〇) |      |     |    |       |
|      | 螢   | 上  | (一六二) |      |     |    |       |
|      | 螢   | 下  | (一六四) |      |     |    |       |

系圖一覽(挿込)

## 第二卷 目次

|         |     |
|---------|-----|
| 薩摩歌     | 一   |
| 心中萬年草   | 二七  |
| 丹波與作    | 一八一 |
| 五十年忌歌念佛 | 二七九 |
| 夕霧阿波鳴渡  | 三五五 |
| 大經師昔曆   | 四二一 |
| 生玉心中    | 五二五 |



源五兵衛  
おまん

薩

摩

歌

源五兵衛  
おまん  
薩摩歌  
...



# 薩摩歌

## 解題

この作は元祿十七年正月十五日に、竹本座にて初めて上演されたものにて、近松が世話物の第二作といふことになつてゐる。上中下三卷より成り、材料の點からいふと、幾分時代物めいた處もあるが、全體としての扱ひ方からは、世話物に入るべきもので、所謂世話氣分が可成に豊富に現はれてゐる。

此作に關する事實は詳ならず、寛文の頃流行したといふ「源五兵衛どこへ行く」といふ句を頭にかぶらせた流行歌が盛に流行したとから思ひつき、西鶴の五人女の一として描かれてゐる「戀の山源五兵衛物語」にヒントを得て、多くは作者の想像によりて成つたものだらうといはれてゐる。

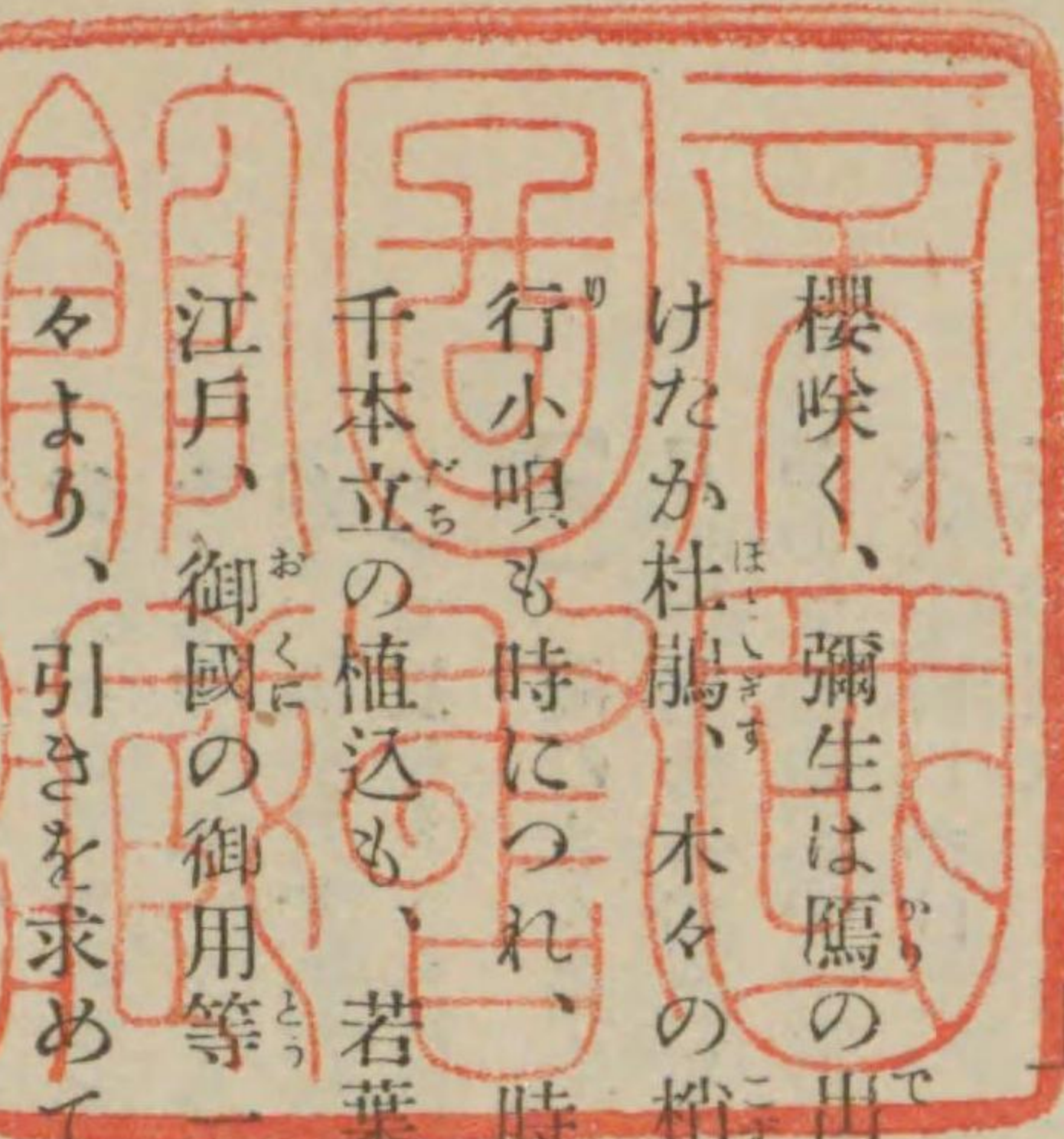
けれども西鶴と近松とは、趣向の點に於て全く方向を異にしてゐる。西鶴の作に於ては、源五兵衛は好色漢だが、一切女をしりぞけ、嘗ておまんといふ女から、艶文まで送られたが、とりあはず、却つて自ら愛した二人の若衆を失うた爲に發心し、庵室に閉ぢこもつてその菩提を吊つてゐる中、おまんは姿を美少年にかへて彼に近づき、遂に源五兵衛を口説き落したやうに書いてゐる。けれども近松の此作に於ては、源五兵衛はもと武士の家に生れ、ある寺の後住となるべく修業中、富豪にして晒布屋である琉球屋の娘おまんと戀に陥り、禁を犯した罪によりてお尋ね物と、るや、出奔して京に出で、身を下郎にして奉公をした。その家の女主人公を小萬といつた。おまんとよく似た名である。小萬はまだ見たとなく、或は死んだとも噂されてゐる許嫁の三五兵衛といふ男にあごかれてゐる。



る。源五兵衛に似た名の三五兵衛は、親の敵をさがすべく、身は死んだことにして、女姿になつて、林といふ姓を名のつて、小萬の侍女となつてゐる。小萬は林を男らしいとは怪しみながら、それがよも三五兵衛だとは知らぬ。即ち小萬が源五兵衛を傭入れた當夜、彼を寢室に導き入れたに端を渡して、三五兵衛の林は正體をばらして源五兵衛に斬つてかゝる。ところが小萬の行爲にはトリツクがあると分ると、源五兵衛は三五兵衛に、その親の敵の所在までも教へて、此家を辭して再び歸つてしまふ。歸國した源五兵衛は事介と名を變へておまんと忍ぶ中に、再びおまんの繼母の爲に仲をさかれようとする。源五は怒つて、遂に繼母を斬らんとして、おまんと腹を斬つた所へ、例の源五に恩を受け、首尾能く敵を打ち、小萬と夫婦になつた三五兵衛は、夫婦づれで尋ね來て、おまんの二人を助けて、長崎の名醫の力によつて蘇生せしめるといふ筋である。西鶴の五人女では、源五兵衛おまんの二人は、流浪してゐる中に、親に發見され、源五は娘の養子となつて、家督をゆづられ、富有な一生を終るとになつてゐて、兩作とも終は目出たくなつてゐるが、近松のは終りを縁喜よくごま化した心中と見るべきである。此作の外題が、流行の小唄から來てをることはいふまでもないが、近松は前年に試みた「曾根崎心中」が當つたのに味をしめて、之を工夫し、筋の興味の上に大衆を引寄せんとしたものであらうが、その割合に長い生命をつなぎ得なかつたことは、元文二年薩摩の武士早田八左衛門が大坂北の新地櫻風呂の菊野を殺した事實によつて、八左衛門を源五兵衛とし、三五兵衛を敵役とした冠子、半二、松洛等の合作「薩摩歌妓鏡」が寶曆七年竹本座で上演され、又並木五瓶の歌舞伎「嶋廻戯聞書」が寛政六年大坂中座で、やがて之が又「五大力戀絨」と題して、人物の名を全部近松の名に改めなどし、翌年江戸傳内座にて當てた以來は、「小まん源五兵衛」といへば、むしろ歌舞伎狂言の如く思はれ、近松の此作のとは近頃まで忘れられてゐたといふことによつても知られると思ふ。

源五兵衛  
おまん  
薩摩歌

上之卷



櫻咲く、彌生は鴈の出かはりに、新參の燕置きつけて、跡を濁さぬ水の面、這出の蛙二合半、首にかけたか杜鵑、木々の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取り、一季半季の花鳥も、兎角は御縁次第なり。流行小唄も時につれ、時の昔と何處へ往く、寛文年の頃かとも。御城本は但馬國、京の屋敷は千本通、千本立の植込も、若葉の錦見掛から、長者町をば押廻し、出水通りの長屋門。此大屋敷を預り、京、江戸、御國の御用等一人に承はる、御留守居平鹿の何某殿にこそ、中途に奴草履取、召置かるれど方々より、引きを求めて目見えする。

【註】 ○出代り―昔奉公人の出代りは三月五日を境として行ふことに習慣が定まつてゐた。その出代りを、雁去つて燕の來るにたとへたので、全體が、平鹿家とて、草履取りの奴を召抱へることに、糸口を開いてゐる。だから出代りだの新參だのいふ語をもち出したのである。 ○置つけて―まはらせて、おいて。自分の代りに新參者をすはらせるのである。 ○跡をにごさぬ―立つ鳥はあとをにごさぬの諺をとる。 ○這出の蛙二合半―這出しは、今日いふかけ出しと同じく、飛出したばかり、ポット出、新參の意。蛙はやはり春出る動物として、奉公人の意に用ひたのだ。二合半は、奴の給料が其頃一日二合半だつた故いふ。 ○首にかけたか杜鵑―杜鵑が「本尊かけたか」と鳴くといはれてゐる語にかけた。首にかけるは、二合半の扶持米をもらつて、それを入れた



箱を首にかけたかといふ意をいつたので、その意を杜鵑の鳴聲にもちつたのだ。樋口氏説。○繁蔵―木々の梢の繁るに、好色の意のしげるを云ひかけて、繁蔵といつて、好色奴の名に擬したので、源五兵衛の情事の伏線としたのだ。樋口氏説。○誰が呼子鳥意履取―草履取りを繁蔵とたれが呼ぶか。草履取りは即ち二合半づゝの日給をもらふ奴僕のこと。○一季半季の花鳥―一季半季即ち一年半で、花が咲いたり散つたり、鳥が来たり又移り去つたりする様が出代りと似てるから、花鳥は、出代りをするもの即ち奉公人にあてたのだ。○流行小唄―源五兵衛どこへゆく、薩摩の山へ、あとはおまへが涙の海よ、船も押されず櫓もたゝず―などいつて、「源五兵衛どこへゆく」とつけた小唄が、此頃しきりに流行した。○時の昔と…過去つた時は昔、昨日は今日の昔ともいへるから、源五兵衛何處へゆくの小唄から、過去つた時の昔とどこへゆくといつたのだ。○寛文―おまん源五兵衛の心中は寛文三年であつた。○頃かとよ―頃であつたかよ。○御城本―本城、お國。○千本通り―正面千本通りから、長者町をくると廻して、長屋門は出水通りにあるのだ。○千本立―上の千本にかけ、只澤山の意に用ひた。○若葉の錦見掛―若葉の錦が、見かけから長者に見ゆるといふ意を長者に引かけたのだ。○中途に―出代り時でなく、半ばの時に。○奴意履取―殿に従つて草履持をする奴僕の意にて足輕をいふ。○ひきを求めて―因縁を求め、つるをさがし。

【譯】櫻のさく彌生の頃は雁が去つて、代りに燕の來る時であるが、それと同じく奉公人は、出かはり時の三月五日に、新參の燕にも比ぶべき代人をおいて、立つ鳥は跡を濁すなといふ諺の如く、跡の水の面をにござぬやうにするのであるが、土の中から這ひ出した蛙に比ぶべき、山出しの奉公人は、一日の扶持米二合半をもらつて、その米入れを首にかけて、ほぞんかけたかと杜鵑の如く鳴き、木々の繁る頃を、好色のしげ蔵と、誰れ呼ぶとなく呼ばれて、草履取りとなりて、一年半の奉公をする。かうした花や鳥のやうな奉公人も、兎角は御縁次第である。源五兵衛何處へゆくなどの流行小唄も、時の流れにつれて、昨日は今日の昔と何處へゆくことやら。寛文のころであつたかよ。御城は但馬國にあり、京の屋敷は千本通りにあり、限りもない澤山の植込も、若葉の錦が見かけから長者らしく見ゆる長者町を廻りて、出水通りには長屋門がある。此大屋敷を預かつて、京都、江戸及御國元の三方の御用を一人であづかる御留守居平鹿の何某殿にて、今季節の途中で奴草履取りを召直かれるのであるが、諸方から因縁を求めて目見えをしに來るのである。

此頃五人三人宛、毎日吟味なさるれど、好い男さへ稀なれば、すこしよめなる女房の、びかしやかぶるは科ならず。中間頭寄親の四十平下見をして、「ム、何れも好い奉公人衆、さて御家の若旦那、殿様よりお小姓に召出され、親旦那御同道で只今は御江戸に。御若年の若旦那、氣を知つた上方者を抱えてやらんと仰せられ、小まんさまと申す姉御様、お部屋のお庭へ召出され、簾越しに御覽あり、女中寄つての御極め、女中多いといふ中にも、背のすらりと眉目の好い、二十餘りの女中が受返答を召されよ。林殿とて姉御様の御氣に入り。第一此人の言成しとはいひつ、縁次第任合次第」といふ處に、小庭へ廻る車戸の、懸金外す女の聲、「これ四十平、奉公人揃ふたら、一人づつお庭へ廻しや」と、言捨てて立歸る。

【註】○少しよめなる女房―少し美しい顔立の女。○びかしやかぶる…得意になりて、びらしやらするは罪もないこと。○寄親―奉公人の保證人、親分。○寄つてのお極め―寄集つて取りよめなされる。○受返答―主人姉御様に對して受け答する。○云ひなしとはいひつ―取りなしとはいふもの。

【譯】此頃五人三人づゝを毎日吟味をし試験をなさるが、好い男さへ滅多にはないので、少し美しい女の自慢らしくびらしやらとするのは罪もないことである。中間頭、奉公人の親分四十平は下見をして、「む、何れも好い奉公人衆ぢや。さてお家の若旦那には、殿様からお小姓に召し出されなされて、親旦那と御同道で江戸へお下りなされ、只今は江戸においでなされる。その御若い若旦那に、氣の知れた上方者を抱へてやらうと、小まん様と申す姉御様が、仰せられて、お部屋のお庭へ奴一同を召出されて、簾越しに御覽あり、女中達寄つてたかつての御取りきめといふ次第である。ところで女中といつてもその数の多い中にも、背のすらりとした姿の美しい、二十歳餘りの女中が受け答をなされるといふのである。その女中は林殿といつて、若旦那の姉御様の御氣に入りである。第一が此人







にも色々とお好みがあるが、お前はそれを心得てをりやるか」といつてたづねると、尋ねられた奴は「私が生國は陸奥の國でござります。武家の七つ道具の扱方一通りや、お馬の湯洗ひのしかた、又その伏せ起しのしかたなどについて、武家での奉公を仕枯し、しなれて、糠味噌汁を永らく食つて、若衆の花ざかり散りはて、近年高野に勤めて、姓達の指圖をし、世話はしましたが、何しろ高野六十、那智八十といふ言葉通りに、年がよつて、きんか頭で若衆をやつてゐたので、遂にさかやきを剃つたとはございませぬ」と答へた。

林「さやうとや怖や。其様な目出たい若衆に、升かけをさり米望み次第ぞや。次なは何うぞ」と奴「拙者は伴の時分より醫者衆に相勤め、町人參や香附子方の奉公は不案内。地體我等は川芎持ち、同じ處に當歸まで、半夏々と季を重ね、罷任し朋輩の、中居に鳥渡甘草の、甘うまい事仕り、旦那茯苓いたされ、詮議まち／＼麥門冬、季中に其處を追出し藥。それより心に裁述を張り、よしや浮世は陳皮の皮、肩に木香かたげても、地黄に大根白髪まで、斯くては果てじとこんのだいなし薑一片。腰に一本藥研鈔、面に鍋墨髭人參、煎じ詰めたる奉公人、誓文白朮和中散、身を粉藥に御奉公、定齋なし」とどぞ答へける。

【註】○きやうとやけうとや。關東でいふこはい意。即ち關東で恐ろしやといふことを上方でけうといふ。○目出たい。老年長壽に對していふのだ。○升かけ。樹で米をはかる時、盛つた米を縁と平にする爲に用ふる木片又は竹きれ。八十八歳の人切つた升かけを珍重し、又樹かけの竹を切ると長命すると云ふ迷信がある。即ち目出度いといひ、きり米望み次第、もつと澤山やらうと、反語にいつた。○きり米。扶持米を錢にかへて與へるをいふ。升かけを切るにかく。○どうぞ。どうぞ。どうぞ。草にて、菲に似た葉で、青い花が咲く。武士にかけてるのだ。○地體。元來。○川芎。をんなかづらともいふ藥草。頭痛の妙藥

だと。疝氣にもぢる。○當歸。やまがつといふ藥草。當季にもぢる。○半夏。根を藥にする草の一種。半季にもぢる。○居。女中。○甘草。藥草。○茯苓。松に寄生する、根も葉もない藥用植物、腹立にもぢる。○麥門冬。せうがひげといふ。多く雨だれの所に植つる蕁の如き草。根が藥になる。問答にかける。問答の末の意。○追出し藥。毒を驅りのける藥。逐いだされた意にかく。○菝葜。若荷の如く、根は生薑の如き支那の藥草。我意をはるにかく。○陳皮の皮。柑子の熟したを干した皮をいひ、へちまの皮などの如く役に立たぬものと思つての意。○木香。南蕃産の藥草。根は枯骨の形をしてる。物を運搬。香にかく。○地黄。強壯劑として用ふる藥草。○大根白髪がまで。地黄をのんだものが、大根を食ふと、中毒して髪が白くなるといふ。即ち地黄を食つて根氣を養ふて、白髪になるまでの意。○紺のだいなし。紺無地の筒袖の意。○薑。漢法醫學では、煎藥に必ず薑一二片を入れて煎じたものだ。生涯一枚の意にかく。○藥研鈔。漢法醫が藥種を碎くに用ふる一種の刀の鈔。即ち腰に鈔を一つつけて、刀をさしての意。○髭人參。一種の人參にて蔓生をなす。その蔓根を藥にする。奴は鍋墨に油をまぜて、髭をかくが習であることに云ひかく。○煎じつめたる奉公人。つまりは奉公人として。漢法の煎じ藥は煎しつめてつくることにかく。○誓文。誓つての意。○白朮。根は食用にし、又乾かして蚊遣などに用ふる。誓文の詞白癩にもぢつた。白癩といふのは無癩と共に癩病の一種で、たとへ白癩になつてもいつて、誓をたてるのである。○和中散。一般に知られた賣藥。丹波與作の中巻始めに近く、梅の木は是齋の辻。處に、六地藏村に和中散の藥店三軒あり、元和の頃此處の梅の木は木蔭にて、和中散をつくり商ふとある。散藥であるから身を粉にしてもいふに對して出したのだ。○身を粉藥。粉骨碎身して。○定齋。大坂の藥種屋に定齋といふものあり、秀吉に愛せられて、明の使沈帷敬に教へられて、定齋といふをつくる。如才なしにもぢつた。

【譯】林は即ち「こはや／＼、其様な目出度い若衆には、升かけを切り、切り米を望み次第にもつと澤山やるべきぢや。このやうなところには向かぬ／＼。次の奴は何うした／＼」といふと、次の奴は「私は子供の時から醫者方に勤をし、町人や武士への奉公はよく案内をしりませぬ。一體私は疝氣もちで、その爲に同じ醫者の家に、此季節まで、半季半季と年季を重ねて、その間に、居あはせた朋輩の中居に一寸甘草のやうな甘うまいことをして、旦那から立腹され、詮議いろ／＼問答の末に、季節半ばにそこを逐ひ出され、それから心に我意を張り通し、よし浮世は陳皮の皮、へちまの皮と、下らないものと思ひ、肩に菝葜をかたげたとにしても、地黄を食つて根氣を養ひ、白髪にな



るまでこの儘では終りはせぬと、紺無地の筒袖、生涯一枚を着て、腰には一本薬研鍔刀をさしこみ、面には鍋墨で髭をととのへて、煎じつめれば奉公人として、誓つて、白癩となるとも、和中散のごとく、身を粉にして御奉公如才なくいたします」と答へた。

林「實に氣の藥なものなれど、女中の前の長口上。近頃天鷲絨の半襟かけた、次の男は町の風、武士の勝手は合點か」奴「さてもお目利今極め、黒印打て私儀は、銀座に長々使はれ、駕籠乗物のはい／＼ぶき。京者の正眞。お屋敷方は新分銅、聲に訛は混らねど、少と行き憎いと申す故、歩を引かれても奉公の、品替へますといひければ、林「それでは此方に使はれぬ。末の季までは包みの儘、宿に居や」と笑はる。林「後な奴が國處、あもと麓の赤松を、打割り松の油煙髭。氣味好い頭のすり鉢鬘、江戸すりがらしと見えたよな」奴「御意の通に丁稚奴は、信州木曾の山家者。でつかく冷る寒國の、髭に氷柱の朝風。布子一つでお供先、ふるか信濃の／＼、ハッア冷たいな。實に雪國で身を寒晒し唐辛。天目にござしゆせん酒、一兩二歩の取替を、春めきながら借越して、末白雪の買がかり。首だけ積る借錢の、深田に馬を欠落いたし、木曾を走つて参りし」と、いへば各々打笑ひ、「左様な者を抱えては此方の算用栗津の原」と、どつと興をば催ほしける。

【註】○實に氣の藥―鬱散の心を慰むる藥。○天鷲絨―尾籠にかく。○お目利今極め―今やつと御めきをきはめられたか。○黒印―こつくいと讀む。祓印のこと。金銀貨に、量目などの證明の印をおすこと。即ち正眞確實の意。○銀厘―銀貨鑄造所―慶長十三年に伏見にあつたを、京都に、ついで江戸に移した。○駕籠乗物―かごと興。○はい／＼ぶき―はいぶきとは、落かし

た銀から、まざりものを除き、純にしたもの即ち純銀のことで、又は、乗物を引く時の聲で、それにかけて、はい／＼といつた。駕籠や輿にかけてはちやき／＼の腕の優れた者の意。○京者の正眞―其頃金は京都が最良とされてゐたので、此邊金物について述べてゐる故、自分が京から出た上等な人間といふ意で述べたのだ。○お屋敷方は新分銅―新分銅とは軍用金などに用ひた分銅形にした金銀の新貨のことで、必要の重さ鑄するのである。物の意味にて、お屋敷への御奉公は始めての意に用ひた。○聲に訛りは交らねど―訛に鉛をかく。此作の出来た時は丁度寶永元年故、その頃の新しい分銅貨は良貨にて、鉛のやうな悪い混ぜ物はいつてをらぬ。故に鉛はないといつた。○いき憎い―通りにくい。通用せぬ。如何なる金銀でも多少の混ぜ物ある故、額面記載の通りには通用せぬ。だから歩を引くといふ。生き憎いにかく。○末の季まで―最後まで、いつまでも。○包のまゝ宿にあや―貨幣にかへず、包んだ儘で。○あもとふもとの赤松―あもとふもとは、足元踏元即ちあちこちの赤松の意。○松の油煙髭―赤松を打割りて、松の油煙をとりて油をまぜてととのへた髭。○すり鉢鬘―すり鉢の形をした撥びんの意。つまり、あとのすりからしと調子を合せたのだ。撥びんといふのは、三味線のばちの形をしたびんをいふのだ。○すりからし―喰ひつめ者。今日のすれからしの意とは少し異なる。○丁稚奴―私の意。○でつかく―大きい、甚しい意から、嚴しい意に用ふ。○髭に氷柱の―髭につららの下る朝風の吹く日に。○ふるか信濃の―「あらい風にもあてまい様を、やるか信濃の雪國へ」のはやり唄からとつて、雪がふるか信濃へと直したものだ。○寒晒し唐辛―奴の尻は寒晒しの語から、寒さで手足が赤くなる意で、唐辛とつけた。即ち寒さに身をさらして手足が赤くなるの意。○天目―支那建安の天目山にてつくる茶碗。形は磨鉢に似て浅く、口が開いてゐる。これから茶碗のことをいふ。○ごき―御器。椀のことをいふ。○菓錢酒―各々頭割りに錢を出し合つて買ふ酒。天目茶碗や御器にて集錢酒をのむ意。○一兩二分の取替―取替は前借のこと。四分が一兩。○春めきながら―此句から「木曾を走つて参りし」までの句の大半は、謡曲「兼平」の中の「木曾殿は心細くも只一騎、栗津の原のあなたなる松原さして落たまふ、頃は陸月の末つ方春めきながらさえかへり、比叡の山風の雲行く空も吳織、あやしや通ひ路の、末白雪の薄氷、深田に馬をかけ落し、引けども上らず……」からとる。春めきながらは此處では、酒をのんで、春のやうな、陽氣な心地になつての意。○末白雪の買が、り―謡曲「兼平」の「末白雪の薄氷」からとつたもので、末はどうなるか知らないで、懸買をして。○深田に馬を―此處では借錢の淵に落ちての意を、謡曲の語をかりて馬を欠落ちたと面白くいつたのだ。○算用栗津の原―算用かあはずにかく。栗津の原は木曾我仲戦死の地。木曾といつたから栗津といつたのだ。



【譯】 林「實に鬱散となり慰とはなるものながら、女の前で餘りの長口上は感心せぬ。近頃びろろな、天鵝絨の半襟をかけて、次に控へた男は町人の風だが、武家仕への様子は承知してゐるかどうぢや」。奴「さて、今お目き、をなされたか。極印打ち、真正正銘、私は銀座に長らく使はれ、純銀の如く、駕籠や輿にかけては、優れた腕をもち、最良金銀貨と同じく京都生れの正真にて、お屋敷方へ仕へるのは、これが最初、聲に訛(鉛)りはまさつてはをらぬが、それでも額面通にはちと通用しにくい即ち生きにくいと申すと故、少しは歩割をひかれても、品をかへて奉公します」といへば、林は「それでは此方には使はれぬ。いつまでも包のまゝの金と同じく、自分の宿に居やれ」といつて笑ふ。又曰ふ「後の男の生國は何處ぢや。足元踏元など、あちこちの赤松を割つて、油煙をつくりて、塗つた髭、氣味のよい、すり鉢の形をしたばち鬢の男であるから、江戸三界のすれからしと見てとつたぞ」。奴は之に答へて「御意の通りに丁稚奴は、信州木曾の山家生れの者で、ひどく冷える寒國の冬の朝、髭に氷柱の下るほど嵐の吹く折にも、布子一枚でお供先に立ち、「あらい風にもあてまい様を、やろか信濃の雪國へ」の歌のやうに、雪の降る、つめたい、雪國信濃で身を寒晒しとし、天目茶碗に、御器にて集錢酒をのみ、一兩二分の前借を、陽氣になつて借越して、末はどうなるか知らず懸賞をして、首までもつもの、借金に深みに落ちこんで、木曾をつつ走つてまゐりまゐた」といへば、皆々打笑つて「そんなものをかゝへては、此方の算用が栗津の原だ」といつて、どつと笑つて面白がつた。

林「お庭の隅に目をもつて、碁盤格子の染帯を、骨牌結びや年配も、二十二三四五六七、押せ、振つて出ませい。在所故郷は何處にて、小姓廻しの一通り、お江戸の勝手覚えてか。供先き、乗打ち、下馬前に、大名方の目印も、知るや如何に」とありければ、奴「悴九州薩摩者、推參ながら古へは、二つ刀もさそふ水。叶はぬ濡れに身を浸し、廣い薩摩を狭められ、近い朝鮮琉球より、遠い東は日本の地、命菜種に油の涙、掴み奉公いたしても、戀しい奴めにま一度と、江戸に三年都に二年。公家、武家方の小姓髪、結立は持ちませず。六十餘州の大名様、お馬印、鍵印、お駕籠をさへの紋印、空に覺へて罷任る。御奉公は縁の者。これを取手に召置かれれば、常江戸、脇城、國脇まで、申せば事も長い事。先一國名に高さ、城主様方概略」と、口拍子にて連ねけり。

【註】 ○お庭の隅に目をもつて、隅に目をもつ、即ち隅に居る意を、碁盤格子と次にいふので、圍碁の法として、隅に目をもつて生きたといふことあり、それにかけたのだ。○骨牌結びや、帯の結び目を、眞四角になるやうにする結び方。○年配も……年恰好も二十五六七なるものよ。○押せ、振つて出ませい、押して槍を振つて出させしやれ。○在所、實家。○供先、殿の先に立つて進む供。○乗打ち、馬又は駕籠などに乗つて過ぎゆくこと。○下馬前に、下馬札の立て、あつて、下馬すべき所でやるお供の振のことで、にはそれとの意。○悴、自分をさす。○二つ刀、大小二本の刀。○さそふ水、刀を差すと、誘ふとにかく。刀をさす身分のものが、誘ふ水につれて。○叶はぬ濡れ……濡れは戀、色事の意。即ち叶はぬ色事に身をぬらし。○遠い東は日本、東は東都、日本の土地ながら遠い都まで來ての意。○命菜種に油の涙、命を物種といふことから、菜種といつた。命物種と油のやうな涙をしぼりて。○つかみ奉公、草履をつかむ奉公。奴としての奉公。○結び立ては持ませず、お小姓の髪をゆふた位で、一々申立るほどの履歴もなし。結びは言ひにかく。○お駕籠押への、駕籠の脇に立ち供人のもつ旗印。○常江戸、脇城、國脇、常江戸とは、大名やその臣が、常に江戸詰にあるをいふ。脇城は、熊本八代、津の上野の如き、甲城を守る城代。國脇は諸侯の支藩をいふ。○一國名に高さ、一國もちて有名な。

【譯】 林は又「お庭の隅に居つて、碁盤の格子縞に染めた帯を骨牌結にして、年配も二十三四五六七なるものよ、押せ、押して鎗をふつて出て見させしやれ、そなたの實家故郷は何國で、小姓達の世話指圖や、お江戸の勝手は心得てゐるか、先驅のお供や、馬にて乗過ぎてゆく作法や、下馬所先でやる行列の供の振や、大名方の目標なんかも知つてゐるかどうか」といふと、奴は「私は九州薩摩の者、失禮な申様ながら、昔は大小二本もさす身であ



りながら、誘ふ水につれて、叶ひもせぬ戀に身をひたしてしまつて、廣い薩摩もせまくして郷里にゐられなくなり、近い朝鮮琉球から、勿論日本の地ながら、遠い東都まで来て、命を物種に油の涙を流して、草履取りの奉公しても、戀しい女に今一度遇ひたさに、江戸に三年京都に二年をりましたものゝ、公家、武家方のお百姓達の髪結はしましたが、これぞと云ひたてる履歴はもつてをりませぬ。だが六十餘州の大名様や、お馬印や、鑓印、それから駕籠の脇にもつ旗印などは空で覚えてをります。何しろ御奉公は縁のものです。此等の點をとり得て召使つて下されば、此上もなく、常江戸詰、脇城、國脇などの事まで申せば長いと故、先づ一國持で、名高い城主様方の概略を」といつて、口拍子にて述べた。

諸國鑓じるし

「武家繁昌の御威勢、我らが口に掛巻も、勿體波風治りし、お江戸は貴賤群集の中、御どうぼうそ連らるゝは、外に數なき類なき、お家の是がしるしなり。重ね盛羽の大鳥毛、對のお道具突立て、お駕籠の者は裏菊の、裾に藩籬染たるは、名にし奥州五十四郡の旗頭。旗は白旗黒羅紗の、杉形鞆に羽織着て、お駕籠昇のは是ばかり。同國若松の主ぞと、誰白河は大身の槍。駕籠の紋は松皮菱、鱗形の腰替り、白頭の振禿、二本松の城主とかや。素鑓の鈎の枝垂糸、さつと枝垂て、枝垂鳥毛の大小は、是れ南部殿、津輕殿。奥大名の長道中、奴が首も投鞆に、紺に手杵をつく、つくくくく岩槻の御城主と、名乗つて出羽の米澤は、摘鳥毛の唐人笠。六尺は釘拔。白鳥の笠鉾鞆、煤竹羅紗の袋鞆。大鈎打ちたる印こそ、庄内の主ぞと、白熊の天目鞆。これが秋田の佐竹殿。劔鉾の中締に、六尺模様はぐるくく。御紋も車は越後の村上。

【註】 ○諸國鑓じるし—鞆の鞆などに、各藩と別たんと工夫したもので、近松は此しるしを元禄十六年の武鑑によつて書いたもので、決して暗記して書いたものでないことは、此處にある排列一切が、元禄十六年の武鑑その儘であることによつても知られる。巻頭圖を参照。○掛巻も—口にかけていふにか。○勿體波風—勿體なくも波風治まつた。○貴賤群集の中—貴賤限りなき群集の中を。○同朋—俗にお坊主といふ武家の職名。室町幕府は之に殿中の雑役をやらせたが、江戸幕府では、大名出入の案内、辨當茶の世話などをし、將軍外出の供をした。此お坊主をつれるのは徳川三家に限つた。始に僧が之に任じたが、後に妻帯して士籍に列せられた。○類なきお家—水戸尾張紀伊の徳川三家に限つて同朋をつれたをいふ。○重ね盛羽—大鳥毛の上に、更に一重の鳥毛をかされたもの。鳥毛は鞆の鞆に鳥毛をかざつたものをいふ。○對のお道具—一對の鞆。武家の道具といへば必ず鞆のこと。○お駕籠の者—お駕籠をかくもの。○ませがき—材の見えぬやうにした垣がませ。要するに裏菊の紋をつけて、裾に垣を染出してゐるのだ。○奥州—名にし負ふにか。伊達家をさす。○杉形鞆—葉の茂つた杉の樹を見るが如く、圓錐形の鞆。これは陸前若松の城主松平肥後守の鞆印。黒羅紗につむと。○誰白河は大身の槍—誰も知る岩代國白河の城主松平大和守の鞆。これは、又が大形であるので分るといふのだ。○松皮菱—菱を三重に重ねたもの。○鱗形の腰替り—腰替りとは、腰の邊りで模様の変つてゐることを云ひ、上が黒で、腰から下が鱗形のかたがついてゐるのだ。○白頭の振禿—白毛のついた丸形の鞆。一體で丸くして飾なきを禿鞆といふが、こゝは白熊の毛につくり、禿の頭のやうに長く毛が垂れて、鞆をふれば、それがふさふさゆれるのをいふ。○素鑓の鈎—素鑓は穂先の直なのをいふ。素鑓の棒についた鈎の糸が垂れて。○枝垂鳥毛—鳥毛が左右に廣がつた槍印にて大小あり、大が南部、小が津輕家。○奥大名—津輕南部などの奥地の大名の意。○投鞆—鞆の鞆の先が折れたやうになつて、ぶらぶらと垂れたのをいふ。首を投げ出すにか。即ち奴が首を投げ出して振るやうな形をした投鞆の意。○紺に手杵—駕籠昇の着物に、無地に、手杵の頭をならべたものが染出してあるをいふ。○つくくく—手杵は餅をつくに用ふる故つくと云ひ、その手杵のつけてある意を表はして、つくくくといつた。○岩槻の城主—岩槻の城主内藤氏のこと。○名乗つて出羽—名乗つて出ると、出の字を利用して、只しやれただけだ。○摘鳥毛の唐人笠—鳥毛はみな摘鳥毛であるが、その鳥毛の鞆が唐人笠に似てる意。唐人笠は背の一種。○六尺は重釘拔—六尺は駕籠昇。二重になつた樹の形を、更に左右に二つ並べて少しく重ねかけた紋をいふ。○白鳥の笠鉾鞆—白鳥毛の、笠に鉾をつけた鞆。○煤竹羅紗—煤竹色即ち茶色の黒みが、つた羅紗。○袋鞆—鞆の鞆に、羅紗の袋がかぶせてあるのだ。○大鈎打つた—鞆の柄に、鈎に近く



大きな釣が打ち込んである意。打つたるは打つてある意。○白熊の天目鞘—白は上の主ぞと知るにかく。白熊の皮でこしらへた天目形の鎧鞘。天目形とは、支那天目山にて製する摺鉢形の茶碗の恰好をいふ。○剣先の中締—刃の先が中央で締めたやうになつた鎧鞘。○六尺模様—駕籠昇の着る紋は、くるくると水の波紋のやうな形をしてゐる。六尺は駕籠昇のこと。○御紋も車—村上氏の紋が車輪の模様なるをいふ。○越後の村上—貞亨元祿の頃は神原政邦、(其前は村上義明、其後は内藤氏)

【譯】 武家繁昌の御威勢の素晴らしいとは、我らが口にかけて申すも勿體ないことで、波風治まつて静かなるお江戸の貴賤群衆の中を、御同朋を連れてあるかるゝ行列といへば、御三家のみで、外には類もなく數もないことで、この御同朋召し連れのところを、まことに徳川家であるといふ印である。次には大鳥毛を二重に重ねて、一對の鎧をつきたて、お駕籠昇は裏菊の紋をつけて、裾にませがきを染出してゐるのは、名にし負ふ奥州五十四郡の旗頭伊達家である。それから旗は白旗で、黒羅紗でつくつた、圓錐形の鎧鞘に、羽織を着てお駕籠をかついてゐるのは他にはなく、これこそ陸前會津若松の城主で、誰も知つてゐる白河の城主松平大和守は、大身の鎧を印にしてゐる。次なるは駕籠昇の紋は松皮菱で、腰から下は鱗形の模様で、白毛のついた丸形の鎧鞘は、二本松の城主丹羽家である。眞直ぐな鎧の釣の枝垂糸がさつと垂れて、鳥毛の枝垂れに、大小のある大なる方の鎧鞘が南部殿、小なる方が津輕殿である。奥地の大名の長い道中を奴が首を投げ出して鎧をふるが如き投鞘に、紺に手杵の模様をつけた駕籠昇の姿は岩槻の城主内藤家で、進んで名を名のつて出る出羽の米澤上杉家は、摘鳥毛の唐人笠に似た鎧鞘で、駕籠昇は重ね釘抜の紋をつけてゐる。それから白鳥毛の笠鉾の鎧鞘と、煤竹色の羅紗の袋鞘と、鎧の棒に大釣を打たせた印こそは、庄内の城主酒井家と知られ、白熊の皮で張つた天目茶碗型の鎧鞘は、秋田の佐竹殿で、剣鉾の中央を締めた鎧鞘に、駕籠昇の紋には波紋のぐるぐるをつけ、御紋にも車輪の模様を用ひたのは、越後は村上の城主である。

黒羅紗の輪鼓鞘、同じく桔梗十文字、紺に無紋の六尺は、加賀に梅鉢百二十萬石に、續くものなし似たるものなし。御紋ばかりは越中も、似たりや似たり杜若花。花菖蒲、菖蒲皮の角十文字、白頭の大

禿、これ越前家六角の、筒鞘の二本道具は若狭の小濱。劍鉾粒子の鈎槍素槍は、伊賀伊勢の津の御城主。花色羅紗の巾着鞘、輪達の六尺は相州小田原。兜巾頭と大身の槍は、下總の國佐倉の御城主。栗色の敲鞘、筆形の中締は、江州彦根の御大将。黒熊の如意寶珠、駕籠は輪抜に角の棒、美濃の加納の主なり。青貝柄に切立鞘、信濃の松代。白柄に白鞘兜巾頭、駕籠は東木丹後の宮津。裾膨の對のお道具出雲の松江。駕籠の紋は丸に蕙の葉のきませ、退けくくとつと退けく、鳥取鳥毛大鳥毛、因幡伯耆のお國取。播磨の同國印も似たり、姫路は赤し明石は黒し。何れも素槍の中締にて、分銅形の一対は備前の岡山、鈎槍に白獅子の摘毛の棒は備中松山。駕籠の紋は丸に虎の尾、ぴんと跳ねたる。備後の福山、獨樂形の白鳥毛、駕籠は紺に膝りの染抜き。袋鞘は安藝の廣島。

【註】 ○粒子鞘—輪鼓鞘にて、鼓をたてたやうな形の鎧鞘。○桔梗十文字—桔梗の花の形をした十文字の鎧しるし。○加賀に梅鉢百二十萬石—梅鉢は梅の花を正面から見た紋様にて加賀百二十萬石前田家の紋。○似たりや似たり……謡曲「杜若」の終りに「色はいづれ似たりや似たり杜若花菖蒲…」といふ句からとる。只非常に似てゐることを美しくいつたのだ。即ち杜若、菖蒲が似てる位加賀と越中とが似てる意。つまりともに梅鉢の紋だからいふのだ。○菖蒲皮—鹿のなめし革にて、藍地に白く菖蒲の形をそめぬいたもの。○角十文字—十文字の横の棒の先が、角の形にはね上つたもの。○白頭の大禿—頭が眞白くて毛のない鞘。○これ越前家—これは前につくのだ。○六角の筒鞘—鞘が筒形の六角形をなしてゐるもの。これは小濱の方につくのだ。○二本道具—二本槍。○劍鉾輪鼓—劍の先が鼓を立てたやうになつてゐるをいふ。○鈎槍素槍—槍の劍の下方に、十字又は鎌形などの鈎のあるを鈎槍。眞直なるを素槍又は直槍。○巾着鞘—巾着形の鎧鞘。これは相州小田原の城主の長男大久保傳吉の鎧標。○輪達の六尺—輪を二つ重ねずして、少し喰ひちがはせた形を輪ちがひといふ。その輪を五つ横にそれからそれとくひちがはせて併べたのが、駕籠昇の紋をなしてゐるのだ。六尺は駕籠昇のこと。○兜巾頭—兜巾は即ち頭巾にて、山伏、修験者などのかぶる頭



巾の恰好をして槍鞘。○佐倉の城主—貞亨元祿は戸田家、その前は土井、其後は堀田家。○叩鞘—細い棒の先を絹で包んだものにて、漆ぬりの上をたゞいて、一面でこぼこにした鞘。○筆形の中締—筆の毛の形をした鞘で、中央がいさゝか締めたやうになつて、故中締といつたのだ。○黒熊の如意寶珠—如意寶珠は、舍利から出るといはるゝ靈珠にて、之をもつてると前願萬望成らざるなしといはれてゐるのだが、こゝでは如意寶珠とは擬寶珠のことを云ひ、その形の鎗に黒熊の皮をかぶせた鎗標の意。○輪抜に角の棒—輪をならべて、それに角い棒を通した形。これは美濃加納の城主の駕籠標でなく、大垣の城主戸田采女正氏定の駕籠標とは樋口氏説。○青貝柄に切立鞘—青貝をちりはめた柄に、切りたやうな鞘がついてゐる。松代の眞田伊豆守信房の鎗じるし。○束木—駕籠の紋には板木を一種の扇形にたばねたやうな形のもの。それを丹後の宮津の城主が用ひてゐる。宮津の城主は貞亨元祿頃は阿部正盛（其前は京極、其後は松平）。○裾膨の對のお道具—裾の方が一旦引しめてあつて、その下の方がふくらんでゐる鞘の一對の槍。○丸に蕙の葉…松の葉五、小唄の「落ちよ」と落しておいて、壁に蕙の葉のき心、蕙の葉、蕙の葉、壁に蕙の葉のき心—からとる。即ち「のきませ、のけ〜…」は小唄の文句から筆の勢で書き出したもので、只丸に蕙の葉の紋の意。○鳥取鳥毛大鳥毛—鳥毛大鳥毛の鞘を用ひた鳥取の城主の意。○播磨の同國—一國に姫路明石の二城主あつて、それが鞘が似てるといふのだ。即姫路の方は油皮を用ひ、明石の方は黒鞘を用ひてゐた。貞亨元祿頃は姫路は本多、（其後は酒井）明石は松平家。○素槍の中締—眞直な鎗の鞘の中央が引しめてあつて、昔の分銅形、即ち二つの圓錐の先と先とをつなぎ合せた形をしてゐる。○白獅子の摘毛の棒—白獅子の毛が、鞘の下方に垂れたのを摘みとつたやうな形の鞘。○備中松山—今日の高梁。松平下總守忠雅にて、此駕籠の紋が「びんとはねたる」までかゝるのだ。樋口氏説。○丸に虎の尾—丸の中へ虎の字がかいてあつて、其尾にあたる右側の終りのはねが、上の方へはね上つてゐるのだ。○びんとはねたる—これまでが松山で、福山は獨樂形…染抜までつゞくのだ。樋口氏説。○獨樂なりの白鳥毛—獨樂の形をした鎗標に白の鳥の毛をつけたもの。○紺にちぎり—角形の菱三つを、山形につないだ模様を、紺地にそめぬいたもの。ちぎりとは、もと機織の附屬具にて、たて糸をまくもの。ちぎり縮といへば、両端ひろく、中央せまき分銅形のをいふ、つまりこんな模様を紺にそめたのだ。○袋鞘—鎗の鞘に袋をかぶせたものをいふ。

【譯】 黒羅紗の鼓を立てたやうな形の輪鼓鞘と、同じ黒羅紗の桔梗の花の形をした十字形の鎗鞘と、それから紺に紋なしの駕籠昇の風は、梅鉢紋所の加賀百二十萬石前田家のしるしで、此に似たものもなければ又續くものもな

い。御紋ばかりは越中も加賀と似たりや似たり、杜若と花菖蒲ほど似て、鹿のなめし皮に、菖蒲の形を染ぬいた、十字の横棒と、白の毛のない鞘、これは即ち越前家、六角形の筒鞘の二本槍は若狭の小濱の城主酒井家。劍の先が鼓をたてたやうな、輪鼓のしるしの鈎の鎗と直鎗は、伊賀伊勢の津の城主藤堂家で、花色の羅紗の中着形の鎗鞘と輪を食ひ違にした駕籠昇の紋は相州小田原大久保家で、鎗鞘が頭中頭をして、大身の鎗であるのは、下總の佐倉の城主。栗色の叩鞘、筆形で、中を締めた鎗鞘のは江州彦根の大將井伊家で、筆毛の形をした鞘で、中央を引しめてゐるのは、江州彦根の城主で、堀寶珠の形の鎗に、黒熊の皮をかぶせた鎗標に、輪をならべて、角の棒を通したものは、美濃加納の城主松平家である。又青貝飾りの柄に、切立てたやうな鞘は、信濃松代の城主眞田家で、白柄に白鞘、頭中頭の鎗鞘で、駕籠に束ね木の紋をつけたのは丹後の宮津の城主である。又裾ぶくれの一對の鎗は、出雲松江の城主松平家で、駕籠には丸に蕙の葉の紋をつけ、大鳥毛の鎗じるしは因幡伯耆のお國取である鳥取の城主池田家。又共に播磨同國內の大名で、印しも似てゐるのは、姫路は赤い色の鎗鞘の本田家、明石の城主は黒鞘の松平家。それからどちらも中央を締めた鞘の眞直い鎗にて、分銅形の一對の鎗鞘を用ひてゐるは、備前岡山の池田家。鈎のついた鎗に白獅子の毛の垂れたのを剪み取つたやうな鎗鞘の棒は備中松山の松平下總守忠雅の鎗標で、その駕籠の紋は、丸の中に虎の字をかい、尾になぞらへて文字の終の筆を、上の方にびんとはねたものである。又備後福山の城主阿部家のは獨樂形鎗鞘に白鳥毛をつけ、駕籠の紋は紺に四角形の菱を三つ山形につないだちぎり模様の染抜をしたものだ。鞘に袋をかけたのは安藝廣島の城主淺野家である。

扱又四國の御大名熊の皮の投鞘は讃州高松、同じく伊豫の松山は、黒熊の唐盃に、お道具持が酔ふたとさ、酔ふたとさ。とさ〜土佐の高知は中膨。お駕籠は紺に香の圖なり。阿波、淡路の兩國主、撞木鞘と丸十文字。六尺は繫ぎ菱。繫げや〜永樂錢の駕籠印。黒鳥の末廣は、周防長門の萩の殿。さて九州に到つては、御紋も石餅、眞丸鳥毛は、筑前福岡の御城主。蠟燭鞘と鎌槍は筑後の久留米。



天目鳥毛は同國柳川。白熊の角袋、杉形の中締は、豊前の小倉。中津の主、白分銅は豊後の杵築。萌黄羅紗の袋鞆、白滑皮の裾膨、銀杏の丸の駕籠の紋、肥前佐賀の御居城。大袋は同國唐津。ずん切鞆に銀の笠、手杵は島原平戸の城主。白猪の丸筒裾膨、同じく筆鞆、駕籠は浅黄に山道こそ、代々肥後の御國主。劔形は日向大名。十文字は對馬の縣。黒熊の片鎌は高麗迄も隠れなき、大隅薩摩の御大將。其外諸國の御大名。數も限もあら慮外、申すも長柄の御槍印、概略斯く」と述べれば、簾の内外ざはくく、「能ふく云ふたり申したり。扱もく」と稍暫し、手を拍いてぞ褒めらる。

【註】○熊の皮の投鞆―熊皮製の鎗鞆の先が折れて垂れたもの。○黒熊の唐盃―黒熊皮にてつくった唐盃形の鎗鞆。○お道具持が酔ふ―唐盃形の鎗鞆といった、即ち盃と酒に縁のある云ひ方をしたので、道具持即ち鎗持が酔ふたといつて、踊の文句にちないだ。○酔ふたとさ―酔ふた意を、松の落葉四、「三谷土手路な酔ふたとさ、く足や千鳥足」の句から引き、更にとさくの拍子から、土佐につづけた。○高松、松山―共に松平を姓とす。○高知は中藤―高知山内家の鎗鞆は中央がふくれてゐる。○香の圖―駕籠昇の着物の裾に香の圖がついてゐるのだ。香の圖は、片假名のコの字を、たてにいろく組合せたやうなものである。○香の卷頭参照。○阿波の國主―蜂須賀家。○撞木鞆―丁字形の鎗鞆。○九十文字―丁度丁字形を逆にしたやうな、そして頭が少しまゐるくなつた鎗鞆。○六尺は繫ぎ菱―駕籠昇の紋は菱を横に四つ繫いだもの。○繫げや―永樂錢―繫ぎ菱といつたから、繫ぐといふ字をうけて、永樂通寶は穴に糸を通してつなぎおくもの故、繫げやといつたに過ぎぬ。○黒鳥の末廣―黒鳥の鳥毛を用ひて、末が廣がつた扇形鎗鞆は毛利氏の鎗標であつた。○石餅―何の記しもない圓い白い紋にて、地の黒又は紺に對して白き圓を用ひたを石餅といふ。○眞丸鳥毛―鳥毛の眞丸な鎗鞆。これは黒田家の印。○蠟燭鞆と鎌鎗―蠟燭形の鎗鞆と、鎌形の鈎のついた鎗は、久留米有馬家の印。○天目鳥毛―前にもある如く、天目は天目茶碗形即ち摺鉢形の鳥毛のついた鎗鞆は柳川の立花家。○白熊の角袋―白熊の皮にてつくった四角な袋形の鎗鞆。○杉形の中締―のびた杉の木中央を締めた様、姿の鎗鞆。○小倉、中津の主―共に小笠原を姓とす、即ち兩家とも同じ印を用ひたのだ。○白分銅―白の分銅形の鎗鞆は杵築の松平家。○白滑

皮―白のなめし革の裾のふくらんだ鎗鞆。○銀杏の丸―丸い銀杏形の紋。○佐賀―鍋島家。○大袋―大袋の恰好をした鎗鞆は、貞享元祿頃は松平家(其後は水野家)。○ずん切鞆に銀の笠―鞆の先をすぼんと切つて、切つた處へ銀をはめた鎗鞆。○手杵―杵の中間がくびれ、手で握るやうにつくり、手で眞直につくに用ふ。鞆が此形をしたものは平戸の城主、松浦家。○白猪の丸筒―白い猪の毛皮にてつくつた丸い筒形の、裾のふくれた鎗鞆。○同じく筆鞆―同じ白猪の皮にてつくつた筆毛の形をした鎗鞆。○浅黄に山道―山道は凸凹又は曲折を意味し、即波形を三段重ねたものにて、それが浅黄の地に染出してあるのだ。熊本は細川家。○劔形―昔の戈の如き形をした劔形の鎗鞆は伊東家。○對馬の縣―對馬の縣郡、宗對馬守義方の居城。○黒熊の片鎌―黒熊製の鎗鞆にて、鎗には片側に鎌形の鈎がついてゐるのだ。これは島津家。○あら慮外―あらは、限りもあらず、にかけあら慮外千萬、御無禮千萬の意。

【譯】さてまた四國の御大名で、熊の皮づくりの、先が折れて垂れた即ち投鞆の印は讃州高松の城主松平家で、同じく伊豫の松山の城主も松平家、その鎗鞆は、黒熊の皮製で、唐盃の恰好をなし、其れで槍持が酔ふたとさく、とさく土佐の高知山内家は、中ぶくれの鎗鞆で、お駕籠の紋は紺に、例の香の圖をかけたものである。阿波淡路兩國の城主蜂須賀家の鎗鞆は、撞木形のと、丸い十文字形のとで、駕籠の紋は繫ぎ菱。繫げやく、繫いで、しまつておく永樂通寶の駕籠印をつけて、黒鳥の鳥毛の扇形の鎗鞆は周防長門の大名萩の城主毛利氏。さて九州に行くと、御紋も白の眞丸い石餅で、鳥毛も眞丸いのは筑前福岡の城主黒田家。蠟燭形の鞆と鎌のついた鎗とは、久留米有馬家の印。天目茶碗形の鳥毛は、これも筑後の柳川の城主立花家。白熊皮製の四角な袋形の鎗鞆と、杉形の鎗鞆の中央を締めたのは、豊前の小倉と中津の兩城主兩小笠原家。白分銅形のは豊後杵築の松平家。萌黄色の羅紗の袋鞆と白の滑し皮製の裾膨れの鎗鞆、まる銀杏の駕籠の紋は肥前佐賀の城主鍋島氏。大袋形のは肥前唐津の城主松平家。打つ切り鞆に銀の笠をはめた鎗鞆、と手杵の鎗鞆とは、島原平戸の城主松浦家。白猪皮製の丸筒形の裾ぶくれなのと、同じ白猪製の筆鞆と、駕籠の紋は、浅黄の地に、山道を象徴した皺形を染出したものは、代々肥後の國主である細川家。昔の劔形の鎗鞆は日向の大名伊東氏。十文字形の鎗鞆は、對馬の縣郡なる宗對馬守義方の鎗標。黒熊の皮製の片鎌の鈎のついた鎗鞆は、高麗國即ち朝鮮までも名の隠れない大隅薩摩の大將島津氏。其他諸國の御



大名、數も限りもあらず、慮外千萬、申すも長き長柄の御鎗印、あらまし斯くの通りにござる」と述べると、簾の内外がざわ／＼として、「よくもいふた、申した、さても／＼感心ぢや」といつて、やゝ暫く手をたゞいて寝めなされた。

林「やれ幸ひの奉公人、此者に極よ」と、四十平を召出され、「おとを殿へ申して取かえ渡し、吉日なれば今日中に請判極め、今宵からお屋敷に泊らせよ。薩摩者とあるからは、さの字を除けて津摩藏とお付けなさる。彼へ立つて休ませい」津「ない／＼／＼」と立ちければ、四十平小隅に招き、「して切米は何程欲しい」津「半季に二兩二分下され」四十平興覺まし、「それでは一年五兩か」津「いかにも／＼」  
 近年「兩取りまする」四「すれば其方は實盛ぢや。道理で女中の氣に入つた」と、連れて入日も三重短夜や、秋の初夜過ぎ早夜中、「蒸くう熱ふ寝憎や」と、小萬の君の夜半起き、庭にとほんと風受けて、「ア、生熱や、此方が様に肥えたものは猶熱い。男持つて瘦せたいぞ」と獨言して、「これは／＼、土戸の錠が下りずにある。林が兎相で忘れたか。誰ぞ来いやい」と召す處へ、屋敷廻りの拍子木の音。月に近寄る影見れば、新參の津摩藏、小「ヤア是は好い慰み」と、ツイ立寄るも女松の蔭、男氣入らぬお部屋なり。

【註】 ○おとな—一番家老。○取替—たてかへ、給金を前金にて渡すこと。○請判—受け人、即ち身元保證の判を押す人。○休ませい—休まつしやれといふやうなやさしい物の云ひまはし。○ない／＼—承知／＼、はい／＼。○切米—扶持米を、金にかへて渡すのを切米といふ。○其方は實盛ぢや—謠曲「實盛」に、近年御領につけられて、武藏國長井に居住仕り……とあるを受けて、五兩を御領ともぢり、それでは實盛といつた。○女中の氣に入つた—女中は只女の意にて、實盛は、その訓が核守に通じ、

核は關西で女陰の一部をいふから、その守即ち女に、關係が深いといふ意から女中の氣に入つたと、悪じやれをいつたのだ。○初夜—夜八時。○蒸くり暑う—むしあつう。○小萬の君—此脚本の女主人公。○とほんと—茫然と。○土戸—戸の面に漆喰などぬつた戸にて、土藏の入口などにあるものだが、こゝは内庭と外庭との境にあるものと見ゆ。○男氣入らぬ—小萬の方が女松の蔭に立よつたのも、男氣のはいらぬ部屋だからだと、作者が説明したのだ。

【譯】 林は「やれ仕合な奉公人ぢや、此者に極めるがよい」といつて、四十平を召し出して、更に、「一番家老殿へ申して、立て替への金をわたし、今日は吉日だから、今日の中に身元保證人をきめ、證文を出させて、今宵からお屋敷に泊らすがよい、薩摩の者とあるからには、上のさの字丈けを取のぞいて、津摩藏と名をおつけなされる。彼方へたつて行つて休ませい、津摩藏「はい／＼」といつて立てば、四十平は彼を小隅に招いて、「そして切米は何程望むか」。「半季に二兩二分下されませ」之をきくと四十平は興を覺まし、「それでは一年が五兩か」。「いかにも近年五兩を貰ひます」。「それでは謠曲實盛に「近年御領につけられて」とあるからには、そなたは實盛ぢや、道理で女衆の氣に入つたのだ」といひながら連れて入る。

それと共に入日もかくれ、短夜のことゝて、秋の初夜の頃も過ぎ、早や夜中とはなると、「蒸しあつくて寝にくいとぢや」といひながら、小萬の君は夜中に起きて、庭に出て茫然として風を受けながら、「あゝなま熱いとぢや、自分のやうに肥つたものは、一層熱い。男でももつてやせたいも、ぢや」と獨言をいひながら、「これは／＼、土戸の錠が下りずにある、林がそそうで忘れたのだらうか、誰か来やれ」と呼ぶ折しも、屋敷を廻る拍子木の音がきこえて来る。その音をたよりに月の光にてらして近寄つて来る影を見ると、新參者の津摩藏である。「や、これはよい慰みぢや」といひながら、女松の蔭にツイ立寄つたが、その松の女松なるもまた、男氣のはいらぬとになつてゐるお部屋なればである。

新參は勝手知らず、戸の開くまゝに突と入り、庭の隅々拍子木打ち、爪立てて蚊帳の中、好もしさう



に見る間に、密と廻つて戸を引立て、錠さす音に膽潰し、津「申し／＼未だ私が出ます。錠開けて下されませ」小「いや／＼此處に鍵はない。むざと男の來ぬ處へ來たが不祥。明日まで待ちや」津「ヤア、それでは私首がない。是れ四十平殿お助け」と、拍子木鳴すを小「エイ囂い／＼」拍子木置いて貫はふ」と、取つて擲つて、手を把つて、「コレちつとも大事な苦にするな。おれは此處の姉娘小萬といふ者。其方は濡れゆる薩摩を出て、賤しい奉公するといふ。大名衆の印揃へ聞きたふも何ともない。薩摩の戀の一通り、根から葉から聞かねば氣にかゝつて夜が寝られず。ひよんな話しを聞きさいて、睡たふて眼がうづく。嘘なしに話さうか。言はねばこれじや」と孤らるゝ。

【註】○むざと—うっかりと、無造作に。○不祥—めでたくない、よくない。○濡れ—ぬれこと、情事。○ひよんな—凶の字の廣東音。樋口氏説。○眼かうづく—眠たくて眼がいたむが、それでも氣にかゝつて寝られぬ。

【譯】新參の津摩藏は勝手がよく分らぬので、戸の開くにまかせて、つとはいり、庭の隅々を警戒して拍子木を打つて、やがて爪だて、蚊帳の中を物好きさうに見てる間に、小萬はそつと廻つて、土戸を引きしめ、錠をさす音がすると、津摩藏は肝をつぶし、「もし／＼まだ私が出ます、錠をあけて下されませ」と小萬は「いや此處には鍵はない。うっかり男の來べきでない所へ來たがよくないのぢや。明日までまつがよい」。「やあそれでは私の首が飛びます。これ四十平殿お助け下されや」と叫んで拍子木を鳴すのをきくと、小萬は「ゑゝやかましい、拍子木を打つとはやめてもらはう」といつて、それをとつて放りなげて、津摩藏の手をとつて、「これ、ちつとも大事な心配するな、おれは此處の姉娘の小萬といふものぢや。そちは色事から薩摩を出て、賤しい奉公するといふとぢや。それにしては大名衆の鎗じるしなどをそろへた話などきゝたくも何ともない。それよりか薩摩でのお前の戀物語の一通りを、根から葉まできかないと、氣にかゝつて夜がねられない。凶い話をきゝさしにして、睡たくて眼がうづくが

それでもどうしても氣になる。さ、嘘抜きで、本當の話を話さか、話さぬとこれぢやがよいか」といつておつめりなざる。

津「あいた／＼、申しませう。私は鹿兒島で菱川源五兵衛と申して、親兄共は小知を取り、我等末子の是非もなく、來迎院と申す知行寺へ後住の約束、十三の秋から豆腐、蒟蒻、念佛の外、魚類女類は口にもかけず、善導か法然の化身であらふと申した。又寺の旦那に濱の町といふ處、芭蕉布屋のおまん」と申すは筑紫一番、和泉式部か小式部の化身と褒めた小娘。彼奴が我等を見るたびに、齋に參れば抱付き、墓へ參れば抱付き、滅多無性に抱付けども、此方合點參るにこそ。和泉式部の化身めが、此法然の化身と相撲を望むと覺えた。投げてくれふと存じて、或時墓へ參つた處、私は裸になり、長老様の緞子の袈裟腰にきつと締付け、さア御座れと抱付いた。彼方も拔らず四ツ手にくみ、汗水流して組合ふとして、何やら囁き呟いて、互に因果を晒屋の、臼から杵とは此の事。まんまと法然上人が、彼方の十念授り、諸譯の五十相傳受け、四十八夜の常念佛、互に忍び忍ばれて、物三年は夜晝なし、千日の回向まで一日懈怠も仕らず。是が知れいであるものか。沙彌が聞けば長老が聞く。兄が知れば親が知り、髪を剃さぬ其内に、縛首打るゝ沙汰。如何も國に堪られず、おまんとの後の契約して、十九の年に薩摩を出て、十方世界を駆廻り、お尋ねなれば身の上の、願以此功德氣の毒な、お話しなり」とぞ語りける。

【註】○小知—小祿、小知行。○我等—私。○知行寺—知行のある即ち寺領をもつた寺。○後住の約束—後に住持となる約束。



○女類……女の口など口にもいはず。○善導、法然―善導は唐の僧にて、淨土教を弘め念佛の功德を唱へた。法然上人は即ちその説をついだのである。○化身―姿をかへて世に出たをいふ。○寺の旦那―施主、檀家。○芭蕉布―芭蕉の一種香蕉の織維にて織つた布。○和泉式部小式部―王朝時代の才媛、和泉守橘道貞の妻が和泉式部、其女が小式部の内侍。こゝは只美人の意に用ひた。○齋―僧家、正午までの食事、午後は非時といふ。○参るにこそ―参らばこそ、参らぬ。○相摸を望む―情事を相摸に托して、巧に述べたものである。○とて―といふ風での意。○晒し屋の臼から杵―芭蕉布を晒す時に、臼に入れて杵でつくが如く、晒屋の娘と自分が臼と杵とで因果を晒した意。臼と杵とは勿論性具を巧に云ひ表はしたのである。○十念掬かり―念佛一唱を一念と云ひ十度唱へるを十念といふ。此十度の念佛をとへることによりて、佛に結縁させるのであるが、これを二人の戀にあてはめて、十念をさげけるべき法然が、却つて女と縁を結び、彼方から十念をさげかつたといつたのだ。○諸羅―戀の諸羅、色の道。○五十相傳―五重相傳にて、淨土宗の重要法儀の一、第一重は選擇集、第二重は授手印、第三重は領解鈔、第四重は決答疑問鈔、第五重は論註、師からこの口傳を受くるを五重相傳といふ、近松全集註。こゝでは色の道の奥義を受けた意。○四十八夜の常念佛―阿彌陀如來の誓願に四十八あるとされてゐるが、その四十八願にちなんで、四十八夜の間、不斷の念佛をとへることから、一心をこめて戀の爲に身をさげてゐる意をいつたのだ。○千日の回向……回向は讀經冥福を祈ることをいふのだが、こゝはまた互に三年間の怠りなき回向の如く戀にのぼせあがつてゐた意を、佛語をかりて面白くいつたのだ。○沙彌―修業熟せざる初心の僧。小僧。○髪をころさぬ内―髪を剃らぬ内、坊主頭にならぬ内。○縛り首―兩手を後ろに縛り首を前方に出させて首を斬ること。破戒僧に對しての制裁として行はれたのだ。○十方世界―東西南北四隅上下をいふ。此所では諸國の意。○顯以此功德―淨土宗眞言宗にて、讀經の後に讀む偈文中の句……こゝでは斯の如き最後、といふやうな意に用ひてゐる。○氣の毒な―に薬にならず、毒になる、即ち人の心を惱ます意。

【譯】津摩藏は即ち「あいたく申ませう。私は鹿兒島の者にて、菱河源五兵衛と申し、親や兄達は僅かばかりの知行をとり、私は末つ子であるので、是も非もなく、來迎院と申す、寺領をもつた寺へ、後々は住持になる約束で入込み、十三歳の秋から豆腐茹弱を食つて、念佛を唱へる外には、魚類を食ふは勿論、女のことゝいつたら口にもせず、唐の名僧善導か、その説を傳へた法然上人の化身であらうと云はれてゐました。又寺の壇家、濱の町とい

ふ所の、芭蕉布屋のおまんと申す娘は、筑紫一番の美人で、王朝時代の才媛和泉式部か、その娘小式部の化身かとはめられたもの。その小娘が私を見る度に、齋に参つた時にも、慕參の時にも、矢鱈滅法私に寄つくけれども、私には何のとか、合點が参らばこそ、譯けが分りませなんだ。がとう／＼和泉式部の化身めが、この法然と相摸の勝負を望むのだと見たので、おのれ投げてやらうと思つて、或時慕參の折、私は裸形にて、長老様の緞子の袈裟を腰に締めつけてまわしとし、さあ来いと飛びました。ところがあちらでも抜目なく、遂に四つに組んで来て、汗水を流して、取組合をするといふ風で、何やかやと嘯きつぶやきまして、互に布晒屋の娘と臼と杵とで因果の恥をさらして、かうしてままと此法然上人が和泉式部から、とんだ結縁の十念をさげかり、色の道の五重相傳の奥儀を受けつぎ、佛の四十八願にちなんで、四十八夜の不斷の念佛に餘念なく打込み、互に忍びもし忍ばれもして、物の三年も夜晝の差別なく、千日の間の回向になぞらへて一日も怠らず出逢つたものだ。是がどうして知れずををらうか、小僧の耳に入れば長老の耳にも入る。兄が知れば親が知りして、まだ本當に髪を剃らぬうちに縛首にあふといふ沙汰になりました。かうなるとどうしても國には居たゝまれず、おまんとは後々の約束をして、十九の歳に薩摩を出て諸方諸國を駆けめぐり、お尋ねの身であるからには、申しあげます身の上の最後、まことにお慰どころかお氣分の毒になるお話しでござります」と物語つた。

小「さても／＼可笑い様で悲しい話。其人はあまん、をれば小まん。身に擬へて涙が飜る。國並びの事なれば、若しは聞きやつた事もある。おれは肥後の熊本、笹野三五兵衛様といふ人と、後紐から縁組あり。無事で御座れば疾に肥後へ嫁入する。八年前に彼のち人、病死なされた便宜あり。一門衆も親達も、盃はせず顔は見ず、方々貫手ある内に、はや片附けふとあつたけれども、頑是なしに道を立て、十二で小癩な髪を断り、今で後家は立つれども、若い女子の可愛と思や。妻戀ふ犬猫鳥翼、蟲に



も劣つて男の肌知らずに死ぬる。今の様な話を聞く度に罪つくられ、當座にしやんと嫁入つて退れば好いものを、阿呆な斟酌仕過いて、湯の辭儀は水になる。吸うても見せず心から、煮こじけの若後家。一字違ふて名も能ふ似た、三五兵衛様と思ふて、其方をおまんに借りたが、なんと一夜は貸す氣か。おまんに請やつた五十相傳、此小まんに授けてたも。手を合せて拜みます。サア南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、これなふ南無阿彌陀じや」と身を揉し、笑止悼はし恥かし。

【註】○國竝びのこと。隣り國のこと。○後紐。着物についた紐を背にて結ぶ即ち五六歳頃の意。○便宜。たより。○頭是なし。何事にも聞分けなしに。○鳥翼。翼ある鳥、即鳥の意。○罪つくられ。今の身をかこつことが即ち罪をつくることになるのだ。○湯の辭儀は水になる。何の役にもたぬ、駄目なことの意の諺。○吸ふても見せず。心から自分が甘い汁を吸つて見せもせず。即ちこちらではうまい汁をすふこともなく、異性にうまい汁をすはせるでもなく、なま半途な、あたら若後家を通しての意。○笑止。氣の毒。

【譯】小萬は「さて、可笑しいやうで悲しい話ぢや。お前の戀はおまん、私は小萬。似た名から、身になぞらへて見ると涙がこぼれる。隣國のこと故、もしか聞いたこともあるだろ。私は肥後の熊本で、笹野三五兵衛殿といふ人と、子供の時から縁組をしてあり、その人が無事なら、とくにも肥後へ嫁入するところだが、八年前にその人が病死されたといふたよりがあつた。でも一門の人も親達も益をしたとはなく、顔を見たとはないので、方々から貰ひ手のある中に、早く私を片附けようとの話であつたが、何の聞分けもなく、女の道をたて、操を守り、十二の時に小癩にも髪を切つて、今では後家は立てはしたが、若い女の身を可愛想と思つてくりやれ、妻を戀ふ犬猫鳥や蟲にも劣つて、男の肌を知らずに死ぬのぢや。それに今のやうな話をきく度に罪がつくられて、下らぬ後家など通さねばよかつたと考へられ、その當座にしやんと嫁入して退けたらよかつたものを、阿呆らしい斟酌をし過して辭儀をしてる中に、あたら湯は水になつてしまつた。こちらで心からうまい汁をすうて見せるでもなく、生半途な

煮えこじけの若後家を通して、あたら人間の盛りを臺なしにした。それに字も一字だけちがつて、源五兵衛と三五兵衛とは名もよく似てゐる。私は三五兵衛様と思ふて、そなたをおまんに借用したいが、どうぢや一夜を貸す氣か貸さぬ氣か。おまんから受けた五重相傳の奥義、此小萬に授けておくれ、手を合せて拜みます。さ、南むあみだ佛、これなう南むあみだぢや」といつて身をもんだ。それは氣の毒にもいたはしくも恥しくもあつた。

源五も困り狼狽へて、「おまんが五十相傳は丸裸で受けました。夜は蚊が喰ふ明日」と、逃げんとすれば引留め、小「氣がつかなんだ蚊が喰ふ。蚊帳へおじや」と抱入る。いやじや、もお主の威光。蚊帳打上ぐるあふちかぜ、有明消えて、「これ、これが安養極樂世界」。いづくも戀の闇どかし。お氣に入の林は宵より茶の間に寝たりしが、土戸に錠を忘れしと、手燭かゝげてお寢間の次、御用もやと立窺へば、有明消えし襖のあなた、しめやかな男の聲、合點いかぬ、蚊の鳴く聲か、いや、人に紛れないと、縁先見れば男の草履。林「サア悪性に極つた。男は何者。襖破り飛入つて、二つ胴に斬重ねん」と跳出しが、「ア、左様でない」。笹野三五兵衛とも言はるる身が、世間は病死と披露して、葬禮まで取行ひ、あらぬ女の眞似をして、五年七年辛氣を碎くも大事を思ひ立つた故。念願遂げず、本名顯はし、小事に大事を忘れては、今迄が皆うつけの沙汰。一家一門武門の名折れ、堪忍の場、思案の場、黙まれ、人や見る」と、もとの女でしやなら、と立歸る。

【註】○あぢかぜ。あふちかぜ、煽風。○有明。有明行燈のこと。商家や娼家などにて明け方までつけておくのは八けんともいつて、第一巻に圖示したが、此巻頭のは浮世書に見えた商家の八けんである。此處の有明はこれとはちがひ、只朝までつけて



おく行燈の意だ。○安養極樂世界―心を安んじ身を養ふ汚れの絶えてなき世界、即ち極樂世界。○悪性―いたづら、不義。○うつけの沙汰―馬鹿々々しいこと。○しやなら―しな―と。

【譯】源五兵衛もこまり狼狽して、「おまんの五重相傳の奥義は全裸形で受けました。それそのやうにするには、夜は蚊が喰ひますから、明日にして下され」といつて逃げようとする、小萬は引止めて「さうぢや氣がつかなんだ、蚊が喰ふとあらば蚊帳へ來や」といつて引入れる。いや〜と謝するが、お主の威光によりて果さぬ。折しも蚊帳を打あげる扇風の爲に、有明行燈のあかりがきえへると、「これ〜、これ即ち心を安め身を養ふ極樂世界ぢや」と小萬はいふ。何處も戀の花咲く世は闇である。

お氣に入りの林は宵から茶の間に寝はしたが、土戸に錠をかけることを忘れてと思つて、手燭をかゝけてお寝間の次の間に來て、御用もやあると立ちながら窺ふと、有明行燈のきえた襖の彼方にて、しめやかな男の聲がする。どうも合點がゆかぬ。蚊の鳴く聲であらうか、いや〜人の聲に紛れはないと思ひながら、縁先を見ると、男の草履がある。「さあ不義者にきまつた。男は何者であらう。襖を蹴破り飛入つて、二人の胴を重ね斬りにしてやらう」と思つて、林は一度は跳り出たが、又思ひ返して「あゝさうでない〜。笹野三五兵衛ともいはれる身が、世間へは病死したと披露して、葬式までして、あらざる女の眞似をして、五年七年と心を碎くのも、つまりは大事を思ひ立つた故ぢや。それが念願を遂げもしないで、本名を現はし、小事の爲に大事を忘れたとあつては、今までの苦勞が皆馬鹿〜しさの沙汰になる。一家一門武家としての名折になる。こゝが堪忍の場、思案の場ぢや、黙つてゐよう〜、人が見るかも知れぬ」と獨言しながら、舊の女姿でしやなら〜と自分の室に歸つた。

お寝間は彌聲高く、今ぞ別れの私言。エ、妬ましく口惜しきに、下部の持つたる拍子木あり。○三、ム、ウ忍び男は下郎よな。たとへ望み遂たりとも、三五兵衛が女房を下郎に盜まれ、目前の女敵見遣しにならふか。日頃塗つたる艶白粉の、つやつくろひも入らばこそ」と、裾捻上げて足首も、人に見せ

ず、包みたる、紅絹地袋の色も出る。腓太股最と黒く、女の爲なる緋縮緬、足纏ひぞと高褰げ、男の下紐顯はなる。常に嗜む紅皿も、今宵血潮の膝の皿、鐵漿壺の鐵も、心を鋼錆おとし、引寄せ引寄せ一刀、挿櫛笄、こん小枕、小微塵になれと髪搔撫で、左足を踏んで駈出でしが、南無三寶、刀は部屋

の長持に、取りに歸るは手延なり。無刀でかゝるは不覺なり。夜中はんじの時計の聲、心せかするばかりなり。○ハア、あの廊下を來る人は朋輩のおしゆんじや。此奴は饒舌の轉婆め。見付けられては大事ぞ」と褰げ下して前搔合せ、所體つければ目の前に、元の林と奈良團扇、空睡りこそゆたかなれ。

【註】○望遠けたり―望は敵討の望。○女敵―姦夫のこと。○つやつくろひやつしつくるひも何の用もない。○紅絹地袋の色も出る―もみぢ袋は紅葉袋、即ち糠袋のこと、糠袋を用ひて角艶も出した。○血潮の膝の皿―夕霧阿波鳴渡にもある如く、膝の皿から火が出るといふ諺からとつた。此處は火に血潮をかけ、血を出して、すねをなぎ仆してやる意をいつたのだ。樋口氏説○心を鋼錆おとし―おはぐるは、はがねの錆であることと、久しくつかつたことのない刀を使ひ、刀の錆を落す意をかけ、女を用ひたおはぐるつばをすて、心を鋼として、おはぐるのさびも、鋼の刀の錆もおとさうとの意。○引寄せ一刀―引寄せ一刀を拂ふべく、意にて、引寄せは、引寄せんとするのであつて、まだ此處では引寄せてゐるのではない。○こん小枕―こん小松など、同じくこんは一種の調子をつくる詞。小枕は髪の中に入れる添へ毛。それもみじんになれど、ぐつと力をこめて髪をかくこと、をいつたのだ。○左足を踏んで―さそくは藤井博士の説の如き、早足の意にあらず。いざといふ時は、必ず左足をふんで出るもので、左足をふんで出るは劍道の語。落曲「熊坂」にも明に「いらつて熊坂左足を踏み鐵壁も徹れと突く長刀……」とあり。樋口氏説。○南無三寶―これはしまつた意。○不覺―不覺悟、輕卒。○はんじ―半時、昔の一時は今の二時間故、今の一時間ごとを半時といつたのだ。即ち夜中半時とは今の一時にあたる。此時計は今日といふ一時間毎に鳴るのだ。○所體―様子、姿。○奈良團扇―なるにかく。奈良團扇は春の禰宣が内職につくつたものだ。もとの林となりて、奈良團扇をつかひながらの意。

【譯】お寝間の方はいよ〜聲高になつて、今は丁度別れの私語がかはされるところである。えゝそれさへ妬まし



く口惜しいに、見ると下部のもつた拍子木がある。「むむ、して見ると忍び男は下郎ぢやな」とへ仇討の望を遂げたとて、三五兵衛が女房を下司にとられて、目の前の姦夫を見のがしてならうか。かうなれば日頃ぬつた艶白粉のやつし繕ひも入るものか」と。三五兵衛は裾をねぢあげて、足頸も人に見せまいと包、褌袋で色艶も出した臍も太股も眞黒に出し、女のする絆縮も足まとひぢやと高くからげると、男の下紐が見えるのである。いつも、たしなみ用ふる紅皿も、今宵は血潮を流す皿として、戀仇のすねをなぎ仆してやり、おはぐろ壺をすて、心を鋼として、鋼の刀の錆もおとさうと、引せて一刀をはらふべく、挿櫛も笄も、髪の新毛も粉微塵になれと、ぐいとぎつくと、髪を搔なでてから、左足をふんで駈出したが、しまつたり、刀は部屋の長持にしまひ込んである。それを取りに歸るのは、手のびとなつて時がをくれる。さらばといつて刀なしでかゝるのは、如何にも輕卒である。夜半過の半時即ち一時の時計の音は、人の心を急がすばかりである。折しもあの廊下を人が来る。「はあ、あれは同輩のおしゆんぢや、此奴はおしやべりのお轉婆奴ぢや、見つかりでもすると大變だぞ」と思ひながら、からげた着物の裾を下らして、前を掻き合せ、姿をこしらへると、目の前に元の林となる。即ち奈良團扇をとりて空睡をゆつたりとするのである。

おしゆんは何の氣も付かず、「林殿、此處に何してぞ」といへば、態とびつくりして、「ア、何んぞいの氣疎げな。お寢間が近ひ嗜めや。明日は月の十五日、鐵漿つけて寢やうか。寢て待つ男もあらばこそ氣散じな獨寢、此處で寢るも同然。そなたも往つて早ふ寢や。明日逢ふぞ」といひければ、しゆん「さればいの、今日ひよんな草紙を見て、氣が騒いで寢られぬ。何時もの様に夫婦事して寢ませう。今宵は此方さんお内儀にならしやんすか。但男にならしやんすか」林「ア、何方になつても思ひの種。男とも女とも見立次第」といふて居る、下心こそわりなけれ。しゆん「いや、如何でも女子が好い。

實可愛らしい女房ぢや。ならば男と生れて、貴様と一夜寢て見たい。どうもならぬ」と懐に、手を差入れて抱付けば、林「ア、ほてくろし放さんせ。女子同士寢やうより、一人寢て本の事、夢に見たのに徳がある」と、じやれに紛らし逃入れば、しゆん「わしも夢の相伴」と、追へてこそは三重入りにつくれ。

【註】 ○氣疎げな―びつくりするわい。いやらしい。○何ぞいの―どうしたことぢや。○たしなめや―つゝしめよ。○氣散じな―氣樂な、氣苦勞なき。○ひよんな草紙―ひよんは凶い。凶の字の廣東音。樋口氏説。草紙は性書をいつてるのだ。○下心こそわりなけれ―見たて次第だといつてる心根は、せん方ないものである。わりなしは、ことはりなし、しかたなし、分別なしの意。○ほてくろし―ほてはほてる、火照る、即あつくるし。○本のこと―性書をかいた草紙のことをいつてるのだ。○じやれ―冗談、戯談。

【譯】 おしゆんの方では何の氣もつかず「林殿此處に何しておいでなさる」といふと、林はわざとびつくりして「あゝ、どうしたのぢや、びつくりするぢやないか。お寢間が近いから、憤みなされ。明日は月の十五日、さてかねをつけて寢ようか。何も寢てまつてるものがあるではなし。氣樂な一人寢であるからには、此處で寢たとて同じことぢや。そなたも行つて早く寢やれ、明日逢はう」といへば、おしゆん「ところが、今日凶い草紙を見て、氣が靜まらなくて寢られぬ。いつものやうに夫婦ごつこしてやすませう。今宵はあなたがお内儀におなりなさるか、それとも主人にならしやんすか」林は忌はしげに「あゝ何方になつたとて、思ひの種を蒔くばかりぢや、男とも女とも見たて次第ぢや」といつてる心根は、しかたのないものである。おしゆん「いや、どうしても女の方がよい。本當に可愛らし女房ぢや。出来ることなら男に生れて来て、そなたと一夜をと思ふが、それもどうにもならぬ」といひながら、林の懐らに手を差込んで、寄りつくくと、林は「あゝあつくりしい。放さんせ、女子同士がやすまうよりか、一人やすんで、草紙にあつたことを、夢にでも見た方が氣が利いてる」と冗談にまぎらかして、逃げて自分の室に入ると、「私も夢のお相伴がしたい」といつて、あとを追うてはいつた。



此人音に源五兵衛、「あらはれては身の落度、お暇申す」と駈出づる。小まん押留め、「覺悟あつてするからは、そなたに難儀かけはせぬ。ハテ高が後家の身。淫奔者といはるゝまで。思案がある待つてたも」といへども、源「いや、お屋敷は如何もあれ。生國薩摩は人改め強く、我等は今にお尋ねもの。此事國へ聞えては、召返されて罪科に遇ひ、一門の恥おまんが歎き。塀を乗越え夜の中に、大津まで」といふ處へ、林は嗜む長刀、裾端折つて捲上げ、「奴殿動くまい」と、縁端に跳出でたるは、狂氣とならば見えざりけり。

【註】○淫奔者……後家で亭主がないから不義にはならぬ。○人改め一人調べ、詮議。○嗜む一好の。

【譯】かうして人の音のするに氣のついた源五兵衛は、「露見しては、身の落度になります、お暇申します」といつて駈出るのを、小まんは押し止め、「ちやんと覺悟があつてするからには、そなたに難儀をかけはせぬ。はて、たかゞ後家の身ぢや、良人がないからには不義といふいはれはなく、只淫奔者といはれるまでのこと。思案があるから、まつておくれ」といふが、源五兵衛は「いや、お屋敷の方はどうともなりませうとも、私の生國薩摩は人調べが強く、私は今にお尋ね者の身分であります。このことが國へ聞えたとすると、呼返されて處刑にあひ、一門の恥ともなり、おまんが歎きともなります。塀を乗り越えて、夜中に大津まででも参りたい」といふ處へ。林は好の長刀をさし裾はしをつてまくりあげ、「奴殿動くまい」といつて、縁の端に躍り出した。その様は狂氣の沙汰とよりは見えなかつた。

林「こゝ些と合點が參るまい。これ小まん 我こそ肥州熊本笹野三五兵衛 我二歳の時、親三五左衛門は武州の遊所にて、石子久彌といふ者に討たれしを、幼少なれば夢にも知らず。四歳で母に後れ、

一門の介抱にて十四の年跡目を繼ぎ、お手前と縁を組み、迎へ取るべき用意最中、毎日門に貼紙して、狂歌俳諧様々のらく書を立て、家中指して嘲哂する。如何なる故と聞合すれば、親の敵があるといふ。弓矢八幡知らぬ事は力なし。敵石子を討取り、此恥を清めずば本國へ歸るまいと、譜代の下人に心を合せ、頼みし寺と内談しめ、三五兵衛病死と披露し、鯨魚といふ魚をもつて火葬を欺き、十六歳で國を出で、髪を伸ばし女となり、十九歳の九月より今年二十三歳まで、五年の春秋附添ひ見るに、顔も知らぬ夫の爲、下尼の身となり、まだ側居るとも知らず、朝夕我に香花取り、精進回向歎きの様子。嬉しいやら不便なやら、部屋に入りては泣暮し、名乗りて聞かせて、嬉しがる顔見たいとは思ふたが、いや、本望達するまでと、胸に包んだ數々は、船車にも餘るべし、日頃にも似ず今夜しも、あの下郎を寢屋へ入れ、見苦しき態は何事ぞ。あれ體の下司奴を、三五兵衛が女敵といふも口惜しい。況んや大事の敵を討つまでは、無念も恥も堪えふと、心誓文立つたれども、凡心の習ひ、目の前の怒り止み難く、かう破つて出るからは、討ちとも無ふても討たねばならぬ。一本差せばうぬめも男。サア抜け。相手にしてくれん。エ、うぬ等風情と太刀打は、武運に盡きた口惜い」と、齒齧をなして歎きしは、道理せまつて哀れなり。

【註】○遊所—遊里。○跡目—家督。○らく書—落首のことにて、諷刺的のざれ歌など書いての意。○弓矢八幡—神に誓をする時に始にいふ語。どこまでもなどの意。弓矢にかけ八幡にかけての意から来る。○力なし—せんかたなし。○譜代の下人—代々仕へてゐる者共。○頼みし寺—頼みをかけた寺、心頼みにして寺、旦那寺をさす。○内談しめ—しめは遂げ。○鯨魚といふ魚……このしるを焼く臭が、人を焼く臭と似てるといふからとる。○下尼—髪を切り下げにした尼。○船車にも……胸に包んだ



数々の思ひは、船や車につむにも餘る。○おれ體の一あの様な。○女敵一問男、姦夫。○凡心の習一凡夫心の習はし。○破つて出—誓文をやぶつて飛出す。○武運につきた—天晴な武運の盡きた。

【譯】 林「此處のところ、少し合點がゆくまい。これ小萬、我こそは肥州の熊本の三五兵衛ぢや。我二歳の時、父親三五左衛門は武州の遊里にて石千久彌といふものに討たれたのだが、幼少故にそれを夢にも知らず、やがて四歳にて母に先たれ、一族に養はれて、十四の歳に家督を續ぎ、そなたと縁組をして、身柄を迎へ取らうと用意して居る最中、人々が毎日門に貼紙をして狂歌や俳諧やいろ／＼の落首などのいたづら書をして、家の中を指して嘲弄するのだ。どういふわけかと聞合せて見ると、我には討つべき親の敵があるといふ。弓矢八幡にかけて知らぬとは仕方がない。だがいよ／＼斯くと知るからは、敵石千を討取つて、此恥をすゝがぬ限りは、決して本國へは歸るまいと決心し、代々家に仕へてゐる者共と心を合せ、頼をかけた旦那寺と内談を遂げ、三五兵衛は病死したと披し、鯨魚といふ魚を焼いて、吾を火葬にしたと誤魔化し、十六歳で國を出で、髪をのばして女姿となり、十九歳の九月から今年二十三歳まで、五年の春秋を附添ふて見るに、顔も知らぬ夫の爲に、切り髪を下げた尼姿となり、まだまだ側に居るとも知らず、朝夕われの靈に香や花をさゝげ、精進をして回向し歎く様子である。それを見ると嬉しいやらふびんなやらで、我が部屋に入りては泣暮し、一層名を名乗つて聞かせて、嬉しがる顔を見たいとは思ひはしたもので、いや／＼敵を討つて本望達するまでは、何事も秘密にと、胸の中にかくしておいた思ひの数々は、積まば車にも餘るとであらう。それなのに目頃にも似ず、今夜に限りて、あの下司を寢屋へ入れ、その見苦しい態は何のどぢや。あの様な下司奴をわが女敵などいふは口惜しいとぢや。まして大事の敵を討つまでは、無念も恥も我慢をしようと思ひ誓をたてはしたが、凡夫の浅ましき習にもれず、目前の怒りが止めんとしてとめがたく、かうして誓を破つて出たが、さていよ／＼出たからには、討ちたくなくても討たねばならぬ。刀一本差すからには汝も男ぢや。さあ刀をぬけ。相手にしてやらう。ゑ、汝等風情と太刀打をするといふのは、われも武運に盡きたのか、口惜しいことぢや」と齒をかんで歎いたのは、道理至極であはれであつた。

源五兵衛にこゝ／＼笑ひながら、「ヤレ假令王の息子でも、今草履取るからは、下郎と言われて構はぬ事。併し下郎を相手にするが無念ならば、其無念を止めて遣ろ。コリヤ音にも聞いたか。薩摩の鹿兒島菱川源五兵衛、雀の餌程な米を取り、馬の脊骨、跨げたもの、其方も昔は誰にもせい、當分女子で居るからは、お腰元の林殿。女は相手にならぬといひたい者じやが、それも口眞似童しい。但女敵といふ悪名、髮斷つた後家女に女敵とは無理屈ながら、是も調べて益ない事。女敵ならば女敵、如何にとしてもお手前が、親の敵に身を碎く、此處が如何もしかられぬ。脇差に手もかけまい。女敵討つて門出祝い、親の敵を討めされ。それとても是非抜けならば抜ふが、身が國の習ひで、抜くと鞘を叩破り、再び差さず死ぬるが、是が薩摩の正銘。時には二人討死して、親の敵久彌只た一人の仕合。何の役にも立たぬ事。これ御腰元、女子衆、女敵の首斬らしやんせ。サア首斬つて取らんせ」と、人を人とも思はぬ顔、さすがに薩摩者なりけり。

【註】 ○無念を止めてやろ—無念にならぬやうにして立派な男にしてやらう。つまり自分下司でなくて立派、武士だから、相手として恥かしくない男だと知らせてやらうといふ意。 ○口眞似童しい—それも口眞似のやうで子供らしい。童しい—童べらしい。 ○無理屈ながら—後家ならば淫奔とはいへても不義とはいへぬから、女敵とは理屈にあはぬが、それとて取調へても無だ。 ○如何にとしても—何としてもお前が親の仇を討つ爲に心身を碎いてとあつては、此點はどうも、とがめる譯にゆかぬ。 ○しかられぬ—叱られぬにて、罪をならしとがめられぬ意。ある本、しかられぬをしかられぬとしてゐるが、此にても意は通せぬことは、い。 ○鞘を叩きわり—薩摩の鞘わりといふ諺がある。 ○正銘—本性。

【譯】 源五兵衛はにこゝ／＼と笑ひながら、「やれ、たとへ王様の子でも、今賤しい草履取りをするからには、下郎と



いはれてもかまはぬが、その下郎を相手にするのが無念とあらば、その無念をとめてやろう。立派に男になるがよい。これ、噂にもきいたか、薩摩の鹿兒島菱川源五兵衛のおれは、僅か雀の餌程の扶持米を貰つて、馬の背にも誇つたところがあるものぢや。そなたも昔は何者であるにせよ。當分女でゐたからには、つまりがお腰元の林殿ぢや。何といつても女は相手にならぬといひたいものぢやが、それも口真似のやうで、子供らしい。但し女敵の悪名はをかしい。とにかく髪を切つた後家女に女敵といふ言葉は、どうも理屈にあはぬが、これも事實を取調べて見たとて益にたぬぢや。まあ女敵ならば女敵として、どうしてもそなたが親の仇を打つべく心身を碎いてゐるときいては、此點が如何にもとがめる譯にはゆかぬ。已むなく協差には手もかけまい。さ、勝手に女敵討つて、門出を祝ひ、親の敵を討ちめされよ。それとも是非抜けとあらば抜かうが、私しの國の習として、一旦刀をぬくと鞘を叩き破つて二度とそれを差さず死んでしまふといふのが、薩摩人の本性ぢや。さうすると、二人とも討死して、そちの親の敵久彌たつた一人の仕合になるばかりで、そちには何の役にもたぬ事になる。これお腰元、女子衆、女敵の首を斬らしやんせ、さあ首を斬つてとらんせ」といつて、人を人とも思はぬ顔をしてゐるのは、さすがに猛々しい薩摩者ではある。

三「いやさ〜武士の喧嘩にぐめんは入らぬ。鞘割らば割れ、碎かば碎け。サア抜け」と詰かくる。小まん隔り押し止めて、小「さては三五兵衛様かいな。此方を男といふことは、三年前から見ただれども、三五兵衛様であらふとは、尤も氣のつく筈もなく、わしやはまつたは是非もなや。餘の腰元は半季でも、季を重ねれば打解けて、冬は同じ夜の物、夏は同じ蚊帳の内、女子と女子の主従は、肌を合せて寝る程に、じやれてんごふも言慰む。それに五年の馴染といひ、お果なされた母様の、鐵漿親にならせられ、おれとは姉妹同然に、一寸側を放さぬに、如何なる事か夜に入れば、只寝姿を隠したがかり、

終に側に寝た事なく、小風呂へ入れば風邪引いたの、物が出来るの何のとて、仰に小風呂へ入る事なく、胸へさはるも嫌がつて、兎角乳を隠したがる。萬づ起居に心を付け、見れば見るほど男じやが、さては此小まんに執心かける奴さうな。愠氣するか試しの爲と、態と今夜あの人を、寢屋へ呼ふたは是れゆゑ。されども佛に誓を立てた道筋は歪むまいと、暗がりに附聲して寝させたは外の者。源五兵衛殿を騙した此詫言は幾重にも、身の明かな證據を」と蚊帳を打上げ、手を取つて引出す。お蘭といふお髪上げ、髪も解けて所體なく、顔を赤めて、蘭、源五兵衛様許して下さんせ。ア、恥かし」と袖掩ふ。三五兵衛は詞なく手持無沙汰に赤面する。

【註】 ○ぐめん—工面、工夫。○はまつた—欺された、うまくしてやられた。○夜の物—布圍。○じやれてんがう—じやればふざけ、悪戯、冗談、てんがうはからかひ、ふざけ。○おはぐる親—つまり後見の意にて、男の子の元服に於ける烏帽子親と同じやうなもの。女子のかねつけの後見をおはぐる親といつた。○物が出来る—腫物などが出来る。○執心かける—氣をもませる、根か何かの執着をかける。○付聲—本人に代つて、はたから聲を出すこと。○髪もほどけて…作者は此處で例の巧妙な悪ふざけの手法をやつて、いさといふに至つて、小萬と源五兵衛を對立せしめず、小萬はどこまでも節操正しき女として終らしめ、お蘭をして代つて源五兵衛の相手たらしめてゐる。さればこそお蘭は髪もとけ、だらしなき風となり、顔を赤めて恥かしいといつてゐるのである。近松はかうした際どい所にて、いつも老巧なる筆致によりてくるりと轉換して、風紀を紊るが如き愚をさけてゐるのである。此等の點が率直大膽なる西鶴とは大に趣を異にし、却つて其手腕の悔りがたきを思はしめるものがある。○所體なく—だらしなく。

【譯】 三五兵衛「いや〜武士の喧嘩に工夫は不用、鞘割らばわれ、碎かば碎け、さあ抜け〜」とつめかけるところを、小萬は二人を遠ざかりながら押とめて「さては、こなたは三五兵衛様であつたか、こなたをどうも男らし



いといふことは、三年も前から死んでゐるが、それが我が夫の三五兵衛様であらうとは、どうしても氣のつく筈もなく、私の欺されたのも是も無いとぢや。他の腰元どもは、半季でも年季を重ねるにつれて、打とけて来て、冬は同じ布團に、夏は同じ蚊帳の内といふ風で、女子同士の主従は、肌を合せてやすんで、いたづらや冗談もいつて慰さんだりする。それにこなたとは五年といふ長い間の馴染である上に、亡くなられた母様が、こなたの爲に、おはぐろ親になられたのだから、私とは姉妹も同様なところから、私は一寸も側から放さないでをるに、如何したとか夜になると、たゞ寝姿を隠したがつて、ついぞわ側によすんだとなく、風呂に入らうとすると、風を引いたの腫物が出来たの何のといつて、私の側をして風呂に入るとなく、胸へ觸るもいとうて、兎角は乳をかくしたがる。其他萬事こなたの起居動作に氣をつけて見れば、いよく男であるにちがひはないが、さては此小萬に恨か何かかけて、氣をもませる奴であるらしい。それならば悋氣をするかどうか、試しの爲にと、今夜わざ／＼あの人を寢屋へ呼んだのである。けれども佛になつたわが夫へ、たてた誓の道筋はゆがめま、節操だけは守らうとして、暗をたよりに代つて聲をかけて、やすませたのは、他のものであつた。かうして源五兵衛殿を騙した詭言は幾重にもいたし、明に操をたてぬいた證據だけはお目につけよう」といつて、蚊帳を打あげて手をとつて引出すのはお蘭である。お蘭はお髪上げの女にて、髪もほどけてだらしなく、顔を赤らめて、「源五兵衛様、あなたをだました罪をおゆるし下され、あゝ恥かしや」といつて袖で顔をかくす。三五兵衛は事の意外にして、小萬の節操正しく源五兵衛が女敵でも何でもないのを見ると、詞も出せず赤面して手持無沙汰である。

源五兵衛も胸衝しが、「些とも苦しからぬ事。小まん様も女子、こなたも女子、人間の身に變りなし。例へば餛飩と切麥、汁は同じ醬油、何方でもお振舞は同然なり」とぞ和ぐる。小まん取付きわつと泣き、「これ三五兵衛様、泣かずに言ふと思へども、如何も涙がとめられぬ。出来た仕様じや御座んすまい。私し明暮れ戀慕ひ、泣悲しむを見て居ながら、能ふも黙つて見て居られなふ。去年の春の大煩

ひも、こなた様ゆるといふ事は、看病なされたお前が證據。男は松、女子は藤と元から譬があるげな。松の力で藤も這ふ。男頼みに女も立つ。十二の年から十九まで、人の盛を拾置いて、けりやう道を守ればこそ、若し氣が反れて淫奔したら、こなた様斬つて捨てさんすか。さりとは情ない人。女房可愛いがつたとて、負になるか恥辱になるか、武士が廢るか。八年の月日は取返しはなるまい」と、思ひの限り息限り、絶つて泣きければ、二人の男も理に迫り、泣くより外の事ぞなき。

【註】○胸衝しが一欺されたので、どきつとするのだ。○切麥一大麥の粉につくつた餛飩のやうなもの。冷麥といふ方は小麥の粉を用ふ。○お振舞は同然一御馳走は同じこととしゃれたその場をつくらうたのである。○出来た仕様ぢやない一普通の人情として、やれた仕方でない。○けりやう一假令の字を音でよんだ通り、かりそめにも道を守つたからすんでるものゝ、守らなかつたらどうするのだ。

【譯】源五兵衛もどきんと胸をつかれたが、平然として「ちつとも苦しうないとぢや。小萬様も女子、お蘭殿も女子、人間の身にちがひはない。例へば餛飩と切麥といったやうなもので、それにかけてたべる汁は同じ醬油でこしらへたもの。どちらでも御馳走にちがひはありませぬ」といつて、相手の心を和げる。小萬は此時、三五兵衛にとりついてわつと泣いて「これ、三五兵衛様、泣かないで言はうと思つても、どうも涙がとめられぬ。何といつても普通では、こんなことが出来た仕方ではありませんまい。私しは明け暮れ、こなたを戀慕ふて、泣き沈んでるのに、こなたは見てゐながら、よくも黙つて見てゐられたなう。去年の春の大患ひだとして、こなた故に起つたことは、看病してくだされたこなたがちゃんとお存じだ。凡そ男は松、女は藤とは、昔から譬があるさうな。松の力をたよりにして、藤も這ふことが出来、同様に、男を頼んでこそ女も立つといふものぢや。十二の年から十九歳まで、人間の盛の時を打つておいて、かりそめにも道を守つたからこそすんだものゝ、若しか氣がそれて、いたづらでもしたら、どうなさる。こなたさんは切つておすてなさるか。さりとは無情な人よ。女房を可愛がつたとて、ひげ目にな



るか、恥になるか、それとも武士がすたるとでもいはれるのか。何といつても八年の年月はとりかへしは出来ずまい」と思ひの限り、息の限り、すがりついて泣くと、二人の男も理にせめられて、泣く外はなかつた。

三五兵衛涙を押へ、「理とも非とも、是ばかりは一言も返答なし。それはよし夫婦の中。源五殿への申譯、腹切らふと申すとも、よも切らせはなされまい。すればいらぬ化粧業、何とも違却千萬」と、いへば源五、「これ〜、お詞の中なれども、親の敵狙ふ身は、盗みをして許しある。何の是式、お心に懸けられな。さて彼の石子久彌といふ者は、只今名波道愚と申す雲水の身となり、或時は勢州に住む、又は濃州、信州、折々は京東山、勝軍地藏の隠遁者に因み、詩文など作る由、草履中間の話なり」といひければ、「三有難き御物語り、御恩の上のお情」と、悦び合ふこそ道理なれ。

【註】 ○すれば〜さうすれば ○入らぬ化粧業―不必要な、體裁づくりの仕方、即ち伊達わざ、虚飾だ。○違却千萬―格式にたがうこと萬々、即ち不都合千萬の意。違格とも違却ともいふ。○これ式―これ位。○雲水―天下遊歴の行脚僧。○將軍地藏―敵に勝つことを祈る佛にて、白川にあり。○草履中間―主人に従つて其履物をもちあるいた連中を草履取といつた、まだ武士にはあらず。中間は足輕と武士との間にあつたものをいふ。

【譯】 三五兵衛は涙を押へて、「理も非もなく、こればかりは一言もない。然しそれはまだよい、つまりが夫婦の仲のことぢや。けれども源五兵衛殿へ對する雜言無禮の申譯を何としてしよう。腹を切らうと申しても、よもや切らせはなされるまい。さすれば入りもせぬ虚飾ぢや。何とも云ひやうない大變な間違だ」といふと、源五兵衛は「これこれお詞の最中ながら、親の敵を狙ふ身は、盗みをして許されるといふに、何のこれ位のことを、お心に懸けられるな。ところで彼の石子久彌といふものは、只今では名波道愚といふ雲水僧の身となつて、時には勢州に住ひ、又は美濃、信濃、又は京東山に住ひ、勝軍地藏の隠遁者に因んで、詩文などをつくるさうだとは、草履取や中間などの

話であるといへば、三五兵衛は「有りがたきお話、御恩受けた上のお情嬉しや」といつて、互に悦び合ふたのも道理である。

夜もしら〜と白む頃、家のおとな磯部與茂太夫、寄親の四十平、中間四五人引連れ、路次口叩いて、「これ〜林殿、お部屋の方に男の聲が聽える。錠明けさつしやれ。穿鑿いたす林殿、林殿」とぞどよめさける。三、そりや親父めが來をつた」と、慌て騒いで三五兵衛は奴振る、源五兵衛は女子の眞似、「先小まん様隠しませ」と、蚊帳へ入るやら駈出るやら、更に差別はなかりけり。中にも源五物巧者、「騒ぐまい〜、渡り奉公した御蔭、我等次第に遊ばせ。私お家に居ぬばかり何の氣遣ない事」と、いふ内にも戸を叩き、下々喚けば詮方なく、土戸の錠を明くるとひとしく、與茂太夫突と入り、「さてこそ新參め、縛れ括れ」と取廻はす。

【註】 ○おとな―家老。○寄親―奉公人の身元引受人。○どよめく―さわき立てる。○奴振る―奴の振りをして、如何にもあはれた様を見せ、同時に例の人形にて近松式の滑稽味を出さんとするのだ。○物巧者―物なれて氣がきいてゐる。

【譯】 夜もしら〜と白む頃、家の家老磯部與茂太夫は寄親の四十平や、中間四五人を引つれ、路次口をたいて「これ〜林殿、お部屋の方に男の聲がきこえる。錠をあけさつしやれ。せんさくする。林殿、林殿」と騒ぎたてた。三五兵衛は即ち「そりや、親父めがやつて來た」とあはて騒いで、女であることを忘れて奴の振りをする。源五兵衛は女子の眞似をして「まづ小萬様をお隠し申せ」といつて蚊帳の中へはいるやら駈出るやら、物の差別もない程であつた。中にも源五兵衛は、物馴れて氣がきいて「騒ぐまい〜、方々を渡り歩いて奉公したお蔭で、ちやんと何事も心得てをる私にまかせておかれよ。つまりは私がお家にをらぬばかりのことで、何の氣遣ひもありませ



ぬ」といふ中にも戸を叩いて、下々のものがわめくので仕方なく、土戸の錠をあけると同時に、與茂太夫はつとはいつて「さてこそ新参者奴、そちが此處に入り込んだのだな。さ縛れ、くゝれ」といふと一同が取まくのである。

源五兵衛少しも怯まず、「いや縛らるゝ科は持ちませぬ。夜前始めて拍子木役。奥とも口とも存ぜず、戸の明いてあるからとは、而も念入れ廻る處、女子衆が見付けて、此處へうせれば曲者。夜明迄留置いておとな殿へ渡すとて、錠を下して動かせず。蚊に喰はれて居ましたが、それでも縛らばお縛りなされ」と、左もありつべしう言ひければ、三五兵衛合點して、「いかにもあれがいふ通り、わしが兎相で錠を忘れた其間に、お庭に来て居ました。勝手知らぬといひながら、後で知れては奥の者の通り。夜明けてこなたへ渡さうと、錠下して留めました。何の別儀も無い事」と、何れも武士の一疋共、尤もらしうぞ言成しける。

【註】 ○うせれば―來れば。○ありつべしう―尤もらしう、似合はしう。○知らぬと云ひながら―勝手を知らぬとは申すもの、後にてそんなことをしたと知れては……。○こなた―家老をさす。

【譯】 源五兵衛は少しもひるむところなく、「いや縛られるやうな罪は何もありません。夜前始めて拍木役を仰せつかり、奥とも口とも存せず、戸の明いてあるから廻るべきだと思つて、殊に念を入れて廻つて居たところ、女衆が見つけなかつて、此處へ來れば曲者ぢや、夜明まで留めおいて、家老殿へ渡すといつて、錠を下ろして動かされず、蚊にくはれてをりましたが、それでも縛るとあらばお縛りなされ」と、さも尤もらしう云ふと、三五兵衛も合點して、「いかにも彼がいふ通り、わしが粗相で錠を忘れた間に、お庭に来て居ました。勝手を知らぬものゝことは云つても、後になつて、此事が知れては、奥の者の過失になる。夜があけたらお前さんに渡さうといつて、錠を

下ろして留めておきました。何の變つたこともありませぬ」といつて、何れも武士の一人であるからには、さも尤もらしく云ひ成しをしたのであつた。

與茂太夫堅い者、「何も奥のお道具に見えぬ物は御座らぬか。能ふ吟味なされたか」三、イヤ何もお道具揃ふて胡散な事は御座らぬ」と、言へども猶顔顰め、奥をのれは好かぬ奴ぢや。第一鼻が高ふて合點の往ぬ面。屹度詮儀の仕様はあれど、脇へ觸れば喧しい。これ四十平、直に大坂へ連下り、薩摩宿へ渡して、舟に乗るまで見届け歸れ。渡した二歩の取替、返して失ふ。早ふ〜と睨付くる。源「ハテかしましい返します。おれが鼻が高けりや、こなたが睨る筈か。一步は其方の一步、鼻は俺が鼻。それ返す」と投出す。

【註】 ○堅いもの―物事に念を入れる人。かた人。○鼻が高うて…鼻高きものは陰大なりとの俗説によりていふ。藤井博士説。○歸へ陣れはやかまし―はたへ觸れると面倒だ。あたりさはりが起ると厄介だ。○薩摩宿―薩摩藩の人々の定宿所。○二歩の取替―給料前かとして、最初立かへて渡した金。○こなたがねめる筈か―何てお前が人の鼻を苦しめるか。

【譯】 與茂太夫は堅い人である。「奥の道具に何も見えぬものはござらぬか、よく吟味なされたか」といふと、三五兵衛「いやそんなものは何一つ怪しいことはありません。何もかもちやんと揃うてをります」といへど、與茂太夫はなほ顔をしかめて、「汝は好かぬ奴ぢや、第一鼻が高くて、合點のゆかぬ面をしてゐる。屹度詮儀の仕様はあるが、はたへあたりさはりが起ると面倒だ。これ四十平、すでに大坂へ連れて下つて、薩摩宿へ引渡して、舟に乗るまでちやんと見届けて歸れ。取かへて前に渡した二分の金、直ぐに返して、往つてしまへ、早く〜」とにらみつける。源五兵衛は「はて、やかましい、返しますとも、私しの鼻が高けりや、どうしてお前がそれを苦しめるの



ちや、金はそつちの金ちやが、鼻は私しの鼻ちや。それ金を返す」といつて投出す。

三五兵衛も我身さへ、世を忍ぶ身は詮方なく、「これ此處な者、其方も人の大事、詞の役にも立つたであらう。先の人侍ならば、其恩は忘れまい」と、心を含む言こなし。お蘭は奥より走出で、「これ待ちや〜」。此鼻紙入鼻紙、中にお錢もあるさうな。お庭に落ちてあつたが其方のであらう。持つて往きや」と、仇の契も仇にせず、心の底に結び置く、露の情を哀れなる。源五兵衛もほろりと見て、「是は如何にも私の。お芳志は薩摩でも、一生忘れは致すまい」と、お寝間の方をじろりと見て、「ほんに切麥でさへ此お情、こんな事なら箸次でに、餛飩も一膳食ましよもの、お残り多や」と三重出にけり。

【註】○人の大事詞の役にも……人の大事である親の敵を知らせるといふ詞の上で役にもたつた。○先の人が侍なら―先の人即ちこゝでは自分が實は武士であるからは恩は忘れはせぬ意。○心をふくむ―恩をふくめた。○仇の契も仇にせず―實は心から源五兵衛がこがれての契でなく、わざと人をちがへられた、いはば空の契であつたが、その空しの契を空にしないで、ちやんと情をこめて大切に心の底にしまつておく。○露の情―露の如く果敢ない情の意。○私の―私の品物。自分のだといつて情をこめたお蘭の送り物を感激しながら受とるのである。○切麥―こゝでは情をかはしたお蘭をさす。○餛飩―小萬にかけていつたのだ。深い意は、説明する限りでもあるまい。○だべましよもの―食ひましたらうものを。

【譯】三五兵衛も我身さへ世を忍ぶ身分であるからには、仕方なくて「これ、そんな源五兵衛、そちも人の大事なことにいつて、物語るといふ、詞の上での役に立つたであらうからには、先方の人が武士であるからは、其恩は忘れはしまいぞ」と恩をふくめた物言ひをする。そこへお蘭は走り出て「これ待ちや〜、此鼻紙入と鼻紙、中にお錢もあるさうなが、お庭に落ちてあつたが、大方そなたのであらう。もつて行きやれ」といつて、あだし契りをおだにしないで、果敢ないながらも深く心をこめて、胸の底に結び納めておく情は、あはれ深いものである。源五兵

衛もそれを見るとほろりとして「これは如何にも私の品。お志は薩摩にゐても一生涯忘れは致しますまい」といつて、小萬の寝間の方をじろりと見て「ほんに切麥の方からさへ、このやうな情をかけられるのだ。こんなことならついでに、餛飩も一杯御馳走になつておけばよかつた。残念なことをした」といつて出た。

中之巻

川下に布搗く晨來見れば寒ずる夜半の霜と見るもの。椿々、谷川の椿編笠形に開いたら好かる。猶好かる。さつさ薩摩の芭蕉布 晒すも織るも上方で、學びも奈良や玉川や、宇治より育ちなりけらし。無慙や源五兵衛、京も東も足留らず、戀に心の不敵なく、又故郷に立歸り、見付られたらそれまでと、おまんに命捨杵の、浮名晒しの其日過ぎ、奉公人やら手間取やら、出入仕事の事介と名を替え、見つ見らるゝを取得にて、語る夜なきぞせう事なき。

【註】○川下に布搗く……川下にて晒す爲に、布をついてる朝來て見ると、布が寒い夜の霜と見える。芭蕉布を晒すことにつけて、布を晒す時に歌ふ歌を引いたのである。○編笠形―編笠は、この頃の若い者や戀に忍ぶものが、必ずかぶつたもの故、これは戀の意をふくめた歌である。○學びもならや―學ぶこともならうやの意にかく。○奈良、玉川、宇治―皆晒布の名産地であるから引いたので、晒布の原産地薩摩より、奈良、玉川などが名高いといふことを、氏より育ちがよいと云ひかけた。宇治は「氏より育ち」の氏にかく。○不敵なく―甚だ不敵な意にて、なくは勿體なくなどのなくと同じく、無の意ではない。○命捨杵―命をすてゝかゝつて、浮名を晒しの意。杵といつたのは、晒しの縁で出したもので、布を晒すには、杵でつくからである。○手間取―賃錢をもらつて、一時備はれる者。○出入仕事―家へ親しく出入する折々にする一寸した仕事。○見つ見らるゝを取得―戀人を見たり、又戀人から見られたりすることの出来るのを利得として。○せうことなき―せん方なし、仕方なし。今日の東京語



のせうがないと同じ。

【譯】川下で晒布を搗く朝に来て見ると、寒い夜半の霜と見まがうほどに、布が晒されてゐる。椿よ椿よ、谷川の椿よ。お前が若者のかぶる編笠形に開いたらよかる、今よりすつとよいことである。さつさ薩摩の芭蕉布は、晒すも織るも皆上方でやるので、その晒し方を學ぶともならぬ。本に晒布の名所は奈良や玉川や宇治である。人はまことに氏よりも育ちの諺の通りで、育ちの悪いのはどうもならぬものらしい。あはれや源五兵衛は京にも東の江戸にも足が止まらず、戀には心が甚だ不敵なもので、又故郷へ立歸つて、見つけられたらそれまでと、おまんに對して命をすてゝかゝり、浮名をさらして其日／＼の身過をなし、奉公人の仕事や、手間取りの仕事や、出入仕事などをして、名を事介とかへてゐるが、おまんの顔を見、また彼女から見られつするだけが取得のみで、互にみ／＼と物語り會ふ夜の無いのは、せん方もないものである。

晒搗の女子男ども、「ヤア事介今か。銀が出来たやら寛りとやりやる。美しい」といふ處へ、内より下女が走出て、「なふ是れ／＼。今日は内方のおまん様へ、御祝言の頼みが来る。それで餅を搗つしやる。臼も杵もいる程に、先ア仕舞ふて歸らしやれ。今日の働き、半日拂ひにせうけれど、なまなか手間取らふより、頼みの祝ひに皆進上にさつしやれと、お内儀様の言渡し」と、言捨て入れれば、皆々呆れて、「何と事介聞いたか。其方が出入の旦那様が、あんまりな慾面。おまん様の頼みが来るなら、祝儀は上から給る筈、其日過の半手間を食つて何程じや。それに今日はおまん様、本の母御の十三年忌、茶の子一つ配る事か。おまん様がいとしい。言ふても一人の娘御、かの名の立つた源五兵衛とやら尋出し、物さへ入れれば成る事」方々首尾を繕ひ、聲に取つて世を渡いたが先順といふもの。定め

て頼みの来る方も、大分取れる見込で奉公分といふであらふ。其跡へ銀持つて来る男の子を養ふて、又銀の付く嫁を取り、あげくに主の連合も逐出し、銀持つて来る亭主を入れ、悪ふしたらば内との者も置替え、銀持つて来る奉公人、敷銀する手間取を尋ねられふも知れまい。傳兵衛のお方如何思やると、どつと笑へば、

【註】 ○今か—今来たのか。 ○内より—おまんの家の内より。 ○内方—此家の。 ○祝言の頼み—婚禮の結納。 ○臼も杵もいる—此家では、ふだんは布を搗く道具で餅をつくの。 ○半日拂—半日働いたに對する勞銀を支拂ふのであつて、半日分の賃金を拂はうがの意。 ○半手間—半日働いた勞銀。 ○頼みの祝に皆進上—半日分の賃金なんかとらないで、結納祝ひに備主へ進呈しるの意。 ○お内儀—おまんの繼母のことにて、此邊繼母の因業な態度をいつてるのだ。 ○出入の旦那—出入りする旦那、出入して仕事をさせてもらう主人、即ちこゝでは内儀をさす。女でも主人故旦那といふ例澤山あり。又尊い未亡人などに對しても皆旦那様といったものだ。 ○本の母御—本當の生みの母。 ○茶の子—法事にくばる茶うけの團子。 ○いとしい—いとほしい、可愛い。 ○云ふても—何といつても。 ○物さへ入れれば成る事—物は錢、源五兵衛を尋ね出すことも、金をかければ出来ること。 ○首尾繕ひ—諸方の都合をよきやうにとりはからつて。 ○世を渡す—世をわたらせる。暮らさせる。 ○頼の来る方も—頼みは結納。結納をもつて来る方をもの意。 ○大分取れる見込—大分物にすることが出来るつもりで。 ○奉公分—大分結納の金とれる見込をもつて、貰ふことにしながら、それを聲とはいはないで、奉公人といふ名義で、といふであらう。 ○銀のつく嫁—持參金つきの嫁。 ○擧句—はては。 ○主の連合—主はおまんの繼母をさす。その連合はおまんの父親新兵衛をさす。 ○内との者—關西で、わしたちといふをこちとらといふ。さうした時の、とと同じのが、此内とのとである。内の者と同意である。もと内外から来たのだらう。 ○敷金—持參金、身元保證金。 ○お方—女房のこと。

【譯】晒布を搗く女子や男ども「やあ事介、今来たのか、ゆるりとやりをるなあ、羨ましいわさ」といふ處へ、おまんの内から下女が走り出て「なう、これ／＼、今日はうちのおまん様の處へ、御祝言の結納



が来る。それで餅をつかつしやるのぢや。だから白も杵も入用だから、まあ皆仕事をしまつて歸らつしやれ。今日の働きに對しては、半日分の給料を拂ふにはしようが、なまじ手間代半日分なんぞ取らうよりか、結納の祝ひとして、皆それを進上しやれと、内のお内儀様のお云ひ渡しぢやぞや」といひすて、はいると、皆の人が呆れて「何と事介、話を聞いたか。そちが出入りする家の旦那ぢやが、あんまりな慾づらぢや。おまん様の結納が来るなら、祝儀はむしろ上から、即ちおまん様のお内から下さる筈。それをあべこべに、祝儀として、半日の手間代を差出せなんて、その日暮しのもの、そんな金を食いとつたところ、それが何程ぢや。それに今日はおまん様の本當の母御の十三回忌ぢや。それなのに、茶うけの團子一つくばることか。おまん様が可愛い。何をいふても、たつた一人の娘御ぢやないか。あの浮名のたつた源五兵衛様とやらを尋出すとぢやとて、金さへかければ出来るとぢや。方々の都合を繕ふて、その上で源五兵衛を掣にとつて、渡世をさせてやるのが、先づ順序といふものぢや。それなのにさうしないのは、定めし結納をもつて来る方をも、大分結納金のとれる見込で、——あれは奉公人といふ名義で迎へたのぢやといふであらう。其後へ金をもつて来る男の子を養ふて、養子とし、又銀のついた嫁をもらひ、そのをはりに結局、主の連台ひの人、即ちおかみさんの連合である御亭主を追出し、その代りに銀をもつて来る亭主を家に入れ、悪くすると、内の者共も入れかへ、銀をもつて来る奉公人や、保証金つきの手間取り男を尋ねさがされるかも知れない。傳兵衛さんのおかみさん、どう思ひなされる」といつてどつと笑ふと——

傳「ヲ、それ、お蝶の父の言やる通り、一を打つて萬を知れ。琉球屋の新兵衛様といつては、ち國は愚か、筑紫九ヶ國隠れない分限者に、餅搗く臼杵持たずに、晒白を兼る程な各坊。あの心で餅搗やるは不思議でないか、事介「いや白ばかりに限らぬ。萬の物を一色で、二色三色に兼はらるゝ。先づ主の身から新兵衛様を排除け、と、かゝの二役。帷子時も前垂で上下共に仕舞はるゝ。入相時分に膳立して、夕飯夜食を引張、火搔が直に塵取。砂糖桶に柄を付けて柄杓を終に買はれず。小狗仕入れて

鼠捕らせ、盗人の用心と一疋で埒明け、冬は時々蒲團代り。欠伸も卒にせまいとて、口開き次でに念佛。精進日には和物一ツ。其和物の搦木の、頭の圓いを長老の代僧で仕舞はるゝ、慈悲ある者の真似はせず、吝嗇者を手本に、杓子を定規に使はるゝ。正月の飾が釣瓶繩になるやら、七月の苧殻が壁下地になるやら、念佛講に當れば、熬豆次でに灸して、來月の庚申も取越したいとの呟き。それに奇特な如來様が欲しいとて、佛師を呼ぶでの好み事。右の御手に錫杖、左の御手に縛の繩、腰から下に緋の袴、御頭には烏帽子着せ、蓮華の代りに米俵、御面めうを真赤いに、御口をくわつと大髭。阿彌陀如來一體で、不動、地藏、聖徳太子、惠壽須。大黒、閻魔大王しまふて、胴の中を空洞に繋て、二月堂の半王と、お伊勢様の御被入る様にとの誂へ。佛にさへ油斷させず責使ふ和郎じやもの、衆生を責るは道理じや」と、口々譏りて歸りける。

【註】〇一を打つて萬を知れ——一つ叩いて萬を知れ、一つきいて、あとは推量せよの意の諺にて、一事は萬事と同じく、一事でその人の大體が分る意。〇分限者——金持。〇一色で——一品で、一種で。〇二色三色——二種三種。〇兼はらるゝ——かねられる。兼用なざる。〇主の身から——藤井博士の説によると、主はおまんの母親自身のことだが、樋口氏は、主といへば家の主人であるから、新兵衛のことだとの説。即ち急轉、母親を悪口したので、新兵衛の身から、新兵衛の實質を押のけ、拔殻にする、換言すれば、主の地位から新兵衛を押しつけて實権なき者とすると解すべきだ。〇前垂で上下共に——帷子を着る時節にも、襦袢や腰巻はしてゐるだらうが、着物を着ずして、よく田舎や、裏だななどに見るやうに、前垂一枚をつけて、座敷の上でも用事をすませ、下の用事もやつてしまふ。つまり客の前でも、雑用でも、夏は着物を着ず、前垂一枚で、やつてしまふ意。〇夕飯夜食を引張り——夕飯は日の暮頃食ひ、夜食はもつと夜をそく食ふのだが、それを中間に食ふて、兼ねるのだ。即ち事實に於ては夕飯はをくらし、夜食はくり上げるのだ。〇小狗仕入れて——小犬を馴らして、訓練して猫の仕事と盗人の番と兩方させる。〇蒲團代り——



犬の子が暖かい故に、抱いて蒲團の代用とするのだ。○卒にせまい―無駄にせまい。○長老の代僧て……長老を呼んで、佛に向向してもらう代りに、搦木の頭を代僧として、本當の僧は呼ばないですます。つまりしみたれの意。○正月の飾―正月の飾に用ひた繩の部分さす。○七月の芋競―七月の盂蘭盆會に用ひた芋の皮をとつた後の屑をさす。その屑で壁下地をつくるのだ。○念佛講に……念佛講の引受元にあつた家では、煮豆を出して、講中をもてなす習がある。又灸鑿といつて、灸をする時には、後で煮豆を馳走する習がある。即ち念佛講の時灸をすえると、豆は二様に役に立つといふのだ。○庚申―庚申待の夜は、夜通し飲み食ひするから、念佛講と一緒にすまして費用を節約したいといふのだ。○錫杖―僧侶又は修験者のもつ杖にて、杖の頭に塔婆形の數個の環をつけたものもある。悪獸や毒蟲などを警むるものといはる。こゝでは地藏がもつてるのだ。○縛の繩―不動尊のもつもの。○腰から下に緋の袴―他の振當てからいふと、此姿は聖德太子の姿にあたることになる。○烏帽子―惠美須は風折烏帽子をかぶつてゐる。○米俵―大黒米俵を二つふまへてゐる。○御面めんを眞赤に……御面めんは面貌、それを眞赤にして、口をくわつとあけて、大髭をはやしてゐる。即ち閻魔大王のことをいふのだ。○しまうて―一つにしての意。不動以下を一つに片づけて。○二月堂の牛王―奈良二月堂から出す牛王の札。牛王は即ち、牛王寶印又は牛王寶命とかいた一種の守札で、牛王の中では熊野社、高野山などが最も名あり、村鳥のしるしあり。之に誓をかくに用ひた。二月堂の牛王には、南無頂上佛面除疾病、二月堂、南無頂上佛面願満足」と書いてある。卷頭熊野牛王の圖参照。○お伊勢様のお被―伊勢大神宮のお被札。○佛にさへ油斷……佛でさへ油斷させず、利用出来る丈け利用する男の意。○和郎―男の意のやさしき語、つまり、奴さんといふやうな意でおまんの母親のことを毒づいたのだ。○衆生―佛といつたに對して用ひた語で、此處では人間とか、召使の意に用ひた。

【譯】傳兵衛のおかみは之に答へて「おゝそれ〱、お蝶の親父のいやる通りで、一を打つて萬を知れぢや。琉球屋の新兵衛様といへば、此お國は申すも愚か、筑紫九ヶ國に隠れない大金持ちや、その家に餅をつく臼や杵がなく、晒布をつく臼をそれに兼用する程の吝つたれぢや。あの性根で、餅をつきやるといふは不思議ではないか、事介」といふと、事介等は「いや臼ばかりに限らぬ。萬のものを一品で二色や三色に兼ねさつしやる。先づ主人の地位から新兵衛様を押のけ、自分一人で、爺と嬢との二役をつとめ、帷子時には、着物を着ないで、只前垂一枚をかけて、上の用事も下の用事もやつてしまはれる。入相頃にお膳立をして、夕飯を延ばして夜食兼たいにし、又火搔

をすぐに塵取りにも用ひ、それかと思ふと小さい砂糖桶に柄をつけて、柄杓に代用して、遂に柄杓を買はず、小犬を慣らして、猫に代用して鼠をとらせ、盗人の用心と兩方を、一匹の犬で埒をあげ用を便じ、冬は又その小犬を抱いて蒲團の代りにして温をとれ、欠伸も無駄にはすまいといつて、口を開いて欠伸をするついでには念佛をとなへ、精進日には和物一つだけこしらへ、而もその和物をつくる搦木の頭が圓いを利用して僧に見たて、長老を呼ばないで搦木を代りの僧のつもりにしてしまふ。

「慈悲心ある者の眞似は少しもせず、しみつたれを手本にして杓子を定規に使ふ。正月の飾の中の繩をとつては釣瓶繩にする。七月の盂蘭盆の精靈棚に用ひた、芋の皮をむいた殻は壁下地にする。念佛講の引受元に當りでもする」と、御馳走用の煮豆をこしらへるついでに炙をして、おまけに來月の庚申も取越して一緒にやりたいとつぶやく。それにまた奇特な如來様がほしいといつて、佛をつくる佛師を招いての好み事には、右の手に錫杖をもち、左の手に縛の繩をもち、腰から下に緋の袴をつけさせ、頭には烏帽子をかぶらせ、蓮華の代りに米俵に乗らせ、御面相を眞赤に、口をかつとあけて大髭をはやさせ、つまり阿彌陀如來一體で不動と地藏と、聖德太子と、惠比須と大黒と閻魔大王を片づけて、而も佛像の胴の中をうつろにくりぬいて、その中へ二月堂の牛王の守札と、伊勢大神宮の御被札と、神佛兩方のお札がはいるやうにとの詠をしたものだ。佛にさへ油斷をさせないやうにして、絶え間なしに攻めつかつてゐる奴ぢやもの、召使などを攻めたてるのは當り前のとぢや」と口々にそしつて歸つてしまつた。

琉球と家名を聞けば唐めきて、君は和國のぼつとりもの。おまんは千々の物思ひ。七歳で離れた母様は、十三年忌が二度はなし、お墓へ鳥渡と加賀笠に、小風呂敷には手向草。露も涙も押包み、なまふ竹、大儀ながら是持つて、お寺まで供してたも。參つて來たい」と言ひければ、竹、お袋様に問はしやんしたか。わしや喚かれたら何んとせう。今にお前の氣に入りの事介がぢやりましたよ。事介連れ



て御座りませ」萬「いや事介は少とお寺に障す事ある。母様の今藏に御座る間に、早ふ出たい」といふ處へ、母「ア、これ〜母は今藏から出た。動く事はなるまい」と、笠風呂敷も取つて投げ、「參らして好けりや參らする。今日はそなたの嫁入の頼みの使ひ來る筈で、此中夫婦が用意して、餅よ杵よと世話かくが、そなたの目には見えぬか。産落した母御前も七つの年まで養育、それから此のかた十何年といふものは、誰が世話で其様に背丈伸たと思やる。十月の宿こそ貸しはせね、恩較べをして見たい。本の母御前から剩を取る。地獄にやら何處にやら、見えぬ孝行せうよりも、これ鼻の先にぎろつく此母に孝行なら、寺も精進も取措いて、今日にはつこり笑ふて、生臭物で祝ふてたも。其代りに來年は祖父様の三十三年忌。それと一度に荷ふて、そなたの母御は十四年忌、一年でも多ければ弔はるゝ佛も徳。此方も造作は少い」と、差手引手に算用なり。

【註】○琉球—琉球屋といふ家名。家の名は唐風のやうでもといふのは、當時琉球が日本の版圖と明ならざりしよりいふのだ。  
 ○君—色君の意。○ぼつとりもの—ふつくらした意。○加賀笠に—加賀笠をかぶる意。加賀笠は加賀名産の菅笠にて元祿寶永の頃流行した。○露も涙も押つゝみ—手向の花においた露と、母を憶ふ涙を一緒に風呂敷に包んで。○お袋様—繼母をさす。○おじやりまじよ—おいでありまじよのつまつたもの。○御座りませ—おいでなされませ。○障すことあり—さしはりがある。○世話かく—世話やく。○十月の宿—母胎内にゐること。○地獄にやら—地獄にゐるか極楽に行つた分らぬ意にていふ。○ぎろつく—ぎらつく。目の前にあり〜と見える。○一度に荷うて—一荷にかつぐといふと同じ。つまり二つを同時にする意。○造作—費用も手数も手間もなどの意。○差す手引く手—差出す手、引き入る手のことで、舞などによく用ひる語。一舉一動何事をするにもこの意。

【譯】家の名を琉球屋といふと、如何にも唐風に見えるが、おまんといふ色君は、日本娘のふつくらした美人であつた。そのおまんは千々の物思になやんでゐる。今日は丁度七歳の時に別れた母親の十三年忌にあたるので、かうした年忌は二度はないし、せめてお墓へでも一寸參つて來うと、加賀菅笠をとりて、小風呂敷には手向草を入れて、草の露も涙と一緒に押し包みながら「なう、お竹や、太儀ながら、之もをつて、お寺まで供をして來ておくれ、お墓に參つて來たい」といへば、下女のお竹は「お袋様に、參つてよいか問はしやんしたか。私しや叱られてもしたらどうしませう。今にお前様のお氣に入りの事介が來やりませうから、そしたら事介をつれておいでなされませ」。

おまんは「事介はちとお寺にさしはりがある。母様が今藏の中においでぢやから、その間に早く家を出たい」といふ處へ、お袋は飛出して「あゝ、これ〜何をいふ、母は今藏から出たぞや、そなたは家を出ることはならぬ」と叱りつけて、笠や風呂敷も引きとつて放り投げ「參らしてよいものなら、ちやんと參らせる。今日はそなたの結納の使が來る筈であるので、此間から私し達夫婦が用意をして、餅よ杵よと、色々と世話をやいてゐるのが、そなたの目には見えぬのか。そなたを産み落された母御も、お前を七つの歳まで養育されたであらうが、それから後十何年といふものは、誰の世話でその様に背丈が伸びたと思つてゐるのぢや。十ヶ月の間私しの腹に宿つてをらんだとはいへ、親の恩といへば、死んだ母御と、繼母の私と、どちらの恩が大きいか恩較べをして見たいものぢや。恐らく私の方が、本當の母御からつりを取ることである。それなのに、地獄にゐるか何處にゐるか、見えもせぬ母親へ孝行せうよりか、これこの通り鼻の先にあり〜と見える此母へ孝行するのなら、寺參りも精進もやめて、今日にはつこり笑つて、生臭い物で祝しておくれ、その代りに來年は、祖父様の三十三年忌ぢやから、それと一荷にして、そなたの母御の十四年忌を營むことにしよう。十四年忌といへば十三年より一年多いが、一年でも多いければ、弔はれる佛の方でも徳といふものぢや。そして此方も費用も手数も少くてすむ」と、一舉一動に十呂盤づくである。

常例も事なり親ながら、おまんも餘り堪へかね「最う好い加減に黙らんせ。他人でさへ、恩ある方親



しい中は精進して、寺道場へも参るのが、先づ道さうに御座んする。腹を借つた母様の、十三年忌の墓参りが、それ程科になりすか。第一は此方様の外聞冥加もあるものと、寺へ上がるお布施も、皆此方様の志に書付けをしめた。嘘なら風呂敷見さしやんせ。死んだ人への回向は此方様への孝行、此方様への孝行は佛への奉公。母といふ字は同じ事、わしや分限はせぬものを。又しては、左してもない事苦口言ふて、我も嗔恚を燃したり、人にも悪氣附さんす。精進すなら爲すまい。寺が嫌なら参るまい。子は親次第のものなれど、縁の道ばかりは押付業には成らぬ事。頼み取りたか取らしやんせ。わしや嫁入はしませぬ。せめて十ヲに一ツは父様にも問はしやんせ。母に向ふて口過すも、皆此方様が言はしやんす。あんまり氣強ふ御座んす」と、袂を顔に押當てて、恨み歎きの其中にも、今日命日の亡母を、慕ふ涙ぞ増りける。

【註】 ○いつも事いづものこと。ありふれたこと。母親の剛愎な態度は、珍らしくもない意。○寺道場—寺のこと。○道さうに—人 道のやうに、人のふむべき道であるやうに。○外聞冥加もあるもの—あなたについての世間の噂の上に、冥々の中に利やくがあり、神佛の加護あるものと思ひ。○こなた様の志—あなたの志から出た御布施のやうに上書をかいた。○さしてもないこと…格別もないこと、これといふ程のこともないことに對して、苦々しい口をきいて、○我も嗔恚を燃したり—自分にも腹をたてたり。○惡氣つけさんす—惡氣を他人につける即ち悪く感じさせる、つまりいやな氣をもたせる、いやな感じを起させる意。○精進すなら—精進するなといふことなら。○押付わざには—無理強ひに思ひのまゝにしうとて。○頼み…結納を手に入れたいとあらば、取り入れるがよい。○母に對うて—母親に對して。

【譯】 何時もあることではあり、親のいふことながら、おまんもあまりにこらへかねて「もうよい加減におだまりなされ。他人でさへも、恩を受けたものや、親しかつた仲の人は、精進をして、寺へも参るのが、まづ人としての道らしうござんする。腹をかりた、産みの親の十三年忌に、子が墓参りをするのがそれ程罪になりますか。第一に此方様に對する世間の噂について、冥々の中に神佛の加護もある、のと思つて、寺へあけるお布施にしても、皆此方様からの志であるがやうに、上書を書付けました。嘘と思はれるなら、風呂敷をあけて見さんせ。死んだ人への回向は、つまりが此方様への孝行であり、此方様への孝行は、佛への奉公だと思ひ、死んでも生きても、母といふ字は同じ事で、どちらも同じ母として、私しや別け隔てなんかはせぬものを。又しても、格別これといふでもない事に、苦々しい口をきいて、自分にも腹をたてたり、人にもいやな感じをさせたりなされる。何も精進すなといはれるならしませぬ。寺がいやと仰有るなら寺へ参りますまい。子は親の命する次第のものながら、縁の道ばかりは無理強ひの仕打はならぬものぢや、結納がとりたくばおとりなされ。私しや嫁入りはしませぬ。凡そ物事、せめて十に一つは父様に尋ねしやんせ。斯うして母親に對して、過ぎた口をきくのも、皆此方様が云はせなされるのだ。こなさんは餘り氣強うござんす」と袂を顔に押あて、恨み歎いてゐる中にも、今日が命日である亡き母を慕ふての涙がふえまさつたことである。

母「ヲ、泣く程嫁入がしともなくば爲せまい。一期男持たずに居やるか。どれ顔見やう。ヲ、嫌さうな顔じや。わが身の好やる男はあれが嫌、親の許すはそなたが嫌ひ、押付業はしませぬ。追付け頼みが来る筈。なげかやいて見せうぞ」と、喚き散す折しも、袴に媒人が、裕羽織も鹽目好き、大鯛、昆布、柳樽、五色の縮緬、紅真綿、附紙臺、折紙臺、三荷に擔はせ、先づ萬事首尾なつて、私まで大慶」と、鼻込めば、女房今まで夜叉の忽に、愛敬柔和の高笑ひ、「まア、是は、夥しい。何故に止ては下されぬ。さりながらあなたも代が一度の事。皆お媒人のお世話ゆゑ。これ姉、お禮申しやいの。あの子も今朝から悦んで、待受けて居ましたが、恥かしいと見えました。連合の新兵衛奥に待受



け居られます。先づあれへお通り。供の衆は端の間へ。男共は何處へ往た。事介はうせぬか。これおまん、目を拭ふて鼻でも龜や玉よ、此進上物持つて来い。それ茶の下を、吹きはちやつと酒屋へ、はしりに水がなさをふな。吸物に何を醬油か。いやざつと薄味噌を、鰯炙れ」とやかましく、連立ち奥にぞ入りにける。

【註】〇一期―一生。〇驢目よき―品位よき。〇柳樽―例の赤い樽のこと。〇附紙臺―黄金一枚銀一枚など書いた包紙を、糊にて臺に張つけ、金銀を別に包んで遺す習があつた。〇折紙臺―折紙といふのは目録書のことにて、それをのせる臺。〇首尾なつて―都合よくなつて。〇今まで夜叉の―たつた今まで夜叉の如く荒れ狂つてゐたのが。〇何故に止めては―媒人たるあなたが、なぜ此程深山の雜物を送ることをさしとめては下さらぬ。〇あなたも―彼方も。聲の家のことをさしていつたのだ。〇代が一度―一代に一度のこと。〇姉―おまんをさしていふ。〇男共は―召使の男どもは。〇うせぬか―來ぬか。〇龜や玉や―下女の名にかけて、鼻汁をかめといつたのだ。〇吹き―下女の名と、茶の下の火を吹くにかく。〇はしり―流し臺のことを、關西でははしりといふ。酒屋へ走りにかく。〇醬油―何をしようにかく。〇鰯あぶれ―味噌をするとかく。

【〇】母は「おゝ泣くほど嫁人がしたくなくばせまい。一生涯男をもたずにおゆるか。どれ顔を見よう。おゝ嫌さうな顔ぢやわい。そなたの好きやる男は私しがいや。親の方から許す男は、そなたがいや。ぢや、無理に押付るやうなことはしますまい。やがてもう結納が来る筈ぢやが、投げ返して見せうぞ」と喚めきちらしてをる折しも、袴をつけた媒人が、拾羽織姿も上品な風で、大鯛に、昆布に、柳樽に、五色の縮緬、紅色の眞綿、附紙、折紙臺などを三荷に荷はせ、「まづ董事好都合になつて、私も大慶に存する」といつて、昇込むと、今まで夜叉のやうな顔をしてゐた女房が、忽ち愛敬のある柔和な高笑ひをして「まあ、これは、夥しい品を恐入ります。何故此程の深山の進物を、あなたからさし止めては下されなんだ。それにしても先方でも一代一度のことではあるし、皆お媒人のお世話のお蔭ぢや。これおまん、お禮を申しやいの。本にあの子も今朝から喜こんで、まつてゐましたが、

いざとなると恥かしいと見えます。連れ合ひの新兵衛は奥に待受けてをります。まづあれへお通り下され。お供の衆は端の間へ、お上り下され。男どもはどこへ行つたやら。事介はまだ來ぬか。これおまん、目を拭うて、鼻汁でもかめや、お龜やお玉は、此進物をもつて来い。それお茶釜の下を焚きたてよ、おふきはちやつと酒屋へ走れ、流しに水がなさうな。吸物に何をせうか。いやざつと薄味噌をすれ、鰯をあぶれ」とやかましく云ひながら、媒人連れ立つて奥に入った。

おまんは胸もせきかへり、「サア頼みを取つては最う遁れぬ。わざくれやけじや。ばれて出て、忍男の構があると、とんといふて捨てふか。いつそ内を走らふか。いや、源五兵衛様も日蔭の身、其上に苦を持たせては愛しい人の身の大事。談合もするものを、今日は如何して見えぬぞ。父様を呼立てて變替して貰はふか。内の者は身にならず、心の合ふた友はなし。何とせうやら彼とせうやら」遣瀨涙に氣も塞り、座敷の内をうろくと、起つたり居たり泣くばかり。

【註】〇胸もせき―胸もこみあげ。〇遁れぬ―のがれられぬ。〇わざくれやけじや―まよ、やけくそぢや。〇ばれて出て―内實をばらして出て。〇忍男の構がある―ひそかに云ひかはした男の抗議がある。〇談合もするものを―話合もせうものを。〇身にならず―身方にならぬ、頼むに足らぬ。

【譯】おまんは、胸もこみあげ、たまらなくなつて来て、「さあ結納をとつてはもう遁れられぬ。まよやけくそぢや、暴露して出て、隠し男の方に抗議があると、とんといつてのけふか、それとも一層のこと、家から脱け出してしまはふか、いや、源五兵衛様も日蔭者の身であるからには、此上に苦勞をかけては、愛する人の身の上の一大事になる。相談もせうものを、今日はどうして姿を見せられぬやら。父様を呼出して、約束の變替をして貰はるか。といつて家のものは唯一人身方として頼むには足らず、氣の合つた友達はなし、何とせうやら、かとせうや



ら」と獨り言をいひながら、遺瀨なき涙が流れて氣もふさがり、座敷の内をうろくとして起つたり居たりして泣くばかりであつた。

時刻移れば奥の間に、「千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風、さつさお暇〜」と、好い機嫌にて媒人は、足もひよろ〜立出る。新兵衛も送つて出で、蝶、兎角目出たいお目出たい。おまん様追付け好い殿持たせませす。お内儀様と申します。兎角目出たいお目出たい」と、管を巻いてぞ歸りける。母は酒氣に猶氣強く、「何んとおまん見やつたか。安ふ積つて百兩足。なんぼ四の五のいやつても、我身の細工で、あれ程の男は些と持憎くかる。皆媒人の肝精。親父殿の名代に、媒人へ禮に往て、氏神へも參つて來ふ。何れぞ暇な女子共、供を雪駄よ綿帽子よ」と、引繕ふてぞ出でにける。

【註】 ○千秋樂……松風さつさまでは、謡曲「高砂」の終にある句にて、千秋樂、萬歳樂共に樂曲の名、民を撫では、民の心を和げの意。相生の松は双生の松、さつさは颯々にて、松風の音を形容する語、さての意にかく。○お内儀様―此の前にぢきにかいやなどの語を入れて見るべきだが、管をまいてのこと故語をなさぬやうにわざと書いたのだ。○百兩足―足は錢の意。藤井博士いはれる如き、足は内外の意にはあらず。金百兩の意。「又は氷の朔日」にも、四兩あしの語がある。樋口氏説。○細工―力、腕などの意。○肝精―骨折り、盡力。○雪駄―雪駄をだせといふことを、件をせよにかく。○引繕ふ―身づくろひして。身なりを直して。

【譯】 時刻が移ると、奥の間では媒人が謡曲高砂の終の文句を謡つて「千秋樂には民をなで、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風さつさ、さてお暇〜」といひながら、上機嫌になつて、足もひよろ〜と出てゆく。父親の新兵衛も送つて出る。媒人はまた「とかく目出度いお目出度い、おまん様追つけ、よい殿をもたせませす。いやお内儀様と申します。兎角目出度い、お目出度い」といつて管をまいて歸つた。母親は酒氣に乗じて「層氣強く」どうぢや、

おまん見やつたか、あの結納、安く見積つても金百兩程はある。いくら四の五のとそなたがいやつても、そなたの腕であればどの結納もつて來る男はちと持ちにくからう。これも皆媒人の骨折ぢや。さて親父の名代になつて、媒人の處へ禮に行つて、氏神様へもおまわりして來う。誰れか暇な女ども、供をせよ、雪駄を出せ綿帽子を出せ」といつて、身繕ろひをし風を直して出て行つた。

おまんは母の町内を出離るゝまで見送りて、門口より走入り、「父様これは如何ぞいの」と、膝の上にかつばと伏し、絶入るばかりに歎きしが、「育てし恩があればとて、縁の道は格別ぞや。殊更今日は大事の年忌、弔ふ者はわたしばかり。本に無縁の佛の日、出家の一人も供養せず、お墓の花も枯次第、持佛の香も消え次第。さゝんざ所じや御座んすまい。但今の母様の、仕様が好いと思ふてか。嫁入は思ひも寄らぬ事。重ねていふても下さんすな。いつそ死ねなら死にます」と、聲を上げて泣きければ、

【註】 ○何うぞいの―どうしたことぢやいの。○無縁の佛―供養する人のない佛、おまんの母親を誰も他のものか顧みぬ故にかくいふ。○持佛―持佛とは身にそへて持つか、自分の居間に安置信仰する佛のことにて、此處は持佛堂、即ち祖先の位牌を安置する佛壇の意。○さざんざ―陽氣に騒ぎ歌ふこと。

【譯】 おまんは、母親が町内を去るまで見送つて、門口から走つて入り「父様これはどうしたことぢやいの」といつて父の膝の上にかつばと打伏し、息絶えるばかりに歎いたが、やがて、「いくら育てた恩があればとて、縁の道はまた別のものぢや。殊に今日は亡き母御にとつては大切な年忌、それだに弔ふものは私しばかりぢや。本當に無縁佛の忌日といつてもよく、出家の一人も來て供養するではなく、人の參詣も妨げるといふ風で、お墓の花も枯次第に打やられ、佛壇の香も消え次第といふ有様、陽氣に騒ぐ所ぢやござんすまい。それとも今の母様の仕方が良いと思ふてか。嫁入なんて思ひもよらぬこと、二度そのやうなことをいふても下さんすな。重ねていはれると、それは



死ねといはれると同じだと思ひます。いつそ死ねたら死にます」といつて聲をあげて泣けば――

新兵衛も涙にくれ、「我子の心底恥しい。今の母に目がくれて、死んだ母を忘れたと、思ふ恨みが恨めしや。今日は往なさん逐出さんと、幾度筆は執つたれども、堪忍せしも子の可愛さ。七歳から馴染たる彼奴めさへあの辛さ、跡に呼ぶは猶以て、馴染は薄く氣兼して、互に隔もある時は、苦勞に苦勞を重ねべし。世話の譬にいふ如く、本の母の折檻より、隣の人の扱ひが、痛いといふは誠ぞや。如何なる賢女貞女でも、乳房の母には似もつかぬ。斯ういふ我も其通り、若い時分は色もある、頭に雪を頂いて、寢覺勝なる夜な／＼は、幼馴染の子の親を、忘るゝ事はなきぞとよ。此度の縁付も一旦心に從ふて、三日なりとも居て戻れ。其上では如何様とも、望みの通り違へはせじ。さら／＼彼めが最負でなし、兎角心に逆らはず、可愛がらせう爲ばかり。今日の佛が不便やな。預けて往んだ此娘、何とて粗末、思はん」と、絶付きて泣きければ、萬「それなら是非に及びませぬ。必ず／＼苦に持つて、煩ふてばし下さんすな」と、親子手を取り絶合ひ、泣叫ぶこそ道理なれ。

【註】○涙にくれ―涙の爲に眼がくらみ。○我子の心底恥しい―我子の心底をきくにつけても、自分が恥かしい。○筆はとつたれ―離縁状をかくのである。○彼奴さへあの辛さ―七つの時から馴染んでる彼女さへがあれほどの辛い目を見せる。○姉に呼ぶは―更にまた後妻を迎へることゝなると、それも繼母だ、だから一層悪い。○母の折檻より―母の責めさいなむことより、隣の人の仲裁の方が、却つて痛みを感じ、生みの母からはどれほどひどくされてもそれほどにない。あつかひは仲裁の意。○乳房の母―乳房をしゃぶつた母。○色もある―色戀もある、色事も、艶っぽいことも若い時には伴ふものぢや。○なきぞとよ―とは只よと同じ。足利時代の古き表白法。○さら／＼―さらに、決して。○彼奴が―娘の繼母、自分の後妻をさす。○可愛がらせう

―そなたを……○預けていんだ―前妻が自分に預けて淨土へ行つた ○是非に及ばぬ―是非を論ずるに及ばぬ。○はし―はしは助辭。はの意にて、強めた表白法

【譯】新兵衛も涙の爲に目も暗みて、「我子の心底を思ふと恥かしい。今のそなたの母親に目がくらんで、死んだ母親を忘れたと思ふそなたの恨みが恨めしい。今の母は、今日は離縁しよう明日は追出さうと、幾度も筆をとつて離縁状を書かうとはしたが、今までそれを我慢したのも、みなそなた可愛さの爲ぢや。七歳の時から馴染んでゐるあの女にさへ、あれほどの辛さを感じるのぢや。あれを離縁して、そのあとに呼び入れる女は、猶更もつて、馴染はうすいので、氣兼をし合つて、互に心の隔てがある時には、いよ／＼苦勞に苦勞を重ねることがあらう。世間の譬にもいふやうに、ほんとうの母に折檻されるよりも、隣の人から仲裁される方がすつと痛さを感じるといふのは誠ぢや。一体どの様な賢女や貞女でも、乳房をしゃぶつた母には及びもつくものではない。斯ういふ私もその通りで、若い時分には色戀もあり、艶っぽいこともあつた。頭が白くなつて、目が覺めがちである夜には、必ず幼な馴染で夫婦になつた、子供の親を決して忘れることはないぞよ。此度の縁談だとして、一旦わしらが心に從ふて片づいて、例へ三日でもよいから、嫁いでゐて、それから後に戻つてくれ。その上ではどのやうにでも、そなたの望通りにしてやることは、決して違へはせぬ。決してあの奴にひいきするではない。兎角あの奴にさからはないで、あれからそなたを可愛がらせる爲ばかりのことぢや。今日の佛は不便なことぢや。わしに預けて行つた此娘を、どうして粗末に思ふか」といつて絶りついで泣けば、おまんは「それなら是非をいふには及ばぬ。必ず／＼心配して患うては下さんすな」といつて、親子が手を取り絶り合つて、泣き叫ぶのは道理である。

父「こりや／＼戻つて見れば喧ましい。縫物でもして居や。酒の上に泣いたれば、アゝいかふふらつく。やあゑい」と手枕すれば、萬「少とろ／＼となされませ。わたしも其間に、事介の頼みやつた洗濯物、つい仕立ててやりませしよ」と、取出す我も其人も互に思ひ替らじと、神に誓を掛針や、此血



を染し指貫なりと、思へば心みだけ絲、過し其夜を忘れかね、思ひ切りかね捨てかねて、心の底に包み綿、落る涙の糸筋に、戀を絆込む哀れさよ。

【註】○やあゝいーやあつとこらしよ、といふやうな、拍子をとる詞。○其人ー事介をさす。○掛針ー簪を、か、け、に、か、く。縫物と  
いつたから、例の同種ものを澤山出すやうな方ととり、此から縫物つくしをやつたのだ。○指貫にー裁縫用の指環に、指切りを  
かく。指を切つて血に染めた意。○みだけ糸ー亂れ糸。○くけ込むー戀、包みかくすにかく。

【譯】父は即ち「母親が戻つて見ると、またやかましい。縫物でもしてをれよ。あゝ酒をのんで泣いたから、ひどくふらつく、やつとこしよ」といつて、ころりとなつて手枕をすくと、おまんは「ちと、とろ／＼とお休みなされませ。私もその間に、事介から頼まれた洗濯物をこしらへてやりませう」といつて、縫ひものを取出す。自分も戀人も、互に思ひ合つて、變るな變るまいと、神に誓を掛けて、指を切つて血に染めたことがあると思ふと、心もみだれ、ありし昔の夜のこと忘れられず、思ひ切りも出來ず捨かねもして、心の底にかくし、落る涙の糸で、人しれず戀をくけこみ包み込んでおくあはれさよ。

事介は頼みの使ありと聞くより堪り兼ね、嗜む一腰ぼつこんで、覺悟極めし顔色、門に駈入り、「おまん様これ來ました」とばかりにて、ろ／＼涙で立居たり。おまん嬉しく、「ハアおじやつたか、先づ上りや。母様は留守、父様は寝轉んだばかりで、碌に寝入はなされぬぞ。物を言やらばそつといや。お眼が覺めれば悪いぞ」と、眼ませ領さ知らせける。事介やがて合點し、「今日は御縁付の極めがある」と承はり、お出入申す私が、お前の嫁入をおめ／＼と、知らぬと申すは一分立たず、御心底を聞届け、其目出度いお座敷の、お茶の給仕を、これ急爾所をまづ此様に、お給仕でも致さんと、脇差さし

て参つたが、はや御祝儀は相濟み、御縁付は極つたか、早ふ聞きたい／＼と、胸撫擦るばかりなり。

【註】○頼みの使ー結納の使即ち媒人。○嗜む一腰ー萬一の場合にと用意の一刀。○ぼつ込むー腰にさしこむ。打つ込むから來たのだ。○ろ／＼にー十分に。○そつとーひそかに。○眼ませー眼交ぜにて、めくばせをすること。○一分ー男の顔、男、面目などの意。○急爾所ー急に死ぬるやうな大事な所、即急死所、急所の意を、口合ひて、給仕の音にひやかせたのである。

【譯】事介は結納の媒人が來るときより、堪りかねて、萬一の時にと用意しておいた一刀を腰にさして、覺悟を定めた顔色にて、門にかけ入つて「おまん様まゐりました」とばかりいつて、おろ／＼と泣きながら立つてゐた。おまんは嬉しくて「はあ、來て下さつたか、まあお上りなされ、母様は不在、父様は今寝ころんだばかりで、十分に寝てはゐなさらぬ。物をいふとあらば密かに話しやお目がさめると悪いから」と眼くばせしてうなづき知らせた。事介もやがて合點し、「今日は御縁付の取極めがあると承つて、こなたへお出入りする私が、お前の嫁入をおめおめと知らぬとあつては男の顔がたぬ。即ち御心底を聞届けて、その目出たいお座敷の、お茶の給仕をし、事情によりては、このやうにして急所をつき死なうと思ひ、いや給仕でも致さうと思つて脇差さして参つたが、もはや御祝儀はすんで、御縁付は極りましたか、早く承りたい／＼と、心配しながら胸をなでさするばかりであつた。

萬「いかにも出入の門の事、其方に知らせ、取持つて貰はずば、残多く腹も立ち、無念も嘸と思遣り、様々心碎きても、先づ一旦は縁付に遁れ難なふ極りし。嫁入する日は死扮装、葬禮の儀式と聞く。此方の用意は死用意。嫁入の供をしてたもらば、其方も定めて死扮装。此誂への縫物も、其心得に仕立つれども、心の底の衾丈は、昔も今も變らぬが、かの袖下の言換し、いよ／＼一尺一寸も、引かね合點か聞きたい」と、縫物にことよせて、問へば答へも返し縫ひ、心通はず端縫の、詞の縁こそ



哀れなれ。

【註】○出入の門—そなたが出入りする家の事と、他人へ遠慮して云ひ二人の間を暗にほめかした。○死にてたち葬禮の儀式—一體で嫁入の日は、死にゆく扮装で、葬禮の儀式をするものだ。女子が一旦嫁ぐと二度と歸らぬことを習ひとし、即ち一度家門を出るを死出の旅にたとへ、嫁入の衣に白無垢を用ひるは、清淨を示すと同時に、死装束に比したので、こゝは嫁入の儀式のことから暗に死の覺悟あることを示したのだ。○桁丈け—心の底の行き方、意志の意にかく。○袖下—内々の、又は人の知らぬ意。○引かぬ合點か—後へは引かぬ積か。○ことよせて—かこつけて。○返し縫—詞をかへし返事をして。○端縫の詞の縁—心を通はす詞の端の縁、詞のはして心を通はす縁。

【譯】おまんは答へて「いかにもそなたの出入することなれば、其方に知らせ、取もつて貰はぬと、残念でもあり腹も立ち、さぞ無念でもあらうと思ひやつて、いろ／＼と心を碎いて見たが、先づ一度は縁付かねばならぬことになり、それがのがれられぬことにきまつた。嫁入する日は一体死のいでたちで出かけ、葬禮の儀式があるものと置く。ところで此方の用意はちやんと死の用意で出かけてゆく。もしそなたが嫁入の供をして下さるなら、そなたも定めて死のいでたちである。此お誂への縫物だとして、その心得で、仕立てゝはゐるが、心の底の行き方意氣込みは、今も昔も變らぬにしても、あの内々の誓ひはいよ／＼一尺一寸も間違ない積りか承つておきたい」と、縫物にかこつけて問ふと、男もそれに返答して、詞の端をたよりに心を通はす縁は、まことにあはれである。

萬「我もそもじも脇明の、其袖形の衿肩も、何も彼も未だはづしの絲の、愛しとまでに思わくの、針の本末覺え初め、互ひに心懸袖の、縁に縫糸括袖、針目人目も思はねば、親の躰もよしや只、解くな解かじと仕立しに、綻び易き習ひとて、誰がみづに聞傳へ、さがない浮世の袖口に、かけて裂かれて味氣なや。文の音信言傳も、誰れ縫當す中絶えて、何時染々と久振り、衿丈逢うた夜半もなし。果

敢なきものは女 身。親の詞に下交の、餘所の小褌に綴られて、辛や悲しや忍び泣き、涙小針にし／＼と、まばら／＼に縫ひこぼす。實に理や、とても肩身ばかりが浮々と、ながらへ果つる身巾なし。縫込廣き身でもなし。かたの悪さに裾切れて、人を恨みん道もなし。思ふた事、言ふた事、今は仇なる逆衿、三寸落しに裁切つて、此世の契麻糸なれど、來世は長き糸巻を、繰返しては繰返し、繰れつ縫れつ合せ糸、六道の縫目に待針して、手は遅くとも待ちぬべし。

【註】○我もそもじも—此邊は事介お萬の心の中を地の文にして寫したのである。○脇明—脇のあいてる子供の時、即ち振袖をきてゐる意。嫁入りすると脇を縫ひつめたのだ。○袖形—振袖を着るといつたから、その袖の形の意味即ち色ざかりの意。○いきかた—行き方、桁と肩にかく。○まだはづしの糸—はづしの糸は、布片をほごして、縫糸にする糸。つまり糸にならぬ糸にて、うぶ未熟の頃よりの意に用ひた。従つて初心、まだおはつ、初めにかけた。○思わくの針の本末—思ひの針の次第、即ち物思ひを覚え、○互に心懸袖の—懸袖は相方から肩に手をかけて、袖をかけ合ふことにて、藤井博士の説くが如く、二重の袖などにあらず。互に袖を懸け合ひ心を懸け合ひの意。○縁に縫糸括袖—より糸となり、袖口をく／＼つたく／＼り袖となり、即ちよれ合ひ、く／＼れ合ひの意。○針目—人目といひたいので、徒らに針目とかいた。○親の仕付—躰と、仕付糸とにかく。○綻び易き習、若き人々の戀故に綻びが見え易き意。○みづ—針のめど、耳にかく。○さがない—善くない。○浮世の袖口に—善くない浮世の人の口にかけての意を袖口にかけた。○味氣なし—なげななし。○纏當てず—綻びに綻びをあてぬごとく、橋渡しをして言傳してくれるものなし。○久振り—逢はずして、久しく時を経ること。○衿丈合ふた夜—二つの着物の桁きと丈けとがびたりと合ふ如く、心ゆくばかり出逢つた夜。○下交—したがへ。着物の下まへのこと。従ひの意にかく。○親の詞に從つて—小褌—思はぬ人の妻にせられての意にて、棲にとぢられるは、妻として縁を結ばるにかく。○涙小針にし／＼と—小針にちよこ／＼と縫ふごとく、涙をしく／＼と流す意。○まばら／＼に縫ひこぼす—折々に縫ひこぼしをすることに、をり／＼と涙をこぼすことをかく。○片身ばかりが—うか／＼として長く生きる身ではない意を、片身の布だけでは、身巾ほどではないに云ひかく。○繰込廣き身—縫込んだところの多い即ち餘裕のある身。○肩の悪さ—運は肩にあるといふ諺がある。即ち運の悪いの意。○裾切れ



て一裾が切れる、終が完くならぬ、成熱せぬ意。○仇なる逆衿—衿は和服の襟の側にある、先の尖つた、下に向つて巾廣くつてゐる布のこと。反物の長さ充分ある時は、先づ袖、胴をとり、餘つた布の、半分を襟とし、半分の残にて左右の衿をつくるのであるが、若し反物が短い時は、衿の一部より切り取り、襟をつぎ足し、又は上襟を作つたりするのである。さうすると、衿の布も自然に短くなる故、衿をつくるに、逆衿又はかぎ衿といふものをつくり、衿の布の不足を補ふ方法を講ずるのである。それは巻首に圖示したやうな鉤形の裁方をするのであつて、普通ならば、衿になる布を、横に二つに裁つて、餘分な所は縫ひ込むのであるが、此逆衿にすると、縫込が少くなり、長さに於て補足が出来るのである。ところで仇なる逆衿とけ、只徒らに齟齬し事志とくひちがふ意。○三寸落しに裁切—肩の頂上即ち肩先から衿の尖つた先まで、即ち衿下りが、三寸の距離あるごとく下げ、布を切つての意。蓋し子供の着物は衿下りが三寸位にて、大人のは五寸餘である。つまり子供の時に縁を結んだ意にかけたのである。或は經帷子即ち死人の着る着物も、三寸落しに切るといふ説があるが、著者は之を詳にせず。○契麻糸—契りが浅いのが意。○長き糸巻—命の長い糸をくり返しより合せ。○六道の縫目—六道の辻の意。六道とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上にて、人間死後は必ず此六道の何れかにゆかねばならず、此道の分れる處が、六道の辻。○衿針して…遅くなつても待つといふことを、待針して待つと云ひ、手は遅くともは、縫ひの手は遅くとも意にて、凡て裁縫にかけて云つたのである。

【譯】 おまん「私もそなたも、脇のあいた子供時代の色ざかりにて、行き方も何もかもまだ未熟なる、ぶなころから、愛しいとまでに思ひの境目を覺え初めて、互に袖をかけ合ひ、心を懸け合ひて、その縁で縫りつくゝりつ、人目、思はぬから、親のしつても只無駄にするな、せぬといつて仕立てたのに、戀はさすがに綻ひ易き習であるから、誰かゞ耳に聞き傳へて、善からぬ浮き世の人の口にかげられ、あはれや引裂かれてしまつた。かうして文の昔信も、言傳も、誰れ一人橋渡しするものないまゝに、中絶してしまつて、逢はぬこと久しくして、何時といつて、しみ／＼と相逢ふた夜半もないことである。果敢なきものは女の身で、親の詞に従つて、思はぬ人の妻にせられて、辛や戀しやと忍び泣きをし、涙をしく／＼と流して、をり／＼にこぼすのである。實に道理なるかな。とてもうか／＼とながらへ果つる身ではなく、餘裕のある身でもない。運の無いことには、成熱しないが、人を恨まう道理もない。思ふた事も、いふた事も今は徒らに齟齬して、若くして縁を結んで、まだ此世の契りは浅いけれども、

來世では長い／＼糸を繰返し／＼より合せ、もつれ合つて、六道の辻に待針をして、のろくともいつまでも待つてとであらう。」

事「ア、跡も結ばぬ糸筋の、一筋先へ抜けんや。一人残りてまだ／＼と、誰を相手に裾合せ」萬「針道違ひ着憎しと、手づゝの浮名は取るまいとよ。」事「さては頼もしなまなかに、まだ着替なき此生は、五尺に足らぬ襟落し、狭き浮世は何かせん。」萬「戀にさはりのせき縫の、積る思ひをかたあけて、同じ刀に裁違へ、一ツ枕に伏縫して、三途の川の脊筋にて、結止ましよ縫止ましよ」止めてとまらぬ涙の糸、裾を引合ひ棲を引き、二人が歎き諸共に、疊み込めつゝ泣沈む、世に便りなき戀路なり。

【註】 ○跡も結ばぬ糸筋の—尻も結ばぬ糸といふ諺をとりたもので、末の始末もつけずの意。○一筋先へぬける—おまんが先に死ぬ意をほのめかすので、末の始末もつけず、一筋先にぬけて死ぬとはいつたのだ。○まだ／＼と—まだ／＼と人をまつて。○裾合せ—辻棲を合はす、裾を正しく合せること、即ち二人が棲を合せ夫婦として生きる意に云ひかく。○針道違ひ—針のはこびの悪ひのと、契約の違つたにかく、着憎いといはれるやうな、即ち契ひを違へて悪いといはれるやうな。○手づゝ—下手な、不器用な、無調法な。○とよ—とよはよの意、即ちとるまいぞよ。○さては—以下は、有朋堂本にあるが如き、おまんの心にあらずして、事介と、お萬二人の心に分けて見らるべきだ。○また着かへなき此生—此人生には、再び來ることなき即ち二度生き返ること出來ぬ意を、着替の衣がないといつた。○襟落し—襟を切り落す即ち襟を切つてとることにて、襟の長さは大體四尺八寸位なる故五尺にたらぬといつた。五尺にたらぬ襟を切つてとるやうなもので、短くて狭いといつて浮世につゞけた。此尺は皆メートル法施行前のこととて、鯨尺の標準によつたものだ。○せき縫—戀路に横はる關を、脊縫にかけていつた。戀にさはり戀を妨げる關所の意。○かたあけて—肩明、襟肩明又は襟明のこと。之を片明け即ち片はしをあけて、積る色々な思ひの片端をあける意にかく。同じ刀で差しちがへるのも、思ひの片はしをあけることになるのだ。○裁ちかへ—刺ちかへといふべきを、裁縫にかけて、わざと裁ちかへといつた。○伏縫—針を着物の面に出さぬやうにして縫ひ合ふこと、隠し針にぬふこ



と。伏すにかく。○背筋一春の筋をたよりに縫ひとめるといつて、三途川の瀬筋に云ひかけた。即ち死んで三途の川瀬にて止まらうの意。○疊み込めつゝ二人の敷を一緒に一つにたゝみ込んで。

【譯】事介「後の始末もせぬまゝで、自分一人丈け先へ抜けて死なうとや。そして私があとに一人残つて、まだまだと待ちながら、誰を相手に裾合せをし、一緒に暮さうことぞ。」おまん「約束違へては生きにくいといはれるやうな、下手な無調法な浮名は取るまいぞよ。」事介「それは頼もしいことぢや。なまじまたと再び來ることなき此一生は、五尺に足らず切つてとる襟布のやうな、短い幅の狭き浮世であるから、その憂い世を何にせう。」お萬「戀路の妨げである關所の、積る思の片端をあけて、同じ刀にて刺違へて、一つの枕に伏せて、三途の川瀬の筋で、流れゆく身を結びとめましよ、縫ひとめましよ」とはいふものゝ、とめてとまらぬは涙にて、その涙の糸で裾を引き會ひ棲を引き合ふて、二人の敷きを一緒にたゝみ込んで泣き沈むおまん事介の戀路は、世にも便りなきものであつた。

時しも表に念佛も、鉦の響さも哀れげに、細々と女の聲、「これは上方より諸國を巡る修行の尼 草鞋の價頼みます」と、聲付賤しからざりけり。新兵衛起上り、「ヤア事介來たか。あれ一錢取らせ」といひければ、萬「なふ父様、母様のお位牌に念佛一言手向の爲、あの修行者を持佛堂へ呼入れても大事ない事か」父「ヲ、氣が付いた奇特々々、殊に比丘尼の事といひ、雷奴が戻つても大事ない事。これ事介呼入れよ」事「はい」といふより表に出で、見れば京の屋敷にて、假の契のお蘭なり。互にはつと驚く顔、事介ちやつと我身を蔭に、頭を振つて口の内、「何も言ふまひ言ふまひぞ。ゑへん」と知らずれば、心得肯く目元にも、浮ぶ涙ぞ至極なる。

【註】○表一戶外。○一錢一文即ち青銅錢一個のこと。この銅錢千文を一貫文といひ、丁度金一分にあたり、四貫文即ち四千文

が金一兩にあたる。又一貫文は銀では十三匁にあたり、銀六十匁が金一兩と算した。○大事ない事か——宜しいか。○氣が付いた——よい處へ氣がついた。○雷——ハケ間敷怒鳴りたてる妻をさす。○假の契——かりそめに契を結んだことのある。○我身を蔭に——身を物蔭にかくし。○至極——尤も至極。

【譯】折から戶外に、念佛もあはれに鉦の音も悲しげにきこえて、女の細い聲がする。「これは上方から出て、諸國を巡禮修業する尼でござります。草鞋錢を惠んで下され、頼みます」といふ聲も賤しからぬ様子である。轉寢をしてゐた新兵衛は起き上つて、「ヤア事介來たか、あれ、一文尼にくれてやれよ」といへば、おまんは「なう父様、母様のお位牌に對して念佛を一言手向けて貰ふ爲に、あの修行者を佛間へ呼入れてもよいか。」新兵衛は「おゝよい處へ氣がついた、奇特なことぢや。ことに修業者も比丘尼のことではあるし、雷みたいな女が戻つても、心配はない事だ。これ事介呼入れよ。」事介は「はい」といふより早く戶外に出で、見ると京の屋敷で、假初の契を結んだ事のお蘭である。互に驚いてハツとするが、事介はちやつと、我が身を物蔭に隠し、かぶりを振つて口の内で、「自分も何もいふまい、お前もいふまいぞ。ゑへん」と知らずれば、ちやんと心得て、うなづく目元にも涙が浮ぶのは尤も至極である。

事「これ内方から志がしたいとある。此方へ」と案内す。蘭「ハア御免なりませ」と、笠を脱いで腰懸くる。おまん茶を汲みもてなして、「若いお人の上方から、筑紫の果まで修行して、發心の因縁は如何した事か知らねども、今其身には苦もなふて羨しふ御座んす。ほんに此世の佛じゃ」といひければ、蘭「あのおしやんす事はいの。苦は色替ゆる松風、通り風の吹く様に、身にも染まぬ一時戀、物言ふ間もない仇し男と、假初臥の轉寢、後も前もない戀なれど、お前様も姫御前、女の果敢い心か



ら、二人に枕交はすまいと、思初めたが善知識。髪容つくつてさへ高の知れたわたしが嫖織、衣を墨に頭を圓め、戀慕はれふと思はねば、いつそ氣樂で、何れ佛では御座んする。されば佛の石上樹下とて、石の上、樹の下蔭の宿も厭ひ給はねば、岩が根枕氣散じながら、寢覺々々に如何やらすれば、かの仇臥の因果めが、煩惱を起させます」と、餘所に語りて事介を、尻目に睨むぞ氣味悪き。

【註】○内方―此家で。○志がしたい―寸志が差出した。○御免なりませ―御免なさりませの意。○發心の因縁―佛門に入る動機の意。○めのおしやんす事はいの一―まあ何をおつしやるの意。○苦は色かゆる―藤井博士引用の「波の音きかじと入りし山の奥に苦け色かへて松風ぞ吹」の歌にも見る如く、苦は何處にもあり、只其形が異るといふ意。○身にも染まぬ一時戀―一時のはかなき戀にて、身に染みこんでもぬ。○仇し男―はかない男。○後も前もない戀―前後に何事もなく、只假そめに契つたのみなるをいふ。○お前様も姫御前―お前も女なれば、私の心が分るだるが。○思ひそめたが善知識―思ひそめた心を善知識とし、悟道に入る導きとしての意。○衣を墨に―此語の前に「その上に」と入れて見る。○何れ佛…何れ佛になる身の、佛のやうな生き方をしてゐる。○佛の石上樹下…かうして釋尊が菩提樹の下に、石上に坐して、難行苦行をつみ修行をしたと同じやうに、自分も石上や樹の下蔭の宿もいとひもせねば、岩が根を枕にする身であるから…。佛といつたから自分に對しても「給はねば」といつたのだ。○氣散しながら―岩が根を枕とした生活は氣樂ながらの意。○仇臥の因果奴―いたづらに結んだ假の契の夢が。

【譯】事介「これ此内で、寸志が差上げたいといふことぢや。此方へおはいりなされ」といつて案内する。お蘭は即ち「はあ、では御免下されませ」といつて笠を脱いで腰をかける。おまんは茶をくんでもてなしをして、「若いお身で、上方の方から筑紫の果まで、修業においでなされて、どうした因縁、動機で佛門に入られたかは知りませぬが、今のお身には苦もおありなさらぬ筈であるからには、羨ましくござんす。ほんに此世からの佛とも申してもよいお身分ぢや」といへば、お蘭「まあ何をおつしやいます。苦は色かへて松風ぞ吹くといふ歌の如く、苦は何處に

もあり、只其形が異なるのみで、私にだつて苦みも惱みもあります。私こそは通り風がすつと吹いて行つて、すぐと消してしまふやうに、ほんの一時の戀をしたのみで、しみじみと語り合ふ間もなく、はかない男と、かりそめにうたゝねの枕を交はしたばかり、その前に何事もなければ、後に何の續きもないといふ、果敢ない戀をしたのではあつたが、―お前様も女の身であるからには、さうした戀をしても、いたづらに忘れ去るべきであるかどうか、大方思ひやり、出来ることであらうが、―それでも女心のはかなさから、仇し男の心を思ひやつて操を守り、二人の男とは枕を交すやうなことをすまいと、思ひそめた心を善知識とし導びきとして、どうせ髪容をととのへ、姿をつくつたとて、たかの知れた私の器量であるからには、思ひ切つて佛門に入つて、墨染の衣をまとひ頭をそつて、このやうに尼になりましたが、何も戀ひ慕はれうと思はぬ身となつては、いつそ氣樂で、何れは佛になる身の、佛のやうな暮しをしてをります。されば佛の石上樹下といつて、釋尊は石上に坐し、菩提樹下に難行苦行をつまされたが、それと同じく、自分も石上樹下の宿りをいとひもせず、岩の根を枕として修行をつむ氣樂な身ながら寢ざめくの折々に、どうかすると、あの昔のあだし男とのかりそめのちぎりを結んだ因果がめぐつて、心をなやまし思ひを苦めます」と相手の事介を目の前にしながら、餘所ごとについて、尻目ににらむので、事介は氣味の悪い思ふすることであつた。

事介も迷惑、エ、此處な佛殿、問はず語りせぬものぢや。近頃佛とも覺えぬ人じや」といやがれども、新兵衛氣も付かず、菩提の縁は様々、殊勝にこそ存ずれ。今日は我等が先妻の忌日。あの中二階の持佛に薰譽蓮清と申す位牌、あれにて念佛御回向頼みます。蘭「それならあれへ通りましょ」父「いざあれへお通り」と、二階へ上れば新兵衛、事介頼む、何ぞ一種で非時をせい。さらばお布施を包まふ」と、奥の間にこそ入りにけれ。



【註】 ○問はず語り……それからそれと、こちらでは問ひもせぬ男のことまでいふからいつたのだ。○佛とも覺えぬ佛として尊むべき方とも思はれぬ。○菩提の縁—佛門に入る因縁、前の發心の因縁と同じ。○中二階—普通の二階よりや、低き構造「一心中萬年草」にも此構造あり。○持佛—佛壇。○念佛御回向—念佛を唱へ讀經して、死者の冥福を祈ること。○非時—佛教にて午後の食事のことを云ひ、午前の齋といふ。○布施—僧や尼に與へるものをいふ。

【譯】 事介も迷惑さうに「え、この佛様、餘計な問はず語りなどはせぬものぢや。佛ぢやといはれても、近頃佛とも思はれぬ人ぢや」といやがつていふが、父新兵衛はそれとは氣付かず「佛門に入る因縁は人さまぐで、お身の發心も殊勝なことに思ひます。それにつけても今日は私しの先妻の命日である。あの中二階の佛壇にある薰譽蓮清といふ位牌がその妻のことである。あちらで念佛御回向をして下され、頼みます。」お蘭ではあちらへまゐりませう。「新兵衛」さあ、あれへお通りなされ」といふにつれて、お蘭が二階へ上ると、新兵衛は「では事介お前にたのむ。何か一色こしらへて御馳走してくれ。それでは私はお布施でも包まう」といつて奥の間に入つた。

二階を見上げて事介、「エ、打見には殊勝らしく、咄を聞けば淫奔者。信心が覺めたれど、非時をせよとの言ひ付け、豆腐でも取つて來ふ」と、起たんとすればおらん取付き「コレ待たつしやれ。あの尼は、内々話に言はしやんした、小まん様の腰元お蘭であらふが、何故黙つて隠さんす。但わたしがあのお蘭を取つて噛ふと言ひましたか。どういふ心で御座んす」と、問詰られて顔を赤め、事「ム、今の尼の話が蘭が噂に似たゆゑに、其處を以つての悪推か。イヤ是はいかひおはまり。かのお蘭があつたの尼ほど見えれば、薩摩へ戻らず京に居る。床から出た顔見せたかつた。頭は赤熊、猫背中、鳩胸に顔は猿、まぢつとで鶴になる。思出すもなふ嫌や。暗がりの商ひはせうもので御座らぬ」と、紛らかし出れば、

【註】 ○打見には—見たところでは。○淫奔者—尼ながら煩悶が起るといつたをいふのだ。○信心が覺めたれど—彼女に従つて、佛に對する信心をもつ氣はなくなつたが。○内々話に……これまでひそかに物語つてゐた。○取つてかまふ—お蘭だと、お前が白狀したとすると、私が取つて食はうとでも云つたかの意。○惡推—悪く推量する、邪推する。○おはまり—はまるは、穴にはまる、はまり込むにて、思ひ込むこと。それから無鐵砲、向ふ見ず、まぢかふ意。○赤熊—或は、支那に産する牛の一種の尾を赤くそめたものといひ、又は白熊又、はぐまの毛を赤くそめたものといふ。此處は赤い色の髪毛を罵つた意にとるべきだ。○思ひ出すもなふいや—思ひ出すも何もない、そんなことどころではなく、嫌なことぢやの意。○暗がりの商—品をよく見もせず、暗いところで、取引などするものでない。商ひとは、こゝではお蘭を自由にしたことをさしてゐるのだ。○紛らかし出れば—云ひまぎらして出ようとする。

【譯】 二階の方を見上げながら、事介は「え、一寸、たところ殊勝らしく見えるが、話を聞いて見ると淫奔者ぢや。あんなものについて佛信心の心をもつ感など覺め果てたが、御馳走せよとの言ひ付けとあつては、已むを得ぬ。豆腐でも買つて來う」といつて立たうとすると、おまんは事介にとりついて「これお待ちなされ、あの尼さんは、お前が内々に話してをられた、小まん様の腰元のお蘭であらうが、何故にそれを、つて隠しておいでなさるのぢや。但し私があのお蘭を取つて食はうとでも云ひましたか、お蘭はどういふ心でおいでなのぢや」と問ひ詰められて、事介は顔を赤らめ「む、今尼の話した話が、お蘭に關する噂に似てゐる故に、お前はそれでの邪推をするのか、いやこれは大きな見當ちがいの思ひ込みぢや。いつか話したお蘭が、あの尼ほどに見える女ならば、私はかうして薩摩へ歸らずと京に居た筈だ。本當にあの時、床から出たお蘭のあさましい顔といつたら、全く見せたかつた。頭はしやくま、背中といへば猫背、胸は鳩胸で、顔は全く猿のやう、も少しで鶴になるところぢや。思出すどころではない、いやなことぢや。品物見すの無鐵砲な商などせうものではない」といつて云ひまぎらして出ようとする。

萬「いや、言はしやんすな。それなら何故門口で、咳拂して背合ひ、何もいふまい」とは



何んの事で御座んした。命をかけ身を捨て、親に見返る男なれば、鼻息はないきも氣を付ける。低ふ言ふたら聞くまいと思はしやんすが不覺の至り。過にし事を輪廻りんね深く言ふ氣はさら／＼無いものを、問はれても未だ隠かくさしやんす。左程に隔て心を置き、未來までとは能ふ言はれた。お蘭が來たも皆あいけん。積られた、欺だまされた。逢初あひそめし時の誓文せいもんを、金輪際こりんざいと思ひ詰め、男を大事にかけるゆゑ、今の母に逆さかひて、常々疎うとみ憎にくまるゝ。袈裟あはせまで憎い世の誓ちか、今日は年忌の佛まで、憎にくまするは我戀ゆゑ、多くの罪を作りしも、徒らに成果なりてた。死んだ跡あとではあのお蘭と、心安ふ添はしやんせ。わしや死にます」と、事介が脇差抜いて我胸に、突通つとさんとする處を、

【註】 ○親に見かへる男―母親にも見かへる男即ち、事介をさす。○不覺―不覺悟。低聲ひせいでいつたら、私にきこえまいと思ふのが、お前の根本の考ちがひ。○輪廻りんね深く―執念しつねん深くの意。○あひけん―合拳。馴れ合ひ、ぐるになる意。○積られた―安く見積られた、馬鹿にされた。○金輪際―佛語にて、物のつまり、底の底、の意にて、大地の底をさし、どこまでもまぢがいないと；○袈裟あはせまで―坊主憎けりや袈裟あはせまでも憎いといふ諺のやうに、私を憎むあまりに、今日は年忌の母即ち死んだ佛までも、繼母をして憎ましめるのは、皆我戀ゆゑで。

【譯】 お萬は「いや／＼、出鱈目なことを仰有るな。それでは何故先程門口で、咳拂をして、互にうなづき合うて、何もいふな／＼と仰有つたのは何の事でござんした。命をかけ身をすて、母親にまで見かへる程の大事な男でお前があるからには、言葉は勿論のこと、お前の鼻息にだとして私は氣をつけてをる。低い聲で話したら、私が聞くまいと思はしやるからが、そも／＼の考が間違つてゐる。過ぎてしまつたことを、執念深くいふ氣は更にないのを、何故あつさり打あけはなさらぬのぢや。いや問はれてもまだお隠しなさるなんて、あきれたものぢや。それほどにまでも中を隔てる心をもつてゐて、未來までも添ひ遂げようなどと、能くもいはれたものぢや。お蘭がやつて來

たのも、皆馴れ合ひで、ぐるになつてのことにちがひない。私は馬鹿にされた、だまされたのぢや。初めて逢つた時の誓を、底の底まで間違ないものと思ひつめて、お前を大事にするので、自然と今の繼母には逆さかひもして、いつもうとすれ憎にくまれもするのぢや。坊主憎けりや袈裟あはせまで憎いの誓のやうに、私が憎いからとて、今日命日である佛までも、繼母に憎にくますのは、つまりが我が戀ゆゑのこと、かうしてこれまで澤山の罪をつくつてまで、お前のことを思ふてゐたに、それも皆無駄事になつてしまつた。私が死んだ後では、あのお蘭と心安くお添ひ遂げなされ。私は死にます」といつて、事介の脇差を抜いて、自分の胸につき立てんとする處を――

事「これは短氣」と飛懸り、柄つかに取付き、「これ／＼今日の日天御照覽、少しも隔つる所存なし。思ひがけなき處へ來て、我も當惑たうわくしたる上、氣にかけさせて無益むいやくと思ひ、先づそでないといふた分ぶん。隠し遂とげる心でなし。後前あとまへの聞分ききわけなふ、氣が短い」ともぎ取れば、萬「ヲ、氣が短かふて鈍どな事、見ながら生きては居られぬ」と、又取付いつもぎ取りつ、競合せりあふ中に母親は、表おもてまで歸りしが、内の騒さわぎに心をつけ、暖簾のれんの蔭かげより覗のぞくと、更に白刃しろはを奪む合あふて、やう／＼男もぎたぐり、手許に置かじと力に任せ、投なげる拔身ひきみが一はづみ、二階の比丘尼びくにが小腕こでしに、鉦かねはづれにずつばと立つ。狙ねらふてはよも當るまじ、障子しょうじにさつと生血なりち引いて、朱あかに染それば兩人の、口説くはなも傍わきへ興覺きやうかくめて、「これは／＼」と騒さわぎしが、されども淺瘡あせ甲斐あひなくしく、二階の梯子かみと踏轟ふみとどろかし、

【註】 ○今日の日天……今日日輪も御照覽あれ。○氣にかけさせて……氣にさせたところで、何の益にもたぬと思ひ。○そでないといふた分―さうではない、お蘭ではないといふたまでのこと。○後前の聞分なふ―お前はあとさきを聞き分けることなくして、そのやうなことをするのは氣が短かいといふものぢや。○鈍なこと―鈍はぬけ作、愚どん、馬鹿な意。氣が短かくて愚どん



なこと、おあひにくなことぢやの意。○見ながら……けれども今日の前にかくのごときことを見ては。○せり合ふ、競争し合つて。○更に白刃をばひ合ふて一更に知らず、白刃をとり合ふて。白刃は不知にかく。○鈍はづれに一刀のきつききが目的外れに、的を外れて。樋口氏説。藤井博士の腕の外れにといふのは殆んど意味をなさぬ。

【譯】 事介は「これはまた短氣なことぢや」といつて、とひかゝつて、脇差の柄にとりついて「これ／＼今日のお天道も御照覽ある如く、お前を少しも隔てる心はない、思ひかけぬ處へお蘭が来て、自分も當惑した上に、お前に氣にさせたところで何の益にも立たぬことと思つて、まづお蘭ではないといつたまでのことで、決してどこまでも隠し通す氣ではない。それなのに、お前は後前のことを聞きわけ納得することもなく、そのやうなことをすると、氣の短いことぢや」といつて脇差をもぎとると、お蘭は「お、氣が短かくておあいにくな事ぢや。それにしても目のあたりにこのやうなことを見るからには生きてはをれぬ」といつて、又とりつい、脇差をもぎとり、相方が競争し合つてる最中に、母親は表まで歸つたが、内に起つてる騒動に氣がついて、暖簾の蔭からのぞいた。二人はそれとも更に知らず、白刃を奪ひ合ふて、やつとの事で事介もぎたぐつて、手許にそれをおくまいと、力にまかせて投げたところが、其拔身が一はづみで、二階にゐる比丘尼お蘭の小腕に、ねらひもせぬに、的を外れてすばりと立つた。狙つて立てようとよもや立つことではあるまい。はづみでさつと飛んだ生血が障子にちりかゝつて、赤くそまると、それを見た二人の口論も傍へとんで姿をかくし、二人は興をさまして驚き、「これは／＼」と騒いだが、疵が浅いので、甲斐がひしくお蘭は、二階の梯子を踏みとどろかしつゝ下りて来て――

蘭「これ源五兵衛殿、おまんどの、さすがは田舎夷よなふ。男に執心引かされて、尋ね來たとの悪推か。執心残る程ならば、可惜姿を憐たらしう、木の端と窠さいでも、人は情の心の花、花の匂ひに引かれては、深山谷の奥までも、離れ難なふ慕ひ來る。戀路とても其如く、此胸一ツすゑたらば、源五兵衛殿で御座らうが、業平殿で御座らうが、戀の絆に繋ぎ留め、物の見事に添ふて見しよ。されども

國のおまんゆゑ、かうなつたとの物語。我身の事は思切り、そなたに早ふ逢せたく、路銀まで取しつらひ、其上にも其中は、何とか成りしと氣懸りにて、逆も捨てたる此身の果、修行がてらに餘所ながら、戀には味方の欲しいもの、役には立たずと力にもやと、八重の汐路を越渡る、都女の戀の仕様、見習ふて手本にしや。それに刃物を投打して、欺し討に殺そうや。コレそなたの手では得死ぬまい。サア源五兵衛殿、尋常にお手に懸れば身の本望」と、脇差抜いて手に持たせ、泣喚いてむさぶり付く。

【註】 ○田舎夷よなふ―お前さん達は田舎にすんでゐるからには、さすが田舎者だ、わかりのわるい者だなど見下げて夷といつたのだ。○木の端……「法師ばかり羨しからぬものはあらじ、人には木の端のやうに思はるゝよと……」とつれ／＼草にあり。無用のものとなつた意に用ふ。○人は情の心の花―心の花は情、即ち人には情といふものが心の花であるがの意。○力にもやと―力にもやなると、即ち力にでもなるかも知れぬと思ひ。○八重の汐路―遠い／＼海路の意。○だまし打に殺さうや―殺さうとや、殺さうといふことは何ぞや。やは疑問に用ひたもの。○むさぶりつく―食りつくの轉化にて、有朋堂本の如く、武者ぶりつくではない。

【譯】 お蘭は「これ源五兵衛殿、おまんどの、さすがお前達は、物の分らぬ田舎者ぢやのう。男に執心があり、それに引かされて尋ね來たとの邪推をなさるのか。執心が残つてゐる程なら、あたら若い盛りの姿を、酷たらしく尼となりて、木の端のやうな無用の者としなくても、人間には情といふものが、心の花であるからには、その心の花である情にひかれると、深山の谷の奥までも、離れがたい心のまゝ、自ら慕ひ來るものである。戀路とてもその通りで、此胸一つすゑてかゝれば、例へ源五兵衛殿でも、乃至は業平殿でも、戀の絆で繋ぎとめて、立派にわが手に入れて、見事に添ひとげて見せませう。けれど、國のおまんゆゑに、自分の今の身がかうなつたのだとの、源五兵衛殿の打明け話をきいては、氣の毒になつて、自分の事は思ひ切つて、そなたに早く逢せたくて、旅の費用までも取りつくろつて渡し、その上其後の二人の仲はどうなつたやらと、氣に懸つて、何れ捨ててしまつた此身の、果は



どうならうとまよ、修業がたらに餘所ながら見届けたく、それに、戀には兎角味方の欲しいものであるからには、役には立つまいが、入用とあらば力にもなりでもするならと思つて、遠い／＼海路を越え渡つて來た都女の、貴い戀の仕様を手本にして見習はれたらどうぢや。それなのに双物を投うつて、欺しうちに人を殺さうといふは何としたのぢや。これおまんどの、そなたの手にかゝつたのでは、私は殺されても死に切れぬ、さあ源五兵衛殿、尋常にお手に懸つて死ねば本望ぢや、殺して下され」といつて、脇差をぬいて手にもたせ、泣きわめいて烈しく食るやうにとりつくのであつた。

おまん引退け、「これ姦しい。しちくどい。都の、上方の、聞ともない置いてたも。西國の、筑紫のとて、情の道に變りはない。そなたの様に言ふならば、西國はまだしも、唐には戀はあるまいか。これかう竝んだ妹背の中、そなたの様な女房が、千人萬人妨なし、杆を入れても離れはせぬ。何が邪魔で殺さうぞ。怪我にあたるは其身の不運。言れぬ處のお見舞がら、都衆の戀には手傳ひが入るさうな。薩摩の戀に味方はいらぬ。早ふ出て往ね。腰が起たずば綱つけて、引ずり出すが失せまいか」蘭「いや張合になつたれば、かう居た處を動きはせぬ」萬「ヲ、動かすとも動かさう」と競合ひ捻合ひ立騒ぐ。新兵衛駆出で、「四邊隣もあるぞかし。兩方黙れ静まれ」と、制すれども聞入れず。母親始終を聞濟し、水汲あふご押取延べ、競合ふ中を容赦もなく、「静まれ／＼片端に、撲すへてくれるぞ」と、叩き廻りし勢は、只山姥の山廻り、舞損ふたる如くなり。

【註】〇しちくどい——くどい、くどく／＼とだらしなきをいふ。しちは、しち面倒な、しちやかましい、などの如く、關西にて、力を強める意味で、時々行はれる一種の接頭辭。〇都の上方の——今日の、やれ都の、やれ、上方のといつて、といふ云ひ方

と同じ。〇西國の筑紫のとて——西國ぢややとて筑紫ぢやとて。〇唐には戀はあるまいか——唐にまでもゆけば、戀と呼ぶ價のある戀はないだらうか、どうしてそんなことがあらうの意。〇妨なし——千人萬人が來て妨を爲し邪魔をして。〇何か邪魔で殺さうぞ——二人は何としたとて離れはせぬからには、お前さんが、何で邪魔になるものか、従つてどうし——邪魔で殺さうなどとするものか。〇いはれぬ所の——いらぬ所の、無用の。〇お見舞がら——お見舞ごと、入りもせぬ見舞柄ぢや。〇うせまいか——行くまいか、行かぬか。出て行けといふことを俗語では出てうせろといつたものだ。〇張合に……意地を張合ふことになつては、かうしか、尻をすえた處を動かぬ。〇おふこ——關西では天秤棒のことをおふこといふ、物を荷ふ棒のこと。〇山姥の山廻り——山姥即ち山の鬼女が、山廻りをして、しそこなつたやうである。これは都の女が、山中に宿り、山姥の山廻りする様を見る風につた諺曲「山姥」から引いたので、此諺曲の文句の作りかへたものは、本書第三卷「長町女腹切」の「お花半十道行」の始に乗つてゐる。

【譯】おまんは女を引のけて「これ姦しい、くどく／＼しい。やれ都の、やれ上方のと、聞きたくもない、おいておくれ。西國だの筑紫だのとて、情の道に變りはあるはせぬ。そなたのやうにいふなら、西國はまだしもだが、唐には戀といふ戀はなからうか。よもそんな馬鹿氣たことはあるまい。これ、かう源五兵衛殿と私と二人で並んだ妹背の中を、そなたのやうな女が、千人万人やつて來て邪魔を爲したとて、挺を入れて引離さうとしたとて離れはせぬ。だからお前は何の邪魔にもなりはせぬのだ。何の邪魔になつて殺さうなどとするものか。双物のとんだのは、只怪我であつたのぢや。怪我にあたるのはその身の不運といふのもぢや。都衆の戀には手傳ひがあるさうだが、薩摩人の戀には味方はいらぬ、いりもせぬお見舞柄のお前さん、早く出て行きや。腰が立た とあらば、綱をつけて引ずり出すが、それでも出て行かぬか。」蘭「いや、かう意地の張り合になつては、かうして据つたところを動きはせぬ」おまん「おゝ動かんでも動かして見せう」と競合ひ、ねぢ合つて騒ぐのであつた。ところへ父の新兵衛かけ出して、「近所隣りもある。兩方とも黙れしづまれ」といつて制するが、なか／＼聞き入れない。母親は話の始終をきき、終り、水を汲む爲の荷ひ棒を取り出して、競合ひ合つてゐる間を用捨もなく、たゞきまはつて「静まれ／＼、静まれぬとなぐり、えるぞ」といつた勢は、山姥が山廻りをして、それをしそこなつた様であつた。



銅鑼の様なる聲荒らげ、「エ、親父殿が生温い。縛し上げて置きもせず、あいつ等が口説の揚屋の亭主になる氣か。やい事介、おのれはお尋ねの源五兵衛、大事の娘を唆し、塞りの此國へ、前髪落して態を變え、又あの子に悪氣を付け、人の目を暗ますは、人買よりも野太い奴。只さへお國は人改め、をのれゆゑに此内は、月に一度の判をする。見知らぬとて是非もない。手前に不斷飼置いて、外から上へ聞えては、同罪といふ一筆の身拔がならふと思ふか。御吟味所へ引渡し、牢へ入るゝは易けれど、おまんが心底量つて、腹を貸さぬ母ゆゑに、世間内證、義理一ツで沙汰なしに往なすぞ。尼めも共に出て失ふ」と、常わんざんとは事變り、道理至極に返答なく、おまん涙に正體なく、源五は手を突き頭を下げ、「元に落度ある上に、重ねくの過り、如何様になるとも御恨みとは存ぜず。只御夫婦、娘御の御難儀のなきやうに兎も角も御計ひ」と、差俯向て居たりけり。

【註】 ○口説の揚屋……口説をあげるを揚屋にかく。○前髪落し―若衆が大人姿になつたのだ。○塞かりの此國―源五兵衛は薩摩でお尋ね者になつてゐるをいふのだ。即ち八方塞がりの國の意。○野太い奴―圖太い奴。○月に一度の判―源五兵衛はをらぬ、行衛を知らぬといふ證明の判をするのである。○見知らぬとて是非もない―汝が事介であるといふからには、源五であること見知らぬとて、已むを得ないことだがの意。樋口氏説。○手前に不斷……琉球屋の家に平生から飼つておいて。○外から上へ……此家の外部からお前 源五であることがお上へ知れては。○一筆の身拔……隠したものが、隠れたものと同罪よりと、決定狀を一筆に書かれたとて、その筆に對して、身を抜けて、罪を逃れることは出来ぬ。それが出来ると思ふかの意。○義理一ツで……繼母であるといふ義理一點から、何事なく、だまつて逃がすから逃げる。○常わんざん……わんざんは和議。さかしらの意。(節用集)さかしらとは物知りであり、わきまへた風に見せかけ、さうした振りをすることにて、此處はいつものさかしらとはちがふ意。

【譯】 銅鑼のやうな聲をあらゝげて母親は「お、親父殿が生温い。連中を縛りあげておきもしないで、あいつらが口説をあげる揚屋の亭主にでもなる氣なのか。何といふたわけた事ぢや。やい事介、汝はお尋ね者の源五兵衛、それが大事のわが娘を唆かし、八方塞がりの此薩摩の國へ、前髪を落して大人の様子に風態をかへ、またおまんに悪い心をつけたりして、人目をくらますといふのは、悪むべき人買ひよりも圖太い奴ぢや。たゞでさへお國は人を改め詮議のあるところへ、汝故に此家は月々一度は、汝がをらぬといふ證明の判をしなければならぬ。處で汝が事介だといへば源五であることを見知らぬといつて、已むを得ぬことだが、此琉球屋に、不斷から汝を飼つておいて、家の外からお上へ、汝が源五である事が聽へては、吾々も汝と同罪といふ一筆の罪狀決定の書きものから逃れ、罪を逃れられると思ふか。吟味のお役所へ引渡し、汝を牢へ入れてしまふのはやさしいことぢやが、おまんの心持を推量して、私は生みの親でない母であるからには、世間へ内證で、義理一片で、上へも沙汰をせず逃がしてやるから、いんでしまへ。尼奴も一緒に此家から出て行け」と、いふことが日頃のさかしら事とはちがつて、道理至極であるので、返答もなく、おまんも性体なく泣くのであつたが、やがて源五兵衛は手をつき頭を下げて、「前に一旦落度のある上に、重ねくの過失をし、此上は如何なるとも恨とは思ひませぬ。たゞ御夫婦及び娘御の御難儀のないやうに、兎も角もお計らひ下され」と差しうつむいてゐた。

情ある新兵衛も、私ならねば詮方なく、「疾にも斯と打明けて仰せられれば、何とぞ思案も致さうもの。近頃残念氣の毒」と、いへばおまん絶付き、「とてもお慈悲の上からは、わたくしも源五様、一所にやつて下さんせ。拜みます」と泣叫ぶ。母は彌腹を立て、「おのれが一所に出て往んで、頼みを取つた聲殿へ此方とは死んで見せうか。それ親父殿、奥へ連れて往つしやれ。事が延れば尾緒がつく。男共は居らぬか。此奴が宿は坊の津にあるげな。家主へ渡して來い」下男、心得ました」と引立つる。おま



んはわつと聲を上げ、なふ源五様、お蘭と連立ち御座んすの。ア、羨ましい。腹の立つ」と、恨み歎けば源五兵衛、「行き度ふては往させぬ。今此庭でさつぱりと、死にたいわい」のとばかりにて、どふと伏して泣沈む。手荒き薩摩の無意氣もの、「死にたくば我宿で、撲殺してくれふぞ。コリヤこれを見よ」と、振上げて振廻したる坊の津や、棒づくめにて三重送りける。

【註】情ある—源五兵衛に對して愛情をもつた意。○私ならねば—道理に對して私情をはさむことが出来ぬので。○仰せられれば—これは源五兵衛が武士であるといふことから、町人から敬語で呼ばせたのだ。○出て往んで—出て行つて。○頼をとつた—結納を貰つた。○此方と—こちら、私の意を、關西で、こちと、こちとらといふ。○死んで見せうか—生きてゐるわけにゆかぬから、云ひわけに死んで義理をたて、見せうか。○尾鱸がつく—さまん、なつてたりがついてくる、即面倒になるからの意。○男共—下男ども。○ぼうの津—薩摩川邊郡、鹿兒島 西北海岸。○往きたふては往させぬ—行きたたくて行くのではありませぬ。○薩摩—薩摩男の意に用ひたが、もと／＼獵夫の意にかく。○無意氣もの—意氣でないもの、無法な連中。○棒づくめ—何かいへば棒でなぐるとか棒で押すといふやり方を、棒づくめといひ、坊の津のほうに音を引かけたものである。

【譯】情深い新兵衛も、道理に對して私情をはさむことが出来ぬので、仕方なく源五に對して、「早く斯う／＼と打あけて仰有つて下さつたら、何とか思案もしたであらうものを、近頃残念なことでもあり、氣の毒なことでもある」といへば、おまんは父にすがりつき、「一層お慈悲で、源五兵衛を助けて下さるからには、私も源五様と一緒にやつて下さるせ、拜みます」と泣き叫ぶ、母はいよく腹をたて、「お前が一緒に出て行つてしまつては、結納を取つた聖殿へ對して、どうして云ひわけを立てるのぢや。私は生きてゐるわけには行かぬから義理に死んで見せうか。それ親父殿、おまんをつれて行かつしやれ。事が延びる中には、それからそれと、餘計なとんでもないことが起つて来る。下男どもはをらぬか。此男の宿は棒の津にあるとやら、家主へ渡して來やれ」といへば、男共は「心得ました」といつて引立て、ゆく。おまんはわつと聲をあげ「なう、源五様、お前はお蘭と連れ立つておいでな

るか、羨ましい、腹の立つことぢや」といつて恨みながら歎くと、源五兵衛は「決して行きたくて行くのではありませぬ。成ることなら、今此庭で、奇麗さつぱりと死にたいわいのう」とだけいつて、どうと打伏して泣沈むのである。と手荒い薩摩男の無法なものが來て、「死にたいとあらば、汝の宿で叩き殺してやらう、こりやこれを見よ」と棒をふり上げて振りまはし、棒づくめで坊の津へ送つた。

何時の間に、日の暮るゝとも夜の更くるとも、おまんは譯も正體も、泣續ける嬌鳥、親の棚む背戸門に、人目の網の繁ければ、魂ばかり飛ぶ鳥の、翼折れたる如くにて、屋敷の内を此處處、逃出づる隙間もがなと尋ね廻れど、常々に用心精しき屋造の、風の通もなかりけり。見付けられたらそれまで」と、布織の下機取組みて、庭木の松にもたせかけ、我身ながらも恐ろしき、智慧の梯子を上るにも、盗みする氣の斯くやらん、震ひくもやうくと、枝に取付き、塀の上へは上りしが、廻りは用水底知れず。幅一丈の堀切にて、下るゝに足手のかゝりなく、飛ぶことかたき石垣なり。此上は思案もなし、思切つて飛んで退けふ。水に溺れて死んだらまゝ。千に一つも神佛の、力もあらばと思ひきり、ひらりと飛べば南無三寶、帯を松に引かけて、宙に下つて是も彼の、畏に懼りし野邊の雉子、夫ゆるにこそ苦しみけれ。

【註】○譯けも正體も……譯けも分らず、性體もなく、泣きつゞけて嬌鳥のやうであつた。○親の棚む……親が棚をもつて邪魔をする背戸にも門にも。○人目の網……人目の多いといふこと、網の目の多いとをかけていつたのだ。○魂ばかり飛鳥—魂ばかりは飛んでゆきながら、飛鳥の翼のをれたやうで。○用心精しき—用心が行き届いた。○下機—上機は麻や紬などをり、下機は木綿を織るに用ふるもの。即ち上下は等級をいつたのだ。○取組—組立て。○恐ろしき智慧の梯子—恐ろしい智慧をし



ぼつてこしらへた梯子を上へ、ぶる／＼とふるえながら、盗みをする時の心持も斯うだらうと思はれて……○足手のかゝりー手が、より足が、よりなく。○かたき石垣―飛ぶこと難きほど高き石垣。堅きにかく。○思案もなし―思案の仕様もなし。○南無三寶―しまった、と後につけて見るとよく分る。即ち三寶は佛法僧のことにて、此語は失敗したやうな時にいふ語である。

【譯】 何時の間に日が暮れたとも、夜が更けたとも分らず、おまんは譯もなく、性體もなく、嬌鳥の姿にて泣きつゞけて、母親の邪魔する背戸にも表にも、網の如く人目が多いので、魂ばかりは飛んでゆきながら、飛鳥の翼が折れた様にて、屋根の内をこゝ、かしこと、逃げ出る隙間はないものかと尋ね廻つたが、常々に用心の行き届いた家造のことゝて、風の通ふ路もなかつた。まゝよ見付けられたらそれまで」と思ひ、布を織る下機を仕組んで、庭木の松の木にもたせかけ、我身ながら恐ろしい智慧をしぼつて、こしらへた梯子を上るにつけても、盗をする時の心持はかうであらうと、ぶる／＼とふるひながらやうやくに枝にとりついて、扉の上へはあがつたが、ぐるりは底知れぬ用水の湛へた、幅一丈の堀切りで。おりるには足が、より手が、よりがなく、飛ぶことも難かしい高い石垣である。此上は思案のしやうもなし、思ひ切つて飛んでしまはふ。水に溺れて死んだらまゝよ。千に一つも、神や佛の力もあつて助からばと思つて、思ひ切りひらりと飛ぶと、南無三寶しくじつたり、帯を松の枝に引かけてしまつて、宙ぶらりに下つて、かの良にかゝつた妻戀ふ野邊の雉子の如くにて、夫の爲に苦むのであつた。

斯る處に如何はしけん、お蘭比丘尼は紛れ來て、締たる門口見世格子、覗き歩き、裏へ廻つて此姿、一目見るよりはつと驚き、怖氣立ち念佛申して居たりけり。おまんそれと見るよりも、萬「ヤアをのれは又來たか。思ふ夫に添ふからは言分はあるまいが、我に恨みが遺つて殺さん爲に來たよな。口惜や。これを見よ。内は忍び出たれども、兎角男に縁ないしるし、其方が手にかけていでも、暫しの知死期を松が枝の折るまでの命ぞや。定めて源五様も同道と覺えた。槍はあるまい、竹の先に小刀でも結付

けて、夫の手にかけさせて殺してくれよ。エ、苦しや。身がしまつて息切れして、ア、苦しや」と悶えしは目も當られぬ風情なり。

【註】 ○知死期―生年月の干支によりて、其人の死ぬ時が豫め分ると云ふ説から出た語。○松が枝―知死期をまつて、松の枝の折れるまでちや。待つと松とかく。○身がしまつて……帯の處に身がしまるといふのだ。

【譯】 かうした處へどうしたのであらう。お蘭比丘尼は紛れてやつて來て、締めた門口、見世格子などをのぞきあゝるいて、やがて裏口へまはつて、此姿を一目見るなりはつと驚き、恐ろしくなつて、念佛をとなへてゐた。おまんはそれを見るなり「やおおのれは又來たか、思ふ男に添ふからには、少しも云ひ分はないであらうが、思ふに私に恨が遺つて、私を殺さうために來たのだな。口惜しいことぢや、これを見るがよい。家からは忍び出たが、兎角男に縁のないしるしには、此通りの有様ぢや。そちが手にかけて殺さずとも、知死期をまつて松の枝の折れるまで、暫しの間をまつてをるまでの命ぢや。屹度源五兵衛様も一緒に來たことゝと思ふ。それにしても槍はあるまいから、竹の先に小刀でも結へつけて、それでつきさして、源五兵衛殿の手にかけさせて殺してくれ。ゑゝ苦しい。帯のしまるにつれて身がしまつて、息切れがして苦しい」と悶えるのは目もあてられぬ有様であつた。

蘭「なふ勿體なや。我等に左様な悪心なし。素より源五様に露心遺さぬ上、今日御二人の深い中、そもやそも此尼が、半時も男の側に居ては女の道立たず。三衣の罰も恐しく、此世では源五様に、逢ふまい見まいと鉦を打ち、明日の夜明に上方へ、幸ひ出船の伴もある。夜の中に港までと思立しが、待て暫し、おまんさまは如何してぞ。力にも成らふと申した一言、嘘にはせまじと來た證據、死なせばせまひ。聲高に暇取て見付られては一大事。何としてがな下さん」と、駈廻つて、「これ／＼澤山晒布



が干してある。此端を屹と結付け、こちらは此木で留めて置く。是を手繰れば樂々じや」と、石を重に結付け、投げて如何届くべき。力の程も白布の、松にかゝるぞ仕合せなる。おまん嬉しさ「恥かしゃ。疑ひは御免あれ」と、伏拜みく、布引絞り松の木に、髓と括り付ければ、此方は尼が締付けて、しつくりの木に留めてけり。おまんは片手に布を取り、片手を廻し松の木に、かゝりし帯を引放し、左右に手繰る布引の、瀧津心の胸跳り、目まひ肝消え絶えく、雲の通路天津風、尼がせくまひく、の、聲を力にやうくと、對ふの岸に手繰り着く。

【註】○三衣―僧尼の服即ち袈裟のこと、大衣、七條五條の三種ある。○証を打ち―僧尼が行を始めるしるし。○聲高に暇とつて―高い聲を出して、時間をかけて、暇をつぶして。○力の程も白布の―力の程も知らず投げた白布が。白布は不知にかく。○しつくりの木―しつくりと栗の木にとめた。○手繰る布引の瀧津心の…左右に布を手ぐる心の胸がの意に、布を引いて作つた瀧の如き路である故、布引の瀧津といひ、更にどきめく心を瀧つ心の胸といった。○目まひきも消えたえく―の―目がまひ、肝がつぶれ。たえくのは雲にかゝる。○雲の通路天津風―例の天津風雲の通路の歌を逆にして用ひたので、たえくは雲の通路を、尼がせくなくといふ聲を力にして、ゆらくといふべきを、尼に引かけて調子の上から天津風尼がといったのだ。

【譯】お蘭は「なう勿體や、私には右様な悪心はない。素より源五様に少しも心を遣さぬ上、今日御二人の深い仲を見るにつけても、そもく此尼が半時も源五様の側につては、女の道もたたず、折角身につけた尼の衣に對しても佛罰が恐ろしく、此世ではもう源五様に逢ふまい、顔も見まいと、鐘を打ち佛行を始めて、明日の夜明に上方へ歸らうと思ふ折柄、幸ひ出發の道連れもある。夜の中に港までゆかうと思つたが、まてしばし、おまんさまはどうなされたぞ、力にもならうと最初申した一言もあるのだ、それを嘘にはすまいとてやつて來た證據には、どうしてそなたを死なせはせぬ。聲高にぐづくいつて、暇をつぶして見つけられでもしては一大事ぢや。何としてでも

下ろして進ぜう」といつて駈け廻つて「これく澤山晒布が干してある。此一端を結びつけて此木でとめておく、だから之を手繰れば樂々と下りることが出来る」といつて、石に重りをつけて投げたがどうして届かう。力の程も知らぬことながら、繰返してをる中に白布が仕合のことに松の枝にかゝた。おまんは嬉しさに「恥しや、これまで色々の疑をかけてゐたが、許して下され」といつて伏拜みく、布を引しぼつて、松の木にしかとくゝりつける。と、此方は尼が引しめて、しつくりと栗の木に結びとめた。おまんは即ち片手に布をとり、片手をまはして、松の木にかゝつた帯を引放し、やがて右手と左手にて、布引の瀧の如き布を手繰ると、瀧のやうな心の胸が跳り、目がまひ、肝も消える心地にて、天津風ふく、絶えく、の雲の通路を、尼が急なくといふ聲を力にして、やうやうと向ふの岸に手繰りついたのであつた。

蘭「サアしてやつた。あぶなや」と抱下せば夢心地、萬「ア、正眞の生如來、これが誠の善の綱。お禮は何と申さう」と、泣拜むこそ道理なれ。蘭「禮をいふ間に夜が明ける。所の人に教へるは、釋迦に經か知らねども、陸を往けば遠くて追手の氣遣ひ。九里の渡が近いげな。一足なりとも早いが好し。此尼は今生で逢ふ事は是まで。一所不住の出家の身、互ひに便も是限り。早ふく」と別れ行く。萬「仇を御恩。情人。名残は盡ず上方で、芭蕉の布を見る時は、形見と思ふて下さんせ。蘭「ア、此方様松葉の相生まで。わしや一人寝の芭蕉布。萬「御恩生平の目も詰る。涙に袖は半晒。今ぞ一期の織留」と、互の心太布の、名残は一反裁切て、二丈六尺五尺の身、戀に晒すぞ三重哀れなる。

【註】○してやつた―うまくしおふせた。しめた。○善の綱―釋迦如來の救の手の意。釋迦はその手に衆生を救ふ爲に「引接の糸」といふ糸をかけてゐる。それは觀音菩薩と同じ。今はお蘭に救れた綱をいふのだ。○釋迦に經―釋迦に説法の意。○九里の



渡一坊の津から大隅の福山に至る海路。○一所不任―所定めぬ雲水の身。○仇を御恩の情人―仇を恩にて返す情け深き人。○松葉の相生―松葉は二葉が普通故、そのやうに夫婦で長生しの意。○一人寝の芭蕉布―芭蕉の葉は單葉ときまつてゐる故、一人寝といつた。布といつたのは、芭蕉から布をつくる故。○御恩生平―麻の布の少―赤らみを帯びた、晒してないもので、江州産が有名。着るにかく。織り目がこまかいので、目もつまるといつたのだ。御恩を着て有難さの涙に目も見えず。此語から織止までは、有朋堂本の如き、お蘭の語にあらず、お萬の語として、前のお蘭の語にかけ合ひに出したものだ。○半晒―布の半晒しと片袖は涙にさらしたとかく。○一期の織留―一生のおしまひの意にかく、織留は織物の一番の織終りの止の意。○太布の名残―太布の果は一反づゝに裁きつて、五尺の身に適する衣につくる如く、一旦互の心を切り名残を切つて、戀に身をさらす。○一反―一旦にかく。○二丈六尺―古來の一反の布の長さ、それから、語呂で、普通の人の丈け五尺に引かけたのである。一反の長さは大正の終頃からぼつゝメートルで計算することゝなつたが、それまでは勿論、その以後でも、小學生以外は多く舊鯨尺で計算してゐる。

【譯】 お蘭は「さてうまくしめた、危いことであつた」といつて抱き下すと、夢心地のおまんは「あゝこれこそ正直の生き如來様、これが眞の善の綱と申すもので、お禮を何と申してよいやら」と泣きながら拜むのも道理である。お蘭即ち「禮をいふ間に夜があける。急がれよ。土地の人に教へるのは、釋迦に説法か知らぬが、陸を行けば遠くて、追十の心配がある。九里の波が近いさうな。一足でも速いがよい。此尼は此世でお目にかゝることはこれまでぢや。所を定めて住まぬ出家の身であるからには、互に便りをするのもこれきりぢや、早くゝ」といつて別れてゆく。おまん「仇を恩で返した情け深い人、名残はいつまでもつきぬが、上方で芭蕉布を見られたら、私の形見と思ふて下され。」お蘭「おゝあなたは松葉の双葉の如く、相生の夫婦となるまで長生なされい、私は芭蕉の葉の如く、人寝をします」といへば、お萬は「御恩を着て、有難さの涙に眼も見えず、片袖は涙に半晒にしてぬらし、今こそ一生の終りである」といつて、互に心を懸け合ひ、太布の最後は、一反にたちきつて、二丈六尺の布とし、それから五尺の身に適する着物をつくる如く、互の心を一旦裁切られて、五尺の身を戀にさらすのはあはれである。

下之卷

源五兵衛おまん夢分船

唄源五兵衛何處へ往々やる。薩摩の山へ。後はおまんが、涙の海よ。船も押されず、櫓權も立たず、寄邊尋ねてうかゝ、うかゝ焦るゝ、源五兵衛焦るゝ。高い山から谷底見れば、布を晒すは、夏こそよけれ。おまん心は互寒の冬か。雪の俣、ちらゝ、ちらゝ、忘れぬ、源五兵衛、姿は四季の花なれや、時折りゝに流行行く、山ぞ伊達者の山葛、引手數々かずならぬ、心の種の小舟に、情の上荷はねられて、思ひは沈む。ヤツサ、やつさゝの空櫓の音も、耳に悲しく遠ざかる、あの故郷へ此儘で、又歸らじと思ふにも、これが此世を出船ぞと、親を恨みの目は涙、何に生れん佳例川、松の叢立夏樹立、櫻島人打群れて、サンサ沖に、綱引き釣垂るゝ波の雄波を、かさわけゝ走る兔の名所ぞや。よゝの鷹野に逃れ来て、遊ぶ野雁や鷺鷥、筑紫の夫を都鳥、ありやと問へどいかにとも、牧の野馬の馬の耳、風福山の渡守、我が思ひはしらずげに、舟も潮も引く方に、下り行く濱は速日のさし。

【註】 ○夢分船―夢の中に波を押分けて行く船の意。樋口氏説。然し繪を見ると船頭もおまんも皆寝てる故、夢を分けて、皆が寝てる意かとも思ふが。○源五兵衛何處へ往々やる……此句を頭にしたり唄が、當時盛に流行した。此唄はおまんが源五のあとを追うて、坊の津に至る時の有様を歌つたものである。○高い山から……これは「松の葉」所載、諸國盆踊歌の中、「高い山から谷底見ればおまん可愛や布晒す」として甲斐の盆踊歌として傳へられるもの。かうした「高い山から」の頭をもつた盆踊歌、その他の流行歌も、澤山出来たものらしい。○夏こそよけれ―主として夏、布を晒す故、いつたのだ。○おまん心は互寒の冬か―夏といつた



に對して、溼寒といつたので、源五に離れたおまんの心は、冬の如く冷たい意。○雪の佛ちら／＼冬といつたから、雪を出して、雪がちら／＼と降る如く、忘れられぬ源五の姿が、眼にちらつく意。○姿は四季の花なれや—源五兵衛は好男子にて、その姿は、四季をり／＼の花である。従つて引手数多い意。○時折々に—四時折々に、時節さらはず、花がはやりもて遊ばるゝ如く、源五も美男子としてはやる意と、彼を歌つた歌もはやりもてあそぶゝ意をかけた。○山ぞ伊達者の山高…源五兵衛どこへゆく、薩摩の山へ、といふ流行歌にある如く、伊達者の源五ははやりて、それを引く手は数々ある中に、物の数にもならぬ…山ぞは薩摩の山への句から引き出し、それから、更に山葛と出した。そして、山葛は、それからそれへと四方八方に延びて、一端を引くと、四方八方が引つばつてゐる如くなる故、引手数多といつたのである。○かすならぬ—物の教にもならぬ、小さく、つまらぬ意。○心の種の小船に…思の種の小さい船に積んだ愛情の…○橋の上荷はねられて—数ならぬ思の小船に積んだ愛情の上荷を受け入れず、はねられたので、自らは沈むといつて、おまんが、戀の叶へられぬをなげく様を述べたのだ。○空櫓の音—夢の中の道行としたから、本當の櫓でなく、空櫓としたのだ。○思ふにも—思ふにつけても。○此世を出船—再び故郷に歸らぬ旅といつたから、此世を出るといひ、港を出る船にかけて出船といつた。○親を恨みの目は涙…親を睨めば鯨になるといふ俗説の如く、これがこの世を出てゆく最後ぢやぞと、自分の思を遂げさせてくれぬ母親を、恨む目には涙が流れて、やがて何に生れ變ることであらう。○佳例川—これは親を睨めば鯨になるといふ俗説から、親を恨みの目は何に生れるか、鯨に生れると、佳例の音を鯨にかけたのだ。此川は大隅國始良郡にある。此等の地名は、近松は皆「國花萬葉記」によつたもので、それを思ふと、近松が九州の人だといふ説は怪しくなる。○松の露立夏木立—これは必ずしも、何處と定めず、只道中にある景色を読み込んだのである。○櫻島人—松といつたから、櫻と出したまでだ。○波の楚波—大波をさす。○走る兎の名所ぞや—走る兎は、月の中には兎が餅をついてるといふ俗説があつたから、波間に走つてる兎といつて、海を照らしてゐる月のことをいつたので、櫻島は月の名所として古歌に讀まれてゐる。○世々の鷹野にのがれ来て—世々はいつも鷹野は、鷹狩をする野、その野に雁や鶯などが来て遊んでゐるから、鷹に狩られず逃れ来たといつたのだ。○筑紫のつまを都鳥—「名にしおはばいさこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」の伊勢物語の業平の歌からとりて来たので、只わが筑紫の夫はありやと問へどといひたかつた處から、此歌をかり、上に色々な鳥をならべながら、都鳥といつたのだ。むしろ次の渡守に問ふといふことから、業平の歌を引きつて都鳥といひ、鶯鳴を出して来たのだ。○ありやと問へど—文脈からは、都鳥に良人の安否をきいてゐる

が、意味の上からは後の渡守にきいてゐるのだ。○牧の野馬の馬の耳—牧場の野馬の耳の如く、即ち馬の耳に風の諺にもある如く、馬耳東風とき／＼ながして答もせず。○風ふく山の渡守—良人の安否をとられた福山の渡守が、馬耳東風と、聞き流し、聞いてもきかぬふりをして、船を引く。○おりゆく濱—潮も引くにつれて、船の下りてゆく濱は。○遠日の岸—連日は日向にある。

【譯】源五兵衛は何處へ行くか、薩摩の山へゆく。その後ではおまんが悲の爲に涙を海と流す。その涙の海は深く、船を棹すことも出来ず、櫓や櫂をたてることも出来ぬ。そこでおまんは、寄る邊をあちこちと尋ねまはつて、うか／＼と焦れ、源五兵衛にこがれ、舟はう／＼と漕がれてゆく。高山から谷底を見ると、布を晒してをる。布を晒すのは夏がよい。ところが源五兵衛に行つてしまはれたおまんの心は、夏でも近寒の冬ともいふべきか、ちら／＼と降る雪の如く冷く、そのちら／＼と降る雪の如く、ちら／＼と目にちらつく源五兵衛の佛が忘れられぬ。その源五兵衛の佛なり姿なりは、例へば四季の花である。花の一年中、時をきらはず流行りて世人にもて遊ばるゝ如く、また源五兵衛何處へゆく薩摩の山へといふ流行唄の如く、伊達者の源五ははやりて、それを引く手は数々あるが中に、物の数ならぬ、思ひの種の小船に積んだ、愛情の上荷を受入れられず、はねられたので、おまんの思ひは沈むのである。夢の中にきこえる空櫓は、やつさやつさと漕がれながら、その櫓の音も悲しや耳に遠くなつてゆく。あの故郷をぬけだして来たわが身は、此儘では決して歸らないぞと思ふにつけても、これが此世を出て、あの世へゆく船出ぞと思ふと、かうなるも皆親故であるからには、母親を恨む目には涙が流れるが、親を睨めば鯨になるといふ俗説があることから察すると、やがては何に生れ變ることであらう。あすこには松のむらがり生へた所もあり、夏木立も見える。櫻島には人が打群れてをる。沖には網を引き釣を垂れるものがあり、櫻島はその波間をかきわけて走る、兎の姿の見える月の名所である。雁や鶯は、いつも鷹狩の行はれる野に、鷹の眼をのがれ来て遊んでゐる。都鳥に向つて、業平が思ふ人の安否をきいた歌にならつて、筑紫のわが夫源五兵衛は居るか、安否はどうかと、お萬が問ふても、牧場の野馬の耳—風の吹くごとく、福山の渡守は私の思ひを知らぬ顔であり、潮も引く方へ舟も下りてゆくが、その濱は連日の岸といふのである。



高千穂の嶽高けれど、高い聲せぬ二人が中の、契は此世後瀬山、隠すほど猶世に漏れて、誰ひらき、の、神の氏子の神歌や。おらは知らぬが子供等が話す。おまん寢處に足や四本となんしよばへ。寢處におまん、おまん寢處に足や四本となんしよばへ。謠ふ一節舵の音。蟹の友呼ぶ聲までも、此方が浮名の噂かと、餘所の僻言梵付の、硫黄が島は一霞。流され人のあの島で、流す卒塔婆も立波に、寄來るく、綜くる糸は、くまの三筋が流れちりつる、ちんりちりつる三味線の、渡初にし國とかや。

【註】 ○後瀬山—大隅の地名(これ等の地名は皆國花萬葉記にあり)後瀬を後世にかけて、此世も後世もの意。○誰ひらき—の神—薩摩國、一の宮、牧聞神社。猿田彦を祭る。誰もかれも平にきく、即ち皆一様に聞くの意をかく。○神歌—神樂歌のことであるが、此處では祭禮とか、盆踊などの際に、おらは知らぬが…の歌に近いものを歌つたもので、今も歌ふと。○足四本—もとより共寢の意である。○なんしよばへ—はやしの調である。○一節舵の音—一節や、舵の音や。○噂かと—かと思はれて。○餘所の僻言…餘所のまぢがひまでも、わがものとききつけるといつて、次の硫黄が島のことをいはんとするに方りて、火を焚きつける、附け木に硫黄がついてゐるからもち出したのである。○硫黄ヶ島—俊寛や平康頼等が、此島に流され、なか／＼宥されなかつたので、康頼は歎きのあまり、「さつまが沖の小島に我は有り人と人にはつげよ八重の鹽風」と詠じて、千本の卒塔婆にかきつけ、都人に此ことを傳へよと熊野權現に祈つたことをいふ。(平家物語に出づ) ○流され人—康頼をさす。○彼の島—鬼界ヶ島の事、硫黄ヶ島十二島の中にあるのだ。○立つ波に寄來る—卒塔婆も寄り來り、船も岸に寄り來るのである。○綜り來る糸は…上の寄り來るから、小さい糸をよりてつくつた三味線の糸といつたので、その糸は、康頼が願をかけた熊野權現に、編らされ、流れて散る三筋の煙と同じく、三筋にて、そのちんりちりつる三味線が、日本へ始めて渡り來たのは、琉球からであるとか。○熊野 筋—藤井博士の説によると、熊野三社を三味線の三筋にかけたといふのだが、此三筋 康頼が祈つた熊野權現の線香の三筋の煙に云ひかけたのであらう。油地獄上巻にも載つてゐるやうに、當時の流行唄に、「これの見さんせな、愛宕の山によゑ、ぢんの煙が三筋立つ、煙がな、ぢんの煙が三筋立つ」といふのがあり、それが「四筋に分れ…」といつて、近松がつかつてゐることから見ても、理會されるとは樋口氏説。なるほどさうすると、三筋が、流れちるといふてのがよく分るやうである。

○流れちりつる—後の三味線のちんりちりつるに合せて、三筋の煙が流れ散り即ち分れるといつたのだ。○三味線—永祿の頃琉球より堺に渡るをいつたので、三味線を日本へ渡りぞめさせた國は琉球とかやの意。

【譯】 高千穂が岳は高く聳えてをるが、高い聲して、人に語る事が出來ぬ二人の間の契は、此世は勿論、後の世までもかけて結んだものであるだけに、隠さうとすればいよ／＼世間に漏れ、誰も一樣に聞く牧聞神社の祭禮や踊などに歌ふ歌として、「おらは知らぬが子供等が話すおまんの寢所に足は四本ある」と唄はれるのであつて、その歌の一節や舵の音や、子どもが友達を呼ぶ聲までが、わが浮名の噂をするのではないかと思はれて、餘所のまぢがつたときまでも心配されるが、動もすればその餘所のまぢがひまでも焚きつける、硫黄つけ木ではない硫黄が島は、一霞の中に霞んで見えない。その硫黄が島に俊寛と共に流された平康頼が、熊野權現に祈りながら、一つ／＼に歌をかいて流したといふ千本の卒塔婆も、立つ波により來り／＼、救の船も寄り來たといふ平家物語の話にちなみて、綜つた三味線の糸は、熊野權現に祈りてくゆらされ、流れて散る三筋の線香の煙と同じく三筋にて、そのちんりちりつる三味線を、日本へ始めて渡りぞめさせたのは、琉球であるとか。

琉球國に打續き、薩摩や、三が國に、霧雨が降らばよな。それぞ立名の浮き雲の、雨のもりとして濡れて行く。袖は嵐の吹乾して、顔は涙の水鏡。ア、あれ、あれ／＼、眉の引墨紅臙落ちて、髪はばらばら海松布和布に、纏れ亂れて何時櫛の齒の「櫛になりたや。ヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘の、ヤレサテ手に渡ろ」どうがねの、よんぢり嫁御は好い嫁御。此なんなんこの好い嫁。あれ見さいな霧島山の横雲。此なん／＼此横雲。横雲の下こそおれらが親里。此なん／＼此親里。夫里が夜の間に近くなれかし。此なん／＼此なれかし、戀しき方も近くなれ。」

【註】 ○薩摩や三ヶ國に…「鹿兒島薩摩三ヶ國霧雨が降らばよの、しづが思ひと思召せ」の唄からとつたもので、三國は日向大源五兵衛おまん薩摩歌



隅薩摩の三國。大坂南組北組天満の三郷といふを、天満大坂三郷と繰返すと同一筆法。一卷四〇四頁註参照。○よなよのと同じく、よ、なあの意。ね、な、の、に、と地方によりて此音が色々變つてゐる。○立つ名の浮き雲―霧雨の降る雲は、勿論浮雲であるから、霧雨がふれば浮き雲が立まよひ、名が立ち、雨がもるといつた。浮きは憂きにかく、○雨のもり―雨の森といふ日向の地名に洩るをかく。○顔は涙の水鏡―涙にぬれて、それに顔のうつるほど涙が出る意。○引墨―眉にぬつた墨。○みるめ和布に―海松布や和布のやうにの意に、見るもわからぬやうにの意をふくませたのであることはいふまでもない。○櫛の齒―いつ櫛の齒をあてたものか分らぬ意。○櫛になりたや―これは「松になりたや有馬の松に藤にまかれて寝たうごさる」の歌からつくりかへたものだ。○とうかねの…―東金の茂右衛門が女房はよい嫁御、あれ見さいな筑波山の横雲、横雲、下こそわしが親里をつくりかへたものである。○よんぢり―腰をよぢる意。○なんなん―なあゝの意。○夫里が近くなれかし―此句以下は附加へものにて親里ならぬ夫のゐる處が、夜の間に近づいてくれ、ばよしの意。

【譯】その琉球に續いて、薩摩三ヶ國に、霧雨が降らば、浮き雲が立ち迷ひ、浮き名が立つて悲しいとであるが、その浮き雲から雨が洩る雨の森をぬれて通り行けば、袖は嵐が吹いて乾かすが、顔には雨がかゝり涙が流れて、まるでその水鏡に顔がうつる程である。あゝ、あれゝ眉にぬつた眉墨や紅臙は、その爲に落ちて、髪はばらゝと亂れ、見ても分らぬほど、海松布や和布のやうにもつれてしまつて、何時櫛の齒をあてたかわからぬ位である。「櫛になりたや、薩摩の櫛に、そしたら、諸國の娘の手に渡るとであらう。」東金の腰をよぢる嫁御寮は好い嫁である。あれを見やれ、霧島山にたなびいてゐる横雲、此の横雲の下におれが親里がある。此の親里ならぬ夫の居る里が、夜の間に近くなつてくれ、近くなつてくれ、戀しい方角も近くなつてくれ。」

潮満来れば水馴棹、長き日影もほの曇り、心盡しや氣盡しに、暮ぬ先より我心、夕暮の關眺めやり、  
 睡る鷗に誘はれて、轉睡のふらくくと、船に揺れて睡るらん。舟人も睡り漕れ行く、そも一睡の假枕、  
 皆一心の鬱結、夢を結びて有磯海、夢か現か幻か、更に分ちも七流れ、流灌頂血の上の、亡者浮ぶる

法の水、哀れにも亦不思議なり。

【註】○水馴棹…潮がみちくと、水馴棹の長い影もくもつて…○我心―お萬が心。○夕暮の關―大隅國にある地名。國花萬葉記に出づ。○睡るらん―らんといつて、此處を想像の風にかいたのは、おまんは想像してはゐぬが、外から想像してかいたからである。これからお萬が、船の中で眠つて夢を見たことに、ていふのである。○漕れゆく―いつとはなしに夢の中で船は漕れてゆくのだ。それにおまんは源五に焦れてゆく意をふくませたのだ。○有磯海―荒磯海。磯に荒波打つ海。○七流―分ちも無くにかく。七流は幡七つの意。○流灌頂…もと旗の水に流して回向するをいふ。それから卒塔婆の水の邊にたて、之に旗を釣り、橘の葉をそなへ、水をかけて供養する。水死者又は魚類の供養に行ひ、難産で死んだ亡靈の血を清むる爲にもやる。水施餓鬼ともいふ。○血の上の…水施餓鬼は誰の爲か、新血の上で死んだ亡者が浮ぶ爲である。○法の水―凡てが之によりて成佛する水の意。即ち流れ灌頂をして、法の水をかけてゐる光景を夢の中に見るのである。

【譯】潮が満ち来ると、水馴棹の長い影も曇るまゝに、暮れぬ先から、我心は心を盡し、氣を盡して、夕暮の關をながめやつてゐると、其處に睡つてゐる鷗に誘はれて、ふらくくと轉寢をしながら、船にゆられて睡り、船頭も睡つて、夢の中に船は漕がれてゆくのである。そもゝ今一睡の假枕に夢を結び、荒磯海を渡るのも、皆一心の鬱結からであつて、夢か現か、幻か、更に分らないのであるが、そこに七流の幡をたて、流れ灌頂を行ふのは、誰の爲か、新血の上で死んだ亡者の浮ぶ爲に法の水をかけて供養するのは、あはれにもありまた不思議なとである。

導師のお僧鉦打鳴し、釋迦は去り、彌勒は未だ世に出ず。彌陀の彼岸を頼まずば、何時か火宅を出船、  
 乘遅れては誰か渡さん。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、  
 陀佛南無阿彌陀。如何なる人の何故に、又の上の往生か。産のあら血か世の中は、餘所の事とも思は  
 れず。語り給へ」と尋ねれば、誰がいふとも浪の音。弔ふ人は琉球屋、おまんと申す姿の花。夫源五



の手にかゝり、消えて散つたる血刀の、生血の誓も浅ましや。其おまんとは我身の上。娑婆か冥途か如何にとも、覺束涙せきかぬる、浮世の恨み葛の葉の、返す刀に腹搔破り、男は晨女は宵、一夜ばかりは隔つれど、末の逢瀬は一筋に、流れ寄邊の水施餓鬼、語るも我身聞くも我、心一つをいろくりに結ぶは有漏路、解れば無漏。萬事は夢の戯れの、手にも取られぬ沖津風、濱風潮風颯々、さつとして覺行く夢の痕見れば、ありしは浪の音響々として、海上空しく渺々たり。

【註】○導師—衆生を佛道に導く僧。○釋迦は去り…釋迦の死後五十六億七千萬年にして、彌勒佛出現するとされ、それまでは世に苦がたえることないといわれてゐる。○彌陀の彼岸—生死のある此世を彼岸とし、淨土を彼岸、煩悶を中流とし、波羅密を到彼岸となし、菩薩は私心のない智慧をもつて、舟にのせて此岸から彼岸に渡してくれると佛説にあり。即ち阿彌陀の光遍滿する淨土に頼をかけなければ…○火宅—現世に苦が多いから、此世を稱して火宅といつてゐる。現在を出て淨土にゆく船に乗りをくると誰に渡してもらうことが出来ようの意。○又の上の往生—死んで死んだのか。○産のあら血か—お産の爲に新しく死んだを吊ふのが。○餘所の事とも…人事とも思はれず、いつ自分の身にも廻ることかも分らず。○浪の音—誰がいふともなく、と浪にかく。そして浪の音が答へるのである。○姿の花—姿の美しき花、即ち美人。○のりの誓もあさましや—のりは生血と、法とかく。法の誓とは、例の佛が弘く衆生を濟度せんとする誓願の舟に乗ることにて、それと血刀の生血と引かけ、夫の手にかゝつて、血刀で死んだ身であるからには、佛の誓の船に乗ることも、即ち成佛も見込のない浅ましきことだの意。○覺束涙せきかぬる—此處は娑婆即ち現世か、冥途、即ち死者の國か、どちらとも、どうもはつきりせず、涙が堰きとめかねるほどなぐれ。○恨み葛の葉…葛の葉が風にかへると、葉裏が見えるといふことを、浮世の恨みとかけ、更に浮世の恨みにて、女を殺して返す刀で自分の腹をかき切りてと述べたのだ。○末の逢瀬は一筋に—末には逢つて一つになると云ふを、一筋に流れ寄るに云ひつゝけた。○水施餓鬼—無縁の死者の爲に、續經回向するを施餓鬼といひ、水施餓鬼は流れ灌頂のことにて、一つに流れ寄つて、水施餓鬼を受ける意。○結ぶは有漏路…漏は煩惱。煩惱によりて、三界を脱し得ざる凡夫の世界を有漏路といひ、煩惱なく悟道に入つたものを無漏路といふ。即ち煩惱の結ぶと、解くるとによつて、心一つがいろくりになるといつた。○さつ—風の

ふく形容。○ありしは浪の音—ありしといつたは何もなく、只波の音のみにて、…波はなくの意にかく。

【譯】導きの僧は鉦を打鳴らして、釋迦は死に彌勒佛はまだ世に現はれて來ぬ。だから阿彌陀の光輝く淨土を頼みとせずば、何時の日にか苦惱の現世を去るべく、菩薩に導かれ船に乗りて、彼岸に到るとが出来よう。その出船に乗り後れては、誰にか彼岸へ渡して貰へよう。南無阿彌陀佛々々。一體如何なる人が、何の故に、又によつて往生したのか、それともお産の爲に死んだといふのか、兎も角も世の中とは、人の事とて餘所には思はれぬ。語つてきかされよ」といへば、誰が之に答へていふともなく、浪の音が自然にいふのである。「弔をする人は、琉球屋のおまん申す美人で、良人源五兵衛の手にかゝり、血刀で死んだ身であるからには、佛の救の誓の船に乗ることも見込のない浅ましきことぢや」と。そのおまんとは我身のことである。此處は娑婆か冥途か、如何にもはつきり分らず涙が堰きとめかねるほど流れ、浮き世を恨みて、葛の葉が葉裏をかへす如く、返す刀で腹をかき切つて、男は晨女は宵に死に、一夜だけは間が隔つてゐるが、やがては逢つて一つになり、一筋に流れ寄つて、水施餓鬼を受けるのだ。かういつて語るのも自分であり、聞くのも自分であるが、一つの心を色々と結ぶのは、煩惱を脱せず、悟り切れぬ身であり、心の結びがとけると、即ち悟道の身である。萬事は夢の戯れごとで、手にもとるとの出來ぬ沖の風、濱風潮風はさつ／＼として吹き、覺めてゆく夢の跡をみると、有つたと思つたとは何もなくして、浪の音がどろ／＼と音かするのみで、海上いたづらにひろく／＼としてゐる。

おまんは驚く楫枕、我身は元の我身にて、覺めても覺めぬ夢心地。淺瀬の波に下り浸り、歎きの聲に舟人が、舵取直す面舵の、思ひ廻せば夢なりけり。「心もとなや我夫に、怪我過ちの知せの夢」と、かつばと轉ぶ兩袖に、涙も潮も滿にけり。夢違へし轉じ反へ、心も浪も立騒ぎ、瘡は上る山嵐、吹くや追風のそよ／＼と、風のいろはに帆を上げて、走り行衛は薩摩瀉、沖の雄波に憧れて、便り渚に立



つ雌波、身を碎くこそ三重不便なれ。

【註】 ○驚く舵枕—船の中に旅寝することを舵枕といふ。全體でつまり寝てゐたのが、さめて驚く意。○面舵—舟のへききを右へ向けるときの舵のとり方にて、「とりかぢ」に對する語。とりかぢにしてゐたのを、船頭が、面舵に舵をとり直して見ればの意。○思廻せば—船人が面舵を廻せばと、おまんが思ひ廻せばとかけたと解するのは、樋口氏説だが、繪を見ると船頭もねてゐるから面掛をとりて船頭が思ひ廻すのではないかとも思はる。暫く前説に従ふ。○心もとなや—心配な。○夢ちがへ—夢を判じ變へる。○轉じかへ—轉んだのを、起きかへるのだ。○心も涙も—心もなしにかけ、心も心ならず、さわぎ、浪もさわぎ。○つかへは上、山嵐—胸のつかへは、ひどくなり、また下りつして。山嵐のおろしにかけて下。意あり、つまり上つたり下つたりしての意。○吹くや追風—山嵐が吹くと、追風がそよ／＼と立つて。○いろはにほをあげて—いろはにほと色にかけていつた。○雄波—大波。雌波は小波。○たより渚に立つ—たよりなくにかく。大波にあこがれて小波が碎ける如く、男に憧れながら女がたよりなく渚に立つといつた。

【譯】 おまんは驚いて旅寝から覺めれば、我か身はもとの儘の我身にて、覺めたと思つても半醒のまだ夢心地である。即ち波の淺瀬の所に下り、水にぬれながら、歎きの聲を出せば、船頭は面舵に舵をとり直し、それにつれておまんは思ひまはして見ると、夢を見てゐたのである。おまんは即ち「心配なことぢや、わが夫に怪我が過ちのあつた知らせの夢かも知らぬ」といつて、がはと轉ぶと兩袖は潮にもぬれ涙にもぬれてしまつた。やがて夢の判じかへをなし、轉じかへり起きかへれば、心も心ならず騒ぎ、波も立騒いで、胸のつかへは上つたり下つたりする間に、山嵐が吹いて、追風はそよ／＼と立てば、風の色を見て帆をあげて、薩摩瀉へと走りゆく。と沖の大波にあこがれて、渚に立つ小波は、便りなきに身を碎くのはふびんである。即ち男にあこがれて、便りなく渚にたつ女はあはれである。

尋巡るやはうくの津、鹽の辻なる裏貸屋、豫て聞置く目標あり。萬嬉しや此處ぞ」と走込み「ヤア

アこれは源五様、死なずに健で御座んすか。先のが本か是が夢か。何れが夢やら眞やら。息が切れた水一ツ、先づ飲せて下さんせ」とどうと伏してぞ泣居たる。源五抱上げ水含ませ、「能ふこそ」。心底届いた満足した。此上からは親里の、首尾は兎もあれ角もあれ、首は首、胴は胴、甲が舍利になるとても、親の手へは渡すまい。落着いて氣を静めや」と、背中を擦り撫下す。

【註】 ○はうくの津—方々をたづね巡りと、坊の津をかく。○鹽の辻—坊の津に斯かる町がありしか分らぬ。今はかゝる所なく、觀音堂の近所に湖のさし引強き所があるが、それどもにやとは樋口氏説。○首は首胴は胴—各々別々になつても。○甲が舍利—甲蟲の甲や、蟹の甲などの硬いものが、舍利になるとも、即ちどんなことがあつてもの意。舍利はもと、佛骨の意だが、此處は焼いて骨になり、灰になつてもの意。

【譯】 方々を尋ね巡つて、やう／＼坊の津の鹽の辻の裏貸家に来て見ると、豫て聞きおいた目印がある。おまんは即ち「嬉しや此處に違ない」といつて駈け込み「やあ、これは源五兵衛様、死なないで、まめでお出でなされますか、先程船の中で見たのが本當であつて、今面の當りに 見るのが夢であるのか。それとも先のが夢でこれが本當か。何れが夢か、何れが眞か。それにしても興奮して息がきれた、水を一杯まづ飲まして下さんせ」といつて、どうと伏せて泣いてゐた。源五兵衛は女を抱き上げ、水をふくませ「ようこそ来てくれた。心底見届けた、満足した此上は郷里の首尾がどうあらうと、かうあらうと、首は首、胴は胴と分れ／＼になり、硬い甲が焼けて骨となり灰となつても、即ちどんなとがあつても、お前を親の手へは渡すやうなとはすまい。落ついて氣を沈めるがよい」といつて、背中をさすつて撫下ろしてやつた。

おまんも少し笑ひ顔、「此方様の顔見たりや、胸も大方静まつた。氣遣して下さんすな。さて／＼愛い目辛い目や、身の一代に覺えぬ事。裏の高塀飛損ひ、堀へ落ちて死ぬる場を、お蘭比丘尼は命の親結



ぶの神。眞實奇特な介抱ゆゑ、鰐の口を遁れ出で、やう／＼と福山の船に乗り、九里の渡も千里の如く、とけしないやら怖いやら、氣が草臥てとろ／＼と、船梁に手枕して、寝るとも思はぬ其間に、まざ／＼しい夢を見ました。わしや此方様に斬らるゝ。此方様は又腹切つて、夫婦の死人の爲と、流れ灌頂七流れ、殊勝らしい坊様が、鉦をはつてお念佛。わしや悲しふて／＼、何やら泣いて口説いたが、言ふた事は覺えねども、我手に我身の回向して、念佛申すが耳に入り、ふつと目が覺め恍惚と、今のは夢であつたげな。サアたゞ事ではあるまい。此方様の怪我過ちか。但し浮世を見限つて、例の短氣が起つたか。早ふ逢ひたや聞たやと、胸も心もわくせきして、帆掛船さへ間緩ふて、手繰つく程氣が急いた。此様に無事を顔見まいかと思ふたに、わしやがつくりとなりました。善いにつけ悪いにつけ、夢は三日が大事のもの。必ず人に逆らはず、身を慎んで下さんせ。これ此袖見さんせ。夢に泣いた涙で、今に濡であるはいの。思へば思へば夢の間の悲しさが、本の事なら如何せうぞ。夢が合ふたら如何せう」と、夫の膝に凭伏し、聲を上げてぞ歎さける。

【註】 ○とけしないー待遠い。○まざ／＼しいーあり／＼はつきりした。○夫婦の死人の……双で死んだ夫婦の死人の爲とあつて、流れ灌頂を行ひ、七流の旗をたて……○鉦をはつてー鉦を打つて。○口説いた／＼と／＼といふた。○我手にー自から。○わくせきーあくさく。○がつくりとなりましたーがつかりした。はり合がなくなつた。張りつめてゐた氣がゆるんだ。

【譯】 おまんも少し笑ひ顔をして、「お前の顔を見ると、胸も大分静まつた。心配して下さるな。さて／＼憂い目や辛い目を見て、これまで一生に覺えぬ事をして來たものぢや。裏の高い扉を飛損つて、堀の中へ落ちて死ぬる場合に、お蘭比丘尼に助けられ、その、命の親として、結ぶの神としての、眞實奇特な介抱のお蔭で、鰐の口のやうな

危険な所を遁れ出で、やつとのとで福山で船に乗つて、坊の津まで九里を隔つる渡しも、宛がら千里を隔つるが如き心地して、待遠いやら、怖いやらの中に、氣づかれがして、船の梁に手枕してゐると、寝るとも思はぬ間に、まざ／＼とはつきりした夢を見ました。私はお前に斬られる。お前は又腹を切つて、そこで双で死んだ夫婦の死人の爲とあつて、七流の旗をたて、流れ灌頂をして、殊勝な坊様が、鉦を打つてお念佛をとなへるといふ騒ぎ。私は悲しくて／＼、何やら泣いていつてゐたもの、言ふたとは覺えぬが、自ら自分の回向をして、いふた念佛が自分の耳にはいり、ふつと目が覺めて、うつとりとして、今のは夢であつたさうな。さあたゞ事、並々のとではあるまい、お前の身に怪我があつたか過ち事があつたか。但しは浮世を見限つて、例の短氣を起しての事ではあるまいか、早く逢いたや、様子をきゝたやと思ふと、胸も心もあくさくして、帆掛けて走る足の速い船でさへ、まだるく思はれて、手でたぐりつくほどに氣がせてならなかつた。そして此様に無事な顔は見るとは出來ぬではないかしらと思つてゐたに、それがかうして健かな顔が見られたので、張りつめてゐた氣もゆるんで、がつかりしました。ところで善いにつけ、悪いにつけ、夢といへば後の三日を氣をつけぬと、どんな事があらうもしれぬ。必ず／＼人のいふことに逆はずと、用心して下され。これ此袖を見なされ。夢の中に泣いた涙で、今だに此んなに濡れてをるわいの。思へば／＼夢の間に感じた悲しさが、眞實のとであつたら如何せう、夢に見た通りになるのだつたらどうしよう」と、夫の膝にもたれて、伏せて聲をあげて泣いた。

源五は男氣打笑ひ、「ア、氣がくたびれては、いろ／＼の譯もない夢見るもの。身に金が入るとて斬らるゝが上夢。あれも去年怖い夢、天狗の鼻に取付いて、女護の島へ渡ると見た。其明る日、餘所から松茸と赤貝を貰ふた」と、語ればおまんも吹出して、「エイ好い加減な事ばかり。ア、久しうて笑ふた。家では親の氣を兼ねて、誰に甘へる者がない。わしや此方様に甘へる。あまやかして下さんせ」と、



頬杖枕身を横に互に足を打もたせ、來し方語るぞ盡しなき。

【註】 ○男氣—男の様子で、男らしく大膽に、俠氣に。○身に金が入る—刃物で斬られる夢を見ると、身に金がいるとの云ひ傳へを引いて、おまん 夢を上夢といつたのだ。水谷氏説による。○松茸と赤貝—共に陽陰の性器と見た故、いよ／＼笑つたのだ。○久しうて—久しうして、久し振りにて。○頬杖枕—頬杖を手でついて、それを枕にして。○盡しなき—つくるまはない。

【譯】 源五兵衛は男らしく打笑つて「おゝ氣が疲れると、他愛もない、色々の夢を見るものだ。斬られた夢は、身に金がいいる前兆だといつて信ぜられてるから上等の夢ぢや、何の心配があるものか。おれも去年怖い夢を見た。天狗の鼻にとりついて、女護の島へ渡るといふ夢だつた。するとその翌日、他所から松茸と赤貝をもらうた」といふと、おまんも吹き出して「ふゝよい加減なとばかりいひなさる。あゝ久し振りで笑つた。家では、繼母の氣兼ねして、誰にとて甘へるとが出来ぬ。私しやお前にあまへるよ、あまやかしてくだされ」といつて、腕で頬杖をついて枕にしながら、身を横にして、互に足をもたせ合ひ、これまでのとを果しもなく語つてゐた。

斯る處へ母親は、下女下男引連れ、案内もなく突と入り、「ハア、おまん此處にか。左様あらふと思ふた。來るなら來ると、二人の親に何故知らさぬ。人も連れず、着の儘で、親の外聞構はぬ氣か。言ふ事いふて仕舞ふたら、きり／＼戻りや迎ひに來た」と、後前もなく言捨けり。おまん挨拶言はんとするを、源五兵衛押止め、突と出て、「われ／＼昨日までは、其方へ出入奉公下人分の事介。今日より元の菱川源五兵衛 一錢持ねど武士の嫡々。十萬貫目持ちやつても琉球屋の新兵衛。詞も違ひ座も違ふ。推參至極な案内もなく踏込んで、歸れといふは誰が事。此おまんは身が女房。武士の妻女は夫の心次第にて、親の儘にはならぬ事」をのれが宿にて新兵衛を廻いた格とは違ふたぞ。其方ばかり早や歸

れ。長居をせば引摺出す」と、烟草引寄せ烟吹き、取つて着くべき方ぞなき。

【註】 ○出入奉公下人分—出入り奉公をして下男どころの。○ちやく／＼—嫡々の義から出て、立派なもの意。ちやく／＼。○十萬貫—銀六十匁を金一兩と計算する。此割合でゆくと百六七十萬兩の金にあたる。○推參至極—無禮至極。ずう／＼しきの眼り。○おのれが宿にて—自分の家で。○新兵衛を廻いた格—自分の亭主新兵衛を思ふまゝにつかひまはす格式とはちがふ。○取つてつくべき方ぞなき—とりつく島もない。どうも仕方なかつた。

【譯】 丁度そこへおまんの繼母は、下女下男をつれて來て、案内も乞はずつとはいつて「はあ、おまんは此處にゐたか。屹度さうだらうと思うた。來るならば來ると、兩親には何故知らせないのぢや、誰一人召使もつれず、着たまゝの姿で、親に對する世間の聞えなども何とも思はぬ氣か。言ふべきとをいつてしまつたら、さつさと歸りやお前を私は迎へに來たのぢや」と、あと前に世辭をいふでもなく、用事だけを云ひ捨てたのであつた。之をきくとおまんが、それ相當の挨拶をしようとするのを、源五兵衛は押へとめて、自分からつと出て「私は昨日までは、お前の家へ出入人として奉公し、下男どころの事介といふ格であつた。けれども今日よりは元の菱川源五兵衛ぢや。金一錢ももつてはゐないが、それでも侍のちやく／＼である。例へ十萬貫持つてゐやつても、琉球屋の新兵衛に變りはない。只立派な商人ぢや。その新兵衛と私とは詞づかひもちがへば、坐る時に座もちがふ。それをづう／＼しくも案内も乞はずに踏込んで、歸れとは誰にいふとぢや。此おまんは私の女房である。侍の妻は夫の心次第で動くべきで、親のいふまゝにはならぬものだといふとを知らぬか。お前が自分の家で、亭主の新兵衛を使ひ廻はすやり方とは譯がちがふぞ。お前ばかりがさつさと歸るがよい。長居をすると引摺出すぞ」といつて烟草盆を引よせて、烟をふいて、とりつく島もなかつた。

女房さすが物仕にて、詞を柔げ、「御尤々々。連れて往んだら戻すまいと惡ふち心廻つたそうな。親が千萬嫌ふても、主が心に好いたもの、戻さぬともあの子が戻らずに居やるまじ。親も何しに留ませ



う。さりながら、琉球屋ともいはるゝ我々、娘一人を躰かね、長持一つ送らぬと、外聞悪い沙汰も嫌第一あの子が身祝ひ、屹度仕立てて送りませう。新兵衛心も其通り。其證據に今日は、祝ふて餅を搗まする。一寸戻して下さりませ。善哉祝ふて戻させう。サアおまん、起つておじや。サアおじやいの。ア、しぶとい子や」と言ひければ、おまんは中にうろ／＼と、「情なや疎ましや。あのゝものが喧しい。一寸戻つてざらりと、埒明けて來ませうか」源「何處へ／＼」。母めが言分皆僞り、騙して賺して連歸り、頼みを取つた聲の方へ送らんといふ心底、面付に顯はれた。門より外へ一寸も出しはせぬぞ。動くな。母めも今日が明日になり、千日なりとも居たくば居よ。おまんに於いては戻さぬ」と、既に顔色變りけり。

【註】○物仕―物師、世なれて圖々しいをいふ。やりて、隅におけぬ人間、こうしやな奴、又一筋繩では行かぬ人間などの意。

○千萬―どんなに。○主―此處ではおまんをさす。御本人の意。○身祝ひ―一身の前途の祝福の爲に。○しぶとい―強情な。

○あのゝものゝ―何のかの、あれこれ。○頼をとつた―結納をもちつた。

【譯】女房はさすがやりてにて、怒る處か、いよ／＼詞をやはらげ、「御尤も／＼、連れて歸つたら、二度と、戻さぬかも知れぬと、悪い方にお心を廻はされたい。親の方で幾らきらつても、御本人が心に好いてるものを、戻さぬといつたとて、彼の子が戻らずにはをりますまい。さうとあるからは、親でも、どうして止めなどませうでも琉球屋ともいはれる私共であるからには、たつた一人の娘を仕つけることが出来んで、長持一つ送らないといつて、人聞きの悪い評判をされるのも嫌ぢや。第一あの子が、一身の前途の祝福ぢや。屹度仕立て、一人前として送り届けませう。亭主新兵衛の心もその通りです。其證據には、今日はお祝に餅をつきます。一寸の間戻して下され善哉を祝つて歸しませう。さあおまん、立つて來やれ、さあ來やれ、あゝ強情な子や」といへば、おまんは中に立

つて、うろ／＼としながら「情ない、いやなとぢや、何のかのと喧しい。一寸歸つて、さらりと片をつけて來ませうか」といふと、源五兵衛は「何處へ行くといふのぢや。母の云ふとは皆僞ぢや。あれはだましますかして、家につれ歸つて、結納をもちつた聲の方へ送らうといふ心で、ちやんと御面相に現はれてゐる。門口から一寸だとして出しはせぬ。動くな。母親にしても、今日があすと延びて、たとへ千日間でも、此處にをりたくばをるがよい、おまんは戻しはせぬ」といつて、既に顔色が變つてゐた。

母は元より只者ならず、ア、町人の淺ましさ。お武士の作法は知らず。是非に及ばぬ何とせう。駈落人のお尋ねもの、それでも武士が立つならば、いはれぬ肝精やかふより、町所家主を頼んで連れて歸りませう。手間も暇も入らぬ事、皆來い」と起たんとす。おまん取付き、「先ア待つて下さんせ。町所へ斷つて、源五様を今の間に牢へ入れふといふ事か。連立つて歸りませう。先づ静まつて下さんせ。これ源五様、萬事人に逆らは身ずの愼みと申した事、必ず忘れさんすな。大事のお身じやが合點か。何もわたしが胸にある。鳥渡戻つて親達を、宥めて歸ればさらりと濟む。私次第にして居なさんせ。つい戻りませう」といひけれど、源五兵衛合點せず、「イヤ明日戻さば戻しませぬ。今日一日は此源五が戻さぬといふ一言、首になつても言通すと、さら／＼戻す氣色はなし。

【註】○只者―尋常一様の人間。○是非に及ばず―仕方なし。○いはれぬ―よけいな、いらざる。○肝精焼く―肝膽をつくし精根をつくす。即ち精を出して骨を折る。○町所―町の年寄の事務をとる所即ち今の役場。○今の間に―今のうち。○私次第―私にまかせておきなされ。○つい戻りませう―ついには關西の方言で、譯なく、さつさとなどの意。一寸親里へもどつて來ませう。○首になつても―殺されても。



【譯】母は元々尋常一様の人間でないので「あゝ町人の浅ましい人には、お侍の作法は知らず何としたものやら、仕方はない。ところが駈落をした、お尋ね者であつても、武士としての顔が立つといふとでは、役にもたゞぬ丹精をしようよりか、年寄の役場と、家主とに頼んで、つれて歸りませう。さうすれば手間もいらねば暇もかゝらぬ、さ、召使ども皆来い」といつて立たうとすると、おまんはそれにとりついて「まあ待つて下され。お役所へ行つて、ことはりをして、源五様を今の中に牢に入れようといふのか、それなら私の方で一緒に歸りませう。まづ靜にして下され。これ源五様、何事も他人のいふとに逆らはず、身を慎んで下されと申した事を、必ず忘れなざるな大事のお身であることをお前は承知か、何もかも私の胸にある。一寸歸つて、親達を宥めすかして歸るとすれば、さらりとすむわけぢや。私にまかせて、私のする通りにしてゐなされ。つい一寸親里まで戻つて来ましよ」といふたが、源五兵衛は承知せず「いや明日戻すといふとなら戻しようが今日一日は、此源五兵衛の意地で、戻さぬといつたら戻さぬ。その一言、命にかけても言ひ通す」といつて、さらにお萬を歸す氣はなかつた。

母は名に負ふ我武者もの、ヤア、しやまだるい男ども、おまんを引立て連れて来い、畏つた」と下男床の上へ駈上る。源五兵衛駈塞り、武士の女房に指でもさ、ば片端に、泥臙斬つて斬すへん。寄つて見よ」と睨めまはす。薩摩一國名取の男、源五兵衛に睨付けられ、左右なく寄付く者もなし。母事もせず打笑ひ、臙病な奴等かな。昔が今に至るまで、睨まれて死んだ者はない。おまんおやじ、手を引かふ」と、立寄る處を抜打に、頬先かけてずつと斬る。斬られながらに刀の刃にしがみ付けば、手の中くられ朱になつて逃廻る。おまんは母を斬らせじと、立掩ひ立隔り、拔身の下へと廻りける。男はおまんを除けん／＼としけれども、急に急たる手も伸びて、見込の曲合外れけん、おまんが左の

肩先より、前は乳房を袈裟がけに、兩へさつと斬下られ、既に最後と見えにける。

【註】○我武者—我意の強い向ふ見ずの意。無茶な亂暴者。○しやまだるい—しやは罵の意をもつた附加へて、まだるいは、まだるつこいとか、のろい、手ぬるいなどの意。○泥臙—どろのついたすね。○斬つて斬すへん—切つて切ぬ。○左右なく—左右に誰もぬないやうに、即ちやさしくは。○事ともせず—何事ともせず、物ともせず、何とも思はず。○昔が今に至る—昔が今日になる、昔から今まで。○抜打ちに—刀を抜くと同時に切りつけ。○立ち掩ひ立隔り—立ちふさがつて邪魔をしたり、間をあけたりして。○急に急きたる—急ぎにいそいで。○曲合—釣合、見當、平均のとりかた。○袈裟がけに—袈裟をかけたやうに斜に。

【譯】母親は有名な無茶な亂暴者であるから、「やあ、まだるつこい男ども奴、ぐづ／＼せずと、おまんを引立て、連れて来よ」といふ。下男は「畏まりました」といつて座敷の上へ駈上る。と源五兵衛は駈けつけて間をふさぎ、「侍の女房に指でもさして見よ、片端から泥すねを斬りすえてやるから、寄れるものなら寄つて見よ」と睨みつけて見まはす。さすがに薩摩一國で名をとつた男の、源五兵衛にねめつけられると、やさしく寄りつくものはない。それでも母親はそれを何とも思はず、笑ひながら、「臙病な奴等ぢや、昔から今日に至るまで、人に睨まれて死んだものはありはせぬ。おまん来い、手を引いてやろ」といつて立寄る處を、源五兵衛は抜くが早い頬の先にかけてすばりと斬つた。母親は切られながら、刀の刃にしがみつくと、手の甲をゑぐられた、そして眞赤になつて、逃げ廻る處を、おまんはまた母を斬らせまいとして源五兵衛の前に立ちふさがり、間を隔て拔身の下へ廻つて行つた。源五兵衛は、またおまんを避けて敵を切らうとしたが、餘りに急いたので、手ものびて、見込の見當が外れたものか、おまんは左の肩先から、前は乳房を経て、袈裟をかけたやうに右の方へまで、兩方へかけてさつと、斬り下げられ、最早最期の斷末魔だと見えた。



母は怯まず大聲上げ、「やれ人殺し、切つた／＼」と呼はる聲に、當町隣町驚き騒ぎ、我も／＼と駆集り、手負を勞り、「源五兵衛取逃すな」とぞ轟きける。源五騒ぐ色もなく、大肌脱いでほつたと睨み、「やかましい町人共、逃すなとは誰が事。術によつて此源五が、立退かば退きもせん。逃るといふ字が聞憎い。刀を抜くは人斬る覺悟。人を斬れば死ぬるは覺悟。嘘か實かこれ見よ」と、左の肋に刀を突立て、「ゑいやつ」と引廻し、返す刀を喉笛に、立ては立てて剗りしが、腹を深く切りたれば、腕先弱りのつけに反り、半死半生哀れなり。

【註】○ひしめく—騒ぎ立つ。○術によつて—方法を講し、技術によりて。○聞憎い—そのやうな見にくいことをするものでないから、逃げるといふ語は聞づらい感がする意。○のつけ—仰向けに。

【譯】母親はびくともせず、大聲をはりあげて、「やれ人殺しぢや、斬つた／＼」と呼ぶ聲に應じて、此町隣町のものども驚いて、がや／＼とかけ集り、負傷者をいたはりながら「源五兵衛を逃がすな」と騒ぎ立てた。源五兵衛はまた騒ぐ様子もなく、大肌をぬいで、はたと睨んで、「やかましい町人ども、逃すなとは誰が事をいふのぢや、技術によりて、此おれが立退かうとすれば、立退もせうが、苟しくも侍の身が逃げ隠れなどするか、そのやうな字は聞くだけでも不快ぢや。武士か一旦刀を抜くからは人を斬る覺悟であり、人を斬つたとすれば死ぬ覺悟はちやんとあるのぢや。さういふおれの覺悟が嘘か真かはこれを見ろ」といつて、左側の肋骨に刀をつきたて、「ゑいやつ」と聲をかけて引まはし、返す刀を喉笛につきたては立てゝゑぐつたものゝ、あまり腹を深く斬つたので、腕先が弱つて仰向にそり返つて、半死半生の態となつたのは氣の毒であつた。

斯る處に風體千石ばかりなる武士夫婦、供廻り華美に、親新兵衛に案内させ、息をはかりに駆付け、

「未だ死切らぬは嬉しや」と、夫婦の手負を看病し、耳に口寄せ大音上げ、「エ、言甲斐ない源五殿、先年 都で參會した、林と申した腰元、今は笹野三五兵衛、是は我妻、其時の小まん見忘れたか。不慮の縁によつて親の敵の在處、別名まで聞いたるゆゑ、翌年敵を討ちおほせ、數年の本望遺恨を晴し此小まんと夫婦となり、本國本地に歸參して、會稽の恥辱を雪ぎ、武門の美名を輝かすも源五殿の御情。御恩は海山報じても猶報じがたし。先づ御自分の行衛を尋ね、拙者が主人を頼み入り、お國を廣ふ彼のおまんと、比翼の盃取結ばせんと、心の限り尋ねても、今日まで行方知らず。その内におまんに縁に付けさせては、恩報する甲斐もなし。先づ外の手を止むるため、我等が方へ呼取つて、靜に貴殿を尋ねんと、我々夫婦が思案にて、媒人頼み作り名して、言入れの頼み送つたは此三五兵衛であつたぞや。残り多や残念や。さりながら曲がない。よし此方こそ知らずとも、笹野三五兵衛こそは親の敵を討ちおほせ、本懐を達せしとは、九州に隠れなきものを、何故尋ねては下されぬ。但し今零落て、諷ふまいとの身の卑下か。但し又拙者が、昔の恩を忘れて見ぬ顔しさうな三五兵衛と見付けられたか、恥かしいさりとはいへぬ。恨めしい。せめて好い折對面して、詞を交して満足した。後に聞いて三五兵衛に追腹切れといふ事か。さりとは曲もない。其筈ぢやない源五殿」と、抱付いて泣きければ、今際のおま人も眼を開き、じろりと見たる眼は涙。

【註】○風體千石ばかり—千石ぐらいの知行をとりでもしさうな様子。○供廻り—供の一群。○息をはかりに—息のある限り。○本國本地—肥後の熊本の男である。次の節の本國長崎の註參照。○會稽の恥辱—支那の春秋時代に、越王勾踐が吳王夫差と



戦ひて敗れ、會稽山に逃げこもりて、遂に降服し、さまぐの恥を蒙つた故事から、敵の爲に蒙つた恥の意に用ふ。○御自分  
 ーお前。○比翼の盃ー夫婦となる盃。○言入れの頼みーもと結納をいひいれと讀んだのが、ゆひなふといふに至つた。藤井博  
 主説。これは自然のやうに思はれるが、そのいひ入れは、結婚の申込のこと、その頼みとは結納のことをいふのだ。○諛ふま  
 いー源五兵衛の身が落ぶれてゐるから、わざと三五兵衛の私に申し出て、へつらふやうな態度をとるまい。○曲がないー趣が  
 ない。○見付られたかー見極めをつけられたか。○聞えぬー分らぬ。○追腹切れー後を追つて切腹しろ。

【譯】 丁度其處へ千石位はとりそんな風采の侍夫婦が、華かな供の一群をつれ、おまんの親父新兵衛に案内をさせ  
 息のあるかぎりにかけて「まだ死に切らぬは嬉しいとちや」といつて、手負の夫婦のものどもを看病し、耳に口を  
 つけて大聲をあげて「え、云ふても言ひ甲斐のない様になつた源五殿よ。私は先年京都で出遇つた、林と云つた腰  
 元姿の男にて、今こそ笹野三五兵衛と申すもの。これは我妻にて、あの時小まんといつた女ぢやが、お忘れなされ  
 たか。計らざる縁にて、わが親の敵の在り所を教へて頂き、その敵の別名まで承つた故、翌年には見事に敵を討ち  
 遂げるとが出来て、數年に亘る本望を達し遺恨を晴らし。此小まんと夫婦となつて、本國の熊本に歸り、會稽の恥  
 を立派にすゝぐとが出来、武士としての美名を輝かすことが出来たが、それといふも皆源五兵衛殿のお情で、その御  
 恩に對しては海山ほどの報してもなほ報ひ足らぬのである。それにしても先づ第一に、お身の行衛を尋ね、私の  
 主人にたのみて、あのおまん殿と夫婦の盃を交はさせ縁を結ばせ、お國を肩廣く渡らせようと、心を盡して尋ねた  
 が、今日まで行衛が分らなんだ。その中にもあのおまんに、他へ縁付させては、恩を報ゆるとも甲斐がないから、  
 まづ他の方からの申込があつても、その方を止める爲に、私等の方へ呼び迎へておい、その間にゆる／＼と貴殿  
 を尋ねようものと、我々夫婦にて、媒をたのみ、こしらへ名をして、結納を送つたのは、この三五兵衛であつたの  
 ぢや。名残り多い、残念なことぢや。だがそれにしても趣のないとちや。私の方でよし分らないでも、笹野三五  
 兵衛といへば、只今親の敵を討ち遂げ、本望を達したものであるとは、丁度九州に隠れなく名が響いてをるのに、  
 何故私を尋ねては下さらなんだのぢや。但し今日落ぶれてゐるからには、人氣のある私に諛ふやうなことをすまいと

の、卑下する心からの差控であつたのか。但しまた、私が昔の御恩を忘れて、知らぬ顔をしさうな男であると、見  
 極めをつけた爲に、尋ねては下さらなんだのか。恥しいとちや、本當にさうとあつては分らぬ、恨めし、とちや。そ  
 れにつけても、せめて丁度よい時お目にかゝつて、詞を替はすとの出来たのは満足ぢや。でも後から話をきいて、  
 此三五兵衛に、追かけて腹を切れといふ思召であつたのか、それにしても趣もないとちや。そんな筈ではなかつた  
 が、源五殿」といつて抱きついて泣くと、臨終の際のおまんも眼をあげて、じろりと見た眼には涙がた／＼へてゐた

源五兵衛も手合せ、「忝い」とばかりにて、各々わつと泣く涙、落て流れて紅の、朱の血潮も洗ひけ  
 り。源「ア、三五殿、御夫婦の御禮は來世で〜。とても情に御介錯、早ふ〜」と苦しむ聲、三「エ  
 、腑甲斐ない、氣遣ひすな。尤も深手といひながら、本國長崎に黄陳といふ南蠻外科。昔の華陀が仙  
 方を傳へ、斷れたる筋、折れたる骨、落ちたる首も接ぐ名人。此療治にかけたらば夫婦が命も恙なく  
 千年までは千石取が、受取つたりや松の風。風に當つるな身、揉むな」とり〜さま〜取繕ひ乗物  
 に乗せ、三味線に乗せて謠ふは「源五兵衛、何處へ往さやるぞ薩摩の山の、山は寶の山とかや。」

【註】 ○腑甲斐ないー意氣地のない。○本國長崎ー兩節には本國本地とある。此本國の意を、肥前とすると、前の處は肥後を  
 さ、ねばならぬから具合が悪い。さらばと、つて肥前肥後を一つに見るもどうであらうか。樋口氏は、或はこれは本朝、日本  
 の意と解しては如何との説だが、此處は支那のことが後に出るから、それでも許せるとしても、前節のは本朝とすると聊か具  
 合悪しく、或は筑紫を即ち九州全部を、一國と見る意であらう。その少し前には九州に隠れなきとあるから、殊に此感がする  
 ○南蠻外科ー外科醫術は天正頃に南蠻人といはれた葡萄牙人や西班牙人からはいつて來たと。○華陀ー支那の三國時代の魏の名  
 醫であつた。○仙方ー靈術、不可思議な醫術の意。○千年まではー長くの意で、千年といつたから、千石取る武士が保證する



といつて、千年の壽を保つ松にかけて、松の風といった、○三味線に乗せて―乗物即ち輿に乗せるといつたから、直ぐに三味線にのせるといつた。○寶の山―琉球屋が金持であることから、その家へ入り筈になるのを寶の山へ入るといつたのだ。

【譯】源五兵衛も手を合せて、「忝けない」といつただけで、各わつと泣けば、涙か流れて、紅の血汐も洗ふ程であつた。やかて源五は「三五殿、御夫婦のお情に對する御禮は、來世で申しあげる。一層のことお情序に、御介錯を早くして下され」と苦む聲をきいて、三五兵衛は「えゝ意氣地のないとをいやるな。心配しやるな。成程傷は深いが、わが本國長崎に、黄陳といふ南蠻即西洋の外科醫術を學んだ醫師がある。昔の支那の名醫華陀の靈術を傳へて切れた筋や、折れた骨も、落ちた首もつなぐほどの名人である。此療治にかけたら夫婦の命も、無事に千年までは千石取りの私しが受合つた。千といへばそれにちなむ松吹く風にもあてるな、身をもむな」といつて、とり／＼にいろ／＼と取替ひ、駕籠に乗せて行つたといふが、その物語を三味線に乗せて謡ふ歌は「源五兵衛何處へゆきやる薩摩の山の、山は寶の山である、千萬長者の琉球屋であるとか」

高野山  
女人堂  
心中萬年草



高野山  
女人堂  
心中萬年草

解 說

外題年鑑によると、此作は寶永五年四月十六日から竹本座にて上演したもので、作者五十六歳の時の作である。高野山といへば、女人禁制をもつて有名なものである。従つて此山には小姓が澤山ある。南谷吉祥院の小姓の一人に成田久米之介といふのがある。彼は神谷宿の紙屋雜賀屋與次右工門の娘お梅と戀し合つてゐた。處がお梅は京烏丸の紙商美濃屋作右工門と結婚せねばならぬ破目になつた。お梅は即ち久米之介を呼び下すべく、彼の本國からの手紙だといつて、吉祥の法印にあてた偽手紙を出した。ところが偽手紙は久米之介にあてた艶文と中味が入れ違になつてゐて、事の一切がばれた。

お梅はかくて其夜結婚の席上から危くものがれて、久米之介と二人で駆落し、女人堂に至つて心中するのである。此題名は二人の心中の日、久米之介をたづねて高野に來た彼の姉が、鹽水につけて見ると旅人の生死を占ふことが出來ると傳へられてゐる、高野産の苔草万年草を以て、久米之介の安否を占うたに原づくものである。

此作の文化史的興味は、高野山上の寺院内に於ける男色流行の有様や、墓石建立の狀體や、當時流行した結婚の當夜に於ける石打の有様などにあるといつてよからう。



高野山 心中萬年草  
女人堂

上之卷

歌女嫌をんなきらやる、高野の山に、何故なぜに女松めまつは生はゆるぞや。何故なぜに女松めまつが生はへまいならば、夜這星よほしでも飛とぶまいか。松より梅より柳より、お寺小姓てしやうの兒櫻こごぎくら、兒文珠こもんじゆの御相傳ごさうだん、大師の廣め置き給ひ、俗も尊たうとむ若衆わかしゆの情なさけ、衆道秘密しゆだうひみつのお山とかや。南谷みなみだにの吉祥院きしやういんに、播磨はりま大名の使者有とて、庭の掃除さうじの下男したなま、小姓こしやう衆は客殿きやくだんの、床とこに掛物かぶつもの、臺子たいすの塵埃ほこり、掃はいつ拭ぬふつ忙いそしさ。

【註】○女嫌をんなきらやる：飛とぶまいか—この全體が歌。高野山は山頂に平原あるより名づけ、弘法大師金剛峯寺を開く、古來女人禁制としてある。それで女嫌をんなきらやるといつたので、その女人禁制の山にどうして女松めまつが生はへるのか。何故なぜに女松めまつが生はへてはなるまいといふならば、夜這星よほしでも飛とんでならぬといふかと、女人禁制の云はれなき事を諷したのである。○生はへまい—生はへてなるまい。○夜這星—流星のことで、わざと卑猥とされる言葉を用ひて、くだけて出たのだ。○兒櫻—兒櫻といはんが爲に、その前に松梅柳といひ、要するに高野山では女を遠ざける代りに小姓や稚兒を近づけることを云はんが爲に用ひたのである。○兒文珠こもんじゆの御相傳—文珠菩薩の本名は文珠師利であるが、其幼名を兒文珠といふ。又師利をいふ梵語の音をわが尻に通はせ、元來文珠菩薩には決してそんなことなきに、兒文珠尻といふことから、文珠は男色に關係ありとし、弘法大師が男色を文珠から傳へたとこじつけた。○大師の廣め：弘法大師が傳へて廣めた男色といふ、蓋し女犯を禁じた餘弊として男色が盛になり、大師山を開きしのみならず衆道の開山なりと嘲るもの出づ。○俗も尊たうむ若衆わかしゆの情—世間で尊ぶ男色。俗は出家に對していふ一般世間。若衆はも



と歌舞伎の若いものをいつた、それから一般に男色に關し美少年をいふ。○衆道秘密—高野山の眞言秘密の語にかく。衆道は若衆道、即男色の交情をいふのだ、○南谷—此外にも谷の字のついた處あれど、別に谷にあらず、實は平地である。吉祥院といふ宿坊は實際はなかつたやうだと。○小姓—貴人につきそう給仕をいふ。○臺子—茶の道具をおく棚。

【譯】 女を嫌つて女人禁制などいつてゐる高野山に、何故に女松ははへるのだろ。何故に女松が生へてなるまいものならば、夜這星は飛んではなるまいか。ところが夜這星が飛び、女松の生へるのも自然とすれば、高野の山に、松よりも梅よりも柳よりも、稚兒櫻が生へるのも自然であらう。その稚兒櫻ではない稚兒のお寺小姓といふものは兒文珠から傳へて、高野山の開山弘法大師が廣め置かれたもので、此若衆道といふのは、出家間のみでなく、世俗でも尊むもので、高野は眞言秘密のお山であると共に、また衆道秘密のお山であるといふことぢや。ところで今日は南谷の吉祥院に播磨の大名の使者が來るといふので、下男は庭の掃除をする。小姓衆は客殿の床に掛物をかけたり、臺子の塵を拂つたり、掃いたり拭うたり忙はしいことである。

「是長介、關介、掃除が大方出來たらば、不動坂まで一走り、御使者が見へるか見て戻りや。急ぎや〜」と有ければ、「いやそれは餘の者遣らしやりませ。私共は皆様の髪を結はねばなりませぬ。寺方のお小姓は、俗の内儀と同じ事。法印様の奥様の髪結はずに濟ますか」と、じやれをまうけの顔ひねて、足らぬ心の花之丞、「ム、そんなら此方は法印様と女夫か。エ、在所の父様や母様は嘘つきじや、山へ登れば魚喰ふ事がならぬ程に、豆腐や蒟蒻を、鯛やはむじやと思ふて喰へ、山の芋を鰻と思へ、法印様を親と思へとばつかりで、女夫とは聞かんだが、ア、思ひ當つた。一昨日のお日待に、法印様の相伴で、善哉餅を十三杯 それから身持になつたやら、ぼてれんじや」と腹摩り、傍輩は皆兒小姓

の顔を赤めて挨拶せず。

【註】 ○不動坂—京坂よ の登り にて、側に不動堂ある故名あり。○俗の内儀—世間での妻君も同じ、小姓が俗の妻君に代り様々の世話をする故いふ、つまり作者が滑稽によつて、暗に墮落をなじつたのだ。○法印様の奥様—僧正や大和尚に相當する僧位を法印と云ひ、その奥様とは、こゝでは小姓のことをしやれていつたのだ。○じやれをまうけ—洒落を眞に受ける。○顔ひねて心足らぬ—顔はふるくさく、大人びて馬鹿な、鈍な。○在所—田舎、實家。○山へ登る—高野山へ寺入りする。○はむ—はもと稱する關西に多き鰻やうな海の魚。○お日待—日待は日祭、十五日の祭禮のこと。○善哉餅—つぶし餡の汁粉のこと。○身持、ぼてれん—皆妊娠したといふしやれ。○小小姓—或は兒小姓、即ち若い小姓の意。

【譯】 その時誰か「これ長介、關介、掃除が大體に出來たら、不動坂まで一走りしてお使者が見えんか見て來やれ、急いで行きや」といふと、二人の中の一人の男が「いやそれは誰か他のものをおやりなされ、私共は皆さんの髪を結はねばなりませぬ。寺方のお小姓と申すものは、つまり俗世間の内儀と同じものである。だから、内儀にあたるお小姓が法印様の髪を結はずに済みますか」と洒落れていふと、それを眞顔で受けた、顔のひねた聊か鈍な花之丞は「む、そんなら私は法印様と女夫か、え、實家の兩親は嘘つきぢや。山へ登り寺へ入れば、魚を食ふことは出來ぬから豆腐や蒟蒻を鯛やはもぢやと思つて食へ、山芋を鰻と思へ、法印様を親と思へといはれたばかりで、女夫とは聞かなくつたが、いやそれで思ひ當つたことがある。一昨日のお祭禮に、法印様のお相伴して、善哉餅を十三杯くつたが、あれから身持にでもなつたものか、腹がぼてれんとふくれた」といつて、腹をさすり、同輩は皆年若い小姓であるから、顔を赤めてだまつてゐた。

久米之介は年嵩にて、なふ花殿、笑止 事いふ人じや。是に御坐る主膳殿、八彌殿、右門殿、年は三ツ四ツ下なれど、此方の心が足らぬ故、なぶられて居さつしやる。此方は他國者なれば、當地ではこ



なたの里を頼みにして、一家同然のこなたを笑はせて本意でない。此久米之介が居る内は侮らせはせまいが、追付も暇申請け、國へ歸つた其跡では、高野一山のなぶり者。少たしなんで下され」と、いへばむつと腹を立て、花「鈍な事云やんな、法印様の女房が法印様と並んで、善哉餅喰ふて孕んだがおかしいか、コレ忝くもあれが親は神谷の宿で隠れもない雜賀屋の與次右衛門、母様と一つにいつゝも物を喰やるであれも生れる、お梅といふ美しい妹迄生みやつた。そなたも何時も此方へ來て、妹のお梅と二人藏へ這入つて、善哉餅を喰はしやるやらお梅が聲でうまひ／＼といふたを、おれや聞いたぞ」といひければ、久米之介は赤面し、残りの傍輩口々に「賢い人のいふ事を、氣にかけては果がない。去ながら、正直な法印様のお耳へ入れては云譯ならぬ。小姓仲間の恥辱なり。沙汰しやるな」と制せられ、六尺共も聞流し、「阿房に油斷は猶ならぬ」と、目ませしてこそ入にけれ。

【註】 ○なぶられて：馬鹿にされて。○他國者：播州の産だ。○一家同然：花之丞の妹 梅にほれてる故に二人の間は兄弟同様になつて。それ故に花之丞を笑はせるのは望ましくないといふのだ。○たしなんでくれ：謹んでくれ。○紙屋の宿：紙屋とも紙谷ともかく。不御坂の口の宿にて、製紙にて知らる。○いつゝも：何時ものつまつたのだ。○此方へ來て：私しの家へ來て。○賢い人：反對の語で馬鹿といふ意。○六尺ども：駕籠かきのこと、下男にも用ふ。○目ませ：目と目をかはす、即目くばせ。

【釋】 久米之介は年が多いので「なう花の丞殿、をかしたことをいふ人ぢや、こゝにゐる主膳、八彌、右門達は、年は三つ四つ下だが、お前が野呂間だから、此人達に馬鹿にされてゐらしやる。私しは他國生れの者故、此土地ではお前の甲を頼りにして、一家同然になつてゐるのだから、お前を人に笑はせるのは望ではない。此私しがゐる間は他

人に侮らせはせぬが、私しは追付け、お暇をもらつて、國へ歸るのぢや。その後で、お前はうつかりすると、高野一山のなぶり者とされます。少し謹んで下され」と、いふと、花之丞はむつと腹をたて、馬鹿なことをいやるな。法印様の女房同様の小姓が、法印様と並んで善哉を食つて、孕んだといふのが何がをかしいか。忝くも私しの親は紙屋の宿では知れ渡つた雜賀屋の與次右衛門様ぢや。それが母様と一緒にいつも物も食やるので、おれも生れた。お梅といふ美しい妹も生れた。お前もおれの所へ來て妹と二人で藏へはいつて、善哉でも食やるのやら、お梅がうまい／＼といつてるをおれや聞いたぞ」といへば、久米之介は赤面し、あとの同輩どもは口々に「馬鹿者のいふことを氣にしていると果しがない。だが、正直な法印様のお耳へ入つては云ひわけが立たぬ。すると小姓仲間の恥になる。黙つてるがよい」ととめられて、男共も聞流しにして「馬鹿には油斷はなほさらならぬ」と目くばせをして入つて行つた。

やゝ有りて表より、「成田久米之介に逢ひましたい。お國の親御武右衛門様よりの飛脚なり」と、若黨一人刀の先に、文箱付けてつゝと入。ム、久米之介とは身がごと。國許よりの使とは氣遣はし」と云ひければ、「いや別義にてもなく、御老體の武右衛門様、御隠居の願ひに付、久米之介を呼戻さんと、御一門の談合極り、法印様への御狀段々の御口上、兎角は首尾能お暇の出る様に、御傍輩様達へも頼みませとの御使」と、文取出せば久米之介、「是は思ひ寄らぬ事。父が老後の大望を違背ならず、と云ながら我口からは申されず。何れも傍輩云合せ、お暇の出る様に、取合せ頼みます。狀も進めて能い様にいづれもに任する」と、手を合すれば人々も、「心一ぱい申て見ん」と、一度に坐敷を立ちけるが、花之丞ふり返り、「これ久米殿、お暇貰ふて往しやらば、糠袋はおれに下され、巾著にして穴いちの、



つぶ入ます」と打連れて、皆々奥にぞ入にける。

【註】○逢ひましたい―お目にかゝりない。○御狀段々の御口上―御狀や、色々の御口づたへ。○頼みませ―たのみなされませの敬語的表白。○取合せ―取りなし。○狀も進せん―手紙も差上げん。○糠袋―男をみかく爲の袋。○穴いち―穴打のこと。むくろじや錢を、一定の隔りから穴に投げて、巧に穴の中心に投げ込んだものが一番の勝となる遊戯にて、著者の少年時代にも、よくやつたもの。○つぶ入れ―穴打錢の代りに、むくろじの粒を入れる袋にする意。

【譯】暫くしてから表から、「成田久米之介様にお目にかゝり申したい。お國の親御武右工門様からの飛脚でござる」といつて、若者が一人、刀の先に文箱をつけて、つとはいつた。久米之介即ち「米之介とは私しの事。國許からの使とは心配だ」といへば、使は「いや別の儀でもありません。御老體の武右工門様が御隠居なさる願いついて、久米之介を呼もどしたいと、御一族の話がきまつて、法印様への御手紙や、色々の御つたへなどを承り、とかくは首尾能くお暇の出るやうに御朋輩へも御頼みなさるやうにとの御使でまゐりました」といつて、手紙を取出すと、久米之介は、「之は思ひもよらぬこと、父が老後の望を背くわけには行かぬ。といつて、自分の口からは御暇を願ふわけにもゆかず、皆で朋輩中云ひ合せて、お暇の出るやうにとりなしを頼みます。手紙も差上げて、よきやうに皆にお任せする」と手を合せていふと、小姓達は「せい一杯申上げて見ませう」といつて、一度に坐をたつたが、花之亟はふりかへつて、「これ久米殿、お暇貰ふて歸られるなら、糖袋はわしに下され、穴いちの粒を入れるにつかふから」といひ、やがて皆につれて奥に入つた。

飛脚はそつと側に寄り、「申しお國からとはいつはり、雜賀屋へ出入いたす、岸の和田の九兵衛と申す駕籠の者、お梅様のお頼で、密にお話しいたせと有る。彼の御存知の京の紙屋、此中下つて逗留し、二三日中に祝言し、其明る日、お梅様を京へ連れて參るとて、内方にも御用意。兎角お前が片時も早く、

山をお出なさると、何處ぞへ一所に立退るか、分別も有る處、それ故内々約束の如く、お國の親御の僞狀で、お暇取つて今日中に、久米様連れて来てくれと、いとしばやお梅様、涙を流し手を合せ、お頼みなされた手前も有、どうぞお供いたしたし。詳しい事はお筆に」と、懷中よりお梅が文、取出してぞ渡しける。

【註】○岸和田―泉州の町。○此中下つて―此間大坂へ下つて。○いとしばや―いとほしの轉。氣の毒、可哀想の意。○手前もある……お頼なされ、私はお頼を受けた次第もあるの、お供して山を下りたい。

【譯】飛脚の男は、密に久米之介の傍へより、「申し、お國からといふのは偽りで、私は雜賀屋へ出入いたす泉州岸和田の九兵衛と申す駕籠の者でござります。お梅様のお頼みで、内々でお話し申せとのことでした。あの御存じの京の紙屋ですが、あれが此間大坂へ下つて来て、まだ逗留し、二三日中にお梅様と祝言して、其翌日にはお梅様を京の方へ連れて歸るといつてゐるので、お内の方でも其御用意をしておいでなされます。だから兎に角お前が一刻も早く山をお下りなされると、一緒にどこかへ立退くかどうか分別も出来るであらうといふ所です。それで内々でお約束の通り、お國の親御からの手紙のやうにして、僞せ狀をかい、お暇を貰はせて、今日の中に久米様をつれて来てくれと、お氣の毒に、お梅様は、涙を流し手を合せてお頼みなされ、私もそれをお引受した手前もあるの、どうかお供して山を下りたいと存じます。詳しいことはお手紙に」といつて懷中からお梅よりの文を出して渡した。

久米之介も心せき、成程―其筈。そなたも知つての上なれば、隠す事は少しも無い。外の者に添はせては、生きて居られぬ二人の中、親の命と有からは、法印了簡ないとても、暇請捨て出易し。先文



見んと封じ目切り、讀まんとすれば南無三寶、上包はお梅が文、久米様との名宛にて、中は吉祥院法印様參、成田武右衛門親の文。久米、扱は聞へた、お梅が常々男手を能く書くゆへに、國許の状をも人頼みするなど、下書書いて渡せしが、隠忍んでする事として、封違へて我文が、法印の手に渡つたか。これは「と色違へ、立つても居ても詮方なく、うろたへ廻る折柄に、主膳立出で「是々飛脚、法印直に問ふこと有、先休息召されとの事なり」と云ひも敢ぬに久米之介、「なふ主膳殿、最前の文を法印様は、はや御披見なされたか。封じ目お切りなされずば、そつと取つて来て下され。一期の御恩」といひければ「イヤ其状は、法印様繰返し披見有り、反故棚へ入れ錠下し、手が汚れた勿體ないと跡で手水をなされたが、如何なる状で御座るぞ」と、問へ共譯は話されず、はつと計に胸躍らし、久「詮義に逢は、如何せふ」と、飛脚の九兵衛が心迄、細谷川の丸木橋、文返れとぞ祈りける。

【註】○心せき―心がいそぎ。○暇請捨て―許しはなくとも、暇を願つた丈けで、○聞えた―分つた。○男手をようかく―男文字をよくかけるから。○國許の状―國許から來た風に見せるべき、久米之介宛の手紙も、他人に頼まないで、お梅お前お書きなされとて、久米之介が下書を書いて渡したが。○隠忍んでする―かげでこそ―とやるので。○我文が―我へあてた文が。○一期の御恩―一生の御恩を蒙つたと思ひたいからの意。○細谷川の丸木橋―源平盛衰記、三十八、平通盛の歌「我戀は細谷川の丸木橋ふみかへされてぬる、袖かな」をとつて、文がもどつて來ればと祈つた意。

【譯】久米之介も心がせいて、「成程其管ぢやお前も知つてゐるからには隠すことは少しもないが、他のものゝ女房にさせては、二人は生きてはゐられぬ仲ぢや。丁度國の親の云ひつけとあるからには法印の御承認がなくとも、暇

乞をした丈けで、山から出てゆき易い。先づ文を見よう」といつて封じ目を切り讀まうとすると、これはしたり、上包はお梅が手紙で、名宛は久米様となつてゐるか、中は、吉祥院法印様まゐる、成田武右衛門とある親の文である。久米之介は「む、これで分つた、お梅が平生男文字をよく書くから、國許から私し宛の擬手紙も他人に頼むな自分で書けといつて、私しが下書を書いて渡したが、こつそりと隠れ忍んでやる事なので、封を違へて、我に宛てた文が法印の手に渡つたか、これは「こまつた」と色をかへて、立つても居てもゐられず、何ともしかたなく、うろたへ廻つてゐる折柄、主膳が出て來て「これ―飛脚、法印様がぢき―にお問ひなさることがあるから、先づ休んでゐなされとのことぢや」といひも終らぬに久米之介は「なう主膳殿、先程の文を法印様ははや開いて御らんされたか、まだ封をお切りなされずば、そつと取つて来て下され、一生の御恩を感じ入るから」といへば「その手紙はもう御法印様には幾度も御らんなされて、反古棚へ入れて、錠を下ろし、手が汚れた勿體ないといつて、あとで手をお洗ひなされたが、どんな手紙でした？」と、とふが、譯を話すことは出來ず、久米之介ははつと胸を躍らし「詮議をなされたらどうしよう」といふ。又飛脚の九兵衛さへも心の中で、平通盛の細谷川の丸木橋の歌ではないが手紙か返つてくれたらなと祈つた。

時に麓の山どよむ、木遣に法のひよんゑい、聲播磨路の大名より、御墓引くこそ三重殊勝なれ。則宿坊吉祥院、僧達立合、石塔請取給ひければ、使者は坐敷に直りける。法印やがて出迎ひ、「遙々お使者御太儀、是へ。それお盃、お茶持て參れ」と挨拶有。使者の侍、慇懃に、「旦那が悲母第七年にあたりし故、御當山に石牌を立、日牌を供へ申に付、詞堂銀五百枚奉納したされ候。御受納あつて末世末代、不退轉の御回向頼み存候」と包みの白銀、目錄添へて渡しければ、法、武門の御身に御信心御孝行の御追福、感じ入候。それ我山に卒塔婆一本殘せし人は、五十六億七千萬歳の後、彌尊の出



世に逢せ給はん御誓願、などか疑ひ候べき。先此銀子の請取認め申さん」と、法印奥に入給へば、豫て用意の勝手より、銚子盃重箱や、はや吸物の椀折敷、善盡したる馳走なり。

【註】 ○どよむ一なりひびく。○木遣に法一木遣歌にのりて、のせて、ひよんゑいと掛聲しながら石塔を引き上げる。佛法供養の爲に石塔を建てる故、のりを佛法の「法」にかく。○ひよんゑい一かけ聲。○聲播磨 聲をはるにかく。○お墓引く一即石塔を引き上げるのである。元來高野山には宗派の差別なく、神佛各宗のもの皆佛法供養の爲に、先祖代々の墓とか何某の墓とかを建てる習があり、今木遣歌で墓を引上げて来たのだ。○宿坊一高野山には宿屋なく、参詣者は皆其國其國の引受けの寺にやどる。之を宿坊といふ。○僧衆一僧達。○石塔請取一あとに出て来る石塔、今引きあげた墓のこと、それをもつて来たのを受取るのだ。○悲母一亡母。○日牌一毎日讀經供養することをいふ。その時は勿論亡者の法名をよみ上げるのである。○詞堂銀一志納銀ともいふ。先祖供養の爲に寺に寄附する銀。○銀五百枚一一枚は普通に一分銀のことをさす。四分が一兩にあたる。○不退轉の御同向一一たび占めた地を動かさざる永久に轉變なき回向の意。○御追福一死者の冥福を祈ること。○卒塔婆一木又は石にて地水火風空の五層の塔をつくり佛に供ふるもの。如來始めて迦葉佛の爲にたて、日本では馬子大和高市郡大野丘に立つ。死者の冥福を祈る爲に立つ。○五十六億七千萬歳一これは釋迦のあとで彌勒が出るまでの間に、此時彌勒佛出て、衆生を濟度すといひ、即此佛は世界黄金時代に現れる理想佛とさる。○誓願一弘法大師の誓。大師は此誓の爲佛法の爲に今も働き、今日でも大師は尙生きて存するとし、お守りとして年々大師の古着の切を頒けてゐると。○善盡したる一善は膳にもかく。

【譯】 その時麓の山が鳴りひびき、木遣に乗せて、ひよんゑいの掛聲につれて、聲をはりあげて播磨の大名からの御墓を引きあげるは殊勝である。則ち播州の宿坊である、吉祥院の僧達は、皆やつて来て、石塔を受けると、やがて大名の使者は座敷に坐つた。法印はやがて出向ひをして、「遠方からの御使、まことに御大儀に存じます。いざ、これへ御通りあれ、これお盃をもつて、お茶をもつて来い」といつて挨拶する。と使の武士は丁重に「旦那が亡母七年の忌にあたるので、高野山に石塔をたて、日々の讀經供養をして貰ふことにして、詞堂銀五百枚を奉納なさる。どうかお受の上、末世末代まで、決して變ることない御回向をおたのみします」といつて、包の白銀に目録をそへて渡すと法印は「武家の御身でありながら、御信心深く、御孝行よりの御追、まことに感心いたします。一體此山に卒塔婆一本をあげて残す人は、五十六億七千万年の後、彌勒世に現はれる時に、それに出遇はせる誓を弘法大師はしておいでぢやが、決してお疑ひあるな、先づ此銀子の請取を認めませう」といつて、法印が奥に入ると、かねて用意の勝手から、銚子、盃、重箱などが持出され、吸物の椀、折敷、膳なども善美を盡した御馳走振である。

後住の弟子祐辨律師を始めとして、納所同宿入替り立替り、「山中と申し、風情はなく共御時分好し、お吸物でもお代へなされ、それ小姓衆、相手になつて御酒一ツ、緩りと上つて下され」と、待遇へば愛嬌の、小姓は「おあい」と色めきける。使者も數獻を傾け、「扱々御さりやうなる小姓衆、いづれもお名は何と申し、御生國はいづくの御方ぞ、仰聞られよ」と云ければ、「我等は有村主膳と申し、當國田邊の者、私は世繼八彌と申し大和の者、身共は伊賀の上野の生れ小栗右門と申します、私は此麓神谷の宿雜賀屋の花之丞、年は十九で法印様の御内儀、私が妹にお梅と申して、ずんど伽羅めて御座れ共、惜い事は女子で、坊様の口へはいりませぬ。私が顔は花の様に花之丞と申します。妹をお梅といふ譯は如何した事か知らね共、あの梅といふものを、こなたは割て見さしやつたか。中に平たい物が有る。此方のお梅が中にも、それが有やら無いやら、ついしか割つて見ませぬ。無念な事」とぞ眞顔成る。使者も返答し兼れば、傍輩は笑止がり、「是しい」と袖を引く。



【註】 ○後任の弟子—今の吉祥院の法主の後をつぐべき弟子。○律師—僧都の次の地位。○納所—寺務を扱ふ所をさし、遂にそれを扱ふ坊主。○同宿—文字通り同宿してゐる坊主。○風情はなくも……今日の言葉でいふと、何もございせんが丁度御飯時分です。風情なくは、これぞといふ趣なきも。○おあい—はいに敬語の意のおがそはつたのだ。○御きりやうなる—立派な。○ずんど—頗る、非常に、優れて。○伽羅め—上等とか立派な上品な意に用ふる語。○ついしか—しかは助辭。○無念なこと—行き届かぬこと。

【譯】 後繼の弟子祐辨律師を始め、寺務を扱ふ坊主や、同宿坊主など、入れ替り立ち替り、「山の中でござりますし、これといふ風情もござりませぬが、丁度時刻はよろし、お吸物でもおかへめされ、それ小姓衆御相手をして御酒を一つ差上げよ、ゆる／＼と召上つて下され」といつてもてなすと、愛嬌ある小姓は「はい」といつて、よい機嫌になるのである。使者の方でも即ち、四五杯のむと、「さても立派な小姓衆ぢや、いづれもお名は何と申すのぢや、生國はどこ／＼ぢや、お話し下され」といふと、「私は有村主膳と申し、此國は田邊のもの」又一人は「私は世繼八彌と申し、大和の者」他の一人は「私も伊賀の上野の生れ、小栗右門と申します」。「私はまた此山の麓紙谷の宿の、雑賀屋の花之丞と申し、年は十九歳で、法印様の御内儀でござる。又私の妹にお梅と申して、優れて別品なのがあります。惜しいことには女子であるので、坊様の口へははいりませぬ。私の顔は花の様に、花之丞と申します。妹をお梅といふのは、どうした譯か知りませぬが、あなた様はあのお梅といふものを割つてごらんなされましたか。中に平たいものがあります。私の妹のお梅の腹にも、それがあつかないかは、ついまだ割つて見ませぬ、不行届なことでござります」と眞顔にいふ。之をきくと使者も返答しかねてゐるので、花之丞の同輩達も氣の毒がつて、「これい／＼」と制しながら花之丞の袖を引いた。

久米之介はお梅が噂聞くに付けてもかの文の、法印の手に渡り、今や詮義の有るかとして、思痛める胸の中、釘を打るゝ八寸の給仕も更に手につかず、目に涙持つ計なり。使者重ねて「御自分はお年嵩

と見へ申、お名は何と、生國は」と問ひければ、久「我らは播州飾磨、成田武右衛門伴同名久米之介」使「ム、扱は同國武右衛門子息、高野に有るは此方か」と、見上げては泣出し、見下しては涙にくれ、打萎れて見へければ、身に思ひある久米之介、心便りも無き折柄故郷の人の染々の、涙にほだされ側に寄り、「一見に馴々敷事ながら、同國のよしと申、御落涙の様子、御心底の優しさも推量つて頼み奉る。私事此山に、一夜も足をとめ難き、身の難儀出来いたし、幸ひ國より迎ひも參る、具の事は麓にてお物語いたしません。お詞を添へられ、法印より暇を取り今日中に此山を連れてお出下されば、生々世々の御恩に受け、命の親と存じませふ」と、身の置處なきまゝに粗忽の無心も戀路ゆへ、若氣故こそ是非なけれ。

【註】 ○八寸の給仕—足の高さ八寸の膳と、胸に打たれる八寸釘とにかけける。○同名—同苗。○つぶさのこと—詳しいこと。○せん—せうの古い形。○生々世々の—現世も後世も、永世末世までの意。その長い間の恩として感じよう。○身の置き所なき儘に—ゐても立つてもゐられぬので。○粗忽の無心—粗そなた頼みごとをすること。

【譯】 久米之介は、お梅の噂をきくにつけても、あの文が法印の手に渡りて、今にも詮議をされることかと、心痛してゐる中は、八寸釘を打込まれるやうで、足の高さ八寸の膳の給仕も手につかず、目には涙をためてゐる。使者は又しても、「そなたは年が多いやうに見えるが、名は何と云ひ、生國は何處ぢや」といへば、久米之介「私は播州飾磨の成田武右衛門の息子、同じ苗字の久米之介と申す」。使者「むゝさては、武右衛門の子息、高野にゐるといふのはそなたか」と見上げては泣き、見下ろしては泣き、さも打萎れて見えると、心に思のある久米之介は、誰一人頼るものもなき折柄、故郷から来た使者の染々ここばす涙にほだされて、その側により「一度お目にかゝつたのみにて



馴々し過ぎるこながら、同國生れのみしと申し、御落涙の様子も不審ではあるので、お心の底の優しさも推量してお頼み申します。私は此山に一夜も足を止めにくい難儀が出来たので、幸と國からの迎ひも参りましたし、詳しいことは麓で申しあげますが、御詞をお添へ下され、法印からお暇を貰つて、今日の中に私を連れて山を下りて下されば、未來末代までの御恩と思つて、命の親と思ひませう」と、もう自分の身をどこにおいてよいか分らぬので、粗相の無心もするが、それも縁故であり、若氣ゆゑで、是非もないことである。

使者は膝を立直し、「是久米之介、お主が山へ登つたは、末は出家の筈なるに、今此山が出たいとは、還俗したい心よな。ヤレ出家する因縁を忘れたか恨めしい。お手前十二歳の時、傍輩伊吹重太夫が二男卯之介といふ十一に成る友達と、にはよりあはせ雞合の友達喧嘩あへなくお主が手にかゝつた、卯之介が兄、伊吹千右衛門とは身共が事。其頃は數年の在江戸、後日に聞けば、殿よりは切腹との御評定、父母が了簡にて子の可愛いは同じ事、親達へ歎きをかけ、討れし者の爲でもなし、出家させて、幼い者の後世弔はせんとの扱ひにて、我親共が命を助け、當山へは登らぬか。一人の弟が死骸をも見ぬ懐しさ。せめての形見に其方を一目見たさに、此度のお使ひを望み受け、小姓衆の名を尋ね、久米之介と聞くよりも、弟が有るならば今年は十八番む花、つれなくも討つたかと思へ共、あらためて恨みを云はん様もなく、仇を思なる出家して後世を助けてくれるかと、思へば形見の心地もする。恨めしいと床しいと、未練の涙をこぼしたが、口惜しいぞ久米之介。たとへ親の敵でも出家は格別、在家となれば見遁し置かれぬ弟の敵。此山が下り度いと、それこそ望む處、麓に下つて、八年以來鬱憤を散せん。法

印に斷り申す爲、御意を得んと立處へ

【註】 ○雞合の友達喧嘩—鶏を戦はせる鬪鶏の勝負から起つた友達同志の喧嘩 ○お主が手にかかつた—お主の手にかゝつて死んだ。○當山へは登らぬか—此山へ登つて来たのではないか。○つれなくも討つたか—その弟を無情にも打つたかと思ふもの。○仇を思なる出家して—仇である身が出家して、弟の冥福を祈つてくれ、未來を助けてくれ恩を返してくれる。○形見—弟の形見 ○出家は格別—出家したものは、親の敵でも討てぬ ○在家—俗人 ○斷はり申す爲—久米之介を討つことをこととはつて同意を得よ。

【譯】 使者は膝を立て直し、「これ久米之介、お主が山へ登つたのは、やがては出家となる筈であるに、今此山から出たいといふのは、還俗したい心ぢやな、ヤレお主は出家の由縁を忘れたか、恨めしや。お主が十一の時、朋輩の伊吹重太夫の二男、卯之介といふ十一になる友達は、鶏合せから友達喧嘩をして、お主の手にかゝつてあへなくも死んでしまつた。その卯之介の兄伊吹千右衛門といふのはわしの事ぢや。その頃は數年の間江戸にをり、後で聞くと、殿様からお主に切腹の御評定があつたといふが、父母の了簡にて、子の可愛いは誰しも同じことぢやから、此上お主に切腹をさせて、親達に歎かかけたところで、討たれた卯之介の爲には何にもならぬ、それよりか、出家させて幼い卯之介の後世を弔はせうとの扱ひで、わしが親達がお主の命を助け、此山へは上らせ、お主は上つたのではないか。一人の弟の死骸をさへ見なかつた懐しさで、せめては形見であるお主を一目でも見たさに此度のお使を、われから望み受けて登山し、今小姓衆の名を尋ねて、お主の名が久米之介と聞くなり、弟がゐたらば、今年は十八歳蕾の花ぢや、それをお主はつれなくも討つたかと思へど、改めて恨を述べやうもなく、仇の身ながらも、出家して弟の後世を弔うて、助けてくれ、恩かけてくれるかと思ふと、弟の形見の心地もする。恨めしい心と床しい心と争ひ合つて、未練の涙をこぼしたのが口惜しいぞ久米之介。たとへ親の敵でも出家のものに對して、格別の扱をするといふから、今お主が出家の身となるといへばどうも出来ぬが、還俗の身となるとすれば、弟の敵とて見のがすことは出来ぬ。此山が下りたいとは、それこそこちらで望む處、麓に下りて、八年來の鬱憤を散じよう。ついて



は法印にことはつて御意を得よう」と立つところへ、

法印駈出で、「様子詳しく承る。やれ若衆奴、をのれは未だ髪こそ剃らね、九字護身法傳授して、禮拜加行も勤むれば出家も同然。殊に大師以來結界清淨の御山、假にも女犯の穢があれば、一山暴て震動し、其身は狗賓に五體を裂れ、木の枝にかけらるゝは、目にも見せ話も聞ふ。それを知つて此寺を、能ふもく穢したな。國元の親から珍らしい文を得た。此年になれ共、思ひまゐらせ候べく候。御げんの如く二世三世、くされく」と血判据へた、小舌たるい女子文、手に觸れたるは今日始め、梅よりとは誰が事。皷の寄つた此法印を、梅干に譬へたか。師匠と思ふな弟子でもない。あのお使者の手に懸り、死のふが生よふが構ない。かれ引ずり出せ叩き出せ。十一から教へた經文も眞言も、魔道へ捨てたか勿體ない」と、腹立涙にくれ給へば、久米之介は伏沈み、有あふ小姓同宿も、側から何と千右衛門呆れ果たる計なり。

【註】 ○髪こそ剃らね―立派に出家の身にはならぬが。○九字護身法―臨兵闘者皆陣列在前の九字を唱へ、指先で先づ空中に縦に四線をかき、更に其の上へ横に五線を引き、所謂九字を切ると、一切の災禍をのぞくといふ眞言宗、修驗道の護身法。○禮拜―佛前にて兩膝申敷を地につけ合掌低頭するをいふ。○加行―修行力を加へる義にて、受戒灌頂等の儀式を行ふ前に、準備の豫習をするをいふ。○結界―法力をもつて降魔を入れざる一定の區域をいふ。弘法大師高野山結界文といふのに、有ゆる東西南北四維上下七里の中、一切の惡魔邪神等皆我が結界を出て去れとある。○女犯―僧の邪淫戒を犯すをいふ。○狗賓―天狗。○候べく候―女文に用ふる文句にて男の文の候と同じ。○御けん―御見、こゝは「御覽」の意。○二世三世―も變るな變るまい。○く

されく―誓の詞にて、此誓にそむかば、我身もくされの意を示すもの。○小舌たるい―甘たるい。なまめかしい。○眞言―眞言の呪文のこと。諸佛菩薩の誓を説いたもの。之を誦すると、無量の功德を成すとさる。○何と千右衛門―何とせんにかく。何とせん方もなく、千右衛門も呆れてゐた。

【譯】 法印は駈け出して、「様子詳しく承つた。やれ、若衆奴、おのれはまだ頭の髪はそらぬが、九字護身の法も傳授し、禮拜も加行も勤めるからには、出家も同じことぢや。殊に弘法大師以來、此區域は魔障を入れぬ清淨の御山である。假りにも女を犯した穢が此山に入れば、一山荒れて震動し、彼は天狗に五體を引さかれ、木の枝に引かけられるといふことは面のあたりに見せもし話にもきいたことであらう。それを知りながら、よくもく―此寺を穢したことぢや。國元の親からといふ珍らしい文を手に入れた。思ひまゐらせ候、御らの如く二世も三世もと誓ひ、變らば、背かば身もくされ、と、血判を押した艶つぽい女の文であつたが、そんな文を手に入れたのは、此年になつて今が初めぢや。梅よりとは一體誰がことぢや。皷のよつた此法印を梅干にたとへて、梅干爺とでもいふつもりか、今日限り師匠と思ふな、弟子でない。あのお使者の手に懸つて、死なうが生きようが構ひはせぬ。彼を引ずり出せ、叩き出せ。十一の時から教へた經文や眞言の呪文は魔道へすて、しまうたか、勿體なや」と腹を立て涙にもくらくなつてしまへば、久米之介は伏しふさいで、其所に居合せた小姓達も同宿の僧達も、側から何とせん方なく、千右衛門も呆れ果てたばかりであつた。

祐辨律師走り出で、久米之介が袴腰破るゝ計りに、躑付けく引起し、齒嚙をなして涙を流し、「エ、見損ふた伴奴、其根性とは夢にも知らず、兄弟の契約の念比したは何事ぞ。雜賀屋にはお梅といふ若い娘も有程に、出入するには行儀が大事浮名ばし立られな、若衆のたしなみ是第一、兄分に恥かゝすなと、起居にいふたを忘れたか。これ千右衛門殿、今迄愚僧が存ぜしは、彼奴は敵持たる身、若も覘ふ



人あらば、拔身わきうらの下へ此法師が驅入かけいって討たれんと、一命やつたる中なれ共、只今懇切ねんごうの上は、金胎兩部こんたいりやうぶの大目だいにちも御照覽ごしやうらんましませ、ふびん共存こくじんせず。御舍弟ごせていの敵、サアお手てにかけられ」と、坐敷ざしきの下へ取つて投げ、「俗よこの女を慕こふより、法師の身みにて少人せうじんを、思おもふは幾千優いくせんるぞや。其兄分そのあにぶんを袖そでになし、こゝろざしを無下むげにした、憎にくや無念むねんや淺間せんましや」と、氷この様ようなる眼まなこより、涙なみだをはらくとぞ流ながしける。

【註】○袴腰はかまこし—今 腰板こしといつてゐる部分。○伴奴ばんぬ—少年奴。○契約けいやくの懇ねん—契ちりのしたしみ、したしみの契約。○浮名うきなはし—浮名はの意、ばしは意を強める助辭。○兄分あにぶん—兄弟の契約した自分。○懇切ねんごう—兄弟のよしみをすてる。○金胎兩部こんたいりやうぶ—金剛界、胎藏界。○大目だいにち—大日如來、宗教の本尊にて、金胎兩部身に分つ。○少人せうじん—若衆。○袖そでになし—のけものにし。○無下むげにした—どんどこ、最下さいげにした意から、臺たいなしにした、無なにした、輕かろべつした。

【譯】祐辨律師は走り出て、久米之介が袴腰はかまこしをわるゝばかりに踏ふつけて引起し、齒はを食くひしばつて涙なみだを流し、「ゑ見みそこなつた此若造このわくぞう奴、その根性こんじやうとは少しも知らずして、兄弟あにがへの親しみおんしみの契ちをしたは何事なにごとぞ。雜賀屋ざがやにはお梅おめいといふ若い娘むすめがあるから、出入でいりするとすれば行儀ぎやうぎを正ただしくするが大事だいじぢや。浮名うきなを立てられるやうなことをするな若衆わくしゆうには此これが第一だいいちのたしなむべきことぢや。つまらぬことをして兄分あにぶんのわたしに恥はをかゝすなと、起居ききよに常にいふてきかせたのを忘れたか。これ千右衛門殿せんえもんどの、これまで私わたしの存ぞんじてゐたことは、彼奴かかには敵たかがある、若わしその敵たかがねらひでもしたらば、私が拔身わきうらの下へ飛込ひこんでも自ら討たれようと、命いのちまでやつてゐる仲なつぢやが、只今ただいま兄弟あにがへのよしみを切る上は、金胎兩部こんたいりやうぶの本尊ほんそんたる大日如來だいにちにらも御照覽ごしやうらんましませ。ふびんとも思おもひませぬ。御舍弟ごせていの敵たかぢや、さ、御手ごてにかけて討たれよ」といつて、坐敷ざしきの下へとつてなげ、更に、「俗よこの女を慕こふよりか、法主ほふしの身みで若衆わくしゆうを思おもふ方が幾千倍いくせんばい優うるかも知れぬぞ。ところがその兄分あにぶんをのけものにし、志しを無視むしした、憎にくい、無念むねんぢや、淺間せんましくてならぬ」といつて、氷この様ような冷ひやたく光ある眼まなこから、涙なみだをはらくと流ながした。

千右衛門續せんえもんつづいて下り、「心こころないには似たれ共、寺てらを出れば弟あにがへの敵たか、討たでは武士ぶしの道立みちたてたず」と、するりと抜ひいて背打せうちに、四ツ五ツ丁々しよつごつていと打ちつけ、是こゝからは死ししたる人ひと、此方このほう遺恨いこんなき上は、心次第こころしだいに師弟していの中、何卒なんぞ挨拶あいさついたしたい」と、さすがは武士ぶしの神妙しんめうさ。久米之介くみのみけわつと聲こゑを上げ、「只今ただいまの背打せうちも、打うつて打うたるゝ身の報はひ、恥辱ちじよくとも思おもはね共、山やまの名殘なごりに、法印ほふいん様の御機嫌ごきげん損そんふ悲かなしさと、二世にせと頼たのみし兄分あにぶんを、袖そでにしたとの恨にくみの詞ことば、悲かなしうてゝ死しんでも迷まよひと成なります。疾はやに髪かみを剃そつたらば、此これ悔くみも有あるまいもの。坊主頭ぼくしゆだうのすげない顔かほ、兄分あにぶんに見みせる悲かなしさに、せめて二十歳はたちを越こす迄までと鬢びんを撫なで顔かほつくり、身み嗜たみが身の敵たか、お梅おめいに思おもひ初はめられた。是こゝも前世ぜんせいの因果いんぐわかや。お梅おめいに逢あふて斷ことわり立て、縁ゆかりを切りて來きましたら、元もとの様ように念比ねんひに可愛めづがつて下くださるか。」祐すけをんでもない事こと、女むすめと縁ゆかりさへ切きつたらば、身みにかへても法印ほふいん様さまへ、詫言わひごと申まをして念比ねんひせふが、誠縁まことゆかりを切きらずは、大師おほしの罰ばつを受けふといふ誓文ちかじを立てふか。」久く「如何いかにも誓文ちかじ立てませぬ。」祐すけ「サア立て、サア何なにと。」久く「エ、此方こゝは切きらふと思おもへ共、お梅おめいが合點あてせぬ時は、何なにとしませふ悲かなしや」と、かつぱと伏ふして泣なきければ、「それ其心そのこころの付つくこそは、罰ばつの當あたつたしるしぞや。はや出て失うせふ」とどうど伏ふし、共泣ともなするこそ道理ことわりなれ。

【註】○心こころない—無情。○背打せうち—懲ちがす爲ために刀やいばの背せで打うつことにて、これ殺ころしたつもりにするのである。○師弟していの中…師匠ししやうと弟子でしとの間柄まがらを御仲裁ごしんさい申まをしたい。挨拶あいさつは、こゝでは縁ゆかりを結むすぶ、仲裁しんさいする意い。○打うつて打うたる身み—打ちに打うたるゝ身み。○二世にせと頼たのみし兄分あにぶん—若衆わくしゆう道みちにて、兄弟あにがへの契ちりを結むすぶに方かたつて二世にせも變かるまいと誓ちかふのだ。○迷まよひとなる—成佛ぶつじやうの迷まよひとなり障さやとなる。



○坊主頭……若衆として愛せられんには坊主頭の丸出しは醜消して、それよりもすげない顔を見せんとして。  
○身嗜みか身の敵―身だしなみをして、兄弟の爲に姿をつくつたのが、却つて身の仇となつた。○斷り立て―ことはつて關係をつづけることをやめたら。○念比に―親切に。○ぞんでもないこと―いふまでもないこと。

【譯】 千右衛門は續いて坐敷の下へ下り、「無情のやうではあるが、寺を出てしまへば弟の敵であるからには、その敵を討たないでは武士の道がたぬ」と、刀をすらりと抜いて、刀の背で四つ五つ打つて「もうこれで死んだ人間も同然だ、私の方には遺恨はない。さすれば心まかせに、お師匠と弟子即法印と久米之介との間を御仲裁申したい」といつて、さすがは武士としての神妙な態度を見せた。久米之介はわつと聲をあげて、「只今刀の背で打たれたのも、打ちに打つて報はるべき報として、恥とは思はぬが、山を出る名残に、法印様の御機嫌を損ふたことの悲しさ、二世も變るまいと、頼みとした兄分を、のけものにしたといはれる恨の詞、これが悲しうて、死んでも成佛の迷となる。すつと前に髪を剃つておたら、此恨みもなかつたらうに、坊主頭のすげない顔を見せるのが悲しくて、せめて二十歳を越すまでと思つて、鬢をなでたり顔をつくつたり、いろ／＼と身だしなみをしたのが却つて身の仇となつて、お梅に思ひそめられてしまつた、これも前世の因果であるか。お梅に出遇つて、ことはつて二人の間の縁を切つて來たら、前のやうに懇ろに可愛がつて下さるか。祐辨は「いふまでもないことぢや。女と縁さへ切つたら、自分の身にかへても、法印様へ訛言申して懇ろにしてやるが、まことに縁を切らないとしたら、大師の罰があたるが、それを受けますといふ誓文をたてられるか」、「いかにも誓をたてませう」「さあ立てる、さあどうぢや」「でも此方で切らうと思ふても、お梅が承知せぬ時にはどうしませう、悲しいことぢや」とがはと伏せて泣くと、祐辨は「それ、そのやうな心の起るこそ、もう罰があたつてゐるしぢや、すぐと出て失せろ」と、どうと伏して一緒に泣くのも道理である。

其隙に法印、以前の文を取出し、「山に置くは穢らはし、持失ふと投付け給へば、恥かしさうにそ

つと取り、肌懐に入れけるが、男女破戒の御咎め、俄に吹來る天狗風、岩も枯木もどう／＼どう、震動雷電雨霰、天地一つに黒雲覆ひ、長夜の闇とぞ三重成りにける。「すは一山の大事なり、不動坂まで追出せ」と、下僧下部が小腕引立て、棒よ杵よとひしめいたり。さすがよしみの花之丞、「是久米殿妹が事は氣遣ひさつしやんな。こなたの居所知れる迄は、おれが女房に持つてやる」と、聞も苦しき名残の山、鬢も髻も引亂かれ、涙亂れて目も暗く、さらば／＼と振返り、啼音もかるゝ鶯や、お梅に通を失ひし、久米が心ぞ三重哀れなる。

【註】 ○男女破戒の御咎―高野山にあるものが戒を破り、ことに女犯の罪を犯したといふ咎めとして。○天狗風―こんな風はなく、天狗があるかも怪しく、従つて天狗が風を吹くかも怪しいが、忽然たる驟雨的旋風の風をいつたのだ。○長夜の闇―何時あかるくなるとも分らぬ意を誇張していつたのだ。○ひしめき立つ―騒ぎ立つ。○おれが女房に―これのるまをかりて例の冗談をいはせてゐるのだ。○かるゝ―啼く音もしやがれる。○鶯―お梅をたよりに泣く故鶯をもつて來た。○通を失ひし―久米の仙人が、洗濯する女の白脛を見て通力を失ひ、雲の中から落ちたといふ傳説をかりて、久米之介が久米といふ名をもつゝゐるので仙人にかけ、お梅といふ女の爲に山から返はてゆくにもぢつた。

【譯】 其間に法印は前の文を取出し、「山に置くのは穢らしい持つて失せる」といつて投げつけると、久米之介は恥かしさうにそつとそれをとつて、懐に入れたが、高野山にて男女が戒を破つた咎として、俄に天狗風が吹き出し岩も枯木もどう／＼と震動し、雷電に雨霰がそひて、天地一色に黒雲に包まれ、何時あかるくなるとも分らぬ闇になつてしまつた。「それお山の大事だ、不動坂まで逐ひ出せ」と、誰かいへば、下僧や下僕達が、久米之介の小腕をとつて引立て、棒を杵をと騒ぎ立てた。けれどもさすがによしみのある花之丞は「これ久米殿、妹のことは心配し



やるな。例へどこへ行つても、お前の居る處が分るまでは、おれが女房にもつてやるから」と聞き苦しきことをいふ聲をあとに、名残惜しい山を出で、鬢も髻も引きみだされながら、涙も他愛もなく流して目も見えず、さらばくんと振りかへりつゝ、驚ではないが泣く音も噎がれて、女の白脛を見て通力を失つて、雲から落ちた久米の仙人のやうに、お梅の爲に力をなくして山を逐はれる久米之介の心はあはれである。

中之卷

逢はぬ昔の白紙も、忍び重ねて厚紙を、人に裂るゝ横紙に、袖濡紙の漏れやすき、浮名やばつと塵紙の、嵐に脆き鼻紙や、まだ十七のほところ子、名さへお梅は氣もすしや。親與次右衛門、生々として外より歸り、「お梅が祝言いよく今宵に極つた。今朝いひ付けた通り、市介、傳九郎鱒をかけ。夏よ雑煮の用意爲い。竹膳立も奇麗に爲い。掣殿は京烏丸の人なれば、黒椀が好からふ。塗盃はいらぬ。ぞ、年の往かぬ娘じや、土器を三寶に、口取は熨斗昆布、肴は鯛車海老、熊野から貰ふた鹽貝があらふ。ヤ鹽貝の序に女房共は何處に居ると、嬉しがるのも親心。竹「おる様は中二階に、お梅様の髪梳いて」といひければ、二階の口まで駈上り、與「こりやく、宿老殿へ往て談合した。皆内證勝手づくの祝言なれば、廣めは重ねて下つた時。今宵杯濟んだらば、娘は最早掣の物、とんと先へ渡いて女夫連で、明日早々上して退いと云はるゝと、勢ひかゝる親の顔見るよりお梅は涙ぐみ、「急な事いふて下さるす、盃さへ延べて欲しけれど、親のこうけん是非なふて、如何なり共と云ひました。京上りは先待つて、

氏神へも参りたし。阿房でも兄は兄、花様にも知らする筈。日頃懇切遊ばして、お守よ御符よと、御恩を受けた祐辨様、お山には未だ外にも」と、其人の名は云兼ねて、思ふ邊りをかすらする是も思ひの餘りかや。

【註】○白紙―無垢のおぼこ娘をさす。紙といつたのは、お梅の家が紙屋なる故で、以下様々の紙をならべたのもそのためだ。  
○忍び重ねて厚紙―忍びよくて逢ふことを重ねると、自然と厚い戀となる。○人に裂かるゝ横紙―無理を通すことを横紙を破るといふ、これをかりた表白法で、折角厚くなつた紙も、無理に人にさかれると袖をぬらすことにより、ぬれた袖の半は自ら洩れる  
○浮名や塵紙……嵐にもろい花は、嵐が吹くとパツと散るが如く、折角厚くなつた戀が無理に引裂かれて袖をぬらすと浮き名がパツと散る。塵と散り、鼻と花とをかく。○ほところ子―懐に入れてる子、秘蔵子。○すしや―粹なと酸いと兩方にかけて意をもつてる。○鱒をかけ―大根鱒のこと、大根を小さく、かき下ろして魚を入れ、醋醬油をかけたもの。大根を小さくきざんだやうにすることをかくといふ。○雑煮―雑煮餅を祝つたのだ。○京烏、黒椀―烏の縁で黒といつたのだ。○土器―年のゆかぬ娘といふから、性器にまで聯想し、俗説をとり入れたのだ。○口取―これは四條家の禮式の本膳の前に出すものをいつたので、近松は四條家の禮法を宵庚申にも用ひてゐる。つまり酒の肴の出る前に出すつまみ昆布のこと。今日京坂で鹽まめを用ふるが如きもの、之を口取といつた。のしといつたのは、婚禮に用ひるのし昆布をきかせたのだ。樋口氏説。○熨斗昆布―例のあはびでつくりた熨斗の代用として昆布にてつくり祝儀に用ふるもの。之を口取の昆布にきかせたのだ。○おゑ様―お家様、京坂の方言にて、中流以上の妻君を呼ぶ語。○鹽貝の序―年若の娘の性器をよく土器といふに對して、これは老婦なれば鹽にした古貝といつて作者又とんだ所まで筆をすべらしたのだ。○中二階―普通の二階よりやゝ低く、平家よりは少し高き二階。○宿老―町の取締役、年寄役。○内證勝手づく―内證で、都合次第きまゝにやる、づくは盡し。○廣め―披露。○上して退けい―京の方へやつてしまへ。○勢ひかゝる―勢ひこんでいふ。○こうけん―威光、権力。○是非なうて―批評の限りでなくて。○云ひました―どうなりともなされと申しましたのです。○まだ外にも―いふべき人がある、即ち久米之介をさす。○かすらする―かすめていふ、ほのめかす、諷する。



【譯】逢はない昔の、白紙のやうなおぼこ娘も、忍びく重ねて逢ふと、厚紙のやうな濃い戀となるが、其戀も無理非道に引裂かれると袖をぬらすことになり、すると自ら雫ももれて、浮き名がばつと立つて、嵐にもろい花の如く散るものである。また十七の秘藏娘であるお梅は年はゆかぬが、名さへ粹で、なか／＼隅にはおけぬものである。親與次右衛門は元氣よく外から歸り「お梅が祝言はいよ／＼今夜にきまつた。今朝云ひつけた通り、市介と傳九郎は鯨をかけ、夏よ、お前は雜煮をこしらへる用意せい。竹は膳のこしらへも奇麗にしろ。鞆殿は京鳥丸の人だから烏に縁のある黒碗かよからう。塗盃は出すに及ばぬ。年のいかぬ娘であるからには土器を三寶にのせて出し、つまみ物にする口取は鬘斗昆布、肴は鯛、車海老、その他には熊野から貰つた鹽貝がある。や鹽貝といへば序に古具の女房どもはどこに居る」と親心の嬉しがつていふ。女中の竹は「おかみ様は、中二階でお梅様の髪すいでござります」といへば、二階の口まで駈上つて、父親は「こりや／＼、宿老殿へいつて相談したが、皆内證の都合次第、氣まゝ勝手の祝言ならば、披露のことは此次京から下つた時にして、今夜杯がすんだら、娘はもう婿のもの故、すつかり先方へ渡して、女夫連れで、明日早々に京の方へやつてしまへといはれるわ」と勢ひこんでいふ親の顔を見るなりお梅は涙ぐんで、「まあ急なことをいふて下さる、盃ごとをするのさへ延ばしてほしいが、それは親の権力とあらば是非もないこと故、どうなりとも御勝手になされるがよいと申しました。だが京へ上ることだけはまあ待つて下され、氏神へもきりたし、阿呆でも兄であるからには、花様にも知らせにやたらんし、平常懇にして下されて、やれお守よ、やれ御符よと、お恩をかけて下された祐辨様へも、その他にお山にはまだ知らせる人もあるに」とその人物の名を云ひかねて、思ふ近所をほのめかすに止めるのは、これもその人を思ひ戀ふ餘りのことなればか。

母親も打領き、「ヲ、それも左様じゃがこんな事、念比な方へ知らすれば、驢の祝儀のと、厄介かけるが迷惑じゃ。兎角鞆御の心次第、サア御座れ」と、納戸へ入れれば與次右衛門、「これ噂、鞆の供の者共これの内の奴等にも、何がなしに三百宛お引をやるが合點じゃ。つゝごかしの顔で、つらりと九文十

文づゝ、百の口を抜いて置けや」母「ハテこなたも餘まりな。お梅が一世一代に何が惜しいぞ。矢張九十六文で、百宛遣つて置かしやれ」と、連れて納戸に入りにつけり。

【註】○驢—元來旅立つ人の爲に惜別の宴をはり又は品物詩歌などを送ること。○納戸—衣服調度などを納める奥の間。○三百—三百文、その頃九十六文で、百文に通用した。それは大抵小さくよつた繩につないであつて、勘定せずして通用したから、それで公然と通つたのである。○お引—引出物の略にて祝儀の心づけをいふ。○つゝごかし—この頃小錢は竹筒に入れて貯へたものだが、その筒が倒れて少し不足した體で幾分抜き去つておけといふのである。一體此頃は錢も金も勘定しないで包のまゝで通用したので、いつか九十六文で百文に通してゐるのを、更に竹筒が倒れて、中からはみ出したつもりで、九文か十文づゝを、祝儀の中からぬいておけといふのである。これで見ても祝儀や土産などの内容が一般にごま化し來られ、又さうしたことを平氣で普通にやつてゐた日本人の性根がよく分るやうだ。○つらりと—つらりと、する／＼と。○九十六文で百宛—例の九十六文といつた言葉のごとく、九十六文入れて百文で通用してゐるから、あたり前にしての意である。

【譯】母親もうなづいて、「お、それも左様ぢやが、こんな事を懇な方へ知らせてやると、やれ驢だ、祝儀だのといつて、金をつかはせて厄介かけるが迷惑ぢや。兎角は婿の心次第にしたがよかる、さあ來やれ」といつて納戸に入かけると、與次右衛門は、「これ噂、鞆にお供をして來るものや、此内の者達にも、何といふことなく、三百文づゝ引出物をやるがよい、わしは承知ぢや。それも竹筒が倒れたといふやうな顔で、つらりと九文か十文づゝ、百文の口からぬいておけよ」女房は「はてまあ、お前さんも餘りなこといやる。お梅の一世一代の晴れの祝に、九文十文の金が何で惜しいのぢや、矢張世間での流通並に百文に對して九十六文づゝやつておきなされ」といつて、一緒に納戸に入つた。

お梅は稚き時よりも、あまやかされて二親に、我儘云ひしならばしも、心に疵を持ちたれば、いぶりもならずすねられず。「ア、九兵衛は何故遅いぞ。久米様の返事は」とそろ／＼表へ出けるが、女子丁



稚が口々に、「よふお梅様、晩には立聞いたしましよ。京のおか様にならつしやる」と、なぶられても浮々せず。梅「ア、何云やる。京へ往こやら冥途へ往こやら、知れた事か」と門に立ち、坂を見上げて居る所へ、久米之介は頬冠り、九兵衛も投首して、辻へ見ゆれば走り寄り、梅「なふ能ふ来て下さんした。文にいふ遣る通り、京の奴めと今夜盃する筈で、私が氣は今朝からとんと死んで居たはいの」と、縫付て泣きにけり。久「ヲ、そなたは氣が死んだか。私は叩かれ引摺られ、身も心も死にます。嘘ならば是と手を取つて、袖から、梅「背中がハアたんと腫れて有るはいの。鬢もそけた、顔も泣いた顔じゃ。こりや如何ぞい」といりわりも、いはず知らずに泣居たり。

【註】 ○ならばしも一習があれども。○いふもならず一ぶつくと不平をいふことも出来ず。○女子丁稚一女や丁稚ども。丁稚の音は支那語から来たものだ。○おか様一妻。○袖から一袖から手を入れさせると。○そけた一ばら一になつた、亂れた。○どうぞいの一どうしたことぢやわいの。○いりわり一入り譯け、様子、事情。

【譯】 お梅は小さい時からあまやかされて、両親に我儘をいつた習がありながら、心に疵をもつてゐるからには、不平もいへず耐えられもせず、「あゝ九兵衛は、どうして遅いのである、久米様の御返事はどうしたのだろ」とそろり／＼と表へ出たものゝ女や丁稚達が、「よう、お梅様、晩には立聞しますよ」とか、京のおみさんになつしやるのだな」など口々にいつてなぶるが、それでも少しも浮いた心になれず、「あゝ何をいやる。京へ往くやら、冥途へ行くやら、分るものか」といつて、門に立ちながら、坂の方を見あげてゐる所へ、久米之介は頬冠りをし、九兵衛も投首の姿で、辻へ現はれると、お梅は走り寄つて、「なう、よく来て下さんした、手紙にいふてあげた通り、京の奴と今夜祝言の盃する筈で、私の心持は今朝からすつかり死んでゐたわいの」と縫りついて泣いた。久米之介「お

そなたは氣持が死んだるが、私は叩かれたり引摺られたり、體も死に心も死にます。嘘ならこれごらんなされ」といつて、手をとつて袖口から入れさせると、お梅は久米之介の背をさはつて見て、「ハアたんと腫れてゐるわい、鬢もそけてる。顔も泣いた顔ぢや。こりや、如何したのぢやわいの」といつて、内情も知らずに泣いてゐた。

九兵衛不祥な調子にて、「エ、兎相なお梅様、文を封じ違へて、久米様への濡文が法印様のお手に入り、何が日比法印様、眞言陀羅尼讀んだ目で、くどくは御見思ひまゐらせ候と、讀んで波羅僧掲諦を立て、ぼじそあかなる顔付、念者坊の祐辨様は、踏殺すとして煮へさつしやる。一災起れば二災起る、お國からは弟の敵じやとやと申して、理窟臭い侍が背打を喰らはする。弘法大師御入定八百年以來の、一山の大騒ぎ、飛脚の詮義も有りさうで、私は据つた膳箸も取らずに隠れいる。其間にお山が暴れて来て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨大風霹靂大事の山を久米之介が穢した」と叩き出されて、かくの體にておはします。お二人の御蔭で烟草入を落しました。中に頼母子の懸錢七十四文あつたもの、定めて狗賓に擱れたで御座らふ。正眞の天狗頼母子じや」ととぶつくさ云ふも道理なり。

【註】 ○不祥一めでたからぬ。○何が一何がきて、何といつたところでの意。○眞言陀羅尼一眞言の呪文。○くどくは御見……くどくは精しくは、功德にかく。精しくは御眼にかゝりて申しあげようと思ひますの意。○波羅僧……呪文の中の句をかりて、腹を立てにもぢつた。○ぼじそあかなる顔付一菩提婆娑訶なるの婆訶を赤にかく。○念者坊一女色にいてると同じ様に、男色の相手を互に念者といふ、それに坊をつけた、祐辨は兄弟分であつた。○煮える一焼ける、焙氣する。○一さい起れば二さい一凶事一つあれば、重ねてまた禍来る。○据つた膳箸一すゑられた膳の箸もとらず馳走になりかけて。○頼母子一關西で頼母子と



いへど關東では無盡。○天狗頼母子 富籤。○ぶつくさ—今日のぶすかさの音轉。

【譯】 九兵衛はめでたくない調子で、「え、そさうなお梅様、文の中身を入れちがへて封じて、久米様へあてた戀文が法印様の手に入つたので、何がさて法印様には眞言陀羅尼を讀んだ目で、精しくは御眼にかゝつての上申しあげようと思ひまゐらせ候と、讀んで大腹を立て、眞赤な顔をされる。兄分の祐辨様は踏殺すといつて焼けさつしやる。一災起れば必ず二災起るで、そこへまたお國から弟の敵ぢやとやら申して、理窟くさい侍がやつて来て、刀の背打を喰はせる。弘法大師死なれてから八百年以來の一山の騷となり、飛脚の詮議も有りさうで、私は折角据ゑられた膳の箸もとらずに隠れる。其間に山があれ出して、天狗が鼻を怒らし、大風雷雨鳴が起り、大事の山を久米之介が穢したといはれて、叩き出されて今の體たらくでおいでなさる。そして又お二人のお蔭で、私は煙草入を落しました。其中に頼母子の懸け錢七十四文があつたものを、惜しいことをした。あの品も定めし天狗につかまれたことござらう、これこそ眞物の天狗頼母子ぢや」とぶつくさこぼしてゐるのも道理である。

梅「ヲ、其様な事内へ沙汰したもんなや。山は暴れて崩れても、久米様に逢へば嬉しい〜。此方様嬉しうないかいの。少笑ふて見せて下さんせ」と、いふても前後思はれて、泣顔見ゆる不便さよ。親は「お梅よ〜」と門口見遣りて、「誰じや、ヤア久米様か。九兵衛これは何として。呼びに遣たい處へ、能ふこそ〜、まづ内へ。噂久米様が御座つたぞ。暮たに何故に火は灯さぬ。お梅が祝言常とは違ふた。二階は蠟燭、庭もおうへも、燈心を搦込んで赫々とやれ」と、勇む處へ母親は、なりふりを心得難くや思ひけん、「いつの間に、九兵衛は此處へも寄らず山へ往て、お梅が祝言聞いてお出なされたか」と、不審さうなる顔色を、

【註】 ○泣顔見ゆる—前後のことを考へてゐるので泣顔を男がしてゐるのである。○親—父親。○何として—どうしてつれて来た。○祝言常とは—祝言があるのぢや、平常とはちがふ。○おうへ—入口をはいつて一段高い圍爐裏がある主婦の居る室のことをいふにきまつてゐる。○お出でなされたか—久米之介殿にはきいてお出でか。

【譯】 お梅は「お、その様なことを内へ知らせて下さるな。山は荒れようが崩れうが、久米様に遇ひさへすれば、嬉しい〜。お前は嬉しくはないかいの、ちと笑つて見せて下さんせ」と久米之介にいふが、彼は前後のことが考へられて、泣顔をしてゐるのは不便である。親父は此時「お梅よ〜」と呼びながら門口を見て更に「誰ぢや、やあ久米様か、九兵衛これはどうしたのぢや。久米様を呼びにでもやりたいところへ、よろこそまあ、まづ先へおはいりなされ、噂よ、久米様がござつたぞ、暮れたに何ぞ灯をつげぬのぢや。今夜はお梅が祝言の夜ではないか、平常とはちがふぞ。二階には蠟燭をともし、庭にもおうへにも、行燈などへ燈心をどつさり搦みこんで、かつ〜と明るくせよ」と勇ましくいふ所へ、母親は姿や様子を不審に思つたのである、「九兵衛は此處へも寄らずに、いつの間に山へ行つて来たのぢや。お梅が祝言の話を聞いて久米様はおいでなされたのか」と怪しんでゐる顔色をしてゐる。

九兵衛見ても取りつ〜と出で、「久米様のお仕合、未だお聞きなされぬか。お國の親御御隠居で、跡目をお継ぎなさるゝ筈で、私も在所から早飛脚に雇はれ、打通りに上りました。日比の念比、暇請の爲、ちよつとつれて寄つてくれ、祐辨様も追付け其處へと有る事。今日からは是れ七百石の御世繼。且那樣物は談合、お梅様の御祝言未だ盃なされぬ先、彼方を變替なされて、久米様へ進ぜられまいか。私やお爲を申ます。祐辨様も大方其御心と見へました。千貫目持つても商人は、一時の損が知れませぬ。てれふれなしに七百石、すればお前もお手柄。雜賀屋の聲殿がひん〜跳る驛馬に乗りて、娘子は金物



の乗物に乗らつしやる。サアしゃんと打ちませふ」と、手を廣げても、親「イヤ先あ打つまい」九「ハ  
テねちみやくした。そんなら舅御夫婦も乗物やじやく馬」と、乗せてもいかな乗らばこそ。

【註】 ○打通りにぶつとほし、途中どこへもよらず ○一時の損いくら金持つても商人の金はあてにはならぬ、一時に損を  
するか分らぬ。○てれふれなし―照り降りなし必ず。○すれば―さうすれば。○じやく馬―強い馬、荒馬、びん―はねる馬  
○打ちませう―手を打たう。約束をきめたしるしに手を打たうと、商人のするやうなことをいふのだ。手打ちをするともいふ。  
○ねちみやくした―ねちこい、執着の強い人。ねばりづくついで、きればなれの悪い。○乗物やじやく馬―びん―はねる  
馬にお乗りやれ。

【譯】 不審さうな顔色を見てとつて、九兵衛はつと出て「久米様のお仕合を、まだお聞きなされぬか、お國の親御が  
御隠居で、跡を相續なさる筈で、私も郷里から早飛脚に雇はれ、お前の家へも寄り道せず山へ上りました。日頃  
から懇ろにした家ぢや、暇乞の爲に一寸つれて寄つてくれ、祐辨様も追つけ其處へおいでなさるとの事。今日からは  
これこの久米之介様は七百石取りの御世繼ぢや。旦那様物は相談の上といふことがあります。お梅様の御祝言、まだ  
盃をなされぬ先に、あちらを變替なされて、お梅様を久米様へ進ぜられませぬか、私はお爲の上から申します。  
祐辨様も大方その方を御賛成のやうに見えました。何しろ商人といふものは、千貫目もつてゐても、いくら金をも  
つてゐても一時にどれほど損があらうも分りませぬ。それよりか照り降りなしに必ず七百石、その収入のある久米  
様にお梅様をおあげなさればお前もお手柄と申すもの。雜賀屋の掣殿がびん―はねる威勢のいゝ荒馬に乗つて、  
娘御はじつと落つて、安心な金物の乗物に乗らしやるも同じぢや。これに越したことはない、さあしゃんと手を  
打ちませう」といつて手をひろげてゐても與次右衛門は「イヤまあ打つまい」「はて、くづく―と思ひ切りの悪い、そ  
んなら舅御夫婦もびん―とはねる馬にお乗りなされ―と乗せたが、どうしてその手に乗らばこそ乗りはせぬ。

與「イヤ―馬は馬連、牛は牛連、今日祝言する掣殿は、京三條烏丸美濃屋の作右衛門、お梅を欲しいいば

つかりで、年々の殘銀九貫五百匁、百六十兩で帳消して、此秋の買入に、紅の花の様な小判二百五十  
兩、先へ預けて置かれた。今宵の物入仕拵へ、此方には一文入れさせず、娘を裸で請取る掣は、世間  
にちつとありかねる。何んと九兵衛」といひければ、九「イヤ久米之介様も、小判の事は請合れぬ、お  
梅様を裸でならば、鬼に鐵棒で御座りましよ」與「コレ阿房な事はいはずとも、掣がおじやるか出て見  
よ。はお梅、久米様二階へ連れまして、新しう出來た寢道具を見せましや。こりや女子共、看を鼠に  
引るゝな」と、鼠の用心しながらも、二人二階へ上げたるは、是こそ猫に鯉魚なれ。

【註】 ○殘銀―拂残りの金額、つまり懸買ひして拂の残があるのだ。○九貫五百匁―當時銀六十匁が一兩故、百六十兩は九貫六  
百匁にあたる。九貫五百匁へはよいところを百六十兩即ち百匁餘分に拂ひまして帳を消した。○紅の花の様な―小判色をさす  
のだ。○物入仕拵―婚禮についての一切の費用や、物のこしらへ代一文も與次右衛門は出さぬのだ。○入れさせず―つかはせず、  
かけさせず。○ちつとありかねる―滅多にはない。○裸體でならば―裸で受けるとすれば大丈夫といふを鬼に鐵棒としやれた  
のだ。鬼に鐵棒は力ある上に、武器があることで、いよく―強い大丈夫此上ない意。○猫に鯉魚―猫に看の番、盗人に金の番と  
同じ意。

【譯】 いや―馬は馬連れ、牛は牛連れといふことがある。商人は商人同士がよかる。今日祝言する掣殿は、京三  
條烏丸美濃屋の作右衛門といつて、お梅を欲しいばかりで、年々の拂殘九貫五百匁のところへ百六十兩即九貫六百  
匁出して、帳をけさせ、此秋の買入にも紅の花のやうな色をした小判を、二百五十兩を先へ預けておかれた。それ  
に今夜のこしらへものや入費など、こちらには一文もかけさせず、皆出してくれやつた。かうして娘を裸で受取る  
掣は、世間には滅多にありはせぬ。どうぢやね、九兵衛」といへば、九兵衛「いや久米之介様も小判の事は請合は



出来ぬがお梅様を裸體でならば大丈夫でござりませう」與次「これ阿呆氣たことをいはすと、聲が來やるか出て見よ。是れお梅、久米様を二階へお連れ申して、新しく出来た蒲團などをお見せ申せ、こりや女ども、肴を鼠にひかれるな」といつて鼠の用心の方はしながらも、此二人を二階へ上げたのは、これこそ猫に肴、盜棒に金の番をさせるやうなものである。

二階には古渡りの大紋緞子の夜の物、二ツ枕の總付を、妬しそふに久米之介、「ム、く、京の男と、此枕を並べて、此夜著を被て、二人しつぽりと寝さんしよの。ア、ひよんな物見せて、又泣かせて下さるか」と、ほろ／＼涙を流しける。梅「エイ嫌が、す様な事聞度ふない。京の奴と何んの寝よ。今夜中に連立つて走るぞ多。胸を極めて下さんせ。此夜著蒲團に今の奴が寝くさる筈、エ、嫌らしい煩さや」と、踏ちやく／＼くつて投ほうり、梅「是は又私かの新しい寝道具、祝ふて寝初めて欲しけれど、人が來ふかと氣遣いな。ア、辛氣や」と、疊みし夜著にもたれ合ひ、誰も勿來の關心、花のお梅に鶯の、人來と厭ふわりなさよ。

【註】 ○もと渡り古く外國から渡來した意、こわたりといふ。○緞子—もと支那より來た、地合に紋のあるのとないのとある。○しつぽりと—しんみり。○ひよんな—凶い。凶の支那廣東の音をひよんといふ、樋口氏説。○今の奴…あの奴がねやがるなんて、今の奴は京の男をさす。○私がの—私しのと同じ。○辛氣や—じれつたや。○誰も勿來の關心—誰も來るなと急ぐ。心關に急ぐをかく。○鶯の人來…古今集の「梅の花見にこそ來つれ鶯の人來／＼と厭ひしもをる」からとる。○わりなさよ—限りないことよ。【譯】 二階には古く支那から渡つた大紋のある緞子の夜著に房つきの二つの枕がおいてある。それを見ると、久米之介は妬ましさに、「む、京の男と、此枕を並べて、此夜著をきて、二人しんみりと寝やらうの、あ、凶いものを

見せて、また泣かせて下さるか」とはらく／＼と涙を流した。お梅は、「あゝいやがらせを云ふて下さるな、聞き度うない。京の奴と何の寝るものか、今夜の中に連れてつづ走らうぞや、腹をきめて下さんせ。此夜著に京の奴が寝やがる筈なんて、嫌らしい、聞くもうるさいこと」といつて踏ちやく／＼くつてほうり投げ、「これはまた私の方の新しい寝具、祝ひに、今寝初めてほしいけれど、人が來はせぬかと心配だ、あゝじれつたや」とたゝんだ夜著にもたれ合ふて、誰も來るなといそいで、花のお梅を見に來た鶯が、人の來るを厭ふのは限りなきことではある。

時に美濃屋の作右衛門、小者を連れて突と入り、與次右衛門が髻を取つて引寄する。女房始め下々も「是は聊爾」と取付くを、作「寄るな／＼」と打拂ひ、取つて引据へ、「こりや與次右衛門、京の者をはめ立したら、返報を喰はふ、用心せい。親代々の得意で二十年以來、二千貫目足らずのあきないに、九貫目のほこりを取り、先も見へぬ秋買に、十五貫目の前銀取り、祝言の仕入に四貫目取り、男の有る娘を被かせて、さらせて構はぬ工面じやな。此邊では未だ流行るか、京大坂では、其手のもがりは廢つた。サア娘の首を渡すか、二十八貫目戻すか、二ツ一ツの返事を聞かふ。ヤイ一升入る袋は海川でも一升、肩の好いもの、仕合見よ。盃せぬばつかりで二十八貫目拾ふた。惠比須大黒が乗移つた作右衛門をこかそふや、措いてくれ」とぞ罵りける。

【註】 ○小者—召使、小僕。○聊爾—そつじ、かるはずみ。○はめ立て—欺きだます。○九貫目のほこり—前の九貫五百目をさす。ほこりは、埃ほどのはした金。九十六圓の支拂額に對して、百圓札を出した時、殘圓をほこりといふ。○先も見えぬ秋買—どうなるかわからぬ様な買入。○十五貫—二百五十兩。銀十五貫目にあたる。○祝言の仕入—仕度など一切の買物。○被がせて



―背負はせる。〇さらせて―離別させて。男から見た云ひかたで、お梅からいへば、さられても。〇工面―工夫、考。〇もがり―欺きだますこと。〇二十八貫―九貫と、十五貫と、四貫の合計。〇一升入袋…には分があり、又物は正直なものゝ意の謔。〇肩のいゝものの仕合―人の吉凶を占ふに、その肩にて占ふ法あり、即運の良いを肩のいゝといふ。〇こかさうや―幸運の垂移つてるおれを倒さうとしても倒されるものか。

【譯】その時美濃屋の作右衛門は、小僕をつれて、つとはいつて来て、主人與次右衛門の髻をとつて引よせた。女房や下々のものども「これは何といふ輕はづみだ」といつて取附くを、作右衛門は「寄るな」といつて拂ひのけて取つて引すえ、「これ與次右衛門、京の者をだましたら、返報を受けようぞ、用心しろ。親から代々の得意先で、九貫目のはした金をまでとつて、まだ先も分らぬ秋の買入の爲に、二百五十兩即十五貫の前金をとつて、祝言の仕入物の費用に四貫目といふ金ととり、既に男のある娘を背負はせて、離別させても構はぬ考ぢやな。此やうなやり方は此地ではまだ流行してるのか。京や大坂ではその手のもぐりは廢れてしまつてる。さあ娘の首を渡すか合計二十八貫目の銀を戻すか、二つの中一つの返事をきかふ。やい、一升入の袋は海でも川でも一升の水しかはいらぬ。物といふものはそのやうに眞直なものぢや、運のよいものゝ仕合を見る、盃をせぬばかりで、二十八貫の金を拾うたも同じや、恵比須大黒が乗うつつてる作右衛門を倒さうとしても倒れるか、おいてくれ」といつて罵つた。

與次右衛門眞直者、ぐつと急て、「ヤア京々と喧しい、頬げたが過る。七十萬石の下にすむ與次右衛門氣の狭い己等が蔑みとは違はふ。銀返すは易けれど、云詰られて戻したといはるゝが口惜しい、娘にも疵が付く。サア男のある證據を出せ。何處ぞで藁を焚かれて、銀が惜しうなつたか。慮外申した御免あれ、と説言させて其上で、是非に祝言させねば、娘の垢が脱けぬ。サア證據を出せ」とにちければ、家内の上下しみ凍り、二階には逃場もなく、死ぬるより外分別の、泣ひつ震ふつ狼狽ゆる。

【註】〇頬げたが過る―口が過ぎる。〇七十萬石―徳川時代に、高野領といふのは二萬千石で、其以前十七萬石であつたこともあるが、七十萬石は作者の筆だ。〇さげしみとはちがふ―さげしみを受ける身分とはちがふ。〇藁を焚かれ―たきつける、おだてられる。〇慮外申した―無禮を申した。〇娘の垢…垢はよごれた名、冤罪のこと、汚名をそゞげぬ。〇にちければ―ねぢる、こねる、理窟をいふ。〇しみ凍り―しんみりと凍つたやうになる。〇泣ひつ―分別ないにかゝる。

【譯】與次右衛門は眞直者で、相手の話をきくなり、ぐつと急いで「やれ京々と喧しい、やめてくれ口が過ぎよう。七十萬石の高野領の下にすむ與次右衛門、氣の小さい汝等の侮辱を受ける身とは人がちがはふ。銀を返すのは何でもないことぢやが、言ひつめられてこまつて戻したといはれるが口惜しい。さうしては又娘にも疵がつく。さ、男があるといふならその證據を出せ。大方何處かでしかかけられて、銀が惜しくでもなつたのか。無禮なことを申した、御免下されと、お詫をさせて、その上で、是非とも祝言させなきや、娘の冤罪がとれぬ、さあ證據を出せ」と理窟をこね出したので、家内の上のも下もしみついたやうにしんみりして、二階の二人は逃げ場はなく、死ぬより外に分別のないので、泣きつ震へつしてうろたへてゐた。

作右衛門押沈め、「證據―と涼しそふに云やるな。身は明日立つ合點で、今朝から御山へ上つたが、八ツ時でもあらふか、俄に山が暴れ出して、大雷雨風、一期に覺へぬ怖い事、さる寺へ駆込んで、様子を見さに聞いたれば、南谷吉祥院の小姓久米之介といふ者と、雜賀屋のお梅と數年密通して、山を穢した其崇り。それゆへ今追出さるゝと一山が見物、後姿を己も見た。飛脚の様な奴が供して麓へ下つた」と、いふより九兵衛もじり―と、門の方へ後退り、亭主もはつと二階を見れば、女房賢く、「さや―、其分では胡亂な。此方の人、娘が垢をぬかつしやれ。狼狽て娘一人捨てさつしやる



な。是々膝を突けば合點し、奥ヲ、飲込んだ。こりや男、雷が鳴つたとて、此方の娘が不義のある證據にはなるまいぞ。どふでも今宵祝言させ、くもり付けて往なさねば、雜賀屋の與次右衛門が町へ面が出されぬ。手柄に聲にして見せよ。作ヲ、おれが身代見掛けては、定めて聲に欲しからふ。二十八貫目の銀では、疵のない手入らずの女房が持たる。おれが銀で拵へた。夜著蒲團から取てくれよ」と、二階へ上れば與次右衛門、「腕捻折らふ」と引下し、上を下へと掴み合ふ。久米之介は脇差抜いて、すはといはゞと絶付、お梅がわつと泣く聲も、下には聞かず叩き合ふ。

【註】○涼しさうに――綺麗らしく、潔白さうに。○合點で――つもりで。○八つ時――二時。○一期に覺えぬ――一生に知らぬ。○その分では胡亂な――此は廣東音の讀み方である。後姿を見たとか、話をきいた丈では怪しい。○くもり付けて……女を汝の身に結へつけて京へ歸さぬと一緒につれて歸らせねば○手柄に――聲にして手柄をして見せよ○すがりつき――お梅がすがり付のだ。【譯】作右衛門は押へしづめて、「證據」と立派さうなことをいはぬがい。おれは明日出立のつもりで、今朝から高野へ上つたが、二時頃でもあらうか、俄に山があれ出して、大雷雨があり、一生にまだ知らぬ怖い目を見た。それである寺へ駈込んで、詳しく様子をきくと、南谷吉祥院の久米之介といふものと、雜賀屋のお梅とが數年前から密通して、山を穢した祟りでかうなるのぢや。それが山から逐出される所だから、一山のものが見物してるといふことで、おれも後姿を一見した。すると飛脚の様な奴が供をして麓へ下つて行つた」といふなり、九兵衛もきまり悪く、門の方へ後しざりし、亭主ははつとして、二階を見ると、女房は賢くも、「いや／＼それ丈ではまだ／＼疑はしい、お前さん娘の冤罪をよくすゝいでおやりなされ、うろたへて娘一人を臺なしにしたりなさるな、これよいかね」といつて加勢して亭主の膝をつくと、與次右衛門は合點して、「おゝのみ込んだ、これ婚、作右衛門、雷が鳴つたとて、此方の娘に不義のある證據にはなるまいぞ、何といつても今宵祝言させて、一緒に京へ歸らせな

いと雜賀屋の與次右衛門は町中へ顔が出せぬ。婚にして手柄を立て、見せる」作右「おゝおれの財産を見つけては定めし婚に欲しからう、二十八貫目の銀があれば疵のない手つかずの處女の女房がもてる。おれが銀でこしらへた夜著蒲團から取つてやらう」といつて、二階へあがらんとすると、與次右衛門は「そのやうなことを腕をねぢ折つてやるぞ」といつて引下ろし、上を下へとつかみ合つた。二階にゐる久米之介は脇差をぬいて、すはといはゞ自害でもしようとしてゐるのに、お梅がすがりついて、泣く聲も下の方では聞きもせず、互に叩き合つてゐた。

女房中を押分けて、「此方の人から黙らッしやれ。待て下され聲殿」と彼方を拜み、此方をおがみ、やう／＼兩方押沈め、かつばと伏して泣きけるが、「都衆とも覺へぬ物の情の無い事や。是程迄取結び、サア祝言の場と成つて、打破つて此方夫婦、世間か立たふか身がたとふか。男を持ぬ娘は、誰が身の上に何事のあるまい共云難し。過つる事に二親が迷惑するを聞くならば、氣の細い娘なり、先の小姓も堪へかねて、死ふとするは必定。止に往かるゝじぎでもなし。必ず死ぬるな死ぬまいぞ。此處は死ぬる場でないぞ。親に歎きをかけるといひ、其身も無い難受ける事、親孝行と思はゞ、必ず死んでくられるなど、先づ斯ういふて止めたらば、よもやとは思へ共、若い心の一筋に、恥しいとばかりで、若や死なふか悲しや」と、知らせの詞一つをも、皆兩方へ懸橋の、二階にも聞取りて、抜いたる脇差さすが又、死にもやられず聲立てず、抱き合ひて泣居たる。

【註】○世間か立たう……世間に對して顔がたとうか。○男をもたぬ……きまつた亭主のない娘は、誰にしても何事のあるまいものとも限らぬ。情夫のないとも限らぬ。○過ぎつる事――自分達のこれまでのこと。久米之介等二人のこと。○じぎでもなし――時



宜でもなし。死ぬのはきまつてゐるが、今此場を立つて二階に止めに行つてはいよ／＼ぼろが出るから止めに行かれぬ場合ではない。○死ぬるな…死ぬなよ、死んでくれるなよ、○無い難受けること―無實の災難を受けることになるから。○知らせの詞一つきも―知らせるべき言葉一つでも。○兩方の懸橋―二階と階下と兩方にき、こへよとかけて。○さすかまた―さすがにまたと脇差をさすと、兩方にかく。

【譯】女房は亭主と作右との二人の中を押分けて、「まあ此方の人、お前から黙りなされ、聲殿もまつて下され」といつて、あちを拜み此方をなだめして、やう／＼二人を静め、ばかりと伏せて泣いたが、やがて「都の方とも思はれぬ無情ななされ方ぢや。これほどまで相方の間を結び合せて、いざ祝言する時となつて、話を打やぶつて、私共夫婦は世間への顔が立たうか、身が立たうか、考へて見て下され。定まつた男のない娘の子には、誰の身にしても何事があるまいともいへず、情夫がないとはいひにくい。だから、兩人のこれまでの事について、兩親が迷惑するといふ話をきいたとしたら、氣の細い娘ではあるし、小姓の方でもたまりかねて、死なうとするのは必定ぢや。といつて今それを止めに行かれる場合ではない。必ず死になぞするな、死んではならぬぞよ、此處は死ぬる場合ではないぞ。萬一死にでもすると、それこそ親に歎きをかけることになるは云ふまでもなく、自分の身にも有りもせぬ非難を受けることになるのだから、親への孝行ぢやと思ふたら、必ず死になぞをしてくれるなと、かういふて止めたら、よもや死もせまいかと思ふものゝ、若い者の氣一本で、恥かしいと思ふばかりに、若しや死にはせぬかと思ふと悲しい」と知らせる詞一つでも、皆二階と下の作右衛門の方と兩方へ懸けていつたので、二階でもそれをききとつて、一旦抜いた脇差をさし、さすがにまた死ぬことも出來ず、聲もたてないで、抱き合つて泣いてゐた。

母「なふ親はどれも變らねど、母の名汚すも雪ぐもの、娘の育ちの善惡から。お梅が一期の疵つけば、三十年添ふた此方の人に、面かい拭ふて添はれもせず、是非に一旦盃して、男の手柄に何時でも、退去は世の習ひ。子が立つてこそ慾もあれ、屋財家財代なしでも、返す物を返やさずに置く興次右衛門

でさら／＼なし、母が此歎きを聞き、お梅が爰へ出るならば、それを機會に和睦して、祝儀を渡して下され。例へお梅が我を立て、座敷へ出まいと云とても、先方の小姓も木竹では有るまいし、先往きや／＼といやる筈。それも聞かねば不幸者。子を一人育つるに、生る瀬か死ぬる瀬が、七度あるとは幼い内。十七八に背丈伸び、親に夜の目も寝させぬか。憎いものには世話焼かぬ、子を持つたらば思ひ知らふぞ。恨しの世の中や」と、聲を上げてぞ口説きける。

【註】○どれも―誰も、どこの親でも。○一期の疵―一生とれぬ疵。○かい拭ふ―かき拭ふ、ふきにふくこと。○男の手柄に…一度結婚してすぐに女を離縁すると、自分の方で逃げ出すと、それは男の自由であるとした、手柄は権力位の意。○子が立つてこそ慾もあれ―子の顔が立つての上にて、始めて親の慾も出る。○代なし―一代にする即ち賣拂つても。○祝儀を渡して―渡すといふからには、下女下男等に祝儀のしるしを渡すと見るべきである。樋口氏説。○それもきかねば―さうしても娘がきかず我を張れば。○生きる瀬が…生死の危険を冒す場合が七度あるといふ諺。○憎いものには世話焼かぬ―憎いものに對して誰が世話をやくものか、皆可愛さ故に世話をやくのだ。

【譯】女房は「なう、親といへば、どこの親も變らぬが、母の名をよごすのも、けがさぬのも、つまりは娘の育ちの善しあしからぢや。お梅に一生とれない疵がつけば、三十年間連れ添うた此方の人に、面をかきぬぐうても添ふとは出來ぬ。だから是非一度盃丈けて下され。あとは男の權力で何時でもお前から退かうと、女を去らうと世間の習ひに従つて思ふまゝにしたがよかる。何しろ子の顔が立つて始めて親の慾も出るのぢや。家や道具を賣拂つても返すべき物を返さずにおく興次右衛門では更でない。私の此歎をきいて、お梅が此處へ出て來たら、それを機會に和睦して、下女下男達にも祝儀をやつて下され。たとへお梅が我を張つて、座敷へ出ぬといつても、そこは先の小姓だとして木や竹のやうな無情な譯の分らぬものではあるまいし、まづ行きやれ／＼といふ筈ぢや。さうしても、お



梅が云ふことを聞かぬとすれば、それは不孝者ぢや。子供を一人育てるに死に生きするやうな瀬戸が七度あるといふ諺があるが、それは子供の幼い時のことで、背丈がのびて十七八にもなつて、親に夜の目も寝させぬやうな苦勞をかけることがあつてなるものか。何といつても憎いものに對しては世話をやきはせぬ。かういふのもつまりは可愛いからだ。それも自分で子をもつたら思ひ知るであらう。恨めしい世の中ぢや」といつて聲をあげて口説いた。

久米之介も聞取りて、「後は兎もあれ、親御の心安める爲、涙も拭ふて下りてたも。拜む〜」と勧められ、口惜涙ひつしよなく、梯子とん〜踏鳴らし、駈下りて梅「これ母様、いたづらも悪性も、男持たぬ前ならば、いはれぬ構いじや有るまいか。それにいぢむぢいふ人は、放からかいて置かしやんせ。私がかうして出るのは詫言といふもの、それでも合點ないからは、氣に入らぬで有ふまで。田舎育ちのわしじやもの。なんの都の目に入らふ」と、身振もすねて見へにけり。

【註】〇ひつしよなく〜涙が無遠慮に出る意。ひつしよは秘所であらう。秘所なきふるまひの語あり、無遠慮のふるまひの意なればひつしよは秘所、ひつしよなきば隠す所なき即無遠慮の意。〇悪性〜道樂、放蕩。〇男もたぬ前〜定まつた男即亭主をもたぬ前。〇いはれぬ構〜いはれるに及ばぬかまひ、無用な手段、よけいなお世話。〇いぢむぢいふ〜かれこれとぐづ〜いふ意。〇放からかいて〜ほつて。打やつて、打やらかして。〇詫言といふもの〜詫言をいふといふもの。わびるも同じことぢや。〇合點ない〜承知せぬ、諒解せぬ。〇まで〜意なし、徳川時代前の古い用ひ方。只意味を強める筆法。〇都の目に入らう〜都の人の目につくものか、氣に入るものか。

【譯】久米之介も女房の聲をき〜とつて、「あとでは何とするとしても、兎に角、親御の心を安める爲に、涙も拭うて下りて下され、拜む〜」と勧めると、お梅は口惜しい涙に正體なく泣きぐづれて、梯子をとん〜と踏鳴らして馳け下りて、「これ母様、いたづら 道樂も、定まつた良人をもたぬ前なら、こちらの自由で、それを兎や角いふのはいらぬおせつかいではあるまいか。ぐづ〜いふ人は放つておきなされ。私しがかつして出て来るのは、つまりがお詫といふものぢや、それでも理解がつかぬからには、氣に入らぬのであらうさ。どうせ田舎育ちの私しぢや、どうして都の人の目になんかつくものか」といつて、身振もすねて見えた。

聲はお梅に揺られ、につこと笑ひ、「是親仁お袋黙らつしやれ。彼が此處へ出てくれて、今の詞で千倍じや。頭の上で踊つても去ることでは御座らぬ。サア寢所へ」と手を引けば、二親家内打うるほひ、奥「ハア目出度い〜」。去りながら先此處で盃事、其間にそれ〜と、氣を付けてもがけ共、作「いや〜今宵も四ッ過、やがて夜半寢る間がない。目出度い聞の盃」と、寢所急ぐ氣の毒さ。奥「平に此處で酒盛なされ、此間に内外の者一獻酌めや。酒を酌め、そりやくめ〜」とあがいても、何處へ落さん久米之介、夜著引被さ身をちぢめ生たる心地はなかりけり。

【註】〇千倍ぢや〜豫定の千倍もの嬉しさを感じた。十分に満足した意。〇頭の上で…頭をふみつけられても離縁などはせぬ。〇その間にそれ〜その間に久米之介などの始末せよの意。〇氣をつけてもがけども〜注意して煩悶するが。〇四ッ過ぎ〜十時過ぎ。〇氣の毒さ〜心配さ。〇内外の者〜内の者外のもの。〇くめ〜久米之介に注意する意を暗にふくめていつてるのだ

【譯】作右衛門はすねたお梅に身をゆすられて、にこりと笑つて、「これ親仁お袋黙らしやれ、お梅が此處へ出てくれて、今の詞をいつたので十分満足した。頭の上をふまれても離縁することではない。さあ寢所へ」といつてお梅の手を引くと、兩親も家の内にもうるほびが現はれ、與次右衛門は「はあ目出度い〜」。だが先づ此處で盃事をなされ、その間に萬事を整へて」と、一同に氣をつけて久米之介のことで煩悶するが、作右衛門は「いや今宵も、もう十時過ぎぢや、やがて夜半になる、寢る間がない、目出度い聞入りの盃を」と寢所へ急ぐ心配さ。與次右衛門



「是非此處で酒盛をなされ。その間に内の者外の者も一献くめく、それやくめく」とあせつていつても、何處へ  
驚さう方法もなき故、久米之介は夜著をかぶつて身をちよめて、生きた心地はしなかつた。

聾は薄團に延し上り、「ヤア誰ぞ寝たやら暖かな。さらば此夜著を被て、盃せふ」と久米之介が、臥し  
たる夜著を取らんとす。梅ア、是々、此方様計寝よふでの。とんと二人が一度に寝る。盃濟む迄いか  
な事、夜著に手もかけさせぬ」と、もたれかゝりし夜著の袖、足を擦り手をしめて、夫に力を付けられ  
ば 作「一ツに寝やうは忝い。銚子早ふ」と呼ぶ内に、夜半の鐘も鳴渡る。下には夫婦手に汗握り、九  
兵衛其外小隅へ寄り、供の者にも酒盛つて、與「酔ふた時分に臺所の火を消して闇に爲い。二階の酒のし  
ゆんだ頃 祝儀の石を打込んで、騒ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし、どやくや粉れに久米殿の、手を引き門へ  
脱かそふぞ。仕損へばお梅が首がないぞ。ぬかるな」と謀し合せて酒肴、下では下人盛潰し、二階を母の  
酌人は、怪我あらせじの氣遣ひや。

【註】○のし上り―伸上る。○こな様ばかり寝ようての―お前ばかりで寝ようといふのか。○とんと―全く、ちやんと。○いか  
なこと―どんなことがあつても。○足をすり…夜着の袖に手を入れて、久米之介の足をさすつたり、手をしめたりして、久米  
之介に勢をつける。夫は久米之介をさす。○夫婦―夫婦といつても、「酒肴」のところでは妻は二階へ上つて行くのだ。○供の者  
―作右衛門の供の者。○しゆんだ頃―しゆんはしゆむ、即ちしみこむこと、酒びたりになること、酒の酣頃の意。○祝儀の石打  
込む―近所の若者が婚禮の時石を投げ込む習はしが此頃あつた。○どやくやまざれ―どさくさまざれ。○脱かそう―にがせ。○お  
梅が首…下手をやるかと殺される。○抜かるな―失敗するな。○謀しあはせて酒肴―夫婦で云ひ合せて酒肴をもつて、妻が二階  
に上ればの意。○下人盛つぶし―作右工門のお供達に酒をのまして正體なくし。

【譯】 婿の作右衛門は蒲團の上にのび上つて、「やあ誰か寝たものか、暖かい、は此方の夜着を着て盃をせう」と  
いつて、久米之介の臥てゐる夜着を取らうとする。お梅は即ち「あゝこれ―お前さんばかり寝ようといふのか、ち  
やんと二人が一度に寝る、盃のすむまでは、どんなことがあつても、夜着に手もかけさせぬ」といつて、もた  
れかゝつた久米之介の夜着の袖から手をさし込み、足をさすりつ手を締めつして、久米之介に勢をつけると、作右衛  
門は「一つの夜着に寝ようといふのは忝い、銚子を早くもつて來や」といふ内に眞夜中の鐘が鳴る。下では夫婦が  
手に汗を握つて心配し、九兵衛その他のものは小隅の方へよつて、作右の供の者にも酒をのませ、與次右衛門は「酔  
つた頃に臺所の火を消して眞暗にせい、二階で酒が酣になつた頃に、祝儀の石を投げ込んでばた―と皆が騒ぐ拍  
子に蠟燭をふみ倒し、どさくさまざれに久米之介殿の手を引いて外へぬかさうぞ、仕損ずるとお梅は打殺されるぞ。  
ぬからぬやうにしろ」と夫婦二人で合圖をし合つて酒肴をはこばせて妻は二階に上り、下では作右衛門のお供の者  
を酔ひつぶさせ、二階で酌をする母親は、一同に怪我のないやうにと氣遣をしてゐる。

作右は母に辭儀もなく、差いつ差されつ辭儀作法、大盃四五杯引かけ、「なふお袋、姑に酌とらせ、  
無益しいか知らね共、斯ふ召さつたが好い筈。作右衛門程の聾は慮外ながら取憎い。久米之介は若衆  
で前髪は有らふが、己が様に小判の前髪は有るまい。彼の様な奴等が娘子供を 唆し、京大坂にも有  
ること。大方果は心中、ホ、嫌な事、お梅は命拾らやる、親御は娘拾らやる、おれは盃ひらはふ」と、  
又三杯引續け、「サア寝ませう、お袋彼方へ往なしやれ」と、夜著引立てんとする所へ、大石をはたと打  
つ。是はと驚く頭の上、障子雨戸を打破り、大石小石隙間なく、はらり―と 三重投げければ、お梅  
は此處を大事ぞと、久米之介に抱付、作右衛門はひよろ―足、「お梅危い夜著被さや」と立寄れば、



母親燭臺を踏こかし、「やれ暗い火を灯せ」と、いふ聲に與次右衛門、下の火残らず吹消して、常闇の夜と成りにけり。

【註】○辭儀作法―辭儀もせず、至つてあつさりとして、さしつさゝれつすることを辭儀作法として。○無益しい―餘計なこと。○斯う召さつた―かう考へめされた。○慮外ながら取憚り―失禮ながら、私し位の聲は滅多にはとれまい、取りにくかる。○小判の前髪…只しやれたいけで、小判はあるまいの意。○娘子供…女子の子をけしかけて、あんなことをさせることは京坂にもある。○是はと驚く―これはどうしたことぢやと驚く頭の上の。

【譯】作右衛門は母に對して禮儀もなく、さしつさゝれつして、至つてあつさりとした態度でやることを辭儀作法として、大盃に四五杯引かけ「なうお袋姑に酌をさせ餘計なこと知らぬが、かう考へめさつたがよい筈ぢや。私し程の婿は失禮ながらさう滅多には取りにくかる。或程久米之介は若衆故に前髪はあらうけれど、私しのやうに小判はあるまい、あんな奴等が女の子をけしかけるなんて、それは京坂地方にもあることぢや、だがさうした果は大方心中ぢや、ほゝ嫌なことぢや。かうして私しが女房にすればお梅は命を拾ふ、親御は娘を拾ふたも同じ、私しは盃でもひろはうか」といつて、又三杯引續けて飲み、「さ寝ることにしよう、お袋あちらへ行かしやれ」と夜着を引立てようとする所へ、大石をはたりと打つけた。是はどうしたことぢやと驚く頭の上の障子雨戸を打破りて、大石や小石が隙間もない位にばらりくくと投げられるので、お梅は今こそ大事な場合と思つて、久米之介に抱きつき、作右衛門はひよろ／＼として「お梅は危いから夜着をかつきやれ」と立寄ると、母親は燭臺をふみ倒し、「やれ暗いわい、火をつけておくれ」といふ聲に應じて、與次右衛門は階下の火を残らず吹き消したので、常闇のやうな眞暗になつてしまつた。

母ははい寄り、久米之介が手を取つて引出す。喫驚するも夢心地、お梅は久米が帯を取り、ついて出る

も闇の夜の、母はかく共知らばこそ、作右衛門は度を失ひ、「お梅は何處に」梅「イヤ爰に居まする」作「暗がりて怪我しやんな。お袋は何處へぞ」梅「火を取りにでがな御座んしよ。此方様勝手知らずじや、動かずに御座んせ。私も此處に居まする」と、聲が残れば母親も、一人と思ひ連れて出る。お梅は跡も恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を踏む如く爪立て、震ひ／＼沓脱迄忍び出で、母、久米之介に呟きて「此方は命の亡い人なれど、お梅が歎く不便さに、此方夫婦が了簡で今宵の命を助ける。お梅は男定まれば、思ひきらねばならぬぞや。是はお梅が呑んだ盃、これを形身の縁切」と、懐にいれければ、二人は死ぬる覺悟の上、心の中の暇請い、顔は見られぬ暗闇に、久「ま一度聲を」と躊躇へば、母「遅い／＼」と氣を急きて、急ぐは我子の死を急ぐ。産出すも母、死なすも母、生死二ツの門口を、明けて出行く先も闇、跡も子ゆへの闇の夜に、迷ふ親子ぞ三重悲しけれ。

【註】○びつくりするも夢心地―久米之介の心持をいつたので、夢のやうな心地で驚いてゐる。○闇の夜の―闇の夜のことであるので。○火を取りにでがな―火をとりにでも行つたのだ。がなはなあといふやうな感動を表はすてには。○聲が残る―久米のあとについて出るから、後ろの方で聲がするので。○沓脱―入口の下足をぬぐ石。○ま一度聲を―お梅は久米之介の後からついて來はしてゐるが、そこではもう二人が離れてゐてお梅の本心は分らず、二人は顔を見ることが出来ぬ闇なる故、「せめて今一度聲をお梅にかけたい」と久米は母に向つていつたのだ。○生死二ツの門口―生死二ツに分れる門口の意。生死は子にかく。○親も子故の闇―後撰集の「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」からとる、久米之介等の出て行つたあと、親は子を思ふて闇に迷ふのである。

【譯】母は這ひ寄つて、久米之介の手をとつて引出す。久米之介は夢心地に驚くのである。お梅は久米之介が帯を



とらへて、後からついて出るのも闇の夜で誰にも見えぬからのことである。母親はかうと知らばこそ何も知らぬ。作右衛門は調子を失して「お梅はどこにゐる」といふとお梅は「いや此處にゐます」作右「暗闇だけがをせぬことぞ、お袋はどこへ行つた」。お梅「火をとりにどもでござんせう、お前さんは勝手が分るまい、動かすにゐなされ、私も此處にゐますから」といふ聲が後でするので、母親も、久米之介一人だと思つて連れて出る。お梅は後の作右衛門の方も恐ろしく、母に内證にしてゐる足音を、いよく用心して、火を踏むやうな心地で爪立て、ぶる／＼とふるへながら、沓脱のところへまで忍び出で、母は久米之介に嘔きていふ「お前はあたり前なら命のない人ぢやが、お梅が歎くだらうことがふびんさに、私し達夫婦の考で今宵の命を助けてあげる。お梅は良人が定まつたからにはお前はお梅を思ひ切らねばならぬぞや。これはお梅が飲んだ盃ぢやから、形見にあげる、これが縁切れぢや」といつて久米之介の懐に入れてやると、二八は死ぬる覺悟の上で、心の中で暇乞をするが、顔の見えぬ暗闇のことゆえなほ心配になるので、久米之介は、「ま一度お梅に聲をかけ話をしてから分れよう」といつて、躊躇すると、母親は「もう夜が遅い／＼」といつて氣をせいていそぐが、我子がすぐに後を追ふことを思へば、それはつまり我子の死を急ぐことである。子を生むのも母、子を死なすも母、いづれ生死二つの分れ目である門口をあけて、二人が出て行く先も闇であり、後でも親は子故の闇に迷ふのは悲しいことである。

下の巻

歌「幻しや。定業の限りとは、いかに如何成る婆婆やらむ」梅世は何の譬ぞや、逢初めて早三歳、影計の契にて、夫は野中の一ツ井戸、名は後の世の形見かや、残す形見は親の爲、我はそ様の前髪の、長き來世もわしが此、直さぬ額此儘で、見たり見せたり六道の、辻の衢は多く共、はぐれまいぞと夕月

は、はや入果て更渡る、未だ如月の八重霞、隠れ忍ぶにけれ共、顔が見憎の朧夜や、二ツよいこと嵐吹く、木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に疵付けず、死度や」と、顔と顔を摺寄て、こぼす涙はおのづから、互ひの口に傳へ入り、末期の水と成けらし。

【註】○幻しや定業の限とは—佛教にては、吾々の一切所行は皆後の世に果を残し、今日吾々の眼前に現はれつゝある一切の果は、皆我等の前世に於ける所行の生む所となす。即ち果を生み出す一切所行の因をカルマ即業といふ。従つて吾等生るれば其所に定まれる業あり、その報あるとし、業報が極限に達して死ぬるのだ、即ち一切万象は幻であつて、定業の限りが死であるとは何といふ婆婆であらうの意。これは「阿波の鳴渡」にも引かれた「相の山」の歌の句。○世は何の譬ぞや—此の人生は何に譬ふべきか。此世の字をお梅久米之介の仲と見る説あれど、さう見ると次項に見るが如き不合理が起るやうだ。只此人生、婆婆の世とすべきだ。○影ばかりの契—此影といふのは、一切有爲法即ち人間の世は夢幻泡影の如しといふ金剛般若經の中の句の影とつたがよい。故に此邊四五句は、婆婆の世は何に譬ふべきであらうか、二人は逢ひそめて三歳を重ねながら、如夢幻泡影の例にもれず、まことにはかない契りをして、夫は野中の一ツ井戸の如く、只一人かけはなれて、間もなく共に死んで、名ばかりは形見として後の世に残ることであらうか、これさへ久しからずして消えることであらう、と解したがよい。之に反して世をお梅久米之介の仲、野中の一ツ井戸を高野山にある弘法大師姿見の井戸ととり、更にそれから伊勢物語の筒井筒の歌などに引かけたものと聯想し、二人の間を、形ばかりの契を結んだものとし、名を夫婦の名とつて來ると、二人の間が、よし思ふにまかせぬにしても、事實深い契が結ばれて居り、心中までする間柄である事は如何にも釣合がとれなくなつて面白くない、樋口氏説。殊に次の一句の「親の爲」といふの事實が矛盾することになる。即ち樋口氏説による。○殘す形見は親の爲—前の關係から事實と矛盾せぬやうにとるには、殘す形見を前髪又は髪ととりて、親の爲めに殘す形見なる前髪。○そ様—そなた様。○前髪の長き來世—久米之介は前髪の長い姿で死んで行くからいふ。○直さぬ額—お梅も娘の時の姿で死ぬをいふ。○六道の辻—六道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上にて、人死せば現世の業によりて、此六道の何れかに行く、其六道の分れを辻といふ。○はぐれまいぞ—前髪の若衆姿と、娘姿とで互にたづね合つて、はぐれることないやうにしようといふのだ。○夕月—はぐれまいといふにかく。